
女鑑
第拾四年
第拾號


三井呉服店
東京日本橋駿河町
大坂高麗橋三丁目
地方よりの御註文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送仕る可く候尙ほ註文御案内書は御一報次第御送り可申上候
一切の商品は店内一面に陳列致し置候に付き御立寄り御縦覧被下候樣奉希上候

女鑑　第拾四年第拾號　目次



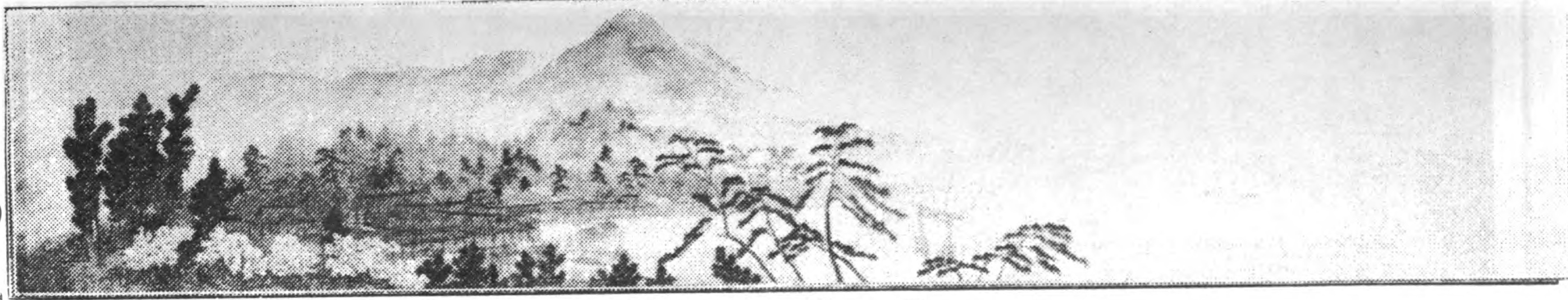
白木屋
呉服
洋服
店
東京日本橋
本店
大阪心斎橋一筋
出張店
電話東
電話本局
八十一
八十二
八十三



華族女學校第十九學年卒業生

明治三十七年七月華族女學校第十九年卒業生合作

宮島眞景



四季の花



宮島眞景

前景

九鬼憲子　和田幸子
池田信子　岡田豊
宮島竹子

中景

鍋島信子　巨智部宣子
佐藤たね　佐々木たか

遠景

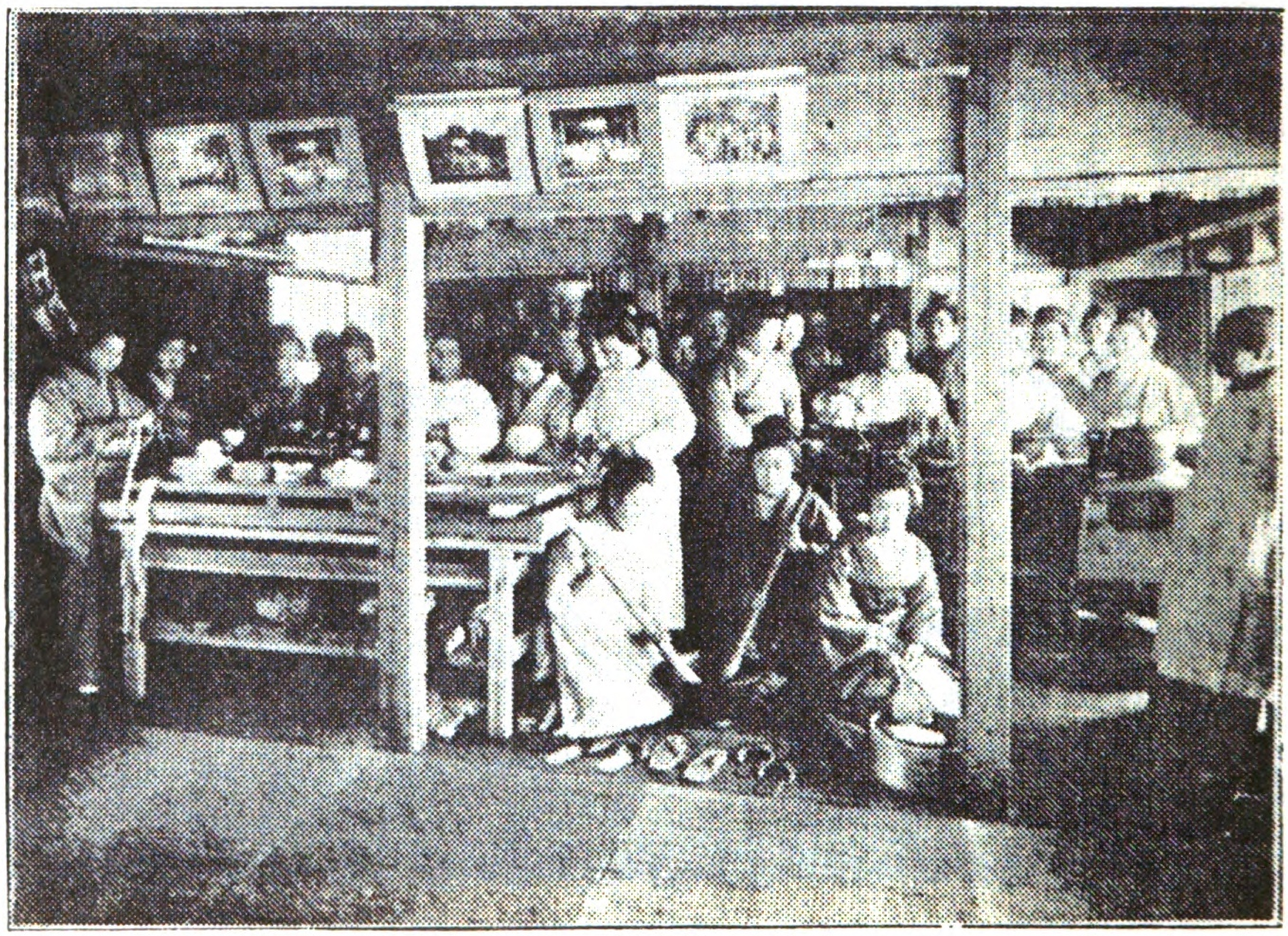
秋山こと

四季の花

三岡つる子　秋山すみ
長與美智　高田綾子
大屋清子　吉田登貴子
土岐敏子　吉田寅子
岩倉米子　島津なほ
郷英子　首藤ろく
東郷ひろ　中川貞子
大寺初子　鍋島茂子
野津輝子　町田豊子
宍戸幾　東久世三千子
山尾西子　蛭海松代



赤堀峯翁割烹教場（其一）



同　上（其二）

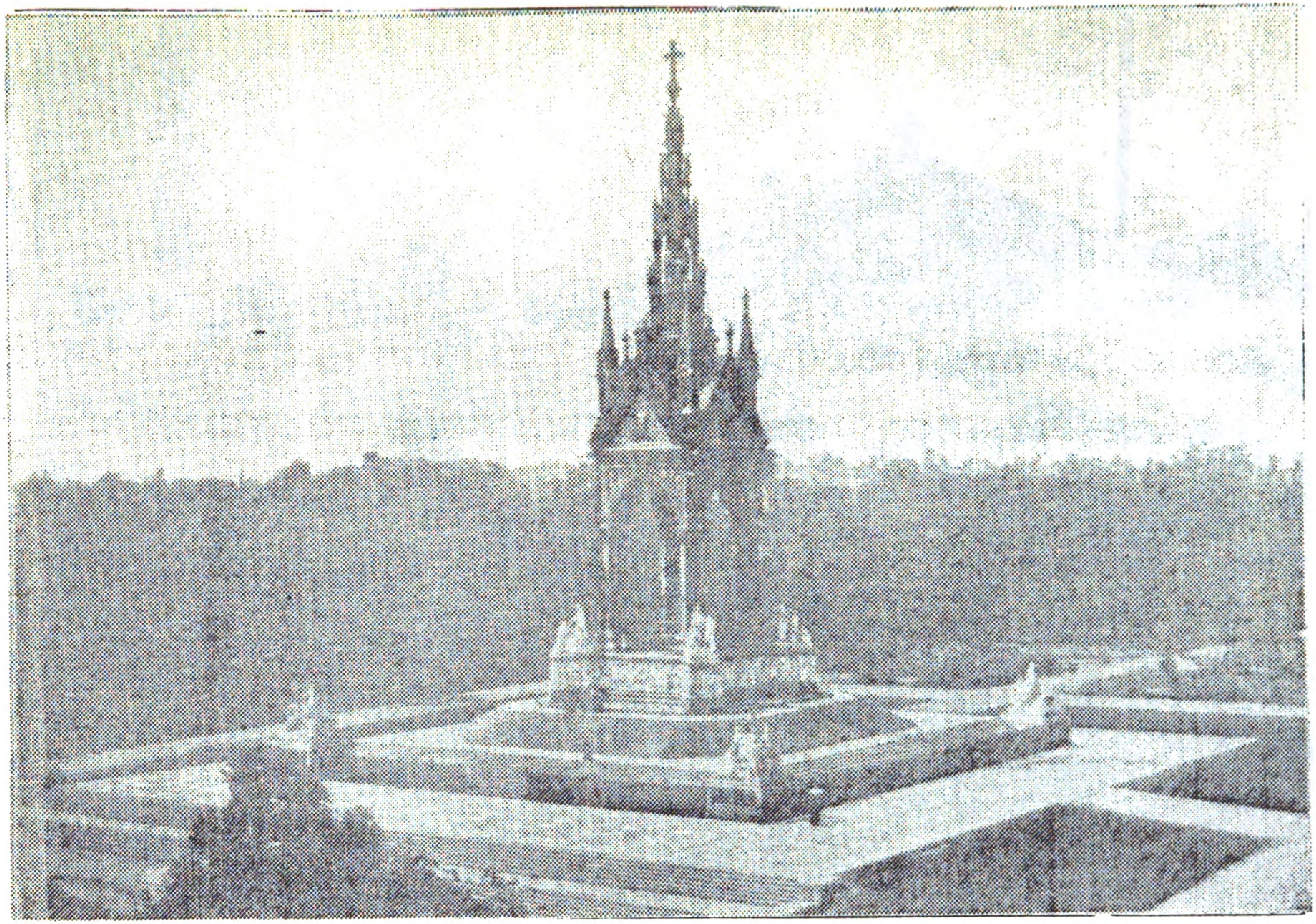


大日本體育會女子部

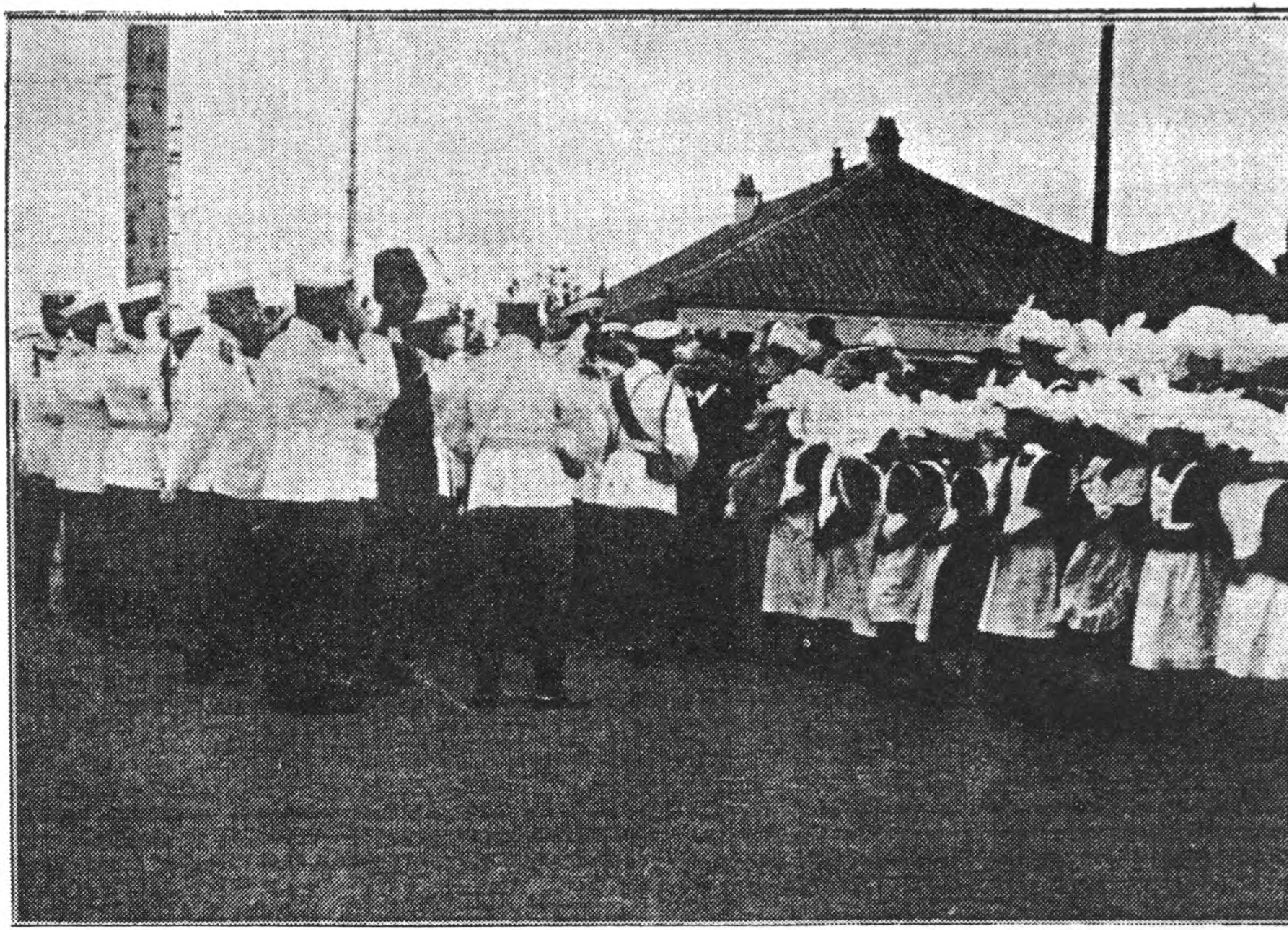

内外博覧會金牌受領
FIRST CLASS. GOLD MEDAL. GOLD MEDAL. FIRST CLASS. FIRST CLASS. FIRST CLASS.
PATRONISED BY THE IMPERIAL HOUSEHOLD
最上醤油
REGISTERED
TRADE MARK
元和二年創業
ヒゲタ醤油
宮内省御用達
田中玄蕃醸造
下総國銚子港
ESTABLISHED IN 1616.
HIGETA SHOYU.
Manufactured by
G. TANAKA,
CHOSHI, JAPAN.



マバー夫人一行中のアリス、ケンメル嬢



英國アルバート紀念碑



（昨年六月我國へ來朝したるクロパトキン將軍が歸途旅順港に於て歡迎されたるときの寫影にして同港日本居留民總代たりし日野氏の寄贈に係る）

旅順港女學校生徒及文武官吏



東京女學館本科五年卒業生

根治確証

わきが

新治療薬 ラピヨン

必ず全治して決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脱せよ丙價七拾錢乙價壹圓卅錢中價特製貳圓五拾錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔淸驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有す新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用いよ

毛のはへる

毛髪生養液 原名ヘクネス

めにへされうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひ、毛髪增生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

定價壹圓卅錢特製貳圓送料拾四錢本品は原名をヘグ子スと稱する現今最も賞用せらるゝ有力なる最新液にして毛をはやしたき人早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止

化粧製品

色の白くなる

パントコロン溶液

皮膚を漂白するを以て如何程色黒き人もB印特製を用ゆれば白色艶美の容貌となる

男女共交際上最も必用の品也 一印壹圓五拾錢特製貳圓五拾錢送料拾四錢

本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば毛性分の力に依り皮膚は次第々に新陳代謝を盛ならしめ

月やくそろ

五六ヶ月以上のとまり及び血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極めて烈強なるも毫も身體に害なし又月經不順月經不順より起る子宮血の道を全治し惡血古血を一掃し驚くべき効驗あり藥價半劑六拾五錢

壹劑壹圓貳拾錢貳劑貳圓三拾錢特製參圓五拾錢送料拾錢郵券代用一割增

メツルピン此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ず下ります又二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下ります猶

専賣 東京本郷湯島四丁目十四 **オリエンタル藥館**

第五回博覽會

褒賞受領

定價 壹袋壹錢 鑵詰五錢



此名題洗粉は皆々様の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の摸造品澤山顯はれ候に付弊舗製造品には袋の裏面に芝居櫓形の登録商標を相用ひ御座候間何卒御求の節は篤と御熟覽の上多少に不限御用向の程偏に奉希上候也



東京淺草區黒船町

梅素亭謹製

下谷 一三四番

女鑑代金の義に付廣告

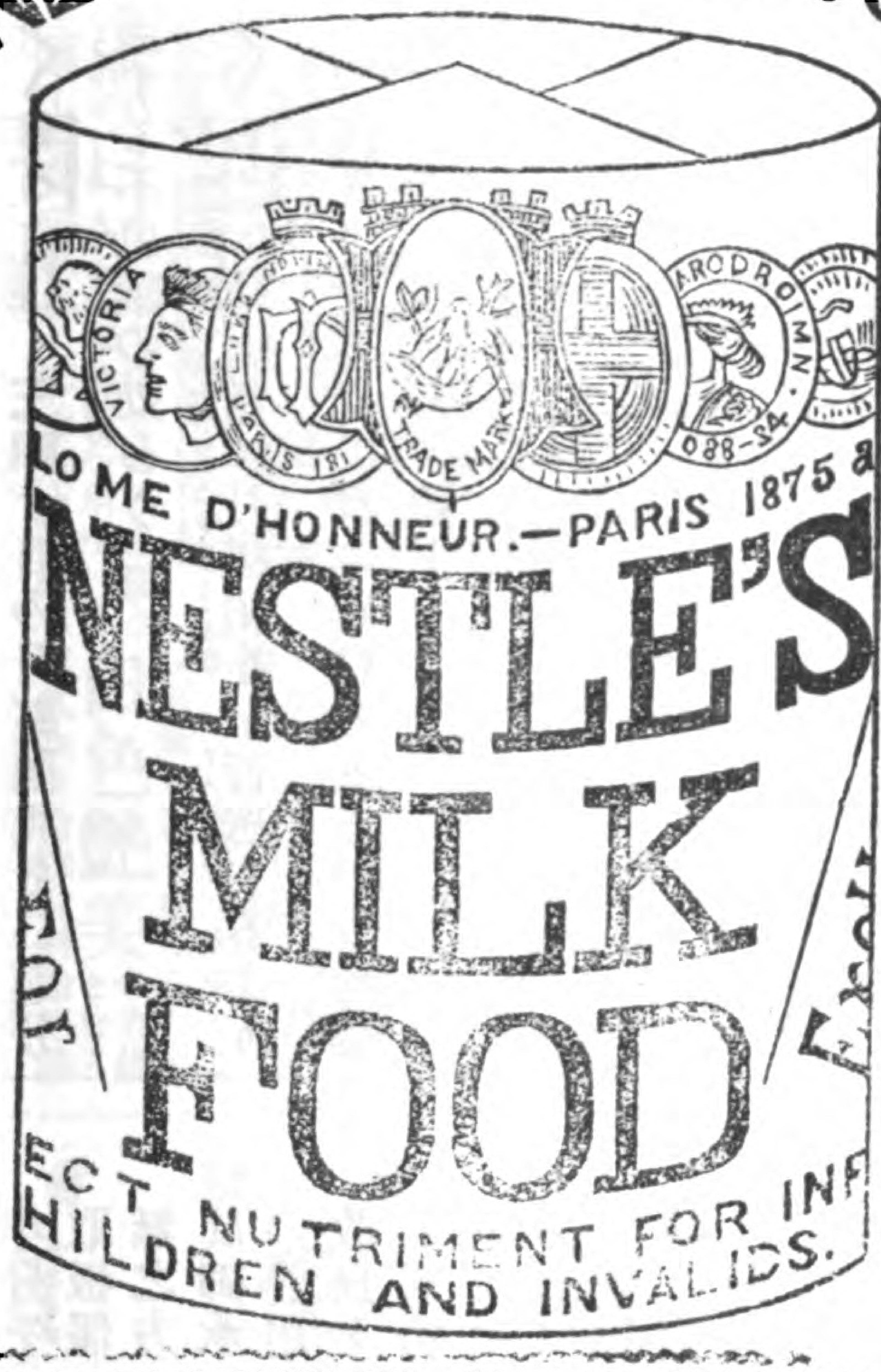
女鑑代金の義は凡て前金申受の規定なれども連年御購讀の方に限りては往々半年分又は一年分を後金にて御拂込相成候向も有之特別御取扱罷在候處近來一ヶ年以上延滯の儘御拂込無之方も有之候て帳簿整理上差支尠からず且は御承知の如く新聞雜誌は其代金を以て多くの費用に充て候ものなれば近來紙面及記事の改良を圖りたるに付ても少からざる費用を要し候旁々過日葉書を以て御催促致候義に有之就ては前陳の次第御諒察被下候て延滯に屬する分は申すまでもなく向後の分をも前金を以て御拂込被下候樣願度若又再應御督促に及び候も尚御送金無之に於ては已むを得ず本誌上に御姓名を掲げて御督促致候事も可有之斯くては平素の御愛顧に對し甚だ不本意千萬に御座候へば何卒當初御愛讀の旨趣に仍り此際至急御拂込被下度此段謹告仕候也

九月一日　國光社會計掛

瑞西國ヘンリーネッスル氏製

ミルクフウド

NESTLE'S MILKFOOD



各國帝室御用品

各國醫科大學大病院

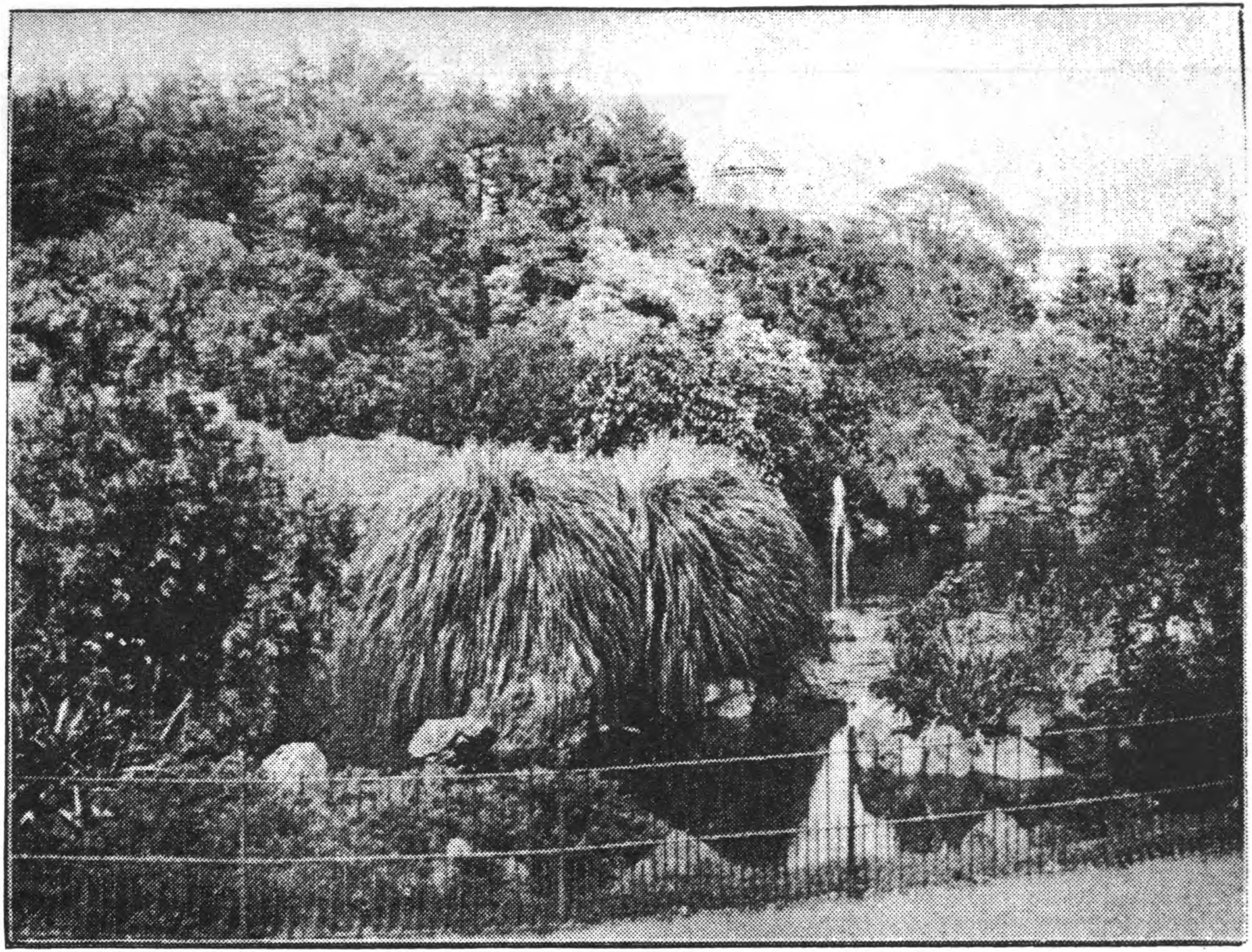
醫學博士ノ賞讃ヲ忝フス

（全國洋食品店及藥舖にて販賣す）

ミルクフウドは麥精と牛乳との調合になり小兒の骨、筋肉を形成するに欠くべからざる蛋白質、炭化水素を含蓄するが故に營養品として尤も消化し易き完美なる食物なり

ミルクフウドは小兒の生育、病者、虛弱者、老人の食物として他に比類なき良品なり

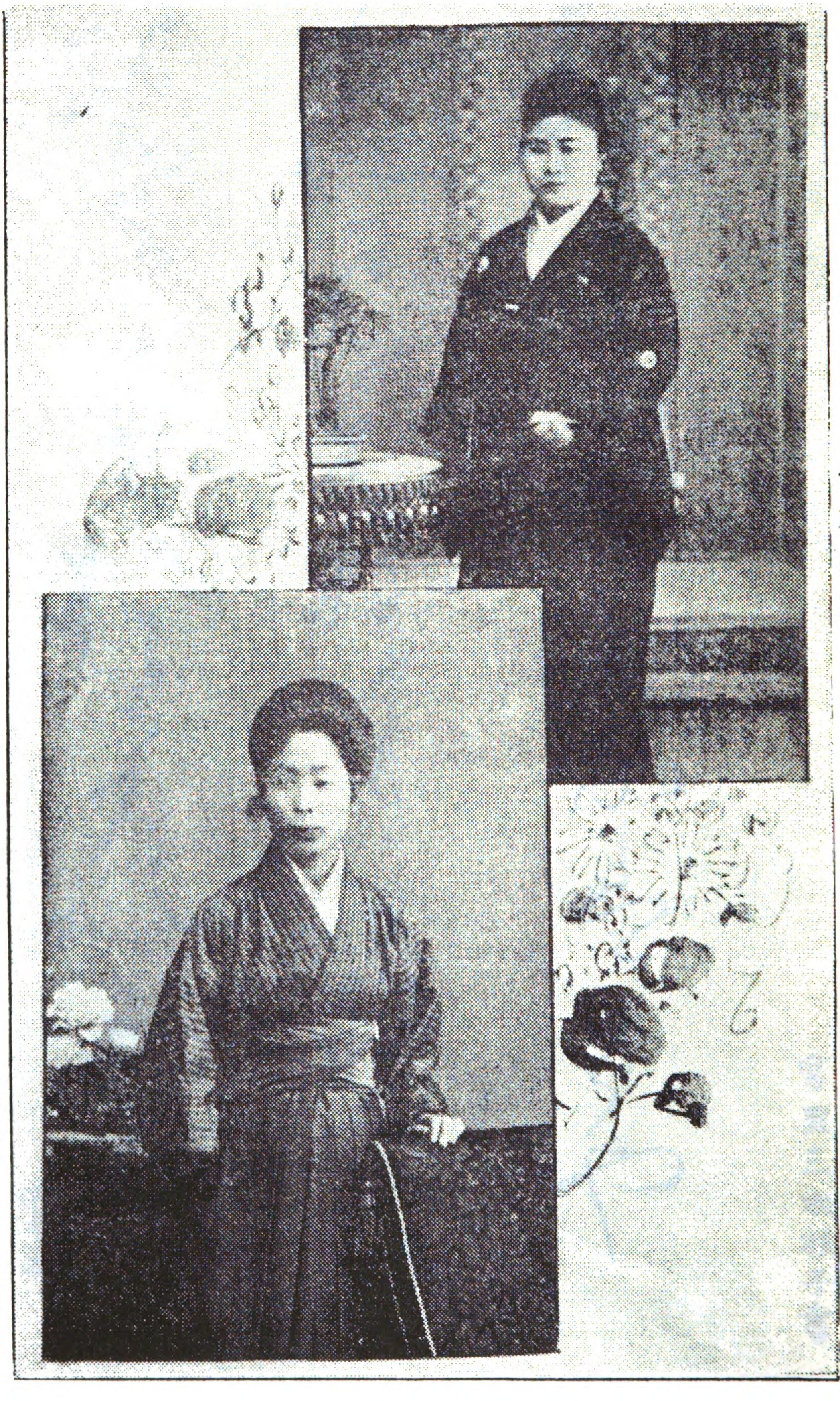
ミルクフウドは完全なる母乳の代用として著名なるものなり殊に母乳の欠乏若くは乳離れの場合に於ては尤も小兒の嗜好に適する最良品なり



（在桑港 杉山米太郎氏撮影 田村松魚氏寄贈）

米國桑港金門公園

女鑑兼題投稿優等生

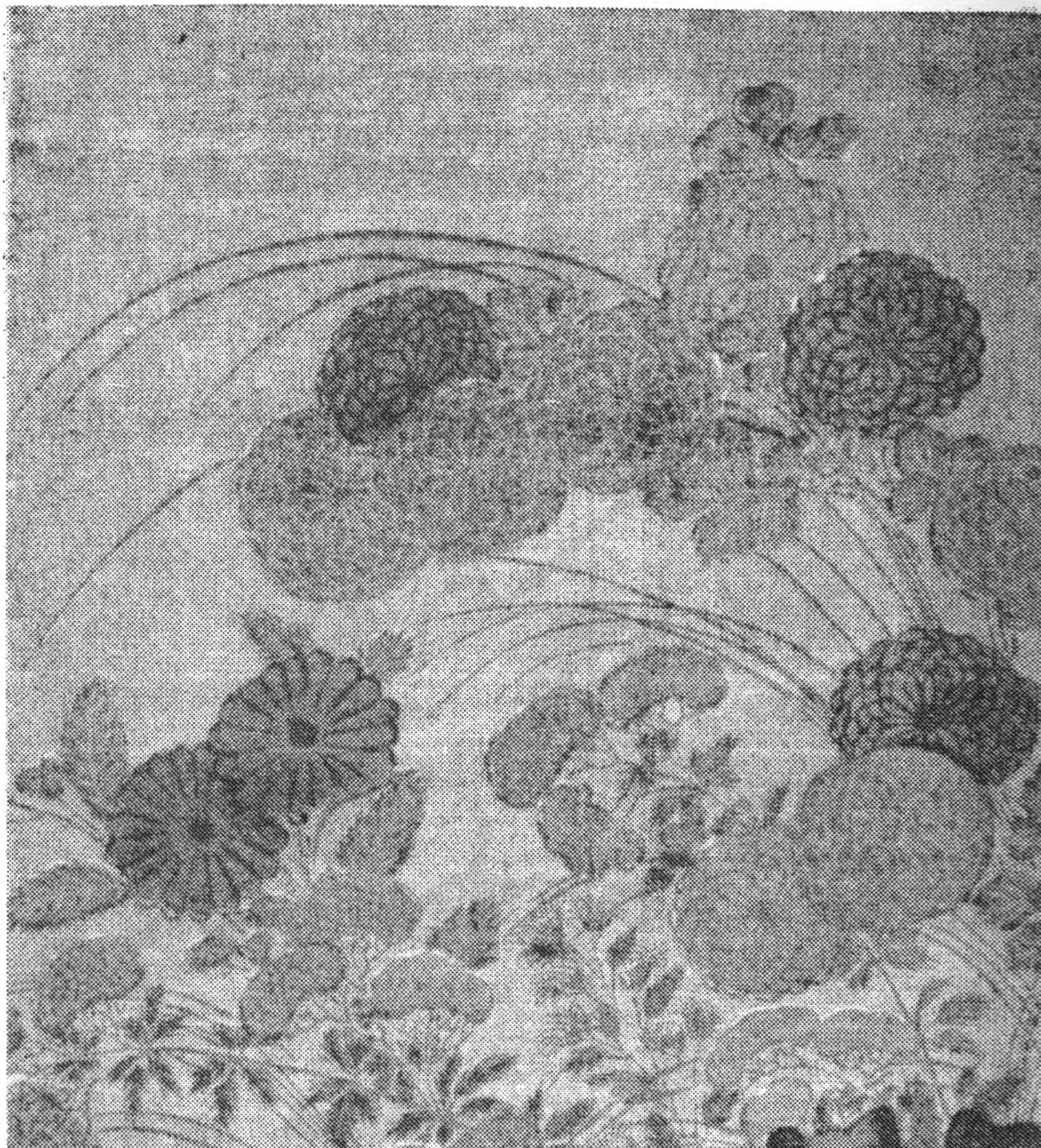


佐藤菊野子

森田花子

秋きぬとめにはさや
かにみえねともかせの音に
そおとろかれぬる

宮里三木枝子書







定價●金五十錢●金廿五錢●金十五錢●金十二錢

女鑑

第拾四年第拾號

新生活

赤帝猶ほ威を逞うして、殘熱未だ去らずと雖も、白露やうやく江に横はつて、秋氣の爽颯たるを覺ゆるは、氣節のはやく苦熱の境を脱して、清涼の域に入るを知るなり。凡ての世界が、夏の休息より起ちて、復び活動を始むるは此時なり。多くの人々が、午睡の夢より一覺して、奮勉の志を立つるも此時なり。若夫れ秋闌にして灝氣の宵に滿つるに及びては、正に是れ人心興奮の絶頂點、讀書勤學の好時期たらずんばあらざるなり。

敢て問ふ、多くの家庭、多くの女學生は如何にして此の苦しき夏日を送りたるか、山青く水白き邊、翠流れ紅滴るの地、泉湧き苔滑かなるの處は、或は愛すべき良人に手を牽かれ、或は懷かしき阿母の袖に縋り、或は親しき同窓の友と相携えたる、細君、孃子等が和樂好遊の地なりしなるべし。世塵を避け、俗累を離れたる樂みは、よく三伏の溽暑をも忘れて、如何ばかり身と心との慰藉と爽快とを買ひ得たりしぞ。しかも夏期の長からざると共に、此の避暑納涼の清興もまた獨り久しきを得ざるは、寔に惜むべしといふべきか。

休息の時期の終りを告ぐるは、再び活動の時期の始まれるなり。即ち職分の爲め、又職業の爲に、力を盡すべき時期の來れるなり。休息の日に於て、飽くまでも遊悠して、靜養を謀りたるが如くに、活動の時に於ては、亦飽くまでも勉勵して、縱ひ多少の辛苦に遭ふも、堪へ忍ばざるべからざるは、殆んど自明の道理なるべし。若し休息をのみ好みて、活動を厭ひ、靜養を謀るを知りて、勤勉の道に就かざれば、遂には懶惰性を爲して、怠慢の人となり、家事を治めては、善く一家の眞福を起すを得ず。學校に在ては、數年の勉學に堪へて、成業を他日に望むことを得ざるべし。斯の如くなれば、主婦たるに於て、將た孃子たるに於て、貴ぶところのもの那邊にか在りとするぞ。

されば家庭を守れる主婦たる人にありては、此の炎涼の境に於て、巧みに、一轉化を爲すの覺悟あるを要す。學校に於ける諸孃子は此の季節變化の間にありて、善く其身を處するの用意なかるべからざるなり。若し家政紊亂し、家事意の如くならざるに於ては、斷然意を決し、此の時期を以て、積弊積習を除去し、洗滌して、更に新生活に入るの心得あるを要す、例へば其家、年久しく收支の相償はざるか、又は家風贅澤に流れて、日に無用の費を見るが如きことあらば、鋭意して、家事家政の改革を圖り、支出を節減して、收入と相對比するを得せしめ、或は衣食調度の奢侈と思はるゝものを省畧して、家風を改善し、以て勤儉の美德を養成するは、思慮ある主婦の

勉むべき任務なるべし。又た女學生に在りても、その寄宿舍にあると、家庭にあるものとを問はず、縱ひ一概に怠慢なりとはいふべからざるも、兎角不勉强なる傾きあるか、又或る學科には嗜好を有して、孜々勉强するも、他の學科には興味乏しくして、自から荒廢に流るゝの跡ある爲め、甲科の成績著るしきも、乙科の結果甚だ薄弱なるが如きことあらば、翻然舊習を脱して、身を勉學に委ね、かの興味乏しき學科に向つては、學生たる本分を省み、一層意を用ひて、奮然勉學し、好成績を收めむことを勉めざるべからざるなり。將又た家庭改良のことの如きも、其家の主婦たる人の信念確くして、早晩實行するの意志あらんには、改良の緒を起すもまた此時を以て可なりとすべし、其他何事に於ても、今日を以て、一時期を劃して、新なる生命を作らんは、時を得たるものといふべく、隨つて、其の目的を達するに近きものなりと信ず。

凡そ物の盛衰興敗するや、必ず時期なきはなし。人生に於てのみ獨り然らずといふを得んや。雪霜の溶解する時は、陽氣の始めて通ずる時なり。春風の駘蕩たる時は、百花の撩亂として盡く開く時なり。之を人身に驗すれば、暮春遲日には、眠を催ふし易く、仲夏の炎暑は、身も心も溶けん許りに苦しくして、業を起し、事を爲すに宜しからず、秋涼のやうやく動くに至りては、乃ち心爽やかにして、體の自づから引きしまるが如くに覺ゆるは、則ち一年の中に於て、發奮し、勉勵し、改善し、新生活に入るべく、新生命を作るべき時期にして、心ある者の閑却すべからざ

るを發するものにあらずや。秋期に於て志を起し、冬時に於て霜雪の苦みに堪へ、春日となりて芽出度志望を達し、花鳥と同じく融々の樂を享け、夏期に至りて再び休養するは、思ふに一年の間に於ける四時自然の順序に従ふものにして、人々の宜しく守るべきところなるべし。
今は前古未曾有の大時期に際し、國家の興敗、國權の伸張みな繫りて今日に在り、終局の勝利や決して疑ふべからずと雖も、在外の將士が、君國の爲めに一死を輕んじて、骨山血河の慘况を事ともせず、たゞ忠義あるを知つて、其他を知らざるの心事を思へば、巾幗者流と雖も、慨然奮起するを禁ずる能はざるべし。しかも婦人は到底男子と功業を爭ふべきものにあらず、殊に戰爭の如きは、專ら男子の業務に屬して、婦人の關與すべきところにあらざるなり。故に唯善く己れの身上に負へる職分を盡して、天分を全うするは、婦人の勤むべきところにして、殊に今日に處する所以の道なりと知るべきなり。
節は是れ秋、時は是れ戰時なり。豈に日本國民に向つて奮起すべき好時期を與ゆるものにあらずや。家庭に於ける主婦諸子よ、學校に於ける女生諸嬢よ、望むらくば興奮して家庭の事に當り、熱心に學校の科業に精勵して、他日の成業と成功とを圖り、以て日本女子たるの眞價を發揚せよ。然りと雖も言ふは易く、行ふは、難しとかや、予輩の言の卑近なるを以て取るに足らずとせず、善く之を實行せられなば、効果を收めむこと蓋し疑なかるべし。

論叢

新人生觀

日本女子大學校長　成瀬仁藏君談

我々は今容易ならぬ、即ち千歳一遇の秋に立つて居ります。

我々は、目下、單に、露西亞を征服するばかりに奮闘して居るのではないです、日露戰爭の幕は、乃ち日本が自己を世界的一強國に其身を固むる世界的奮闘の序幕に過ぎないです、否、やがて我々は日露戰爭より、より大いなる戰爭をせねばならぬのであります。

然るに、近頃の我國民の有樣は如何です、眞に如何です、一ッ勝つたといへば、もうそれで戰爭が終結したかの如く喜び、浦鹽艦隊が二三の商船を傷めるといへば忽ち此先が如何なるだらうかと危ぶむ、泣いたり笑つたり、一喜一憂、掌を飜すが如きものであります、斯る優しい、淺い國民で、以て、露西亞に勝ち、更に此先世界に勝つて往かねばならぬ大なる幕が打てましようか、實に慨嘆に堪んです。

元來、女子は國の根でなければならぬ、而して新敎育に爲入るものは、別してであります、若し夫れ、近頃の女子の如くに、男子を慰藉することは忘れて、男子を哀しましむる、國の根或は母となるではなくして、國の面の白粉であるといふやうでは甚だ不可んです、私は、今先づ我國民が如何なる主義を有して居る國民なるかを研究し、次いで、三四の所感を陳べましよう。

△我國民と二主義

我國民の人生觀はこれ迄、已に二の主義を現はして居ります、一は厭世主義で、一は樂天主義です、而して、此二主義は、共に以て此國民をして、大國民たらしむる所以のものでないです。

昔一休和尚は、正月元旦といふ極く御目出い日の朝、墓場から骸骨を堀出して、之を自分の杖先に衝掛けて、さうして年始回はりを仕たのです、他は皆喫驚して見て居りますると、坊様仕濟したりといふ風に徐ろに說敎なすつて、謂はれるに「アナタ方は、今日は、元旦だ、重歲だといつて、欣びなさるが甚だ可笑しいです、何故かといふに、今日は我々が、一番嫌つて居るところの死地に近く一里塚であるのではないか」と斯ういつたのでありました。

一休のいはれた、この思想は、即ちこれ英語でペシミスズム、譯して厭世主義となります。

此厭世主義は、何處から發生して來たかといふと、無論印度であります、印度には、如何してこの思想が發生しました乎といふと、それには、三の原因があります、即はち第一は無智――此萬有に通じて居る所の天地の大法則を知らなかつたといふことから、斯くの如き迷信が起つたのであります、第二は印度の社會の狀態から起つたのです、印度の社會は、四ツの階級、僧侶、武士、商人、勞役者――此階級は、上と下とでは、甚だ遠く懸隔して、且つ又非常に軋轢し、嫉妬心が深いものであります、實に、印度といふ國は、今に社會を成さないです、今に統一を成さないです、誠に狹い考を以て、互に嫉み合つて、居ります、此印度の社會制度が、終に印度國民を斯の如き氣の毒なる狀態に陷れて、數千年間、國を成すことが出來ず、國の獨立を奪はれても其羈絆を脫することが出來ないといふ慘狀を來して居るのであります、此社會觀が、漸々とペシミスズムといふものを起したのです、今日と雖ども、此厭世主義を奉ずる所の者

は、社會の不平から起つて來る、社會の罪惡から出來て居るのであります、第三は宗教から起つたのです、即ち佛教の寂滅、或は涅槃といふ所の言葉は、此思想を言ひ現はして居ます、この人生の罪業、或は社會の罪惡、人生の苦患といふものを救ふ方法は、只寂滅に入り涅槃に入るの外は無い、只死ぬるといふことに依つて初めて救はれるのである、空漠に入るといふことに依つて初めて救はれるといふ考へであります、この印度から起つた所の厭世主義が、段々と東洋に波及し、終には我日本も、同化するやうになつて來ました、即ち印度のこのペシミスズムが、日本に這入つて來たゝめ、一休和尙のいひし如き思想が、我國にあるのであります。

而して、此思想が我國に如何なる力を有する乎といふと、これは、根深く這入つて居て永い間何事にも我國民の頭腦を支配して、直ぐ悲しみ直ぐ嘆息する、或は此世を味氣無く感ぜしめるのです、我國民は、全く一方ペシミスズムの國民となつて居るのです。

尤もこの思想は、西洋にも無いではなかつたです、例へば、近來の詩人で、セイリーの如き、バイロンの如き、又昔時の希臘の詩人にも、この主義を奉じて居つた者がありました、ソフホクリスの曲中に、人生の至幸は人生を味はざるにあり、即ち產れなかつたのが一番人の幸福である、第二の幸福は、產まるゝや――此世に出づるや、否、元來し所に歸るにあり、產れたかと思へば、直に死ぬのが一番人間の幸福である、即ち寂滅に入るのが人間の至幸であるとして居るです、又ショッペンハウエルの如きは、人の一生は苦しさ辛さの間に往復して居るものとし、ハルトマンといふ人は、人間の一生は、畢竟一長病に外ならず、即ち我々の一生涯は唯一の長い病氣であるとして居るのです、斯の如く西洋にも悲觀的思想が、發生しなかつたではなかたです、けれども西洋の天地には、此主義が發達しなかつたのであります。

而して日本人は全然厭世主義の國民であるかと云ふと仲々そうでない、厭世主義の反對に乃ち樂天主義の國民であります、これは、佛教渡來以前のことを調ぶると、澤山に、其證據が出て來るのです、否惟りこればかりでは無い、其後今日に至るまで其現象を觀ることが容易に出來るのです、マア、づゝと、一年中の節句とか、季節とかいふものを御覽なさい、お正月の飾は如何です、三月の雛祭五月の幟節句は如何です、春は花見、秋は月見、冬は雪見といふて、暑い時も寒い時も、瓢箪を提げ、重箱を携へてこの天然を、樂天的に觀察して、欣び娯んで居るといふ國民であるのです、日本人ほど喜んで笑ひ、踊つて暮す國民は世界に餘り無いかも知れませぬ、又日本人ほど、能く飲み喰ひをする國民は無いです、確かに無いです、他の國民、殊に西洋の國民は、飲食は自分の健康の爲にするといふことが主になつて居るが、我國では快樂の爲に飲食をするやうに考へて居るから、芝居を觀る時でも又相談をする時でも、イヤお祭があるからといつても、人が死んだといつても、何でも可でも飲食ひをするのみならず、其飲食は娯みが主となつて、健康を害しやうとか、身體の爲にならぬとかいふやうな考は、餘り無いで、唯娯しく日を暮すが爲に、飲食をするのであります。

我日本は、從來、斯の如く、樂天的と悲觀的との極端なる二方面を有して居るのです、故に、一家内に往つて見ると、一方に神棚が祀つてあり、又同じ家に佛壇が飾つてあるのです、死んだ時には佛樣に成り產れるといへば、神樣に祈るのです、お正月とかお祭とかお祝とかいふときは樂天主義であるし、死んだとか、法事とか忌とかいふ時は、厭世主義であるのです、我日本の風俗は、全く此兩極端の分子で、組織されて居る樣に思はれます、故に個人に付て觀ても、此兩極端に陷り易い弊を以て居る所の國民の如く觀察せらるゝのであります。

△現今の人氣は如何

我國民の人生觀は斯の如く厭世的と樂天的とであります、而して、現今、我國の人氣は如何です、是は果して樂天主義であるか、又厭世主義であるかと考へて見ると、矢張り現今も亦從來と同じく此二の異分子を以て混成されて居るのです。

今や日露戰爭は漸く歩を進めて、皇軍は破竹の勢を以て、露西亞を征服しつゝあるのです、けれども、一般の空氣は、如何です、日本國民の人氣は如何です、これ又泣いたり笑つたりして些ともドッシリとした點が無いです、旅順がもう陷るといへば、提灯行列に狂噪し、浦鹽艦隊が長門沖に現はれるといへば殆んど失心し、此分では何年かゝつて戰爭が了ふか困つたものだと頭痛鉢卷の人もあるのです、又一方にはナアニ日本は、神國だ、朝鮮征伐、蒙古退治、日清戰爭、皆大勝利の歷史を有して居る、這回はモスコウを屠つて、露西亞に城下の盟を爲さしむべしと力むものもあれば、或は又取越苦勞をして、斯う不景氣では此分で、二三年も續かれては戰爭には勝つても後で國力を耗らして了ふから、二度の立勝負には負けねばなるまい、商工業は沈衰して了ふ、外交が失敗せねば可いが、果ては黃禍論などに驚かされて白人聯合に對して日本が一手にそれを引受けるやうになつては、と杞憂を抱いて居るものもあるのです。

其處で、現今も亦厭世かと思へば、樂天、樂天かと思へば、厭世であるのです、笑つて踊つて居るかと思へば、泣いて悲んで居るのです、而して、甚だ厭ふ可きは目今は此兩分子の中稍々もすれば厭世主義の方が其量を多く有して居ることであります、我心に之ありて此影ありで、自分の心が悲哀で充さるればその反影を殘します、私は去年近衞公爵の訃音に接して急にペスミスチックになりました、行く〳〵この日本は何故斯うだろうと考へて公爵邸に到つた所が、益々此感を深くし公爵邸を出でゝ其裏を回はりました所が

御邸宅の近傍は非常の霜であつて、霜柱が立つて居る、恰も天は、近衛公の邸を温めない如くでありました、近衛公爵の邸は、外の天地と異つて澄み凍つて居るが如く感ぜられた、又段々歩いて行つて空に鳥が歌ひ或は鳥が啼くといふと、何鳥も皆悲んで居るが如く聞える、又音樂が響いて居る、其音樂は悲哀の情を添へるが如く聞える、何を見ても何を聞いても、此天地は洵にたゞ悲しい寂しいのでありました、これは、先づ第一に私の心がペスミスチックであるから凡てが斯う見えたのであります、さて又我國の文學は何故アンナに悲哀の文字に富んで居るかといふことも、亦克く考ふれば我國民の心がペスミスチックであるからであります、這回の事件に國民が戰勝の割合に世間の不景氣を呈せしめて居るのは、全く國民の心にペシミスズムが潜んで居るためであります。

△新人生觀を造れ

直ぐ笑ひ、直ぐ泣くが如きは、未だ決して堂々たる大國民の大國民たる態度ではないです、これは、野蠻時代、未開時代、小兒時代の迷信に外ならんのであります、我國民は、如斯、幼稚性を脫却して、容易に笑はぬ、容易に泣かぬ國民とならなければ、決して這回の如き大事件に成功し、次いで來る世界的の大戰局（兵力其他）に一等國の旗を立つることは出來ないです、若し然らずして、彼のペシミスズムを發すること從來より更に一歩を加ふるが如きことゝならば、我國は到底此厭世主義の唱へる寂滅往生に歸する外は無い、涅槃に入るを以て滿足する外は無いのです、我國民が輕薄、浮華、虛僞、怠慢に陷り易いのは凡べて此爲であるのです、私は信じます、今日の我國は、恰も起るか仆るゝかの秋であります、此戰場に泣いたり笑つたり、或は浮いたり沈んだりは大禁物であります、然らば即ち知る、我々は此從來の二主義を根底より覆して、更に新らしく雄渾なる一大主義を立てゝ進まねばならぬのであります。

元來、樂天主義といふは、果報は寢て待て、ナアニ六かしいことを爲る必要は無い、如何か成るであろうといひ、又厭世主義の方は、社會の現象に不滿を懷いて、慨嘆悲哀に堪えない、けれども、如何ともすべからず、如何に我々が悶搔いたつて、如何に奮戰したつて、人力を以て如何ともす可らず、諦めるより外仕方が無い、成行きに任せる外途はないといふのであつて、即ち此二ツは共に困難に出逢ふても又喜びに出逢ふても、直きに自暴自棄に陷るものであります、即ち此樂天主義と、厭世主義とは、人間が「ラレル」「セラレル」苦められるのです、壓迫せられるのです、或は惠まれる、或は救はれるのです、イツモ外から來る、自分はジッとして居るけれども、外から「ラレル」此「ラレル」主義であります、此兩主義は即ち「ラレル」主義であります。

果して、此人生は、斯の如きものである歟、我々は唯パッシーブに働いて外のものから「セラレル」ものであるが、或は四圍の境遇が我々をスル儘にして「セラレ」て働いて居れば宜いものであるかといふと、決してそうでは無いです、支那人のいふ天道是乎非乎は是でも無い非でも無いのです、又萬有は、人間を可愛がりも憎みもせぬ、決して此萬有は、東洋を繼兒にし、西洋を愛子にすると云ふやうな不公平のものでは無い、誠に公平無私であるのです、此萬有は、自働的であつて、萬有が此四圍の境遇を作り、又た人間の頭を作るのでは無い、矢張り、此萬有の靈長たる人間は、自働的でなければならぬ、さうして此萬有を自働的に使はぬければならぬのであります、然るに、今申す樂天主義と、厭世主義と此萬有を自働的にして、人類を受働的にするのであります、我々の執るべき主義、我々の執るべき態度は、この樂天主義と、厭世主義の反對の主義であります、即ち自働的態度であります、詰り萬有をして、我が意思に服從せしむる、此社會をして、我が理想我目的我經綸に服從せしむる、改善して進んで行く、即ち此社會といふものは仕

方がないものでは無い、仕方があるのである、我意思を以て、之を改善し進歩して行くことが出來るものである、果報は寢て待つても役に立たぬ、我から立つて働いて我から計畫を立て丶我意思を以て、我目的を以て、進まねければならぬといふ主義であります、之を私は自働的改善主義と申します。

然らば、我々は、此積極的主義を持ちまして今後彌々奮進せんければなりませぬ、否已に我々は日露戰爭を始めて、而して、見事に勝利を得つ丶ありますが、此戰爭は尚多くの未決問題を前途にかけ居り、且つ此戰爭と同時に我々の感ずるのは、我々も亦軍人と同じく此國家の或る方面の戰士であります、而して、闔國皆これ兵で、世界の大舞台に此國を立て丶第一と稱せんければなりませんことであります、此時に方り我々は決して直ぐ泣いたり直ぐ笑つたりするやうな國民では不可です、而して我々は我々國民が今後奮鬪す可き要點を次に數へます。

第一　露國征服

露國は東洋の仇であり、彼は又世界ヒユマニーチーの敵であり、正義公道の敵であります、而して前にいふが如く我國家は今應に此露國を征服しつ丶あります、これ非常なる意思と非常なる決心と勇氣との要ることであります。

然るに、幸ひなる哉、皇軍の力克く彼を壓迫し、不日目出度戰局を告げやうとして居るのであります、けれども露西亞人は最とも根氣強き國民であります、執拗頑冥の國民であります、實にこれが征服を了る迄には幾多の困難を覺悟して居らねばなりませぬ、然るに、目下、我國民は、動ともすれば一喜一憂といふ狀態であります、これ甚だ不可ないです、一旦已に露國征服の大目的を立てたる以上は、元より、幾程の日子を費ずも、亦何事が湧き起つても、平然として其本分を守るの大襟度がありたいものであります、

況んや我皇軍の連勝彼が如きをやであります、いよ〳〵非常の大決心を以て、世界人道の敵、東洋平和の仇、露國を最後迄征服せんければなりませぬ。

第二　世界商工業の戰爭

露國を征服すると同時に、世界商工業上に我國勢を伸ばして、其競爭者を征服せぬければなりませぬ、今此最近十年間の我國貿易の發達を御覽なさい、まだ中々幼稚なものです、第三は智力的戰爭です、第四は天然を征伏する戰爭です、第五は社會の罪惡並に吾人の惡習慣と戰ふ戰爭であります、而して、此最後のものが、一番骨が折れるのです、此戰爭に負けることが、一番怖いのです、昔からいひまする我々の外寇——外敵は恐るゝに足らぬが、心中の蟲が怖ろしいと、近衛公爵は、嘗つて東洋の山河を跋渉して少しも恐れなかつた、露西亞も亦更に恐れなかつた、けれども、其心中に這入つた一疋の蟲です、實に小さな一疋の蟲です、肺臟を侵し內臟を腐らした一疋の蟲は、恐るべきものでありまして、實に公は其蟲に其前途多望の生命を奪はれたです、最早我國は、其勁敵露國も見事に征服しつゝありまして、戰の上には格別恐る可きものがないやうですけれども、尙其最後迄には仲々安心が出來ないです、今後我々は克く此戰局を收めねばなりませぬのみならず、更に進んで外交に商工業に、社會に打勝たねばなりませぬ、而して凡べてこれが動力となるものは、實に此社會の體力です精神です、吾人は今日外日露の一大事件に成功すると、同時に內一疋の蟲の無いやうに、此國の躰を健全にせぬければなりませぬ、然し我々は此無形の戰に、大に成功せぬければなりませぬです。

此戰は、勿論受働的ではなくして、自働的でなければならぬ、自働的に發展して、以て露國征服の目的を達して朝鮮支那を改善して、彼等に一の生命を與へ、尙且つ進んで、世界の舞臺に新進强者として、

即ち世界的に戰鬪して凡てに打勝ねばなりませぬ、然れども斯ることは勿論非常なる企であるから、勿論二十年五十年とかでも搆はぬでなければならぬ、而して斯くなるには、先づ各個人が克く力ある人格を有せねばならぬ、各個人の力大となり、此力相集りて、國力偉大となるにあらざれば不可ないのであります。

軍隊力、經濟力、智力、其他あらゆる方面の力が一國に充滿し、五十年、乃至百年戰つてもビクとも仕ないやうにならねばならぬのであります、而して、斯くなるのも一に我々自己が、自己の爲すべきを爲すより外に途は無いです、貿易が失敗に終ると嘆いても仕方がない、公德が薄いといつて嘆いても仕方がない、矢張り我々は子供に至る迄、一錢一厘を儉約せぬければならぬ、我々は小供に至る迄公德を重んぜぬければならぬ、時間を違えぬやうに、嘘を言はぬやうに、人の物を取らぬやうに、自分の爲すべきとは決して怠らぬやうにするのは、亦これ戰であります、外は軍隊が連戰連勝し、內は社會が其害惡に連戰連勝す、此に至つて、始めて我々は大國民となる可きものであります。

今や我日本國民は正に其前途の運命に向つて一大開拓の端緒を開いたのであります、今日は宜しく舊來の陋習に泣いたり笑つたり、浮々とすることを止めて、自動改善の方針を採つて奮進奮鬪すべき時であります、而して此社會の戰士中最も重大なる責任を負へるものは實に女子であります、何となれば社會は凡べて其根源を家に置く、家の根は母にあり、母は女子であります、卽ち女子は社會の根源であります、日本女子たるもの、幸に其人生觀に、一新面目を開かれたいのであります。

（完）

（本篇は近時氏が某所に於ける演說を筆記したるものなれば文字の責は記者にあり。）

上流女子の教育に就て

華族女學校教授　淺岡一君談

方今我國の最上流即ち華族の女子に對する教育は華族女學校を以て唯一の機關と爲す。其の施設せる事業の成績を見れば、我國貴族女子の教育が現時如何なる狀態の下に在るかは略々推知することを得べし。同黌の事業は漸次面目を革め、現今の勢を以て益々發達を續くるに於ては、前途頗る有望なるものにして、例之ば入學を望む生徒年々其數を增して校舍の狹隘を告ぐるが如き、又卒業生は學藝體質併び備はりて追追舊觀を更めんとするが如き、又半途退學者減少して生徒の多數は卒業後に至らざれば婚嫁を忌む傾向あるが如き、又教課年々に改良せられ將來益々程度を高めんとするが如きは、校況の一斑に過ぎずと雖も、亦以て瞭かに趨勢の如何を解するに足るべし。然れども亦退いて瞑想すれば、教育上攻究を費さゞる可らざる重要問題尙は尠なからずして、中には生徒の自覺反省を求むべきものあり、教官並に父兄の督勵に俟たざる可らざるものあり、審かに理否得失の存ずる所を究めて之を詳說する如きは、一夕の能くし得る所にあらず。

(一)上流女子の修學期と婚姻期　我國の上流女子は從來凡そ幾歲に至るまで躬を學業に委ね居るか、又幾歲を以て婚嫁の時期と爲し居りしか、各種の研究に入るに先ち、予は此問題に關して聊か考査を試みたり。恨むらくは事情の明確ならざるものありて、筆下直ちに斷案を與へ得ざることを。但し華族女學校創立當時を以て今日に比較するに、修學と婚姻との時期に關して顯著なる差異を生せしことを明言するに難からず。當初同黌の生徒は、初等中學の一二級を以て適當の婚期と信じ居たるものゝ如く、該學年に於て學業未だ

就らざるにも拘はらず、退校するもの頻々たりき。如何に貴紳富豪の子妹なりとはいへ、十五六歲を以て學を輟め、人の妻女となるは早婚も亦極れりと謂ふべし。想ふに其の以前に於ては此弊尚一層酷だしかりしならんか。然るに悦ぶべし十數年後の今日に迨んでは、積弊殆ど蠲かれたりと稱するも不可なき程にて、前日の如く初等中學の乳臭き生徒にて學を廢し婚嫁せんとする者全く其の跡を絶つに至れること、是れ父兄たるものが、女子敎育の必要を解し得たると共に、其本人自らも心智開發して卒業前は可成婚嫁を避くるを得策とする結果たるに外ならずと謂つべし。厭ふべき當初の早婚思想は一片の迷夢と化し去りて、今や高等中學の生徒すら黌を退くことを肯せざるを見るは、人文進步の賚賜も亦偉なりとや云はん。同校の卒業生は滿十八歲以上にして昨年の如き一學級にして約五十名の多きを出すことを得たるは、我が貴族社會に於ても如何に女子敎育の重きを認め、子女の麁製濫造を忌むかをトすべき好左券たらずんばあらず。修學の期間をば成るべく延長せしめよ、婚姻の爲めの故に之を短縮せしむることなかれ、卒業前は努めて結婚することを避けざれば良妻賢母得て求むべからずとの一言は、校長始め華族女學校敎員が生徒並に父兄に對つて誠意希望せざるを得ざる所にして、世間識者の輿望もまた恐らくは之と相反せざるべきを信ず。

(二)上流女子の長所と弱點　此に上流の二字を冠するは、下記の事實と對照して聊か當を失ふ嫌なきにあらず。何となれば上流女子の性行を解剖して長短巧拙を覓むるも、其長短巧拙たる必ずしも尊卑貧富といふが如き階級生活と相關せざるもの多ければなり。左に敘する所は單に予が瞥見したる實驗の一端に止まるのみ。我校生徒の氣質並に成績に據りて之を見れば、其多數は學藝の上に於て概して國文を解し和歌を詠ずる等に巧に、且文學及び美術の思想に富み、此種の學科を修むるときは、進步の度比較的に迅速なるを見る。之に反して數學及び理化學の如き推理的學科の成績は、各生徒を通じて一般に文學美術等に及ば

ざるが如し。これ貴族社會の主部を占むる大名華族の家庭は勿論、所謂富豪の家庭に生長せるものは、錦衣を纏ひ玉食に馴き、多數の婢僕に追隨尊敬せられ、身の不自由てふものを知らずして生育したる結果ならんか、襟度寛厚志操純潔にして瑣事に屑々たらざるの性質に富む。然れど此稱すべき特質の反面には又弊害の伴ふことを免かれざるなり。例之ば其行事に付教師より呵責を加ふるに對し、又講堂に於て反覆懇示したる教訓に對し、之に違反し之に抵抗せんとする如きことは決して之れあらざるも、さればとて之に感激して其の行爲を改むるの意氣に乏し。蓋し生來安逸なる生活狀態の下に養はれ、辛苦を嘗めたる事なきを以て、強硬なる意志の備はらざるもの之が基因ならんと推せらる。要するに自覺の理性と堅忍の志操とは、上流女子の腦裡に於て豐富ならざるやの感あり。

(三)上流女子と父兄の意嚮　上流社會の人士が子女の教育に關し、希望區々にして統一を缺げるや久し。是れ頗る惜むべしと爲す。女は女らしき教育を受け、一通り書を讀み歌を詠じ插花點茶作法等の道に通せば以て足れりとする父兄あり、又之と反對の意見を抱き、日本在來の文人教育はとても實用に適すべからず、貴校の如きは可成歐米文明國の進歩したる學制に則りて、學科の如きも從來修養に乏しかりし數學理化學等に專ら力を注がれたしと望む父兄あるかと思へば、又或人は如今男子は汲々として日新の學術を究むるに遑あらざるに、女子をして比較的不必要の學藝に骨を折らしむるは底事ぞ、願はくは英佛の書を讀み、語に通じ、人に賴らざるも自ら歐米の事情を解し得るやう教育せられたしと求む。其他身分生活等の狀態同じからざるに隨つて皆幾分か望む所を異にす。事此の如くなれば、之を調和して一定の方針を立て各人の囑望を滿さしむることは決して成し得べきことにあらざるなり。故を以て我黌に於ては、校則の定むる所に據りて可成中正不偏の教育を施し、上流婦人に須要なる資格を備へしむるの外、特に方針の採用

すべきものありとも覺えず、一意此の目的の下に刷新補綴を加へ好結果を收めんことを期するのみ。前記の諸希望は、通俗なる分類法を用ゐれば、之を和、洋、和洋折衷主義の三種に別つを以て可とすべく、三者中折衷主義は稍實用に適するものと信ず。

(四)上流女子の體育　世の操觚者諸氏が我黨の爲め特に社會に對つて紹介の勞を執られんことを望むは此の一項なり。何となれば公卿華族にせよ、大名華族にせよ、新華族にせよ、若くは地方富豪の子女にせよ從來華奢逸樂なる家庭に在りて生長したる女子は、體育の重ずべきことを知らずして、普通の生活を營む中流以下の農工商の女性が男子と異ならざる程の業務に服し居るに拘らず、上流に在ては彈琴とか、挿花とか、讀書とか、習字とか云へる如き體育とは正反對なる科業にのみ心を苦しめ、深窓の下に蟄居して、體育上の修練は上流の女子程乏しかりし者はあらざりき。華族女學校は數年前より深く玆に注意して、鋭意匡救の道を講ずるに懈らざりしかば、其效績今や顯著なるものあるを認め得るに至れり。聞說く上流社會の婦人は古來一般に難產の爲めに苦しめられたりと。傳說の因て起る所は一考を拂ふに値せり。維新前に於ける大名の姬君の如き、婚嫁後無事に兒を產して其兒の健全に生育すること能はざる爲め繼嗣の妾腹に出でたる者、若くは養子の多かりしは爭ふ可らざる事實にして、現に德川家十五代の將軍中に於ても、本腹の世子甚だ尠きのみならず同族より入て武職を襲ぎたること其幾回なるを見ても知るべきなり。大凡體育其道を得ざれば、筋骨及び內臟も共に發達せず、筋骨內臟の發育完つたからざるに於ては、婦女の生殖機關の如き生理上決して獨り强健なるを得べからず。古來貴族の婦人が難產の爲めに苦しめられたる理由是に於てか燎然たるべし。天造の機關人爲の障碍を受けて發育不良なるより無益の苦痛を嘗め、甚だしきに至ては可惜生命すらも奪はれたるなり。然るに同時代に於ても、武藝及び農工の如き業務に從事せる婦

人は、分娩を以て別に困難なることゝせざる如くなりしは、畢竟するに後者は勤勉業に從ひ、たとひ現今の學理とは相容れざる點あるにもせよ、大體に於て生理の法に適ひ、筋肉内臟共に發達し、人身の各機關に障碍なくして活動し得る理由ありしに歸着すべきなり。

我黌に於ては夙に生徒の體育に重きを置き、生徒の通學する途上車馬を用ふるを廢せしめ、且一日三十分一週三時間は必ず體操を課するの外、午前と午後とを問はず、各授業後の休憩時に於て十五分宛の隨意運動を課するを以て、縱令體操科に欠席せるものも、之を以て彼を償ひ得べからしむ。又卒業生は言ふに及ばず、未た修業中に在る生徒も、體育奬勵の結果、一般に健康を保ち、病累尠なきことは事實にして、就中卒業生の如き、他へ婚嫁して後産兒の務に堪えざる者なきは勿論、母子共に肥立良好にして、難産等の如き歎聲をば、殆ど之を耳にする事なきに至れるは、生理思想乏しき邦人に對して一大鑑戒を與へたるものにて、玆に特筆するの價あるべし。今一二の實例を擧げて示さんか、某公爵の令孃にして今は某宮妃とならせ給ひたる某殿下の如きは、今日迄に王子女三人を設けさせられ、又某公爵の令孃たる某宮妃殿下の如きも、無事王女を擧げさせられ、又某公爵の令孃たる某宮妃殿下の如きも既に二王子を設けさせられ、健全に御成長遊ばされつゝあることは、世人の夙に稔知する所なるべし。右を以て一に之を華族女學校に於ける體育奬勵の効果に歸するは較失當なるべきも、與かりて力多きは何人も疑を容れざる所ならん。然るに翻つて眼を我國家庭の裏面に注げば、如何せん生活の狀態不規律を極め、學校に於けるが如き合理的設備は一般社會に在りて容易に之を求むべからず。我黌に於て養ひ得たる體力も、各生徒卒業後婚嫁して一二回の出産を經る迄は持續するを得べきも、其後に於ける體力は早く已に耗損して健康體を以て目す可らざるに至るは比々皆是なり。其子女一旦嫁して人の妻となり、母となり、生活狀態を轉ずる時は在校

中授けられたる體育法は幾んど忘却せられ、空しく晏眠座食の人と化し、かくて數年の後に至れば、全く學校の門戸を出入せしことなき舊時の病身なる奥樣風に陷るを見る。我國家庭生活の學校生活と懸隔することの甚しき爲め、此弊を免れざるもの多きは遺憾の極みなり。又良人と手を携へて運動散策する婦人をば、世之を嘲るも、斯る婦人はその肢體概して强健なるを常とす。之に反して世の老夫人社會より好評を博する如き婦人は、健康勝れずして湯藥と親しむこと多きが如し。又女兒を養育するに方りて、手腕が太くては見つともない、腰の廻りが肥過ぎては耻辱だ、躰軀が偉大くなつては、始末に困まる抔と云ふ如き僻見者流は最早影を歛めたるべしと思ひの外、因襲の久しき、陋習未だ全く根絶さるゝに至らざるは歎くべし。されど理不盡なる惡習汚俗は永續するものにあらず、早晩我が社會より一掃せられ、體育奬勵は國家富强の一大要件たることを確認せらるゝに至るや必せり。

(五)**華族女學校の生徒數**　華族女學校は明治十八年の設立に係る。當時入學者の定員を三百名と限り、之に應ずべき設備を施したりしに、爾來修學者歳を逐ふて數を增し、今や六百名に近き生徒を收め、校舍爲めに狹隘を告ぐるや久し。是れ該校が貴族女子の敎育機關として好地位を占むると共に、文運の進歩が國民を促して女子敎育の忽せに爲すべからざるを覺得せしめたる結果に外ならず。同校の設備は之を他の官私立女學校に比して校舍に幾分か餘裕を存せしを以て、今日に至るまでは格別支障を生ずることなかりき然れど設備完全なりやと問はるれば、「然り」と答ふること能はざるを以て、早晩敎室を增築して以て完全を期せざるべからず。現今の如く中學科と小學科と生徒の敎室を接し、將た講堂を以て唱歌室に使用する等のことは、敎室配合上全く一時の都合に出でたるものなり。但し予は校舍狹隘を告ぐるまで志願者の增殖せしことを寧ろ幸慶として悅ぶものなり。

(六)入學者退學者及卒業者　三者の間に存する關係の一斑は、「修學期と婚姻期」と題する項目中に於て已に要點を説き示したり。今日に逮んでは上流社會の人士は皆女子敎育の國家の要務たることを認めて之を忽諸に附する弊なきに至りたれば、其の女子の如きも一旦華族女學校に入學したる以上は、罹病轉住其他已むを得ざる事情に遭遇せるものを除く外、結婚の目的を以て半途より學を停むる者極めて稀れなるに至りしは好傾向と謂ふべし。疾に罹れる生徒の一時休校し若くは退學するは是非もなき次第なるが、近時體育奬勵の効空しからずして發病の爲め退校する者は殆ど之を見ず。又文武高等官の子妹には父兄の職務を以て任地を變更せるより餘儀なく退學轉住するに至るものあるも、其の數極めて尠なし。修學者中十人は十人、百人は百人までは、卒業てふ月桂冠を戴ける後に於て婚嫁を覓むるも敢て晩しと思考せざるものの如く、之を以て十數年前の情態に比較するときは、上流婦人社會に於ける思潮の變化否發達も亦た實に見るべきものあり。この好氣運は必ず益々勢力を得て將來大に歩を進むることを疑はず。

(七)卒業生に對する世評　斯の聲は局外者より學校に對つて送らるべき聲なり。今吾輩の口より之を發するは主客顚倒の嫌なしとせず。されど試に所感の一端を叙して參考に資せん。我黌の卒業生中には外交官と婚を結び居るもの數名あり。此等の夫人は、在校中歐語の敎授を受けたる爲め、今日は頗る便利なり、願はくは今後一層該學科に力を注ぎ後進の子女を薫陶せられたしとの言を寄せらるゝかと思へば、又普通の家に縁付たるものよりは反對に、私は久しく外國語の敎授を蒙りたりしも、一旦嫁入して後は曾て其必要を感ずるが如き機會に遭遇せず、從つて之を復習することも六ケ敷、今日に及んでは日々之を忘失するのみなり、誠に申譯なき次第ながら、事情何卒酌量せられたしと申越すものもありて、學校を同うし學科を同うし卒業期すらも異ならざる生徒にても、黌を出でゝ婚姻せる後、其の良人又は縁家の職業地位等に

因りて所修學藝上の利害を異にすること斯の如しとせば、卒業生の價値即ち世人の之に對する批評も區々にして一定せず、又一定すること能はざるは不得已次第と謂つべし。但だ此に言明するを憚らざるは、華族女學校の生徒には上流女子として修め置かざる可らざる普通の學藝を教授し居るを以て、此點に於ては卒業後如何なる種類の家庭を構成するも敢て支障なかるべきの一事なりとす。又今日までの卒業者の緣家を職業上より區別するときは、中に皇族あり、舊大名あり、新華族あり、銀行員あり、學者あり、醫師あり、文武高等官等ありて一樣ならず、且其婚嫁は果して本人の希望に出でたるものなるや否やを彰らかに知る能はずといへども、傳ふる所に據れば陸海軍高等官並に學士と結婚したるもの比較的多數を占むといふ。而して十數年前までは、華族の女子は同族の男子と婚を結ぶべきものゝ如く心得、士族若くは平民の位格職業を異にするものと共棲することを甚だしく忌避するの風ありしかど、近時良人の門閥よりも其人物を採擇せんとする父兄及び女子の輩出するに至りしは悦ぶべきことなり。

(八)上流女子思想上の特色　其間に多少の遲速高低あるを免かれずといへども、上流女性の思想も他の階級に在る女性の思想と共に著るしく發展せり。就中國家的觀念に至りては、矢張上流の地位を占むる丈けありて比較的深厚なるを見る。其の由て來る所を按ずるに、生徒が各自の家庭に於て幼時より享受する父兄の感化力之が主因を爲すものゝ如し。東京に於て子女を華族女學校に入るゝものは、多く華族、貴族院議員、文武高等官等の人々にして、又地方より來りて遊學するものゝ父兄には、代議士または縣會議員の如き業務を有する人物多數を占むるを以てなり。此等父兄の口にする所、手にする所、若くは交際する所の人物中には國家の公務に干與するもの自然多かるべく、殊に陸海軍武官の如きに至りては、一朝有事の際眞先に身命を家國に捧ぐべき任務を擔ふものなれば、平素此等の事に付家族に對して談話訓戒を與ふ

ることも決して珍らしからざるべし。是に於てか這種の家庭に生長したる女性は求めずして自ら國家的觀念を涵養することを得。已上は比較的の觀察たるや論を俟たずといへども、事實は瞭かにこの觀察の誤らざることを立證せり。又華族女學校の生徒が入學後卒業に至るまでの間に於て國家的觀念の修養上幾干の發展を爲し得べきかは、之を知ること容易ならず。されど家庭の空氣と學校の光熱と內外相應じて彼等をして健全なる國家的思想を培養せしむることは確實にして、之を上流社會に於ける思想界の一特徵と稱するも不可なかるべきなり。而して教養未だ足らざる女性をして國家的觀念を過度に發揮せしむることの得失は姑らく別問題として玆に之を論ぜざるべし。

以上は予が褐を華族女學校に釋きたる已來十餘年間嘗め來りたる經驗に鄙見の一端を加へたるもの、要を撮りて詳を省きたるは尙ほ稽査を施すべき問題多きを以てなり。同感の士倘し微意の在る所を察して斯業の爲め高教を吝むなくんば幸なり。

（本篇は淺岡氏の談話を記者の筆記したるものなり文責記者に在り）

日本婦人と自重心

女子學院長　矢島楫子

日露戰爭と云ふ我國非常の出來事に際して、國民一般に奉公の赤誠を現はして居る事實は、日々新聞紙上に見はるゝのばかりでも、非常なもので、國民として誠に賴もしき次第で御座います、で此際に於ける我婦人の行動は如何でしやうか、其數に於て國民の半數を占めて居る婦人は、擧國一致と云ふ點より申し

まするなれば、國家の半分は婦人によつて負擔されねばならぬと云ふ勘定にもなりましやう、元より婦人の爲すべき職分は男子のそれとは、其性質に於て全然異つて居る、だから果して婦人の負擔が國家の半分に及んで居るか如何かは、一寸知り難い事で御座います、唯今日の日本婦人として力の及ぶ限り盡して居ると云ふ事だけは申しても差閊はなからうと存じます。

で、戰時に於ける婦人の務は、よし其力が足らずして充分に其の責任を全ふすることが出來ないとしても、足らぬ處は他から補ふて貰ふ事も出來る、例へば內顧の憂なからしむるのが女子の務であるのに、實際女子に於て力が足らずして其の務を全ふする事が出來ない樣な場合にも、隣里鄕黨の助けによつて、何うにか斯うにか遣つて行く事が出來る、是は戰時であるからである、非常の場合であるからである、勿論此際に於ける婦人は苦しいには違ひない、責任の重大なる事も無論の談で御座います、而しながら一歩退いて考ふれば眞に女子の重荷は戰時にあらずして、寧ろ戰後ではなからうかと存じます。

今からして戰後の事を申しますると、誠に取越苦勞の樣で御座いますが、平和克復の日は早晩來るべきものであるし、また眞に婦人の責任の重大なるは、寧ろ其時にあると信じまするので、今に於て戰後の事を慮るもの強ち無益の業でも御座いますまい。

家貧うして良妻を思ふで、家に何事か事のある場合には、妻女の責任も重い替りに其の言も用ゐらるゝので御座いますが、一朝事治まり一家平穩無事と云ふ日には、先に良妻として重寶がられた妻は唯床の置物にされて、主人は內を外の放蕩三昧、外妾の三人も四人も圍ふてあるとか、甚だしきは妾を家の內へ引入れるとか云ふ樣な事になる、是は世間によくある例で御座いまして、斯う云ふ際に於ける妻君の立場は非常に困難なもので、寧ろ貧困であつた時の方が氣樂であつたと思はるゝで御座いましやう、斯かる

時に當つて、主婦として、品位を保ち、夫をして不品行に陷らしめず、一家の風儀を亂さず、所謂家庭の女王たる職分を全ふすると云ふ事は、其困難中々筆や口のよく盡すべき處でなからうと思ふ、而して女子の眞誠の職分は玆にあると云ふに至ては、女子の天職も亦重大なものでは御座いませんか。

今や我國家は非常の秋であつて、多くの良妻を要するの際で御座います、現に幾多の良妻は新聞紙によつて日々世人に紹介されて居る、啻に良妻のみならず、幾多の女子の美擧は計劃され實行されつゝあるので御座います、戰時に於ける女子の務は遺憾なく盡されて居る樣に御座いますが、翻つて戰後平和克復の日に思ひ及んだら如何で御座いましやうか、戰爭の終局は豫め明言する事は出來ぬかは存じませんが、大勢の上より揣摩いたしまして我國の勝利は疑ふ事は出來ますまい、そこで戰勝國たる戰後の我國の狀態を想像して御覽なさい、多くの戰死者の遺族が出來ることは云ふ迄もない事で御座いましやう、名譽の負傷によつて癈疾不具となつて歸つて來る人も御座いましやう、是等の戰死者の遺族や負傷者の家族は如何云ふ境遇に立つ樣になりましやうか、大勢の老人や小兒を殘されて其の夫に先立たれた妻や、癈疾不具の夫を持つた女房が、其夫に替つて一家を背負つて立たなければならぬ、其困難は何程で御座いましやうか殊に戰後の財政は非常の膨脹を來すに違ひない、從て貧富の懸隔は益々甚だしきを加へ、生活の困難は尙一層增す事で御座いましやう、現今男子一人の月々の所得、平均二十五圓程に當るさうで御座いますが、戰後に於ては到底此樣な事では足りますまい、假に是を倍に積つても、五十圓と云ふ金がなければ一家を立て行く事は出來ない、是が戰死者の遺族や癈疾不具者の妻の負擔となる譯である、今の日本婦人の實力に於て果して此負擔に堪へる事が出來ましやうか、元より是は大摑みの計算で御座いまして、必ず此通りになると云ふ譯ではなく、若しまた左樣なるとしても國民中極めて少數の部分で御座いましやう、けれど

も此少數の部分には何人が當るか分らない、少くも軍國の婦女として此覺悟はなければならぬと思ひます。さて又他の一方を見ますると、是等の負傷者戰死者以外、健全に凱旋して來る大部分が御座います、是は誠に目出度い事で、如斯人々の妻室たるべき人は右に述べた樣な困難もなく、夫が遠征の留守を守つて一家困難の衝に當り、云ふに云はれぬ辛酸を嘗めた甲斐あつて、目出度き夫の凱旋を迎へ、過ぎし日の艱き苦勞を互に語り合ふと云ふ至極目出度き境涯であつて、夫も亦その妻が永々の骨折に對しては充分に感謝を表する事であらう、何時迄も是で續けば、申し分はないが、扨てどうも世の中の事は左樣は行かぬもので、喉元過ぐれば暑さ忘るゝ習ひ、戰勝の祝盃は早くも曩日の苦勞を忘れしむるに至りましやう、

戰勝て國驕る、戰勝國の民が放蕩に陷るの實例は、各國の歷史が示して居るところでして、我國に於ても殷鑑遠からず、日清戰後の有樣は如何でしたろうか、今回は二十七八年の經驗もある事ですから、國民も大に戒めては居りましやう、けれども先づ其の覺悟で居なければなるまゐと思ひます、如斯場合に處して婦人の取るべき態度は如何にすれば良いのでしやうか。

凡そ一國の風俗に至大の關係を持つて居るものは、婦人で御座いましやう、時としては婦人が風俗の支配者であると申しても、差閊ない樣な場合も御座います、左れば戰後の我國の風敎を維持する上に於て、婦人の責任は餘程重大なものでなければならぬ。

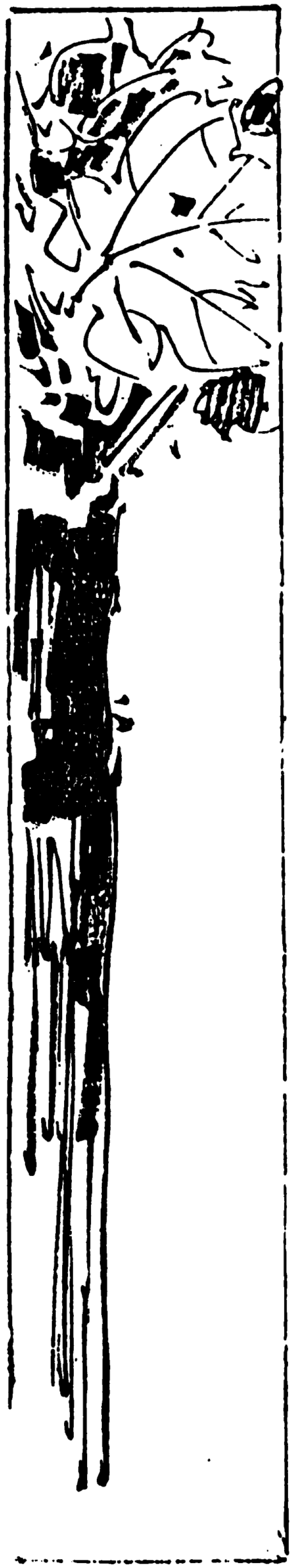
我が同胞姉妹は、如何にして此大任を盡しましやうか、其の手段方法の如きは、實際問題に遭遇して、種々講ぜらるゝで御座いましやうが、先づ何よりも必要なのは根本的の問題であつて、自重と云ふ事であらふと思ひます、男女を問はず、人として自重心の必要な事は、今更云ふまでもない事で御座いますが、今特に是を云ふ所以のものは、日本の婦人に於て最も此心の缺乏して居る事を信ずるからで御座います。

凡そ自重とは、自分を信ずる事である、自分は是だけの事をなすの力がある、而して自分のなすところは貴い仕事である、自分は是を爲すために此世に生れたのであつて、是を成就げなかつたら人間として役目が立たぬのであると云ふ考へを以て自分の職務に從ふ、是即ち自信でありまず、既に自分の從事する仕事を、貴き仕事だと信ずる上は、其の貴き仕事に從事する自分も亦貴き人でなければならぬ、乃で自分で自分を重んずる事になるので御座います、自重と高慢とは履き違へ易い事ですが、高慢と云ふ方は、自分を尊ぶと共に他人を輕蔑するので御座います、けれども、自重に至つては其れはない、自分を尊ぶと共に他人をも尊敬するのである、寧ろ他人に對した場合には、自分は謙るのである、何故ならば、他人も亦貴き天職を全うしつゝある事を信ずるからで御座います、此心を以て各その職に從ふならば、その仕事が何樣な仕事であらうとも、決して他の輕侮を招く樣な事は御座いません、我二千有餘萬の同胞姉妹の中、女子の天職に對して、此自信あるもの果して幾人御座いましやうか、遺憾ながら先づ無いと申さなければなりません、元より一部小數の人には、立派な考を得て居らるゝ方もあらう、けれども日本婦人と云ふ全體の上より見るならば、自重心の欠乏、實に驚くの外ないので御座います、是畢竟數百年來の習慣の結果、遂に日本婦人の性質となつたのであるから、直に之を以て、今日の婦人を責むる事は出來ないけれども、世の女子教育の任にあるもの、少しく玆に意を注いで可なりだらうと思ひます。

外國との交通、日に親しきを加ふるにつれ、我國民の特性も、段々世界列强の間に知らるゝ樣になりました、就中日本婦人の特性を、世界に代表して居るものは、何であるかと云ふに、實に彼の醜業婦で御座います、歐米の人の云ふ處を聞きまするに、各國の醜業婦の中、最も歐米人の氣に投ずるは、日本の婦人であると申します、云ひ替ふれば、日本婦人は男子の翫弄物となるに最も適當した性質を具へて居ると云

ふ事になりましやう、現に我國に渡米して居る幾多の歐米人の中、宗敎家を除くの外は、盡く日本婦人を見るに、醜業婦を見るが如き眼を以てすると云ふのは、實際の話で御座います、何と慨はしき次第では御座いませんか、斯の如きは、其原因一に自重心の欠乏にある、若し我同胞姉妹にして、女子たるの天職に對し、確固たる信念がありましたならば、此樣な淺間しき有樣には、決して陷らなかつたであらうと信じます。

今や軍國多事の秋、女子の爲すべき事業亦一にして足らないので御座います、けれども戰後の日本は、婦人の手を要する事業更に多きを加へましやう、一度思ひを玆に及ぼす時は、婦人の責任の如何に重大なるかを、感ぜねばなりません、只此時に方つて飽くまでも、婦人として自分の天職の貴きを確信し、是非とも婦人によつて成遂げなければならぬと云ふ考へを以て、事に當ると云ふことは、何よりも大切であると信じます。（終）





戰國時代

奥羽の婦人（三）

介洞主人

畠山義繼の夫人

天正年中武勇の名奥羽に隠れなかりし、奥州安達郡二本松の城主畠山右京亮義繼の夫人は、同郡四本松の城主大内備前定綱の女で、才色の世に勝れたるのみならず、性質雄々しき女丈夫でありました、此畠山家と伊達家とは、其仲不和にして、度々戰爭の後、和睦の相談整ひまして、天正十三年十月八日義繼は伊達輝宗の居城宮森へ參られ對面せられしに、事の行違ひより、義繼は輝宗を刺殺し、其身も亦鐵砲に中て討死され、供の武士三十六人、雑兵五十餘人殘らず同し枕に相果てました、此時歩士一人義繼の遺命を受け戰場を遁れて、二本松城へ注進に及びましたから、城中の騒動は、唯鼎の沸くが如くでありました、然るに城の留守居新城彈正は聞ゆる武士で少しも狼狽へず、同苗大和大槻備前、岩角伊勢等を始めとして、宗徒の老臣等と評議の上、義繼の長男當年十二歳の國王丸、次男右京八歳の二人を大將として楯籠り、伊達政宗の大軍を引受けて合戰に及びました、元來此城は、先祖畠山重忠の築かれしもので、要害堅固なる上、籠城の士卒は、主君を討たれて必死を極めました者共でありますから、流石の伊

達勢も攻あぐみ、其年の暮に軍兵を引揚げて、政宗は小濱城に越年されました。

明くれば天正十四年二月、伊達政宗大軍を率ゐて二本松城を圍みました、其時城方の宿老分箕輪玄番、氏家新兵衛、遊佐丹波、同下總、堀江越中等變心して伊達勢を箕輪館へ引入れ、夜の明けるを待て本城へ乘入らんとしました、然るに圖らずも、其夜近邊の寺院に出火がありまして、其光りによつて、箕輪館に伊達家の重臣片倉小十郎の鐘の紋所をつけた旗差物の建並べてあるのが本城から見えたによつて、新城彈正は急に籠城の將士を廣間に呼集め、扨て各々も見らるゝ如く、箕輪玄番等逆心して敵を引入れたれば、今夜の内に、大手搦手より一同に箕輪館へ攻めかゝり、敵兵を切崩し、追出すの外分別あるまじと言ふに、皆一同に御尤に存じますと、各其用意に及ぶ、其處へ奥より局一人出來りて申さるゝには、御前より彈正殿へ直に仰せらるゝ急用あるにより、奥へ參らるゝ樣にと口上を述べました、之を聞て彈正は怒れる聲を振立て、是程鬧敷時分に、御呼立なさるゝ事御無用で御座ると、荒らゝかに返答されたるゆえ、局は手持なげに引返しましたが、又出で參り、急に御聞きなされ度事ある間、御參あるべしとの御意でありますと言はるゝに、さらば唯今參るべし、各御待候へと、其座の面々へ會釋して、奥へ參りますと、御臺所の仰に、別の用にてもなし、折から酒の澤山にあれば、各々始皆の者へ最期の杯を勸め度、此事を其元に相談せんとて呼寄せたのであると、神色自若として平生に變らず仰せられたるにより、彈正も心中其勇氣の逞ましきに驚き、一段御尤もの思召に候、然らば一同是へ召出し申すべしと、廣間へ立歸り、御前より御酒下さるべしとの事なれば、各々御臺所へ通られ候へと申し達すると、一同大に喜びまして、彈正大和の兩人を先に立て銘々具足を着、鎗を提げたまゝ奥へ通りますと、廣大なる御臺所には大提灯を點し燭臺を建連ね四方を照らして白晝の如く其處へ夫人出座せらる、其打扮は、御

身に緋縅の鎧を召され、素絹の鉢巻をなされ、丈けたる黒髪をば背後に散し長刀を小脇に挾みて床机に掛け給ふ、局達は何れも兩刀を帶し、其外の女房共四十餘人衣裝を車端折に取わげ、刀又は大脇指を差して、居流れたる體、勇々しきこと云はん方なく、流石に畠山家の後室と、感嘆せぬ者はありません、其時夫人仰せらるゝ樣、女子のかゝる體たらくにて各方に見え申す事如何に候へども、あの敵どもに生捕られ引立られんには遙にまさるべきか、去年思はずも殿に別れまいらせし事、武家の習ひなれば嘆くべきにあらねど、兩人の子供未だ幼稚なれば、各を賴む外なきに、玄番等譜代厚恩の身にて、逆心する段禽獸にも劣れり、萬事各々へ賴むなり、夜明なば兩人の和公を始め、各々達の妻子まで、此城の上下皆灰になるべしとて更にわるびれたまふ氣色なく唯今城中に酒澤山にあり、此酒を敵に飲れん事心憂き限りなるに、兩人の和公も各々へ盃を進せ度と申さるゝにより、彈正殿へも相談の上呼び申したりと

の御詞なり、其時に彈正等進み出で、必ず御苦勞に思召されまじく、唯今敵を追拂ひ申さんと言上しました、扨其處には大半切桶二ツ据へ、酒をなみ〳〵と盛つて柄杓を添へ、扉を伏せて其上に大小の椀を並べてあり、國王丸は先づ盃を執あげて、彈正父子へ遣はされ次男も盃を岩角伊勢へ遣はされ、夫より御兄弟の御盃を順々に下され凜々敷いでたちの女中共等酌を致します、軈て又夫人の仰せに唯今の肴に請合ふて、片倉が旗馬標を追拂へとあり、彈正最も心易きよしを申上げる、一同も此の優渥きもてなしに勇氣日頃に百倍して、今宵の合戰、敵の首を取るか、我が首を取らるゝか、何れにもせよ、一足も退かじと、決心の色は其顏に現はれました、彈正は徐かに御酒下されの御禮を申し述べ、夜も更けましたれば、廣間に立歸り、申し合す事ある旨を告げて、一同退出に及び、廣間に於て手分を定め、屈竟の兵士は、殘らず箕輪館の大手搦手へ向ける事に致し、彈正自身は三人の侍を相手に御殿に留まる、

扨彈正の申しますには、唯今承はりし御前の御詞並に和公方の御賴み、いつの世にか報い奉らん、今夜若し此敵を逐出し兼ねんには、明朝は各々我々とも皆灰になるは必定なり、就ては我等も一所に向ひたけれども、御前を始め最後の御介錯をする者なくては叶はぬにより、自分は留るのであると別れを告げて、一同を出しやり、皆出拂ふのを待て門の扉を鎖して仕舞ひました、斯の如く上下一致し、必死の覺悟を極めて攻懸りましたから、首尾能く、伊達方に聞えたる片倉の一手を逐崩し、箕輪館を燒拂ひ、敵の首三百餘を打取り、大勝利を得たのは、畢竟此の夫人が將士を待遇するに其道を得、能く之を激勵して、奮發させた功績であります、又籠城中鐵砲玉を鑄造するのは、婦人に相應の仕事であると、總女中を指揮して鑄させらるゝに、女中等も段々慣れて上手になり、後には男子も及ばぬ迄功者になり、硝藥の調合から、武器の掃除一切を引き受け、其外兵糧の配り方、負傷者の看護等、殘る方なく行屆き、凡そ六ケ月程籠城堅固にて、伊達勢も大に攻あぐみたること故、政宗には、遂に小濱へ歸陣されました之を機會として、相馬義胤より城中へ使を遣はされ久しく籠城あらんは危き事なれば、一先づ會津へ御越しあり、時節を見合せらるべき旨を申送られ、會津の芦名義廣よりも、當方へ參らるべき由の使者がありました、夫人には先祖重忠以來の居城を立退くこと如何にも殘念と思し召されしも、さりとて援兵後詰もなき城を守りて、生先長き和公諸共敵の刄にかゝらんも謀なきに似たりと、同年七月十六日本丸に火を掛けて自燒し、一門其外宗徒の人々を前後左右に從へ、整々と備を立て會津へ立退かれました、かゝる夫人をこそ、實に智勇兼備の女丈夫と申すべきであります。

戰國の時代に於ては、一國一城の主はいふに及ばず。その奧方息女など女性の身にても、倘ほ敵愾の志ありて、容易に降伏するなどの醜體を顯はさゞりし氣節は洵に感嘆すべきではありませんか。

豐太閤の雄圖

文學士 濱田紅於

予は既に我が國民の三大飛躍の中、その二を說きおはりたれば、最後に我邦第一流の英雄豐太閤の大活動を略叙せんと欲す、然れども豐太閤が外征の大畧は、何人もよく知れる所なり、若しこれが詳細をつくさんは容易の事にあらざれば、こゝには唯その由來と用意とについて述べむと欲するなり、予は嘗て古英雄と文學を本誌に掲げて、豐太閤の文事につきていさゝか述ぶる所ありたり、讀者諸子彼此の兩文を併せ讀んで、文武の兩面より太閤を觀察せば、庶幾くば英雄の面目を端睨することを得む歟。

豐太閤が外國征伐の大望は、自て來る所遠し、太閤記などによれば、秀吉が織田信長の命を承けて、毛利氏を征せむとするに臨み、信長中國を與へてその功を賞せむとす、秀吉辭して曰く、今や賞その功に償はざる者少なからず、中國には此等の人々を分封せられよ、臣は更に九州を平げ、尋で海を渡りて、高麗と明とを從へ、三國を合してその主たらむと、蓋し他日外征の大業はこゝに萌芽するなり、この物語は未だ俄に信ずべからずと雖も、秀吉の雄圖が當時已にその胸中に夢想せられつゝありしは事實にして、他に證據あり、天正十年六月、秀吉進んで備中高松城を攻めし時、一日遽に本能寺に於ける信長の訃報を得、忽ち毛利氏と和して、蒼皇姫路に退きしが、偶々龜井武藏守來り謁せしを以て、秀吉その欲する所の領地を問ふ、武藏守答へて曰く、今公東上して明智光秀を誅せば、六十餘州は公に歸せん、僕は日本に於て望む所なし、願くは琉球を賜へと、秀吉これを壯なりとし、携へし扇に龜井琉球守殿と書して與へしとぞ、志氣既に海內を呑むの概ありといふべし、天正十五年三月、秀吉親ら大軍を率ゐて九州を征するや、威風堂々として草木も爲めに靡きしかば、多聞院日記にはその光景を記して、事の樣高麗南蠻大唐迄も可二切入一と聞えたり、抑も大變の企、

前代未聞也と云へり、當時すでにその風說ありしが同年五月秀吉島津氏を服し、鹿兒島の太平寺に陣せし時、肥後相良の連歌師淸水宗方來り謁す、秀吉曰く我已に日本を一統したれば、更に琉球高麗を征せむと欲す、一句を試みよと、宗方忽ち吟じて曰く、

草も木もなびき從ふ五月雨の
雨の惠は高麗百濟まで

と、秀吉大によろこびて厚く物を賜ひしと云ふ、かくて薩摩を出發して凱旋の途次、肥後八代に至りて書を生母大政所に贈る、その文中に左の句あり、

唐國まで我等一期の中に申付べく候さげすみ（註云さげすみは下墨にして計畫の意なり）を致候へば、一段骨折申候

と、その後又筑前箱崎に憩ひ、博多灣頭に立ちて、遙かに烟波の浩蕩たるを望み、歌うて曰く、

千歳をもたゝみ入れおく箱崎の
松に花咲く折りのわらばや

と、うちつけにそれと云はねど、雄圖のほのみゆるにあらずや、この外黑田家譜には、

唐國までなりとも可仰付被思召候云々

とあり、本願寺文書には、

高麗國王可ニ參內一候旨被ニ仰遣一候、若於レ滯者、彼國へ相ニ越人數一被レ相ニ究成敗一候事

とありて、その外征の企は一朝一夕にあらざりしを知るなり、而してかの朝鮮の如きは秀吉の眼中になかりしは、本願寺文書を觀ても明ならむ。

かくて西南の方面は既に秀吉に從ひしも、關東奥羽未だ服せざりしかば、天正十八年四月、大擧してまづ小田原を降し、尋で奥羽を威服せしかば、天下全く一統するに至りぬ、こゝに於てか秀吉の宿望を遂ぐべき時機は來れり、すなはち一擧して明國を席捲せむと欲し、使を朝鮮に遣はして、その嚮導たらしめむとす、朝鮮命を奉せず、秀吉怒て先づ朝鮮を滅し以て明に及ばむとし、陸軍十五萬八千、水軍七千を遣はし、朝鮮を征伐せしむ、我兵の向ふ所前なく小西行長は京城を占領し、加藤淸正は二王子を虜に

す、此報達せしかば、秀吉の雄心は大に動き、躬ら海をこえて六軍を統帥せむと欲しぬ。

秀吉の渡航は、朝鮮の平定を待ちて行はれむとしたり、松下文書に曰く

　高麗國之儀彌屬二平均一候、近日有二御渡海一可レ被二仰付一候云々、

大覺寺文書に曰く、

　高麗國王去二日內裏令二自放火一逃退候、則先勢入移候、急度被レ成二御渡海一、此度明朝四百餘州早速可レ被二仰付一候、

その渡航の期限は文祿二年二月と定めしが、二月は暴風多きを以て、三月と改められぬ、かくて秀吉は文祿元年五月十八日、書を關白秀次に與へて、その志望を述べたり、これを熟讃するに、規模あまりに廣大にして、一場の妄想の如く、一片の法螺の如き觀あれども、これ秀吉の秀吉たる所以にして、その面目躍如たり、今その要點を摘記せむに、明國已に平がば、後陽成天皇を四百餘州の君主と仰ぎ奉りて都を北京に奠め、豐臣秀次をその關白となさせ、日本の帝位には、皇弟知仁親王を擁戴し奉り、大和中納言豐臣秀俊か、或は備前宰相浮田秀家をその關白となさむ、岐阜宰相織田秀信或は浮田秀家を朝鮮の領主となし、丹波中納言豐臣秀勝を九州の領主となさむと、その計畫の大なること人意の表に出づ、予は更に驚くべき計畫ありしを見る、そは秀吉が印度征伐をも豫想せしことなり、彼の佑筆山中橋內が、秀吉の義妹に贈りし書狀の一節に曰く、

　一、こんど御さきつかまつり候しゆは、天ぢくちかきくにくだされ候、そのゝちはう〳〵さま御ことばをくわへられずとも、なるべきほど天ぢくきりとり候やうとのぎよい候、

と、世人或はおもへらく、秀吉の事業はその輪廓に於てこそ偉大なれ、細微の點に至りては不注意の事も多からむと、然れども英雄の事業には一々根據あり、大體に通じて細事をわすれず、慘憺たる苦心の

跡は歴々として觀るべきものあるなり、秀吉の如きも亦しかり、その例證を擧ぐれば次の如し、戸澤子爵家の執筆古瀬彈治氏所藏の秀吉の軍扇なるものあり、その表面には朝鮮語と日本語との對譯表をかゝげ、その裏面には日本朝鮮及び明の略圖を描きて、要處々々には名稱を記したり、その用意の周到なる以て模範となすべきなり、京都妙國寺に藏する秀吉條目も、その注意の程を見るべし。

一高麗へ渡海之人數出船事、船頭ににわをよくよく見屆させ、順風次第可㆓罷渡㆒、もしにわあしきに出船仕候はゞ、其ものゝくせ事たるべき事、

文中にわとは海上平穩出船に善きこと

一順風よき時分、船頭令㆓油斷㆒出船なきにをいては、くせ事に候間、舟奉行として堅相改可㆓申付㆒事

一人馬兵粮等、御定のごとく可㆓乘遣㆒候、若違背にをいては、乘候人數之事者不㆑及㆑申、船頭くせ事たるべき事、

又更に小事に注意せしことは、次の如き例あり、

一長柄之鑓は柄を金に可㆑仕候、毛のなげさやは無用に候、大阪に樫の柄を枯し候て置候、可㆑有㆑之候間、御用意候はゞ可㆓召寄㆒候事、

毛のなげさやとは毛皮などの槍鞘の末を長くして、後へ折り垂らして置くもの、

知るべし、かの下宿屋籠城の自稱豪傑どもが、徒らに空論放談するとは、同日の談にあらざることを、かゝりし程に準備も漸く熟しけむ、文祿元年六月七日、京都所司代民部卿法印前田玄以は、秀吉の命をうけて、廻文を伏見宮以下公卿四十五人に贈りたり

高麗落居、太閤御渡海候、即大唐出勢有て、御治定次第、

當今様へ大唐可㆑有㆓進上㆒候間、内々其御用意被㆓仰付㆒候へと、自㆓太閤㆒被㆓仰上㆒候、然ば行幸之儀式等、諸家之記録を被㆑記、今月廿日之内に可㆑被㆑備㆓叡覽㆒之旨、自㆓拙者㆒可㆓申觸㆒之由、傳奏衆を以、勅定候之間、可㆑被㆑成㆓其意㆒事肝要、不㆑可㆑有㆓御油斷㆒候、恐々謹言、

秀吉の意氣は既に宇宙を呑み、崑崙山の樹木も、西

伯利亜の野の草も、その雄風にのべふすは目睫の間にありしなり、然れどもはかなき浮世は思のまゝにならざりき、太政所の病氣は孝心深き秀吉の後髪をひきぬ、複雜せる國内の事情は、秀吉をしてさすがに躊躇せしめぬ、加之後陽成天皇の優詔も下りたり。

高麗國への下向、嶮路波濤をしのがれむ事、無勿體候、發足遠慮可然候、勝を千里に決して、此度の事諸卒をつかはし候んも、可事足哉、且朝家の爲め、且天下の爲め、かへす〴〵もおもひとまり給候はゞ、別而悅おぼしめし候べく候、猶勅使にて可申候、

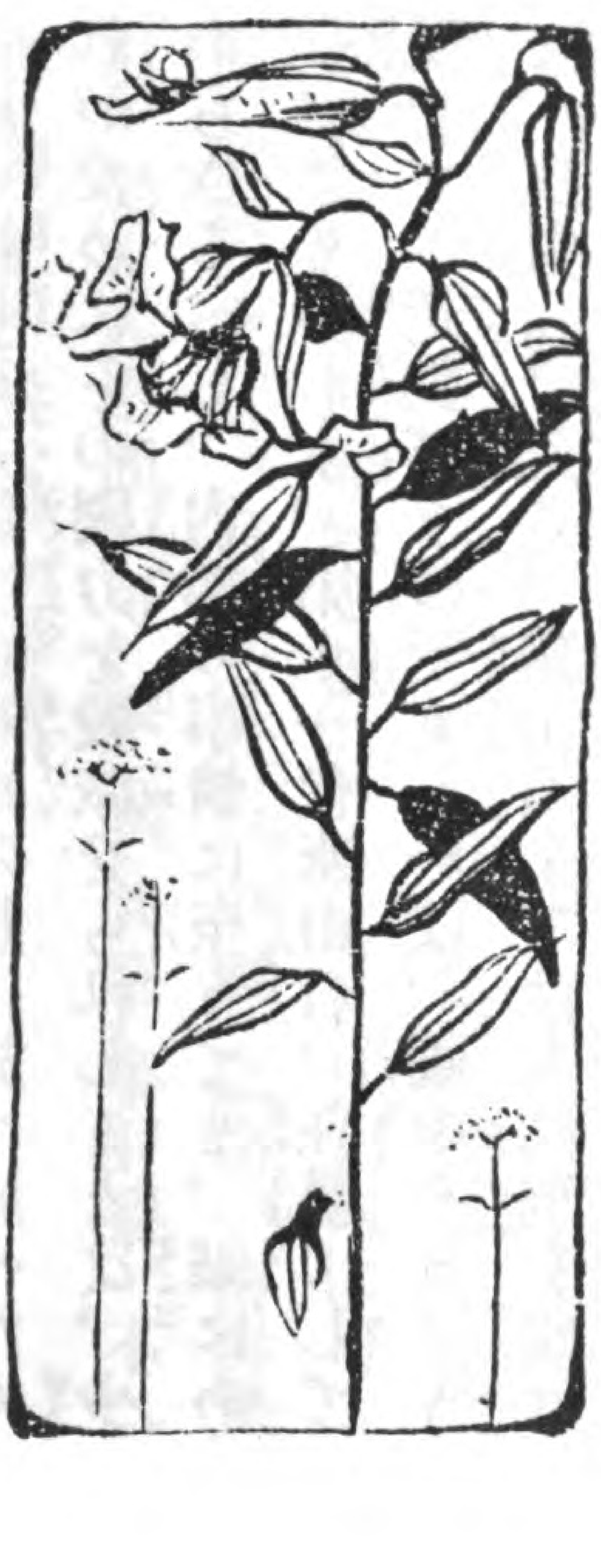
噫秀吉の渡航は中止となりぬ、その遺憾の程やいかなりけむ、天若しこれに壽を假し、充分にその志を伸べしめば、アレキサンダー、成吉思汗と、勢名をひとしうせんこと誰か又疑を容れんや、予は終に臨んで韓明兩國の當時の事情を考へて、その成功を假想せむと欲す。

朝鮮は開國以來秀吉の征伐に至るまで、常に倭寇に苦しめられしことは、蝴蝶軍の篇に於て述べたり、これがためにその國力を殺減せられしことは、少小にあらざるべし、內部の事情に至りても、誠にあはれむべきものあり、第十一代燕山君、狂暴にして民を愛せず、苛税連りに至りしかば、國中やう〳〵動きて、反亂屢起る、燕山君すなはち酷刑を設けてこれに臨み、日夜酒色に耽りて、終には妓を祖廟に招きて痴戲するに至りぬ、皇威これより衰へ初めぬ、恭徽王繼いで立ち、中興の英主と稱せられしも、また昔日の勢を恢復する能はず、第十五代昭敬王（即ち秀吉時代の王）に至りては、國内の無事に狎れて全く武備を廢し、又政務を勉めず、一二忠良の臣ありしも、多數の小人に妨げられて、忠言をつくすこと能はず、地方官はこれに乘じて人民を苦しめしかば、海を渡りて我邦に歸化するもの相繼ぎぬ、然れども王は毫もこれを憂ひず、恬として知らざるものの如し。

明は開國後僅に三十餘年にして、既に靖難の亂あり而して成祖は四方の外國を征して國威を揚げしも、宦官專恣の端を啓き、爾來奸臣と相結びて歴代の禍となりぬ、一方に於ては、王陽明の學盛に行はれ、その末派の徒は學祖の本志をあやまりて、空言自ら喜び、少しも仁義忠孝の道を辨へず、士風大に衰へたり、加之蒙古の遺族韃靼、瓦剌は北境を犯し、英宗皇帝の如きは瓦剌の捕ふる所となり、帖木兒は中央亞細亞を從へて、その西境を覗ひ、倭寇は連年東南の海岸を侵すあり、明はかくの如く内憂外患に苦しみぬ、神宗皇帝（秀吉時代の明主）は即位の初めは鋭意治を勵みしも、中年以後宰相その人を得ず、神宗も漸く政に怠りしかば、明朝は遂に亡滅の色を呈するに至れり。

兩國の事情は實にかくの如くなりき、我が勇猛の將士の鎧袖一たび觸るれば、いかでか碎けて散らざらむや、さらば豐太閤が駿馬を阿爾泰山上に立てゝ、西方の山野を睥睨するの壯觀なしとは云ふべからず

徳川家康の愼重なる、兵を海外に動かすを好まず、專ら内國の經營に力めしが、我國民の雄飛的の精神は尙やまず、功を邊陲海外に立てしもの少なからざりき、然るに家光將軍の時、島原の亂ありてより、幕府は鎖國の方針を取り、我國民の意氣も衰へて、醉生夢死するに至りぬ、今や我國はロシャと兵を交へて、連戰連勝、國民の志氣大に昂れり、然れども血氣の勇は吾人の取らざる所、よく持重し熟慮して國力の發達を計り、豐太閤をして地下に冷笑せしめざらむことを期せざるべからず。





椿詣の記講義（下）

文學士　境野天華

はるかむかひなる山には、岩むら毎に赤き花の見ゆるは、つゝじにこそあらめ、程遠ければさだかにはわかたず、谷すこしめぐれば、こなたの山に沿ひてかのしやくたいじなんおはすなる。こゝををきすとぞいふなる。

見渡す遙か向ふの山に重なり合つて居る岩石の上に赤い花が咲いて居る。われは察する所岩躑躅（杤島類）でがなあらう、遠くて確かには分らぬが。

谷合ひの處を少しばかり巡り道をして行けば今度は山沿ひに自分共の目的の一つである彼のいゝ石大師が鎮座りて御出になる。此邊の一帶はをきすと云ふ所の名になりて居る。

遙に仰ぎ見るにいとも〳〵大きなる石にておはすなるが、たゞひろごり立給ひたるさま、傍なる高嶺どもと爭ひ聳えて高きこと幾そばくとも思ひはかり難し。そのしきいませる根ざしのわたりは目路もかすむばかり廣し。

おゝこれが石大師様に在すかと目を仰げて遙に眺めやれば、實に〳〵譬へん方もない程大な石の神

様でお出になる。それが左右前後にかけて廣く廣く開展して立つて御出になる有様は實に仰山なもので、近傍の高い山と高さを比べて負けじ劣らじと云ふ様子、幾何の高さあるか一寸見當が付き兼ねるほど高い。高さに比例して其の幅の廣さも大したもの、其の足下に敷物の様に成つて居る根底の石が四方に廣く擴げられて居て、眺め遣るにも遙々として遠くかすむばかりに思はれる。

まぢは眼界

此ふもとの田長どものひでり打續く時はこゝに群がり來りて歌うたひ笛ふきなどしてこの御心を慰めまつれば雨かならず降りくとなん。

此のあたり、麓の村に住居をして居る農夫どもは此の石大神の神徳を信じて居るものであるからして、旱天打續き雨無く作物が枯るゝ虞ある時は此石大神の下に集りて、歌を謳ひ、笛を鳴らして此の神の心を慰め和げ雨を乞ふ習俗になりて居る。さうすれば屹度靈驗がありて雨が降りて來ると云ふことである。

そも〳〵しやくだいじとはいかなるはれぞと問ふにむかしより文字には石大神と書來れり。さるは古くは石の大神とも稱へ奉りつらんか。延喜式に鈴鹿郡石神社と見えたるはこれを云ふにやと並樹いへり。日傾きぬるまゝにもと來し道を下りて御贄川より北の山あひを經て山本村に至る。こゝなん椿の御社なりける。即ち式には鈴鹿椿太神社と見えたり。

一體石大神とはどう云ふ由緒のある神様であるかと同伴の並樹に尋ねると並樹の返答に、昔から石大神と文字には書き來りて居るが、それよりも古くは石の大神とも稱して居つたものらしい。延喜

式(書名)の中に鈴鹿郡石神社と書き載せられて居るのは北の石大神の事であらうとあつた。丁度日も傾きかけて來たので始めに來た道を引き返へし山を下りて御熱川と云ふ川の所から北方の山の間を道を歩るいて山本村と云ふ所に着いた。此處が椿神社である。即ち彼の延喜式に鈴鹿椿太神社と書かれてある椿神社は是れである。

日くれぬれば御社へは詣でず。この社のはぶり山本行道がもとを問ふ。行道いと心ある人にてあるじまうけなどまめやかにせり。夜いと寒ければ埋火のもとに寄りそひて古き跡の事ども物語りす。夜更くるまゝに軒の松聲たてゝ、嵐はげしう吹出たり。

あし引の山松かねのかりまくら
あらし吹く夜はいこそねられね

並樹

世の外のこゝちこそすれ稀に來て
やどる軒ばの松風の音

日も暮れたからして神社へは今日は參詣せずして直ちに此の社の祝(神官)である所の山本行道と云ふ人の家を訪ねた。此の行道と云ふ人は極めて風雅のたしなみある人であつて、親切を盡くして饗應接待をして呉れた。まだ三月の事で夜は夜寒烈しく、爐火近く寄りあひ、互に好きの道古跡の話に夜を更かした。段々と夜が更くるにつれて、はげしく吹き出した、嵐の爲めに軒端の松はすごまじい音を立てゝ居る。

(歌)(あし引のは枕詞)此の山中に一夜の假りの宿をすることであるが、軒の松は嵐に吹かれてひどい音を立てゝ居る、さうでなくとも何となく落付かねる心の一入さはがしく、心安く打とけて寢ることも出來ぬ。

と云ふ歌を自分は作つたが並樹にはこう云ふのが出來た。

(歌)偶此の山中に來て一夜の宿をかることであるが、軒に通ふ松風の音、それを耳を澄まして聞て居ると、とうも自分は世の中以外にとび離れて居るやうで、實に何とも云へぬ好い氣持である。

朔日、つとめて起出づ。よべより雨いたう降りたるが猶小止むべくもあらねどとく御社に詣で立歸らばやなどいひあへり。あるじの、この雨にはいかで歸らせ給ふべき山のそば道、たど／＼しかるべし。今日は息らひて明日なん立歸らせ給へなど言へば、さらばとて思ひとゞまりぬ。

明くれば朔日、朝も早くから起き出でた。昨夜から懸けて雨が烈しく降り續いて居て今に止みさうにも見えなかつたが、早く椿の社に參詣して白子へ歸りたいものと並樹と話し合つて居るのを宿の主人が聞きつけて、此の降雨にどうしてお歸りが成りませう、險はしい山坂岩崖の道の事で、若し此の雨にお歸りなされるなら、どの位御難澁なされませう、どうか今日一日ゆつくりなされて、明日雨が止んでからに成されと云つて、親切に引止めて與れるので、自分共も其れに從つて今日の出發は思ひ止まることにした。

晝間過ぐるほどに雨やゝ晴ぬれば御社に詣づ。行道も道しるべせんとて伴ふ。森のうちいとかう／＼しく見渡されたり。年ふりたる木立どもの枝さしかはして茂りあひたるが、さと吹來る風に誘はれて露亂れ散つゝ、衣手ぬれとほりぬ。

晝過ぎになつて、雨も少しは晴れて來たので、椿の神社に參詣をした。行道自ら道案内の爲に同伴に成つて與れた。椿神社の森の有樣が如何にも神々

しく尊とく眺められる、幾百年の年月を經たかと思はれる木立老木の枝を交へ茂りに茂りて居るに雨後の事とて、枝に葉に露を帶びて居るのが、折から吹きつくる一陣の山風に脆くも、はら〳〵と散りて來る、それが木の下に佇んで居る自分の衣裳に落ちかゝつてしつぽり袖は濡れて仕舞つた。

御社の前にいたれば彼方此方にいと陰古りたる椿の花白きと赤きがあまた立てり。立寄りて見るに檜の木のさましたる葉の枝ごとに生ひいでたり。

それから愈〳〵社の前へ行つて見た。社の四邊には其處此處に千代椿の古木が幾本となくわつて白い花赤い花今を盛りと咲きこぼれて居る。能々近よりて見るに、椿と云つても丁度見たところ、檜木の葉の様をして居るのが、枝毎に生ひ茂つて居る。

こはいかなる種ぞと問へば此御社の前なるは皆かゝる葉の生出づめり、こを昔しよりあやつはきとぞ云ふなる。又このうしろなる高根をつばきが岳とも云ひ、なべて此ほとりに椿いと多しとなんいふ。この御社は何の神のいつかれ給ふにかと言へば猿田彦の大神なりとぞ。やがていがきのもとにぬかづきて

はふり子がいはふみむろのあや椿
遠つ神代にうゑし種かも

これは一體どう云ふ種類の椿であるかと尋ねたら此の椿神社の前の椿は、昔から此樣な葉が出るのであつて、これを昔から綾椿を稱して居る。それらの因緣から此の神社の後方に高く聳えて居る山を名けて椿が岳と稱して居る、一體此の邊は椿の木が至りて多い所であるとの答へであつた。又此の椿の神社にはどう云ふ神樣を本體に祀りてあるのであるかと尋ねると、此處に祀られて御ゐでの神樣は猿田彦大明神であるとの答へであつた。

神樣の御身分も分りたので玉垣の前に頓首（ぬかつき）してこう云ふ歌を詠んだ。

（歌）社の神官（はふりこ）達が大事大切にして居る處の此の御社（みむろ）の綾椿は遠き遠き神代に植ゑられて今も千代八千代と此の通りに榮えて居るのでわらう。

行道がいへらく、この近きあたりにいにしへ大寺のあまたありつるが、今は皆跡たえたり。その寺々の名などはむかし聞き置きしかど今は忘れぬ。佛の御像などは猶かた〴〵に殘れり。いざとて森のうち立離れて少し北へ行けば軒傾きて柱など朽ちたる庵あり。

道案内の行道が云ふやうには、此椿神社の近在には、昔は大刹巨寺が幾つとなく在つたのであるが、其れも今は跡形もなく成つた。其の寺々の名も以前は聞き覺えて居たが、近頃さつぱり忘れて仕舞

つた。其寺々に收められてわつた佛像の片端一部分は（かた〳〵）今猶存在して居る。其遺物を御覽に入れませう、こう御出なされと云つて案内するのでわつた。其の後に從ひ、神社の森を離れて少しばかり北の方へ歩るいたが、其處に軒もはや傾き、柱も腐れ朽ちて居る一つの庵があつた。

入りて見ればいと古き藥師のみ像一つなんをはするが、蜘のすなどかきたり。花供すべき皿だになし。傍らに怪しげなるから櫃四つあり。

庵の中に入り込んで能々見ると、極めて古い藥師佛の御像が一つ寂しく、御氣の毒なことには蜘蛛の古巣に閉ぢ込められて御出になる勿體なさ。誰もかまつて上げぬものと見えて佛に花上るべき所の花瓶一つないと云ふ哀れな樣子。其の傍らに古い古い見ずほらしい唐櫃（脚のついて居る櫃）が四つほどあつた。

蓋おし開きて經文とり出でたるを卷々くりかへし見るに、あるは永德あるは康暦、あるは明德など云ふ年の名をしるして又書ける人とおぼしく妙通、聖周、妙香など云ふ名をしるせり。

此の櫃の蓋を取り除けて其の中から御經の本を取り出して、一卷づゝはぐりて見たが、其經のはしに永德だの、康暦だの、明德だのと云ふ極々古い年號が書いてあつて、又それに御經を寫した人であらう妙通だの、聖周だの、妙香だのと云ふ僧侶尼さんの名が書き記るされてあつた。何しろ古い昔の遺物であることがわかる。

又人の名も年月も記さゞるあり。こは後に補ひ寫したるなりと見ゆ。すべて大般若經になんありけるこゝには卷の數五百あまりありて猶殘れる卷どもは高宮の青蓮寺にありとなん。古き佛のみかたこと所に猶あまりあり。伴ひ行きて見せまゐらせんといへど、雨降り來ぬればえ行かず。今宵また行道がもとに來りて寢ぬ。

其中には又寫した人の名も、寫した年月も記るしてないのもあるがこれは察する所始めのが何時か缺損じたのを、後で何人か寫して補つたものと見へる、此等の櫃の中の御經は何れも皆大般若經であつて、此庵中には丁度其五百卷程藏まつて居て、其の殘餘の部冊は高宮と云ふ所にある青蓮寺に藏められて居ると云ふことであつた。此の外に古くなつた佛の御像を畫にかいたもの(佛のみかた)が此寺の外に所々に殘つて居る、それへ御案内いたしませうと云つて呉れたが、折惡しく雨が降り出したので行くことも出來ず、其の儘になりて今夜もまた行道が家に往つて、厄介になり一泊すると

にした。(明日は愈出發して白子の里に還ることである」

二日、日はさし出でながら風烈しう吹ていと寒し、椿が嶽よりすべて立並びたる峯ども夜の間に雪白うなりたり。山あひ打過ぎていつみ野に出づ。さく花どもかたぐ〱に咲き匂ひたるが吹來る山嵐にみだれあひたり。

遠かたや椿かたけの朝かぜに
　櫻ふきまくいつみの〻原

二日。雨も晴て日の目も出たが、寒い寒い風ぞ吹きすさむで居る、見渡せば椿が嶽から始めてそれに連なりて居る一帶の連山は麓の北の里の昨夜の雨は雪であつたと見えて眞白に降り積んで居る。山と山との狹い道も何時の間にか過て、やがていづみ野に出た。丁度咲き揃つて居る櫻の花が其處にも此處にも(かたぐ〱に)山おろしに吹ひて來る嵐に吹き散らされてひらひらと亂れあふて居るのが實に美るはしい景色である。

(歌)遙かかなたの(遠かたや)椿が嶽から吹きおろして來る朝の風が、麓に咲いた櫻を吹き散らして、いつみの〻原の上に撒き散らして居るのは、まあ何と云ふ好いながめであらう!!!

高宮てふ所をすぎて廣野の驛に出づ。なかばすきかへしたる田面に雲雀のあがりたるを見て、並樹

あらを田のおのが古巢を賎の男に
　うち返へされてなく雲雀かな

暮近きほどに歸りつきぬ。この白子の里より椿の御社までは道のほど今の五里にあまれりと云ふ。

天明七年三月

高宮と云ふ所を通り越して廣野と云ふ宿場に出た

其の邊の田の面半は、はや耡き返へされて居る。空には雲雀高く舞ひ上りて居る。それを見て並樹が詠んだ歌、

（歌）折角此處の荒小田（まだ耕きかへされぬ田）に兒をはぐゝむ爲めに造りて置いた古巣、その巢を田男の手に耡にかけられたので、悲しさに堪へず、あれ、あの雲雀があの通り空に高く舞ひ上りて、鳴いて居るのであらう!!!

日沒頃になりて白子の里の並樹が家に着いたが、白子から椿の神社まで道程を云つたら、只今の五里から出で居ると云ふとである。時は天明七年の三月、これは即ち其の時の事を記したものである

（完）



英文雜錄

慶應義塾大學講師
宮森麻太郎

MISCELLANY IN ENGLISH AND JAPANESE.

By A. Miyamor.

I. *LETTERS.*

ASKING FOR A CATALOGUE.

55 Sangenyacho, Azabu,
Tokyo, July 20, 1904.

Messrs. Kelly & Walsh,
Yokohama.
Dear Sirs :—

Will you please send me your catalogue of books and magazines at your earliest convenience.

Yours truly,
A. Miyamcri.

書籍目錄送附を乞ふ文

拜啓書籍雜誌目錄一部至急御送附被下度此段願上候

七月二十日　　宮森麻太郎拜

ケリウオルシユ社御中

ANSWER TO THE ABOVE.

A. Miyamori, Esq.,　　Yokohama, July 21, 1904.
Dear Sir :—

We have for warded to you a list of magazines etc. We shall be glad to have your order.

Yours respectfully,
Kelly & Walsh, Led,
Per James Harris.

同上返翰

拜復雜誌類目錄一部御送附申上候何卒御注文被仰付度奉願上候

七月二十一日　　ケリヲオルシユ社代
ゼイムス、ハリス拜

宮森殿

INTRODUCING A ERIEND.

Introducing Mr. Miyamori.

J. Shiga, Esqr.
Editor of
The Kokkai Shimbun.

33 A Tsukiji, Tokyo,
May 7th, 1893.

Dear Mr. Shiga,

The bearer of this note is my friend Mr. A. Miyamori, who is intending to go to Australia, and having heard of your travels in that island would like to have the pleasure of being introduced to you.

With best regards,
Yours faithfully,
James Summers.

友人を紹介する文

國會新聞主筆
志賀重昂樣
宮森氏紹介狀

謹啓友人宮森麻太郎君を御紹介申上候同君は濠洲渡航の企て有之候に就ては貴君が先年同地に御旅行被遊たる事を聞き御話承度希望に御座候

早々頓首

五月七日　ゼイムス、サンマース

志賀重昂樣
侍史

NOTIFYING ONE'S ABSENCE.

Thursday June 10.

To the Secretary of the Keio Gijuku.

Dear Sir,

I am not feeling well to-day and shall not be able to come to school. Will you please excuse me to my class.

Yours sincerely,
Wm. C. Gemmill.

欠勤を通知する文

拜啓小生儀不快に附き本日は登校致す能はず何卒小生受持の級へ此旨御傳被下度願上候

ウイリアムシーゲンミル拜

慶應義塾書記殿

II. *PLEASANTRIES.*

NONE SUCH.

"I'm looking for a painless dentist. Can you recommend one?"

"I never knew any that did n't hurt at least once."

"When is that?"

"When his bill comes in."

そんなものは一人もゐない

甲「私は苦痛を與へない歯科醫を捜してゐますがそんな歯醫者を御存じございませんか」
乙「私は少くとも一度は苦痛を與へない歯科醫はないと思ひます」
甲「其一度苦しませると云ふのはいつですか」
乙「其れは手術料の請附の來る時の事です」

HIS ARGUMENT.

"So you are an advocate of vegetarianism!"

"Yes."

"For what reason?"

"If I can persuade everybody else to live on vegetables, perhaps eggs and beef will become cheap enough for me to have all I want of them."

彼れの論據

甲「では君は菜食論者ですね」
乙「左樣です」
甲「其の理由は如何」
乙「若し僕の説が成功して誰もかも皆菜食する樣にならば多分鷄卵や牛肉は安くなつて僕が買ひたい丈け買へる樣になるだらうと考へます」

SECRECY NECESSARY.

"The book is a marvel," said the publisher, enthusiastically. "You had better drop the nom de plume and publish over your own name."

"No," replied the author; "it's money I want, not fame."

"But, my dear sir, you can have fame and money both if you publish over your own name."

"Not much I can't. My wife would know I had the money then."

秘密の必要

出版者熱心に云へり「御著書は實に立派なものです。あなたは雅名を削て實名を名乘て御出版なさるが宜しいと思ひます」
著者答へて曰く「否な私は錢が欲いので名譽は欲しくないのです」
「乍併先生若し御本名を顯して御出版にならば名譽と金とふたつとも得られますよ」
「けれども其れは私には出來ない。さうするときは金を得た事を妻が知りますからいやです。」

THE ANTIQUARIAN.

Mrs. Deepdigger.—You never said a word about our wedding anniversary last Tuesday—not a word.

Professor Deepdigger.—My dear, how can you expect me to take any interest in anything so ridiculously recent?

考古學者

深掘夫人「もし旦那あなたは先の木曜日にお互の結婚日の事に就て唯の一言も御言ひなさいませんでしたね」
深掘教授「そうだ一言も言はなかつた私がそんなに新しい事に興味を持つことが出來るとお前はどうして思ふのか」

STEADFAST AND TRUE.

Father.—But I am afraid he is a young man of fickle character!

Daughter.—Oh, no, he is n't, papa. Why, he has smoked the same brand of cigarettes for nearly Six months!

シッカとして氣の變らない人

父「けれどもあの人は氣の變り易い若者ではないかと思ふよ」

娘「否おとーさんあの方はそんな人てはありませんよなぜと申せばあの方は殆ど六ヶ月間も同じ種類の卷煙草を吸ふてゐますよ」

III. *NEWS ITEMS.*

London, July 17th.

The Russian gunboat Tchernomoretz, of the Korietz type, with full armament, passed through the Bosphorous to-day. This is a violation of the Treaties.

Two other Volunteer cruisers are shipping coal at Sevastopol. They are apparently to follow the Smolensk and Petersburg.

七月十七日倫敦發電報

コリエッ型の露國砲艦チエルノモレッツ號は充分に武裝して今日ボスフオラス海峽を通過せり。之れ條約違反なり。他の二隻の義勇巡洋艦はセバストポールに於て石炭積込中なり。右は無論スモレンスク號及ピータースバーグ號の後を追ふ筈なるべし。

ADMIRAL SKRYDLOFF.

Chefoo, July 20th.

A certain Russian affirms that the report that Admiral Skrydloff has gone to Port Arthur from Yingkan on a destroyer is untrue.

スクリドロフ提督

七月二十日芝罘發

スクリドロフ提督が驅逐艦に搭じて營口より旅順口に赴けりとの噂は事實にあらずと一露人は斷言せり。

DEATH OF A WAR CORRESPONDENT.

Chefoo, July 14th.

Mr. Henry James Middleton, the correspondent of the Associated Press, who died near Liaoyang on the 26th June, was interred at Chefoo yesterday.

軍事通信記者の死去

六月二十六日遼陽附近に於て死せる聯合新聞の通信記者ミッドルトン氏は昨日芝罘に於て埋葬せられたり。

EXCHANGE OF PRISONERS.

The French journal *Eclair* learns from St. Petersburg that General Kuroki has proposed to General Kuro-

patkin an exchange of prisoners of war, but that the latter flatly refused to acquiesce in the proposal. This story is rather incredible.

捕虜の交換

セントピータースバーグよりの報道なりて佛國新聞エクレールの記する所によれば黒木將軍は捕虜の交換をクロパトキン將軍に提出したれどもクロパトキンは斷然此を拒絶したりと云へり。此は稍受取りがたき說なり

FOUR RUSSIAN PRISONERS

Matsuyama, July 21.

Four Russian prisoners, including a Captain of the Cossacks, disappeared from here yesterday. They are still missing.

四名の露國捕虜行衛不明

六月二十一日松山發電コッザック隊の大尉を始め四名の露國捕虜昨日當地を逃亡し今以て行衛不明なり。

漢文講義

近世叢語抜萃

阿井笛村

寡婦理慧江都杵築邸山本安兵衛妻也、嫁未數年、喪夫、無子、養他姓爲後、放蕩亡命、山本氏亡、姑謂理慧曰、家之不淑、一至于此、我將歸鄕里、以依親舊、汝也妙齡、良圖再醮、理慧聞之、愀然曰、惡、是何言也、兒一醮誓無它、且尊姑日已傾西山、兒雖不肖、代先君護視、固其職也、無問遠近、兒當從尊姑所之、姑數喩之、不可、姑曰、如是、我子猶不死也、乃與倶出邸、棲居北郊、理慧從是親操薪水、養姑益篤、三十年猶一日也、杵築老侯聞其貞淑、使近臣岡田匡隆、命出仕夫人氏、理慧曰、妾出邸之日、自矢弃人間、且不忍一日離姑也、遂固辭不應、尼崎侯召之、亦辭曰、於亡夫所事君且猶辭召命、事姑之外、亦復奚求、匡隆反杵築、每見親友屢語之、稱其貞節而泣、

本文の理慧と云ふ婦人は、江戸生れの人で、尼ケ崎の領主たりし櫻井氏の家來齋田清兵衛と云ふ人の女でありました、寡婦＝は夫に死に後れたる婦人であります（寡は少くなしと云ふ字で夫に死に別れて便り少ひ身の上なる故に寡婦と稱す）此の婦人は江都杵築邸＝昔の大名は、皆江戸に邸宅を構へて、其の家來を住まはせて置きました、杵築は豐後の國の一藩でありまして、領主は松平氏であります、理慧は其の松平家の家臣の一人山本安兵衛と呼ばれたる人の妻でありました、然るに嫁入りまして後、未だ五六年も立ぬ中に、不幸にも夫を喪くしました、子供がありませぬ故に、養ニ

他姓爲後＝他の家すじの子を養子に貰ひ受けて、安兵衞の後と嗣ぎとしました、處が其の養子が性質の宜しからぬもので放蕩亡命山本氏亡＝身持放埒の揚句の果て、遂に亡命してしまいましたから、山本氏の家が斷絕となりました、そこで姑が理慧に向て家之不淑一至于此＝家の不仕合なことが、遂に斯くの始末と成り果てた、就ては自分は故鄕に歸りて親舊＝親類又は知る邊の人々の世話になろふと思ふ、汝のところは妙齡＝歳若の事でもあるから、良圖再醮＝(良はまことにと訓むどうぞと云ふ意なり)どうぞ再緣して何れへなりとも片附きて呉れと申しました、(醮は說文に冠娶之祭とあり婚禮の儀式なり)理慧之を聞き愁然＝打ちしをれて惡、是何言也＝ア、と吐息を突きて是はまた何たる御言葉でございますか、兒一醮無它＝(兒は子が親に對して自ら稱する言葉なり)私は一たび婚禮してからは、心に誓て它に再びしないと定めて居ります、且尊姑日

已傾西山＝其の上に尊姑が御年が老られて(日輪の已に西の山に入りかゝりてあると同じ樣に)衰へて居らせられることであれば、兒雖不肖代先君護視固其職也＝私はまことに不肖ものではありますけれども先き立たれた旦那殿に代りて、尊姑の護視をするのは、固より私の職分でございますから、無問遠近兒當從尊姑所之＝遠い所でも近い所でも、何處々々までも、尊姑の之く所に從てまゐりますと、斯樣に申したのでありますす、されども姑はまだ／＼氣の毒と思ふ故に、數喩之不可＝其の後も度々之を喩しましたけれどもどうしても聞き入れませぬ、そこで姑は理慧の美しき堅固なる志を喜びまして、左程にお前が申して呉れゝば、我子猶不死也＝我子安兵衞が生きて居るのと少しも替りがないと申して、乃與俱出邸棲居北郊＝そこで二人一同に杵築邸を立退きて、北の方の片田舍に棲居して居りました、理慧は是れから親操薪水＝自分の手づから薪を

採り、水を汲む等の事をして、姑を養ふことが益益手篤く、三十年猶二一日一＝三十年の長の歲月の間少しの怠りもなく變りもなく、一日と同じ事でありました、然るに杵築藩の老侯＝御隱居が理慧の貞淑＝婦人の道に叶ひたる善き行ひを聞込まれ、御側附の家來の岡田匡隆と云ふ人に申附て、理慧を夫人附の女中に召使はれ度き旨を仰せ附けられました、其ノ時理慧の答へたには妾去レ邸之日自矢弃二人間一且不レ忍二一日離一レ姑也＝私は御屋敷を立ち退きまする日に、自ら矢つて（矢の字を誓ふと訓むは昔の軍人が矢を折りて誓ひを爲したる故なり）人間の事を弃て居ります、其の上私が居なければ姑が不自由しますから、一日でも側を離るゝに忍びかねますと申て、遂に固く辭して御請をしません、尼ケ崎の領主も、元々理慧は自分の藩中から出た人故召し出さふとしましたけれども、矢張辭りて申すに於二亡夫所レ事君一、且猶辭二召命一、事レ姑之外、亦復奚求＝亡き夫の御奉公申上た御主人ですらも、其の御召出を御辭り申上た位であります、私は姑に事ふるの外には奚にも求むる所は無いのでございますと、誠に其の志が堅固で、中々昔の御大名の力でも之を動かすことが出來ませんでした、それで右の岡田匡隆と申た人が、杵築藩に反りて後も、親しき友に逢ふ度に、此の理慧の事を物語り、其の貞節の行を稱めては、涙を流したと云ふ事であります。

佐瑱者、常之茨城郡蘆沼村民、伊平太妻也、伊平太家貧患二濕瘡一、踰レ年不レ瘳、臥起須レ人、佐瑱垢面蓬頭、承二便溺一、察二痛癢一、節二時其藥餌一、未三嘗一日怠二焉、家益困厄、佐瑱當二冬月一、鶉衣無レ裡、肘露脛暴、時年三十六、有二二子一、長甫七歲、幼尙在二襁褓一、伊平太一日謂二佐瑱一曰、自度死在二旦夕一、汝與二隨レ我倶死一、不レ若三改適二佗一、二稚兒依レ汝而幸得レ

存、則我受賜而死、佐瑱泫然泣曰、寧窮而死、妾不敢改其節也、奥之巖城有温泉焉、伊平太罹患諸瘡者、一浴有効、佐瑱乃勸往、於是乞里人造一草車、狀如椅子、大僅容身、下施小輪四、使伊平太隱几而坐、己抱負稚輓之、巖城距茨城郡甚遠矣、胼胝碎破、血流被裸、凡至嶮峻難進處、哀號顧天乞助於里胥村老、或有道路憐而助輓者、經十有七日而得至温泉、留浴十餘日、瘡稍有瘳矣、事聞水戸府、府嘉佐瑱貞節、乃免其租税丁徭、

佐瑱は常陸の國茨城郡鳶沼村の村民伊平太と云ふ者の妻であります、此の伊平太と申す者が、其家が貧しきが上に、患濕瘡＝かさの疾を患ひまして踰年不瘳＝一年の上になりても瘳りませんで、臥起須人＝寢るにも起くるにも人の手を須たねば出來ません始末でありました、夫れ故佐瑱は垢面蓬頭＝面は垢だらけ、髮は蓬の如く亂れて居ても、少も構はず、承便溺、察痛癢＝大小便の世話をしたり、痛い所や痒い所に心を配り、節時其藥餌＝其の藥餌を飮まするにも、頃合を圖りて、未嘗一日息焉＝たゞの一日でも怠つた事はありませぬ、家益困厄＝只さへ貧乏な處に、右の始末でありますから、家のくらしはます〳〵難澁となりました、佐瑱は當冬月、鶉衣無裡、肘露脛暴、＝冬の時節に當りましてぼろ衣もの、裡のないのを（鶉と云ふ鳥は、其の狀ち鷄の雛に似て、足が高くして尾が禿れたる如く、至りて短く、ツンツルテンの衣ものを着たる樣なる故に、敝れ衣ものを鶉衣と云ふ）着て、肘も露はれ、脛も暴はに、時に年三十六才の女盛りでありますけれども、少しも厭ふ氣しきがありませぬ、其上二人の子供もありまして、長甫七歲、幼尚在襁褓＝年上の方がやうやく七才で、幼い方がまだ襁褓の中に

在るのでありますす、佐與の困難の程は、如何斗りでありましたらふか實に想ひ遣られて憐れでわります、そこで伊平太が病苦の中にも、見るに見かねて、一日佐與を呼で曰ふすには、自度死在二旦夕一＝自分に度り考へて見るに、此の有樣ではもう死ぬのが旦夕の中に逼つて居る、汝與ニ隨レ我俱死一不レ若ニ改適レ佗＝汝も此の儘にして居れば、饑へ死をせねばならぬ故に、自分に隨つて俱々に死ぬよりも、改めて外に緣附く事にした方が宜しからん、二稚兒、依レ汝幸得レ存、則我受レ賜死＝二人の稚兒が、汝に依りて世に存らふることが出來れば、自分に於ても、誠に有り難く賜を受けて死ぬことが出來る譯であると、佐與は此の夫の言葉を聞き、泫然＝涙をはら〳〵と流して曰ふしたには寧窮而死、妾不レ改二其節一也＝いつそ困窮して饑死をし樣とも私は決して節を改むることは出來ませんと、キッパリと答へました。

奥之巖城有二温泉一、焉伊平太聞下患二諸瘡一者一浴有レ効、佐與乃勸レ往＝奥州巖城と云ふ所に温泉が有て、諸々の瘡の病を患つた者が、一たび浴すればすぐに効能があると云ふことを伊平太が聞き出しました、けれども其の温泉まで往くのは、中々容易でありませぬ、それでも佐與は是非お往でなさいと勸めました、於レ是全里人造二一草車一＝そこで里人に頼みまして、一の草を束ねた車を拵へました、其の狀ちは丁度椅子の樣な工合に成りて居ります、大僅容レ身＝其車の大さは僅かに一人のからだを容るゝ丈けでありまして、下施二小輪四一＝下の方に小さい輪を四つ取り附たものであります使下伊平太隱二几坐上＝伊平太のからだを其の車の几に隱りてすはらせまして、己抱二負一稚一輓レ之＝自身は二人の稚兒を一人は前に抱き、一人は後に負ふて、其の車を輓きました、巖城距二茨城郡一甚遠矣＝奥州巖城は茨城郡を距ることが、餘程遠くありますす故、容易では往き著きません、胼胝碎破、血流被レ踝＝胼胝で以て足は碎け破れ、血

は流れて踝を破ひ、眞赤になる有様であります、それから凡至二嶮峻難レ進處一、哀號籲レ天、乞二助於里胥村老一＝凡そ山坂の嶮峻しくして、どうしても進み行き難ぬる處に至れば、哀しみ號びて天に訴へ、助けを其の村の胥や村の老に乞ひ求めます、或は又、有二道路憐而助輓者一＝道行く人が憐んで助けて輓く者もありました、斯様に千辛萬苦を忍びて、十有七日の長き日數かゝつて、磐城の温泉に著きました、それから其處に逗留して、温泉に浴することが十餘日でありましたが、佐與の貞心を天も憐み給ひてか、疾稍有レ瘳矣＝さしもの難病も稍に瘳へて來ました、其の事が其の頃常陸國の領主たりし水戸縣の御聞に達しまして、水戸府より嘉二佐與貞節一乃免二其租程丁徭一＝佐與の貞節を御嘉めになり、其の褒美として租税を出したり、丁徭（昔の農民は租税として、米麥等の作物の幾分を領主に納め、又丁徭とて身體の勞働を爲し、領主の爲めに苦役を勤めねばならぬ制度なり）を務むることを差免しになりました。

三宅尙齋見レ幽二于忍一、託二其妻田代氏一、以二母及二子一、而與二黄金廿兩一以爲レ資、田代氏念、夫囚在二囹圄一、艱辛無量、爲二其妻子一、而晏然煖飽、心不レ忍爲也、自レ是、冬不レ絮二綿袍一、夏不レ張二蚊幬一、定省之暇、爲レ人縫刺澣濯、以給二奉養一、如レ此三年、所レ得廿金、絲毫不レ費也、迄二尙齋見レ赦、乃出レ金還レ之、尙齋怒曰、其如レ此、奉養必有レ闕也、田代氏徐語、以二養レ姑之故一而言、此金之不レ糜、乃豫備二君今日之用一也、尙齋感嗟久レ之、

三宅尙齋と云へる人は、山崎闇齋の門下に出たる元祿年間の儒者であります、此人は武州忍の藩主阿部家に仕へて居ましたが、自分の意見が行はれぬ事がありまして、今で云ふ辭職、其頃は致仕と申て、御奉公を斷りました、處が昔の大名は我儘

なもので、之が爲に別に罪もないのに、尙齋を牢獄に入れたのであります、此の事は本文にはありませぬけれども、讀者の便宜の爲め爰に述て置きます。

見レ幽二于忍一＝忍藩にて牢獄に幽らるゝときに、其の妻の田代氏に託むに、其の母と及び二人の子供の事を以てしまして、而與二黄金廿兩一以爲レ資＝そうして黄金廿兩……其頃にては中々大金であります、其金を以て自分の留主中母御や子供の養育をする資にしてくれと、預けて置きました、田代氏の念ひまするに、夫因在二囹圄一、艱辛無量、爲二其妻子一、而晏然煖飽、心不レ忍レ爲也＝夫は囚はれて囹圄の中にありて、其の艱難辛苦は如何斗りか量り知られないのに、其の妻子たる者が、晏然と平氣で以て煖ひ衣服を着たり、美ひ物を食ひ飽きたりするのは、心に於て爲すに忍びぬことであると、自レ是冬不レ穿二縕袍一、夏不レ張二蚊幬一＝冬になりても縕袍を着ず、夏になりても蚊幬を釣りませぬ、定省之暇＝定に昏定とて夜になれば、床を敷き展べて親を安らかに寢かすこと、省は晨省とて朝起きて親の安否を問ひ尋ること、にて、子たる者の親に事ふるに、怠てならぬ務めであります、其定省の事をして、暇さへあれば爲レ人縫刺澣濯以給二奉養一＝他人の爲に縫針仕事や、澣き洗濯などをして、姑の奉養料を給して不自由のなき樣にして居ました如此にすることが、三年の間でありまして、夫尙齋より受取た廿兩の金子は、絲毫不レ費也＝少し計りも費やしませなんだ、迄二尙齋見レ赦乃出レ金還之＝尙齋が赦さるゝに迄びまして、そこで廿兩の金子を出してソックリ還しました、尙齋は甚だ意外に思つて、怒て曰ふすには、其如レ此、奉養必有レ闕也＝そんな風、一文も金を使はないならば、母上の奉養に必ず闕げた所があるならん、自分の金を預けて置たのは、母上に御不自由を掛けない爲で有たものをと、殊の外不與の躰でありました、そこで田代氏は徐語以二養レ姑之故一＝徐に留守の

間姑を養ひ、少しも不自由を爲せなんだ事を語りまして、猶又言ふしたには此金之不レ靡、乃豫備ニ君今日之用一也＝此の金子を靡はなかつた譯は、乃ち君が今日の如く御赦免に成てお還りに成た時に

先きだつ物は金子故、豫じめ其の用に備へて置たのでありますと、之を聞きたる尚齋は感嘆久レ之＝暫くの間妻の心懸の善きに感じ入て、心で嗟めて居りました。

○南山攻撃の歌（中村少將作歌）

第一章

南山せめむとふくる夜に
山また山をよぢのぼり
たどれる道は路ならず
さとられまじと只すらに
進みちかづく第二軍
勇み進めるものゝふの
谷また谷をうち踰えて
こゝにかしこにふみ迷ひ
みな息の根をこらしつゝ

第二章

折しもあれやゆふだちの
ひらめき渡る稻妻や
おとすさまじくふる雨に
天の祐けとよろこびて
進み寄りたる第二軍
黒雲空にふさがりて
はためき落るいかづちの
車軸をながすごとく也
敵の堡壘めざしつゝ

第三章

野戰きびしき敵兵は
目あてもわかぬ砲彈を
我がみいくさは事もなく
岡のあなたに兵を伏せ
明くるを待ちし第二軍
闇夜を照す光彈や
うち放ちつゝ守れども
山のこなたに砲をすゑ
戰列こゝに整ひて

第四章

我が砲兵は二百門
それと火蓋を切りければ
火花をちらすそのさまは
この時歩兵の一隊は
難なくこれを落しけり
時をたがへずもろともに
敵もまたこれに應戰し
電光石火もたゞならず
金州城をうち破り

第五章

第四師團のつはものは
金州灣の海手より
第一師團のものゝふは
第三師團のますら男は
息をもつかず攻めよせし
譬へむものもなかりけり
南山堡壘の正面に
大房身の側背に
獅子奮進のありさまは

第六章

金州灣の波間より
敵塁めがけて打出せば
敵の軍艦あらはれて
海陸一致の大激戰
天地も崩るゝばかりなり
わが軍艦は進みいで
大連灣のあなたにも
また我軍を砲撃す
山嶽爲めに震動し

第七章

この勢に辟易し
さは云へ敵塁堅固にて
右に左に機關砲
防禦のてだて拔目なく
敵の勇氣ぞたけ〲し
敵砲まもなく沈默す
西にひがしに鐵條網
地雷火獲穽とり〲に
必死となりて戰へる

第八章

慓悍決死の我兵は
かばねの山をふみ踰えて
さすがの敵も氣をのまれ
わが日の本の日章旗
夕日と共にかゞやけり
硝烟彈雨を冒しつゝ
縱横無盡に突撃す
皆ちり〲に逃け落ちて
南山高地の頂上に

第九章

戰ひすみし夜の空
吹き來る風はなまぐさし
我つはものはいくばくぞ
花はさくらよ人は武士
其名は代々にかほるらむ
雲間の月は影清く
この戰に斃れたる
大和しま根に名も高き
ちるべき時にちりてこそ



好逑志（文明夫人行狀）

文明夫人と申すは、有栖川宮二品織仁親王殿下の息女にして、常陸水戸の源烈公の君に嫁ぎ下し賜へる賢夫人なることは、何人も知らざるものなし、今は霞湖の邊りに野鶴閑雲を友として、静かに寄る年浪を送らる〻、水戸の舊臣青山雷巖翁、其が昔しを偲ばる〻まゝに、夫人の操履を書き綴りて一冊子となしぬ好逑志は則ち是れなり。

謹みて按ずるに我源烈公の配、文明夫人は眞に君子の好逑と謂つべし、然るに公の盛德は、人口に膾炙し、又多くの史乘に炳耀たれども、獨り夫人の賢に至りては、未だ嘗て其撰述あるを聞かず、予之れを以て遺憾とすること久し、此に謹で夫人平生の梗槩を誌し、之れを好逑志と名け、以て既刊の仰景志に比す、本より掛漏の恐れ無きにあらずと雖も、庶幾くは以て懿德の一班を窺ふに足らんことを。

夫人諱は吉子、登美宮と稱し、有栖川宮二品織仁親王の女なり、文化元年甲子九月二十五日京師に生る、天保二年辛卯十二月十三日烈公に歸嫁し、三男一女を生む、伯は即舊藩主順公、叔は前將軍一位公（慶喜）なり、餘は皆夭せり、明治廿六年一月二十七日病んで東京小梅の第に終る、壽を享くること九十、常

陸久慈郡瑞龍山の先塋に葬る、夫人は烈公の薨じ給へる後、貞芳院と號し、薨じて文明夫人と諡せらる、其貞芳と云ひ、文明と云ふもの、皆公の嘗て親撰自書して夫人に授け、後必ず之れを用ゐよと命じ給へるものなり、公の鑑果して違はず、其名は其實に稱ひ、夫人の儀德を賛する、蓋しこの數字に過ぐるもの無かるべし。

第一　光格帝より下し賜へる櫻の事

夫人は烈公に歸嫁せらるゝに先だち、光格帝へ拜謁の爲に、參內せられたり、時に恩賜の品種々ありしが、此れも亦東國の土産にせよとて、南殿の櫻の實生を下し賜ひける、夫人東下の後、後樂園を其培養の地に擇び、又弘道館の設けらるゝや、其の玄關の前に恩賜の一株を移植せられたり。

第二　烈公の求婚を悅び給ひし事

夫人素より佛事を好まざれば、門跡方より結婚を望まるゝや、常に之れを辭し給へり、然るに烈公一たび夫人を迎へんとの意を通じけるに、夫人は水戶家の名を聞きて、意頗る動きければ、宮家の悅び淺からず、直ちに入輿の日も定まりぬと。

第三　北地開拓の壯圖に贊同し給ひし事

天保中烈公蝦夷地開拓の事計畫して、幕府に請ひ給ひしに、幕府之れを許さゞりき、始め公は是の許可を得たらんには、更らに骸骨を請ふて、夫人と共に彼の地に移住せんと決し給ひけるに、夫人其の壯圖を悅

び給ひて、心を精神の修養に用ひ、一日侍女數人と長刀を雪中に揮ひ、千本遣ひの技をも試みられ、更に倦み給へる氣色だに無かりしと、又夫人の乘馬を勵み玉へるも是時なりき。

第四　懷姙中攝生を重んじ給ひし事

大將軍愼德公の御臺は夫人の姉君にましませしが、夫人の始めて懷胎せられたるを聞き、いと慇懃に慶辭を寄せられ、且つ往年親ら試みられたる安產の方とて、極めて輕き手箒と塵取りとを貽られ、朝夕靜かに居室を掃除し給へと有りければ、夫人答へらるゝ樣、姉君の運動には一室の掃除こそ適ひたれ、自分は豫ねて今公の注意に由り、日々長刀柄太刀等の練習に怠り無ければ、省念し給ひかしとなり。

第五　三晝夜の看護に衣帶を解き給はざりし事

嘉永六年癸丑の夏、烈公は養母峰壽院の病に罹り、漸く革かなるを聞きて驚き給ひ、夫人を携へて駒込の邸より本邸に入り、夫人をして藥湯其外看護の勞を執らしめたり、峰壽院深く之れを悅びて、少頃も夫人の其側を去り給ふを許さず、夫人は衣帶を解かず、誠至心勞しけれ共、遂に其効無く、三日三夜にして逝去し給ひぬ、又侍坐の人々夫人奉養の篤きに感じ、皆淚に咽びけりと云ふ。

第六　衆庶の養育は男女を殊にし給ひし事

公甞て夫人を戒め給ふ樣、女子は何れへ嫁ぐも、我家の格式を保つを常とすれば、庶生の者を嫡母の出と稱するも、强ちに妨げ無し、左れど庶男子に之れを許す時は、格式に阻てられ、諸侯の養子と爲すに自由

ならず、且各賢母の家系も賤しからざれば、其請を容るゝ勿れと、左れば因州池田侯嘗て之れを請はれたりしも許されざりき。

維新の後、侯又請はく、我々庶兄弟皆莫大の慈愛を被りたるに、天若し母君に幸ひせざるの日あらんには、心喪は以て哀戚の情を致すに足らず、冀くば請ふ所を允し、小子等をして今後長く安んぜしめよと有りければ、今は世態も變りしこととて、其所請を容れて、遂に庶公子一般に之れを許されたり。

第七　膝侍の撫導に力を用ゐ給ひし事

烈公の左右膝侍の者頻りに隱密を請ふ事あるも、公は常に夫人に包み給はざれば、虚心に出て、面目を失ふもの少なからず、然るに其後は強ひて請ひ奉る者もなく、內治の美愈々擧る、此れ公の用意の深きと、夫人の德の高きとに出れるなり、夫人嘗て公との閑談に、公と力を合せて、偏頗なく撫て且つ抑へんには、召使幾人有りても、風波は起たせじとなり。

第八　黨派の餘弊を嘆き寬典を旨とし玉ひし事

夫人は黨派の軋轢に出り、人心の漸く刻薄に流れたるを憂ひ玉へるに、順公の繼配經壽院、容易に國事に容喙するを憚るの狀あるを見て、悅ばざるに非れど、有司の議して罪科十點と定めたる時など、公より三點に止めよとの內助の如きは、望ましと注意し給へり、夫人は天資仁恕にましくければ、有罪の者に至るまで、斯く寬典に處し玉はんとは、愛民の德亦厚からずや。

第九　人々をして自在に語らしめ給ひし事

烈公の仰せに、國に朋黨の分れありては、最も偏聽を戒め、左右の人にも憚る所なく、其言を盡さしめ、聞く所の狹く且寡きを憂へよと、故に夫人は常に顏色を假し與へられ、人をして自在に語らしめ給へば、或は脣を搖かし舌を皷し、妄りに是非を判斷し、得意の顏色にて、退出する者あり、夫人固より其情狀を察し、憫笑すべきものあり、慨嘆すべきものありと仰せられき。

第十　喪を秘し給はざりし卓見の事

元治元年五月左衞門佐余四麻呂君京師に於て逝去せられしとき、關白二條齊敬公より、國事多端の際なれば、一橋公の服忌は、其發表を暫く稽延したしとの内諭ありたり、佐君の傅渡井量藏東下して、此議を順公へ申啓しけるに、公も亦其已むを得ざるに於ては、内諭に從ふべしと決せられしが、尙ほ安んじ給はず、夫人の意の在る所を問ひ奉らんと、更に量藏をして水戶に馳せしめたり、夫人思ひ給ふ樣、今や時勢は日一日より多事ならんとす、其骨肉の喪を秘して、私かに安んせざる所あらんより、速に葬事を了して、除服の命を待つに孰若と、姑息の進退は、後日の悔を招かんと懇諭し給ひければ、量藏其旨を順公に復命し、直ちに西上しけるとぞ。

第十一　未亡人假粧の狀を說き給ひし事

烈公薨去の後、夫人の仰せに、上流未亡人の化粧江戶風は、劇曲中のさたか後室の摸型にて、鉛粉は面に

白く、臙脂は唇に青く、衣裳も紅赤色は用ゐねど、刺花繍文の類多く見得、京にては脂粉共に施さず、彩繍の服も亦嫌へり、一橋の養母徳信院は、總て京様になされたりしが、烈公毎に感稱し給へり、自分も今は之れに倣ひたりき。

第十二　救荒の手段を忘れ給はざりし事

夫人年々の雜費若干の外、歳暮には烈公仕方金より百兩づゝ受け給ひて、剩財も少なからざれば、何地へか保養をと勸め奉る者ありけるに、否々他日諸人救助の資にせばやと仰せられたり、烈公は惡疫流行の際、雞冠石を粉末にして、廣く之れを賜はりしことあり、夫人も之れに倣はんとの賢慮にや。

第十三　狆の進獻を斥け給ひし事

ある年鈴木石見守公事濟みて、水戸に還る時、佳狆一頭を獻せんとの内申あり、夫人仰せに庶事儉約の際なれば、從來飼養の一頭も猶無用とこそ覺ゆれ、如何んぞ更に一頭を増さんとありければ、石見等愧ぢて事やみにけり。

第十四　有司の誣妄を辯じ給ひし事

元治元年の冬、老臣山野邊某罪を得たる際、執政等は徳潤院山野邊氏を忌みて、之れを黜けんとしたるに夫人は之れを憐み、終身資給の約あるものを、故なく黜くる例やあると仰ければ、執政奈何ともする能はず、遂に其議を中止したり、徳潤院は再生の想ひをなして、感涙に咽びしとぞ。

第十五　農事を敬ひ給ひし事

ある年の秋、農民共苅り収めたる稻を賊の爲に奪はれたる者多かりしが、其嘆きは、金銀財物を掠め取らるゝにまして悲慘を感ぜりと、夫人之れを聞き給ひて仰せけるに、烈公嘗て農夫の小銅像一軀を造らしめ之れを常膳に置き、食毎に飯粒を分ちて、銅像に供するを例とせらる、其農を敬し給へること此の如し、我等も公の意を奉体し、常に粒々皆辛苦の實況を推料し來れり、彼の賊も亦水戸の領内にて、公の徳澤に浴する者、其横行抑亦何の心ぞや。

第十六　書を善くし給ひし事

夫人は少き時より書を善くし給へり、宜なる哉、烈公殊に夫人の才筆を讃美し給へること、嘗て夫人に命じ、天賜の櫻の記を撰み、且自書せしめ、之を石に勒して、後樂園中に建てられたり、斯記數百字、筆致の流麗、字體の遒雅、觀者をして嘆服措く能はざるものあらしむ、維新后この碑は、小梅邸の庭中に移されたり。

第十七　手工の才に富み給ひし事

夫人の多能なるは、奉仕の人々褒稱して已まざりき、殊に雅樂を好み、篳篥を善くし、晩年更に箏を愛せられ、其他諸禮に通じ、又能く手工の妙あり、或年の正月、雪の降りける日、女侍等烈公の笑覽に供せんとて、各競ふて手工の製あり、夫人も之に加はり、筍に鍬を配したる簪一枝を製作し給ひければ、

公之れを一覧ありて、其意匠の清雅に感じ給へりと。

第十八　追慕の情を和歌に寄せ給ひし事

夫人の烈公を追慕し給へることは、特に稱道し奉るべきに非ざれど、其詞章を拜すれば、謂はゆる哀んで傷まざるの情あるを、窺ひ知るに足れり、今其一を掲ぐ。

好文亭にまかり、處ろ〳〵詠めつゝ過ぎにし事のみ思ひ出ければ

君まさばまとゐの今日の嬉さを
同じ所に物語りせん

第十九　五十ヶ年奉侍の者に和歌を賜はりし事

夫人に侍して、五十ヶ年一日の如く仕へ奉りたるもの二女あり、松島福岡と云ひ、中山高崎と云ふ、明治十八年一月夫人親から筆を執り給ひて、

松島尚子がわれに仕ること、今年五十年に成りければ其よろこびに、物與ふるに添へて、

珍らしや百のなかばをいそしくも
仕へてし身のさちは我が幸

其後數年を經て、

中山文子われに仕へてことし五十年に成りければ

はるかにもなほこそたのめ今年より

花咲くもの丶なかばと思へば

二人の斯く長き年月仕へ奉りたるも、皆夫人仁厚の德の致す所と謂つべきなり。

第二十　烈公の肖像を進獻したる時賜はりし和歌の事

明治廿二年の春、考按數囘を經て、烈公の肖像成り、予之れを夫人に進獻す、時に夫人の下し賜はりたる國風一首あり、

つくしける人の誠のあらはれて
昔にかよふみかけをそみる

夫人溢美の賛辭をこの肖像に賜はりけるは、予實に感佩に堪へざりき、夫人薨じてより茲に十星霜、伏して是章を拜誦すれば、夫人の恩容も彷彿として咫尺の間に見へ給ひ、肅然として敬を起し、愾然として感を深ふする者あり、依りて斯章を以て斯志を結ぶ。

附　秘書別志

烈公の水戸城に薨ぜらるゝや、順公は先公の秘書保管の事を在城の母公文明夫人へ願はせらる、後數年にして市川黨權を專らにするに及び、公は左右の言を用ひ、更に之を江戸本邸に收めんとの旨夫人に仰せ上げければ、夫人は之を移して、彼黨の手に委ぬることを深く憂慮し給へり。又御一品と稱し奉りたるものあり、そは萬延元年庚申十月殿良啓之れを奉じて、潛かに京師より水戸に入り、大場一眞齋に托せし密勅なり、一眞齋は待つ所ありてや、後三年を經、即文久三年癸亥三月に至り

陸久慈郡瑞龍山の先塋に葬る、夫人は烈公の薨じ給へる後、貞芳院と號し、薨じて文明夫人と謚せらる、其貞芳と云ひ、文明と云ふもの、皆公の嘗て親撰自書して夫人に授け、後必ず之れを用ゐよと命じ給へるものなり、公の鑑果して違はず、其名は其實に稱ひ、夫人の儀德を賛する、蓋しこの數字に過ぐるもの無かるべし。

第一　光格帝より下し賜へる櫻の事

夫人は烈公に歸嫁せらるゝに先だち、光格帝へ拜謁の爲に、參内せられたり、時に恩賜の品種々ありしが、此れも亦東國の土產にせよとて、南殿の櫻の實生を下し賜ひける、夫人東下の後、後樂園を其培養の地に擇び、又弘道館の設けらるゝや、其の玄關の前に恩賜の一株を移植せられたり。

第二　烈公の求婚を悦び給ひし事

夫人素より佛事を好まざれば、門跡方より結婚を望まるゝや、常に之れを辭し給へり、然るに烈公一たび夫人を迎へんとの意を通じけるに、夫人は水戶家の名を聞きて、意頗る動きければ、宮家の悦び淺からず、直ちに入輿の日も定まりぬと。

第三　北地開拓の壯圖に賛同し給ひし事

天保中烈公蝦夷地開拓の事計畫して、幕府に請ひ給ひしに、幕府之れを許さゞりき、始め公は是の許可を得たらんには、更らに骸骨を請ふて、夫人と共に彼の地に移住せんと決し給ひけるに、夫人其の壯圖を悅

び給ひて、心を精神の修養に用ひ、一日侍女數人と長刀を雪中に揮ひ、千本遣ひの技をも試みられ、更に倦み給へる氣色だに無かりしと、又夫人の乘馬を勵み玉へるも是時なりき。

第四　懷姙中攝生を重んじ給ひし事

大將軍愼德公の御臺は夫人の姉君にましませしが、夫人の始めて懷胎せられたるを聞き、いと懇懃に慶辭を寄せられ、且つ往年親ら試みられたる安產の方とて、極めて輕き手箒と塵取りとを貽られ、朝夕靜かに居室を掃除し給へと有りければ、夫人答へらるゝ樣、姉君の運動には一室の掃除こそ適ひたれ、自分は豫ねて今公の注意に由り、日々長刀柄太刀等の練習に怠り無ければ、省念し給ひかしとなり。

第五　三晝夜の看護に衣帶を解き給はざりし事

嘉永六年癸丑の夏、烈公は養母峰壽院の病に罹り、漸く革かなるを聞きて驚き給ひ、夫人を携へて駒込の邸より本邸に入り、夫人をして藥湯其外看護の勞を執らしめたり、峰壽院深く之れを悅びて、少頃も夫人の其側を去り給ふを許さず、夫人は衣帶を解かず、誠至心勞しけれ共、遂に其効無く、三日三夜にして逝去し給ひぬ、又侍坐の人々夫人奉養の篤きに感じ、皆涙に咽びけりと云ふ。

第六　衆庶の養育は男女を殊にし給ひし事

公嘗て夫人を戒め給ふ樣、女子は何れへ嫁ぐも、我家の格式を保つを常とすれば、庶生の者を嫡母の出と稱するも、強ちに妨げ無し、左れど庶男子に之れを許す時は、格式に阻てられ、諸侯の義子と爲すに自由

ならず、且各實母の家系も賤しからざれば、其請を容るゝ勿れと、左れば因州池田侯嘗て之れを請はれたりしも許されざりき。維新の後、侯又請はく、我々庶兄弟皆莫大の慈愛を被りたるに、天若し母君に幸ひせざるの日わらんには、心喪は以て哀戚の情を致すに足らず、冀くば請ふ所を允し、小子等をして今後長く安んぜしめよと有りければ、今は世態も變りしことゝて、其所請を容れて、遂に庶公子一般に之れを許されたり。

第七　媵侍の撫導に力を用ゐ給ひし事

烈公の左右媵侍の者頻りに隱密を請ふ事あるも、公は常に夫人に包み給はざれば、虛心に出て、面目を失ふもの少なからず、然るに其後は强ひて請ひ奉る者もなく、內治の美愈々擧る、此れ公の用意の深きと、夫人の德の高きとに出れるなり、夫人嘗て公との閑談に、公と力を合せて、偏頗なく撫て且つ抑へんには、召使幾人有りても、風波は起たせじとなり。

第八　黨派の餘弊を嘆き寬典を旨とし玉ひし事

夫人は黨派の軋轢に出り、人心の漸く刻薄に流れたるを憂ひ玉へるに、順公の繼配經壽院、容易に國事に容喙するを憚るの狀わるを見て、悅ばざるに非れど、有司の議して罪科十點と定めたる時など、公より三點に止めよとの內助の如きは、望ましと注意し給へり、夫人は天資仁恕にましまし〳〵ければ、有罪の者に至るまで、斯く寬典に處し玉はんとは、愛民の德亦厚からずや。

第九　人々をして自在に語らしめ給ひし事

烈公の仰せに、國に朋黨の分れありては、最も偏聽を戒め、左右の人にも憚る所なく、其言を盡さしめ、聞く所の狹く且寡きを憂へよと、故に夫人は常に顏色を假し與へられ、人をして自在に語らしめ給へば、或は唇を搖かし舌を皷し、妄りに是非を判斷し、得意の顏色にて、退出する者あり、夫人固より其情狀を察し、憫笑すべきものあり、慨嘆すべきものありと仰せられき。

第十　喪を秘し給はざりし卓見の事

元治元年五月左衞門佐余四麻呂君京師に於て逝去せられしとき、關白二條齊敬公より、國事多端の際なれば、一橋公の服忌は、其發表を暫く稽延したしとの內諭ありたり、佐君の傅渡井量藏東下して、此議を順公へ申啓しけるに、公も亦其已むを得ざるに於ては、內諭に從ふべしと決せられしが、尙ほ安んじ給はず、夫人の意の在る所を問ひ奉らんと、更に量藏をして水戸に馳せしめたり、夫人思ひ給ふ樣、今や時勢は日一日より多事ならんとす、其骨肉の喪を秘して、私かに安んせざる所あらんより、速に葬事を了して、除服の命を待つに孰若と、姑息の進退は、後日の悔を招かんと懇諭し給ひければ、量藏其旨を順公に復命し、直ちに西上しけるとぞ。

第十一　未亡人假粧の狀を說き給ひし事

烈公薨去の後、夫人の仰せに、上流未亡人の化粧江戸風は、劇曲中のさたか後宮の摸型にて、鉛粉は面に

白く、臙脂は唇に靑く、衣裳も紅赤色は用ゐねど、刺花繡文の類多く見得、京にては脂粉共に施さず、彩繡の服も亦嫌へり、一橋の養母德信院は、總て京樣になされたりしが、烈公每に感稱し給へり、自分も今は之れに倣ひたりき。

第十二　救荒の手段を忘れ給はざりし事

夫人年々の雜費若干の外、歲暮には烈公仕方金より百兩づゝ受け給ひて、剩財も少なからざれば、何地へか保養をと勸め奉る者ありけるに、否々他日諸人救助の資にせばやと仰せられたり、烈公は惡疫流行の際、雞冠石を粉末にして、廣く之れを賜はりしことあり、夫人も之れに倣はんとの賢慮にや。

第十三　狆の進獻を斥け給ひし事

ある年鈴木石見守公事濟みて、水戶に還る時、佳狆一頭を獻せんとの內申あり、夫人仰せに庶事儉約の際なれば、從來飼養の一頭も猶無用とこそ覺ゆれ、如何んぞ更に一頭を增さんとありければ、石見等愧ぢて事やみにけり。

第十四　有司の誣妄を辯じ給ひし事

元治元年の冬、老臣山野邊某罪を得たる際、執政等は德潤院山野邊氏を忌みて、之れを黜けんとしたるに夫人は之れを憐み、終身資給の約あるものを、故なく黜くる例やあると仰ければ、執政奈何ともする能はず、遂に其議を中止したり、德潤院は再生の想ひをなして、感淚に咽びしとぞ。

第十五　農事を敬ひ給ひし事

ある年の秋、農民北刈り收めたる稻を賊の爲に奪はれたる者多かりしが、其嘆きは、金銀財物を掠め取らる丶にまして悲慘を感ぜりと、夫人之れを聞き給ひて仰せけるに、烈公嘗て農夫の小銅像一軀を造らしめ之れを常膳に置き、食毎に飯粒を分ちて、銅像に供するを例とせらる、其農を敬し給へること此の如し、我等も公の意を奉体し、常に粒々皆辛苦の實況を推料し來れり、彼の賊も亦水戸の領内にて、公の德澤に浴する者、其横行抑亦何の心ぞや。

第十六　書を善くし給ひし事

夫人は少き時より書を善くし給へり、宜なる哉、烈公殊に夫人の才筆を讃美し給へること、嘗て夫人に命じ、天賜の櫻の記を撰み、且自書せしめ、之を石に勒して、後樂園中に建てられたり、斯記數百字、筆致の流麗、字體の遒雅、觀者をして嘆服措く能はざるものあらしむ、維新后この碑は、小梅邸の庭中に移されたり。

第十七　手工の才に富み給ひし事

夫人の多能なるは、奉仕の人々褒稱して已まざりき、殊に雅樂を好み、篳篥を善くし、晩年更に箏を愛せられ、其他諸禮に通じ、又能く手工の妙あり、或年の正月、雪の降りける日、女侍等烈公の笑覽に供せんとて、各競ふて手工の製あり、夫人も之に加はり、筍に鍬を配したる簪一枝を製作し給ひければ、

公之れを一覽わりて、其意匠の淸雅に感じ給へりと。

第十八　追慕の情を和歌に寄せ給ひし事

夫人の烈公を追慕し給へることは、特に稱道し奉るべきに非ざれど、其詞章を拜すれば、謂はゆる哀んで傷まざるの情あるを、窺ひ知るに足れり、今其一を揭ぐ。

好文亭にまかり、處ろ〴〵詠めつゝ過ぎにし事のみ思ひ出ければ

君まさばまとゐの今日の嬉さを
同じ所に物語りせん

第十九　五十ヶ年奉侍の者に和歌を賜はりし事

夫人に侍して、五十ヶ年一日の如く仕へ奉りたるもの二女あり、松島福岡と云ひ、中山高崎と云ふ、明治十八年一月夫人親から筆を執り給ひて、

松島尚子がわれに仕ること、今年五十年に成りければ其よろこびに、物與ふるに添へて、

珍らしや百のなかばをいそしくも
仕へてし身のさちは我が幸

其後數年を經て、

中山文子われに仕へてことし五十年に成りければ

はるかにもなほこそたのめ今年より

花咲くもの丶なかばと思へば

二人の斯く長き年月仕へ奉りたるも、皆夫人仁厚の徳の致す所と謂つべきなり。

第二十　烈公の肖像を進獻したる時賜はりし利歌の事

明治廿二年の春、考按數回を經て、烈公の肖像成り、予之れを夫人に進獻す、時に夫人の下し賜はりたる國風一首あり、

つくしける人の誠のあらはれて

昔にかよふみかけをぞみる

夫人溢美の贊辭をこの肖像に賜はりけるは、予實に感佩に堪へざりき、夫人薨じてより茲に十星霜、伏して是章を拜誦すれば、夫人の恩容も彷彿として咫尺の間に見へ給ひ、肅然として敬を起し、愴然として感を深ふする者あり、依りて斯章を以て斯志を結ぶ。

附　秘書別志

烈公の水戸城に薨ぜらる丶や、順公は先公の秘書保管の事を在城の母公文明夫人へ願はせらる、後數年にして市川黨權を專らにするに及び、公は左右の言を用ひ、更に之を江戸本邸に收めんとの旨夫人に仰せたげければ、夫人は之を移して、彼黨の手に委ぬることを深く憂慮し給へり。

又御一品と稱し奉りたるものあり、そは萬延元年庚申十月殿良啓之れを奉じて、潛かに京師より水戸に入り、大場一眞齋に托せし密勅なり、一眞齋は待つ所ありてや、後三年を經、即文久三年癸亥三月に至り

始めて之を順公に呈し、公は其翌元治元年甲子正月廿六日執政杉浦羔次郎を以て、この密勅の保管を夫人に願ひければ、夫人は之を御一品と稱へて、深く秘藏し給ひたり。

然るに、慶應元年乙丑四月執政市川三左衛門等、御一品拜觀の儀を順公に請ひ、許可を得て之を夫人に申請せり、是より先き、幕吏某より本邸の調役某へ、去歳水戸騷亂の平定せしは、實に幕府の威力に賴りたるなり、爾後は事の巨細となく、包藏あるべからず、彼の庚申密勅の如き、宜く速かに幕府へ納付すべしと內話ありたり、夫人風かに之を聞知し給ひければ、御一品の漏泄に由りては、如何なる關碍の起るべきやも測るべからずとて、此れ亦痛く憂ひ給ひけり。

是歳七月一橋公の封書京都より本邸に達し、水戸にある母夫人に進せらるべきものを順公特に小性頭取久貝正吉をして、其封書を懷にして下向せしむ、正吉夫人に謁し奉り、一橋家用人黑川某は不逞の者なれば、京師の內旨と矯はりて、公を誤ることありては、更に物議沸騰の端を啓かんかと憂ひ給ひ、此封書は母君披閱の後之を請ひ受け來るべしとの命なりとて封書を呈したるに、夫人は汝よも唯々と承け來りしには非ざらんと仰せければ、正吉一度は辭し奉りしに、公より汝が父は水戸の居住なれば、幸に歸省せよとの厚諭を蒙り、已むなく命を奉ぜりと色を失ひて答へける、夫人之を聞き給ひて、親子の情は天性なり、當主も我子なり、一橋も我子なり、子は一體なり、母の心に於て何ぞ之を別たんや、又何をか隱さんや、但今回當主の口氣無禮なり、聞く先刻執政石見守出頭せり、と汝就きて問へ、云々の使命啣みしに、云々の內旨あり、之を如何にして可ならんと、且つ時規將に午ならんとす、飯を畢へて再び來れと、少時正吉を退けて、其封書を開き給ひしに、一通は秘すべきもの、一通は平信なり、其秘すべきものは包み紙に返上の二字あるを幸とし、換ゆるに傍らにありし弘道館調練場の繪圖を以てし給ひぬ、頓がて正吉の再

び出づるや、石見の意見如何と仰せければ、公の請願は少く穏當ならざればと今度は慈宥し給はんことを石見も切願し奉ることの旨答へ奉りければ、夫人仰せられけるは、己が心を治めなば、胸の疑惑は起るまじ、老母の傳言、汝それ、能く意を留めよとて、直に之を授け給ひければ、正吉畏みて退きしとぞ。

斯く順公の一橋公を疑はれたるは、公の公を疑はれしに非ずして、群小の一橋公を疑ひ懼るゝの甚しく、遂に之れを順公に誣ひ奉りたればなり、是時に際し、秘書及御一品と本邸に移さば、散逸又は漏泄あらんことを憂ひ玉ひたるに、一橋公を除きては、他に之を議るべきものもなかりければ、夫人は公と數回の往復ありたり、小人等は己が非を掩ひ、蔽はんと意を用ゐるの疎ならざる、再三の往復あるを探り知り、必ずや藩臣の黜陟を謀られ玉ふなるべしと推測り、之を公に訴へ、久貝の使命こそ、彼等疑懼の末に發せしぞ明かなれ、道路言あり、曰く夫人を駒込の別邸に徙し奉らんと、名は順公の奉養に便せんと稱して、實は之を迷し奉らんとの窮策なりと、當路果して是議ありしや信ずべきに非ざれど、一旦勢ひの迫る所あらんには、安んぞ是事なきを保たんや、左れど夫人の聰明なる小人の肺肝を洞察し、毫も聲氣に見はし玉はず、從容として機宜に應じ、之れが爲に君子をして憂を增さしめず、小人をして罪を重ねしめざりしは、其德度豈量り易からんや、是後本邸なほ秘書を移し收めんことを促したれど、夫人は故らに其事を緩ふし玉ひけり、而して翌年丙寅一橋公の入りて將軍職を襲ひ給ひたるに及び、順公頓に悟り給ふ所ありて、秘書の事を以て復た夫人を煩はし給はざりき。

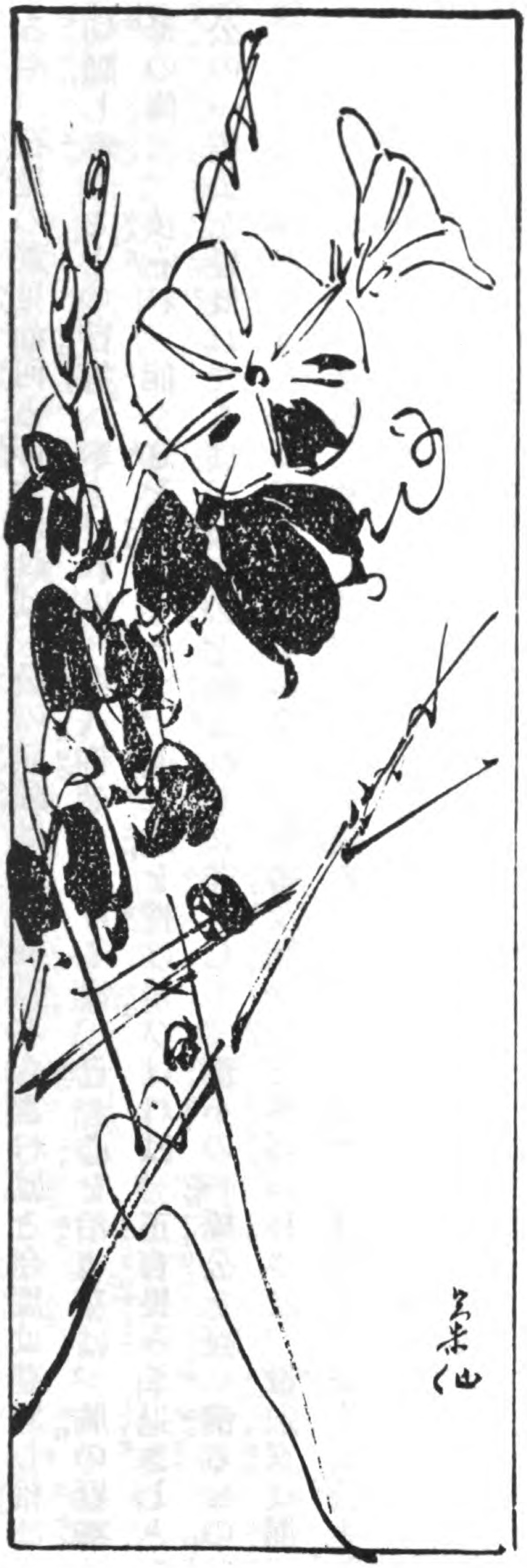
抑も秘書の保護に於けるは、烈公の神靈にして、非道を冥々の中に呵禁し給へるが、夫人の措置何ぞ其れ遺算なき、是れによりて觀れば、夫人の烈公に順公に贊助の功の尠なからざる、亦以て想像に餘れるものあり、嗚呼夫人の淑德此の如し、孰れか君子の好逑に非ずと謂はんや。

跋

勇が祖父延于、父延光は、烈公に事へて皆殊遇を蒙り、勇亦其蔭を以て公に近侍し、小姓より小性頭取に進み、秘書掛を兼ね、誤りて恩遇を蒙り、公の薨せらるる後、亦夫人の德音を承くることを恭ふせり、今や勇老ひて七十に垂んとし、湖畔の草廬に閑居し、古人の謂ゆる玉堂を顧瞻すれば、天上にあるが如きの想ひなき能はざれど、感恩の情誼は未だ嘗て一日も懐を離れず、嘗て聞く君父の美あり、善ありて、臣子之を知らざるは不明なり、知りて之を傳へざるは不仁なりと、此れ勇自ら固陋を忘れて、是志ある所以なり、但言の文ならざる、夫人の靈、幸に之を容れ給はば、烈公亦豈之れを首肯せざらんや。

明治三十六年十月

青山勇謹撰



訪問

佛國婦人ローズ孃の談話

菊池雪子

日本の女子に佛語、佛文學を敎へられ、其後朝鮮に赴かれて、多年女子敎育に熱心でお出になりましたローズ夫人は、此頃本邦に渡來なさいましたから、記者は珍らしいお土産話を承りたいと存じまして、土さへさくてふ此の暑さをも忘れて、お尋ねいたしました。

夫人は昔、記者がまだ、女子佛語學校の生徒で居りました時の事を思ひ出され、大きく成りましたとか、お訪ねして參つたのを嬉しく思ふなど、種々親切に仰せられ、さて久しぶりにて御面會の物語りも終りまして、夫人に向ひ、何か面白いお話を……日露戰爭に就いてお聞きになりましたことでも……またお國のことでも……朝鮮のことでも承りたうございますと、申上ましたところが、夫人は頷き、「面白いと申せばまことに馬鹿げきつて居りますが、露西亞人が迷信して居りますことをお話いたしませう。」

露西亞皇室と戰爭に就ての預言

「露國皇帝は大分迷信家な人ですよ……小供だましのやうな取止めのない事を眞に受けて、其れで玉躰を動かすとは、皇室擧つて迷の中に流浪して居るの

が分るではありませんか、……其の話は先づ、斯うなんです、七十年前ですが、露西亞にセラフィンと云ふ僧がありまして、サロフの沙漠に生活をいたして居りました、此の僧は豫言をすると申て色々の事を云つて居りましたが、其の住つて居る僧庵のほとりに井戸がありまして、僧の死後、病人がその井戸の水によつて全快したと傳へまして、皆サロフの僧を聖僧セラフィンと呼んで、參詣に參る者が續々ありました、そこで遂にセラフィンを聖人と崇め、遺骸を聖堂に運びました、昨年でございました、露國皇室は一の聖堂を、この聖僧の遺骨を安置するために建立いたしまして、開堂式を擧げられましたが、其時皇帝御自身と、三人と太公とで、聖僧の骨を聖堂まで持つて行かれ、綺羅を飾つた壯嚴な行列をいたされました、皇后は手づから遺骨を安置いたす所の幕を刺繍なされ、四圍の裝飾品をお作りになりました、其中に彩色を以て絹布に畫かれましたものは、衆人の目を引いて居ります、露國の皇室が擧つて聖僧と申すセラフィンに、斯樣な禮遇を盡されますのは故あつての事でございまいが、丁度其處が皇帝はじめ皇后、皇族方の迷信なのでございます。

「日露戰爭に就きまして、露國の上流社會の流言には、皇帝は親征して東洋に赴かせらるゝと言ひ傳へて居りますが、乃ちセラフィンと云ふ者の預言を眞正なものと信じて居るからであります……けれど……正義に反いて居るものを神樣はお助けなさる筈はありませんよ、御覽なさい、今まで日本が勝利を占めて居るではありませんか、日本と申せばお國ですが、最後の勝利も日本に歸することゝ私は信じて居ります、……セラフィンの預言はあまり馬鹿々々敷くてお話にもなりません、また其れに解釋を付けた者も、隨分馬鹿なのですが、それは斯うなさうです。

「私の遺骨を移された翌年に戰爭が起るだらう、そうして其の戰爭は露國にとりて、慘禍を極めるだらう、次に皇帝自ら戰場に臨ませられるだらう

が、其時私も皇帝と共に行つて英國婦人の前掛を破るだらう。』

斯ういふ預言なので、露西亞人の註には、戰爭とは日露戰爭のことである、皇帝が戰場に赴けば、聖僧も一緒に行くとあるから、是非皇帝は行かねばならない、して見ると、聖僧はアレキサンドル一世の生れ代りである、英國婦人の前掛と云ふとは、正しく日本に當つて居る、何故なれば露國の眞の敵は日本でなくて、英吉利であるが、日本はたゞ英國のお先きに使はれて居るのだといふのであります。

『實に愚とも何とも云ひやうのない迷信極まつた取止めのない話ではございませんか』と夫人は日本の勝利を熱望し、熱心を籠めてお話になりました『ははあ……迷信の皇帝がお出かけになつても、正義の旗は倒れませんね……』と重ねて仰せられました、『露國皇室内幕の話ですが、今度は何んぞ國(佛蘭西)の慈善事業の事でも、御紹介いたして、日本の益になることを申上げませう。』

貧母と貧兒

『佛蘭西に慈母協會と申す會が設つてございますが一千七百八十四年の創設でありまして、其の目的は貧しい者が母となつて、兒を胎内に宿したとき、金錢物品を以て慰め助け、また分娩した兒には出來得る限り、慈母協會で敎育を施し、職業を學ばせてやるといふのであつて、私生兒でないものは、養育院のやうな捨兒の會には遣らせないといふ目的なので本會は年々隆盛に赴いて參ります。』

『會長はムシー公爵夫人でありまして、副會長幹事なども、それ〴〵有位有爵の夫人方でございます、會員も名高い夫人方が多うございますが、會員の役目といたしまして、貧しい裏店社會の家に尋ねて參り、母となつたものに慰安を與へて居られます、これが何程國家を助ける事業であるか、實に想像の遙く及びませんところでございます、よく人は佛都パリと申ますれば、歌舞音樂にのみ耽り、いかにも上下擧つて日夜贅澤奢侈を極めて、家事不如意の事は

ないやうに思はれますが、實際に立入りますと、中々左様ではございません、金のある人は舞ふたり踊つたりいたして居りませうが、貧しいものは生活に苦しんで、朝夕の烟も立兼て居りますから、有福な人ならば、母となることは喜びであるのに、貧乏な者には、却て二ツの苦勞を招くのです、先づ母の情愛といたしましては子を生みましたらば、充分食物を與へたうございませう、また一人前の敎育も受けさせてやりたうございませう、けれど貧賤な時には、子を生むといふことは喜びの代りに難義が增し、生長するのを見るに付けても、充分に食物や敎育を與へる事が出來ませんから、これまた今一ツの難義を感ずるのです、何處の母にも情愛の無い者はございません、美しい情愛も貧母には苦勞となるのです。」

「此會の創立者はフジユレー夫人でございまして、或る病院に通勤する事務員の女で、名もなき一婦人でございましたが、父君が常に姙娠した施療患者の憐な情態を話して聞かせて居りましたので、憐みの念が非常に女の心を刺戟しました、さうして遂に會を建てやうとの思を起しましたが、始は政府の手を借りませんで、ほんの個人の事業として始めたさうですが、何にいたせ、生兒を救ふことは大々的事業でございますから、創立後まだ日も淺いのに、贊成者が多くあらはれました、惡黨が斷頭臺で首を刎ねたマリ、アントアネツト皇后は、慈悲深きお方で入らつしやいましたから、此の慈母協會の事業を、大いに贊成遊ばして、年々恩賜金を下されました、其れから愈々盛大になりまして、現今慈母協會のお陰で、辛い生活を助けられ、安堵の思をいたして居ります貧母は三千人もございまして、此の人等に對する一ヶ年の出金は十五萬弗に上りますが、悉く慈善家の寄附金で、立派に立つて居るのであります。」

記者は夫人の斯く仰せられますのを承りまして、這回の戰爭に、妻子を後にして公に奉ずるために遠征の途に就かれた出征軍人の中には、赤貧に迫られて、お米の外にはたゞ鹽を嘗めて、漸う命を繫いで

居る人も澤山ございますとのことを思ひ出でました富んで居ります方々は日に一度の御馳走を減じ、又は美服を製るのを止め、無駄な車代を節して、憐な軍人の遺族を慰撫することは、實に今日の急務であると獨り思ひに沈みました。

『夫人は語を次いで佛蘭西の統計表によりますと、國の人口は年々減ずるとも、増しはいたしません、これは多く上流社會に出産の數が少ないのです、下等社會は大勢兒を有ちますが、養育するに困難を感じます、國民は下等社會から増加いたすと申さなければなりませんから、國民の母となる姙婦の貧しいときは、他目に見て居ることは出來ません、出來る丈資力を與へて母を助け、子をも助けて成長させねばならぬ義務があります、此の慈母協會と申す會は、政府から指定されたのでもなく、教會が命じて出來たものでもございませんが、今日までまことによい結果を表はして居ります、富者貧者は何れの國にもあることですから、聊かお國のためにもならうかと存じてお話しました。』

朝鮮のことは、お國に委しく知れて居りますから、今更改めてお話いたす必要もございませんが、一寸私の目に留まりましたのは

婦人の容貌

丈は男子よりは餘程低うございまして、顔は一般に圓くて、偏平で、色は黄色で、何うしても支那人の摸型とは違ひますやうです、多くの婦人は品行の點に於きましては褒めたものではありません、學識も乏しうございます……先づ是れ位にいたして措きませう、風俗などのことも、お國の方は大概お知りでございますから。』

夫人はまことに文學、美術、音樂などの智識ある、活達、寛大な方でございます、久々でお目にかゝりましたから、おなつかしうて、いつ迄も記者を生徒のときのやうに思つて下さいますのは嬉しうございました、夫人はお食事の時間に成りましたのもお忘れになり、此等の有益なお話をなすつて下さいまし

た、夕暮の風が少し冷たう肌にしみましたのに驚かされ、お暇いたし、二階の梯を下りる足元も重く、家路につきました。

棚橋絢子女史

菊地雪子

郁文中學校長文學士棚橋一郎氏の母堂絢子刀自を丸山新町の邸に訪問いたしました、御門前よりお玄關までは敷石が半楕圓形に並べられ、客間には女史の半身を寫した大きな額を飾られ、愛らしい人形は硝子箱の中に、物は言はねど愛嬌を湛へて客に接するやうでございます、それを見るに付きましても、御令息には愛娘おはすとは記者のすぐお察し申した所でありますが、前栽には滴る緑の間に紅葉の少し色付きたるが雑つて、岐阜提灯を揺がす風の香も、塵の巷をかけ離れた閑靜の趣が偲ばれました。やがて女史は客間にお出になりまして氣輕にお話し下さいました。

多年女子の教育に御經驗をお積みになつて居るのみか、道德會をもお立てになりまして、道德の實踐を奬勵してお出になりますから、世間で女史を道德の模範とも賢母の鑑ともして居る方の多いのは尤のことゝ思ひます、實にお若い時から、御良人に盡された女史の眞心、お子樣を教育遊ばした御熱心、職務に御精勤なさいました事などは、まことに氣力あり、見識ある堅實なる御婦人であることを證して餘りありで御座います。

女子教育に就きまして記者は女史の御意見を伺ひましたところが『幸ひ一つの原稿がございますが曾て感じた事を記して置きましたので、これに私が教育上に有つて居ります意見がございますから』と、お示しになりました。

前號の論叢に掲げである「非風非幡の事に就て」とあるのが、則ちそれであります。

仁は道德の大本

『三ッ兒の魂百までもと申す諺がございます通り、幼少の時、心裡に染み込んだ事は、大きく成つても忘れぬものであります、仁はまことに道德の大本です、廣い意義を含んで居りまして、父母年長には敬愛を盡すこととなり、自分より小さいものには愛憐をかけることとなり、下つて、つまらない虫けらまでにも憐をかけて、無益にこれに害を加へないことになります、又仁は廣く死物にも及びまして、一度用ゐたものだからと云つて放擲せず、二度も三度も手を代へ品を代へて用に立てますときは、自然物を大切にいたすやうになります、富貴な人には不用のものでも、貧賤な者に取つては、必要のものも少なくないものですから、無暗に物を棄てるといふ事は、善くないことでございます、私は着物でありましても、手紙のやうなものでありましても、粗末にいたしません、自分で不用ときには、人の用に立て、よく〳〵用に立たぬやうになりましてから、始めて棄てゝしまひます。』

十才より學に志しました

『私は大阪の生れで、其の頃女は學問すると、生意氣になるの、不品行になるのと申して、女子の學問は蔑視されて居つたのですが、ふとした事から、學問を習つて見たいものと、父に乞ひましたところが、其れほど望むならば、夜分に私が教へてやるから決して書物を習うなどゝは人に話していかんと、固く禁じられまして、まづ大學から始めて教へて貰らひましたが、中々六ケ敷くて何度教へられましても、熟達いたしませんでした、十三歳から二年間小山先生と申す學者に就て學びました、父が多忙で教へて居られませんときは、註釋のついた本を求めてもろうて自分で獨學も致しました。』

棚橋氏に嫁す

女史は記者のお尋ねに一々お答下さいまして『棚橋に參りましたのは、十八の時でございました、間もなく愛知に移轉いたさねばならぬことになりましたところが、良人は目が見えぬやうになり、家事向

も困難に成つて參りましたから、私は元來――まあこれは自分ながら裁縫は出來た方でございましたから、數人の生徒に本を教へて、傍ら内職に人の着物を仕立て居りました、それから愛知學校に聘せられることになりまして、始めて教鞭を取りました。

女子高等師範に聘せらる

東京の女子高等師範から申越されまして出京いたし、芝區の福澤さんの邸内に住まつて居りました、丁度良人は外國の學問をいたしたいと望みましたので、私が日々通ひますには不便でございますが、良人のために、此處なれば極く都合がようございますから、毎朝自分で食物の用意、子供等を學校にやる世話をいたして、師範に通つて居りました、此時お茶の水に學習院と申て、華族女學校が建設いたされました、開校式を擧げますとき、兩陛下には臨御ましまして、私が其の時撰ばれて、御前に出で祝詞を讀み上げました。

其れから教育に身を委ねて

「芝の學校、神田橋の學校、名古屋の學校と處々に教鞭を取りまして、昨年また人の勸めによりまして、芝に高等女學校を建設いたしました。」女史のお話のうちには何處となく、誠實淡泊な風が見えまして、記者はお話を承りながら、實に感服いたしました、女史は言葉を續けられて「私は思ふ通りものを言ひます方で、度々人樣に憎まれることがございますが、どうもわが考と違つた事を表を繕つて甘くお話しいたすことは出來ません。」と仰せられましたが、まことに良藥は口に苦しといふことがありますれば、道德會杯いふ眞面目な會をお設てになつて、お出遊ばす女史の忠言は、凡人の耳に逆ふともございませうけれど女史はお子樣をお育てになるにも、家庭の教育として、人に損害をかけず、誠實を旨となさるやうにお教へになりましたさうで、寔に賢夫人、賢母で入らつしやいます、また小笠原家の令孃や、德川家の令孃の教育をも擔任遊ばして入らつしやいますれば、女子教育上の御經驗は、恐らく女史程の方は外にはないと存じます。

新奇發明 増酒資料（さけふやすもと）

壹斗の清酒は即座に倍增し（即ち貳斗）となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり（附錄）腐敗酒直し法、味淋酒醤油參倍增法、速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍增法、味噌速造法等以上の釀造家及び請賣營業者の大有益案內……右今同披露の爲拾萬部限り**無代進呈**す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる確實**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あるを確證す（注意）本館の隆盛を羨み近時當館廣告に贋せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝと勿れ…（當館は去廿壹年の創立也）

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授產館**

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やく下し 通經劑



本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にても必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃すること確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ

わきが（腋臭症）根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事（電話下谷五四六番）以上貳藥

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

家庭好侶伴

隔週土曜日發行

家庭週報

定價一部三錢　郵稅五厘

八月廿日發行　第五號目次

挿畫

●原撫松氏畫●ミスホープ鳥の治療をなす圖●鳥の病床●犬の墓所●蜜蜂の巣箱及巣脾

▲自然を愛すべし（論説）

▲我國の教育に於ける一大缺點　成瀨仁藏

●（生物を愛さゞる事）

▲皇后陛下の御懿德●東宮御慶事●内親王殿下の御仁慈●露國皇子御降誕●海員の母マークレーン

▲經驗なき母親の爲に（ニユーヨーク小兒病院リンコルン氏ノ經驗）

●牧畜部雜話●地方通信

●蜜蜂につきて

●故園のうつし繪●一枚の花

▲體育の目的につきて

●（身體健康●身體の教育●體身休養）

發行所　東京市小石川區目白臺川本女子大學校内　櫻楓會

家庭割烹講義錄

後期第五新刊發行 新入會者を募集す

●規則書入用の向は二錢郵劵を添申込むべし

所載の要目は

▲日本料理……講師 井上善兵衛

春末初夏調理くさぐさ、一汁三菜、同夕飯、朝飯、晝飯、夕飯五月中家庭精進朝飯、晝飯、同夕飯家庭即席半會席、めじ鮪一切、汐干重詰、端午、半會席、鮎一式調理、精進會席、鳥相鴨料理、以上各七十六種

▲西洋料理……講師 宇野彌太郎

高等晩餐献立十種晩餐献立十種、當季一品料理ムセーアラワニラ、カリフラソークレムソース、カリフラワーピクル、カリフラソエンドチース、カリフラワオムチツト等

▲當季會席献立…松本常次郎▲當季家庭惣菜…淺井傳三郎▲露西亞料理店下…矢野太郎▲卓上小話…岡野知十▲抹茶提經…廣田量扱▲雜報本會記事▲出陣式膳献立等は戰時の讀物として尤も趣味あり……井上善兵衛

本課講師

華族女學校、共立女子職業學校 井上善兵衛

大日本女子教育會割烹科教師 外務大臣官邸庖廚主任 宇野彌太郎

課外教師

治庖會教授 赤堀峯翁

女子大學教師 赤堀峯吉

宮內省大膳職庖士 緑川幸次郎

葉山御用邸調魚監督 松本常治郎

女子大學教師 渡邊鎌吉

家庭割烹新聞

月二回發行一部價金三錢五厘十部金三十錢郵稅不要郵劵代用一割增（五厘切手ニ限ル）

本會の機關にして家庭の割烹家庭の娯樂庖厨家の侶伴營業界の顧問として割烹講義錄と相俟つて一日も欠くべからざること尙一食も欠くべからざるに同じ、

家庭割烹實習會

東京市神田區佐久間町四丁目・電話下谷六四九番



家庭

家庭理科

無線電信の話

菅原倭翁

先頃旅順の露軍が、我が陸軍の爲に後方陸上の通路を遮斷せられ、又前面海上の交通は我が艦隊の爲に斷絶せられて、最早や蟻の這ひ出る隙もなくなりまして、傳書鳩や大凧を飛ばして果敢ない音信を頼りにして居るのは、敵ながら他處の見る目も實に氣の毒の思ひを致しました、時に忽然秦皇島の高地點に無線電信柱が立つたとの噂さが起りますと、それと同時に旅順口では老鐵山の頂に檣樣の四本柱が立てられて、その内の一本は確かに無線電信用のガーフと認められると、高木千歳艦長からの報告でありました、これは申すまでもないこと、鳩や凧では安心ならないので無線電信によつて、より正確な通信を得やうとしたのに相違ありますまい、さてこの無線電信の軍用に使用されましたは、今回の日露戰爭が嚆矢であります、而して軍用としての無線電信が如何計り功能がありましたかと申すことは、我が國で專らこの無線電信の研究に從事されて居た、海軍將校及び海軍技師の方々が、特に恩賞せられたのを見ても明かなことであります、そこで嚢中の鼠、釜中の魚なる旅順口の露軍が今生の最後に頼りに思ふた無線電信は如何なるものか、時節柄興味ある談と

思はれますから、一通りその梗概を記しませう。

そも無線電信は最近發明の一でありまして、そのいよいよ實地に應用されるやうに致されたは、伊太利人でマルコニと申す人であります、氏は十年の永き月日の間研究に打ち掛かり、屈せず撓まずして、成功せられたのであります、その研究は今より七八年前のことでありましてマルコニ氏が伊太利ボロニア大學の學生で、電氣學者リギー教授の弟子となり若學中のことであります、さて無線電信の發明は勿論マルコニ氏の功でありますが、其地盤は幾多の先輩に依て造られましたので、氏になつて大成就せられたので、その創意は全くヘルツ氏の發見に係る、所謂ヘルツ波に基いたものであります、そこで發明家の順序より次のやうに申されて居る方があります。

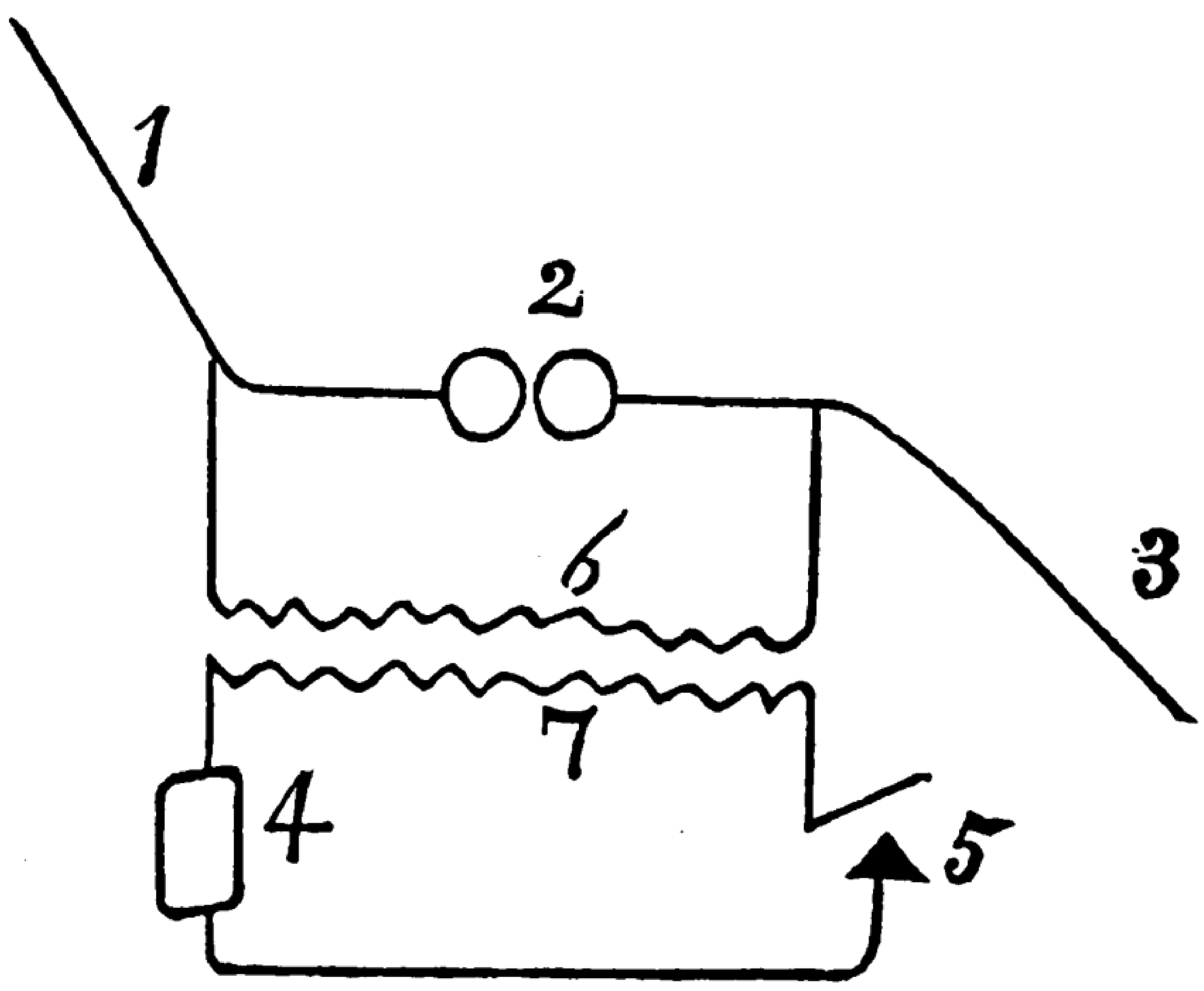
電氣波の發明應用に付ては第一ファラデー氏がその種を蒔かれ、マックスエル氏それを生長せしめられ、ヘルツ氏に至て果實を結ばしめられ、更にマルコニ氏がその果實を實地に應用せられた、

無線電信の開祖マルコニ装置の應用は、今から僅々五年前、西暦千八百九十九年三月に英吉利と佛蘭西との間、即ちドア海峽の兩岸で試みられたのでありますゝ此の海峽の距離は僅に十里餘りでありまして故障なく電信が傳へられました、次に千九百〇一年になつて佛蘭西と地中海コルシカ島との間、その距離約四十五里の所で試驗されましたが、これ亦何等故障なく効果が見えました、それより更に千九百〇二年、即ち一昨年三月亞米利加のフイラデルフヒヤから一千五百五十一哩を隔てた先きへ無線電信で音信を送りました、又當時更に二千〇九十九哩の間に於てSと云ふ記號を通ずることが出來ました、斯の如く致しまして最後の試驗に同年末、太西洋を横切つてしかも能く音信を傳へられましたから、玆に初めて無線電信會社が設立されました次第でありまして無線電信とは讀で字の如しで、有線電信に對する稱呼であります、これ電線の媒介を要せずして、電氣作用で音信を一方より他の一方へ傳ふるのであ

ります、其方法は電氣振動を起して電波を作るのであります、その電波の空中を傳はる状態は、恰も水面上下の波動が、その全面に傳はると同じであります、さて其電波を如何にして發せしめるか、又如何にして其電波を受けるであらうか、その發信器、受信器は如何に拵へて然るべきか、こゝが電線にする場合と異つて居りますから、最も發明者の苦心を要せし處なのであります。

發信機

(一)は觸角と云ふ、マルコニの發明でありまして、極長い金屬の棒でこれによりて音信を遠方へ傳へたり、又受取るのであります、故に艦船などでは檣の頂上を通じて建てますし、家屋ならば屋上を通じて空中に直立させるのであります、そして其觸角の下部は地中へ引てあるのです、又受信の方でも同樣な裝置がしてあります。



發信機畧圖

(二)は振動器であります、振動を起させる處であつて、火花の出る處で、茲に振動が生ずると前の觸角が共に振動いたします、而して其振動が空中に傳はり、その振動所謂ヘルツ波が他方の觸角、乃ち遠距離にある受信機の處へ感ずるとその觸角に同樣な電機振動が起るのであります、この振動が觸角を通せる『コヒラー』に感ずるやうになりますから、通常電信器と同じやうに之に受信器が連續してあると、初めて音信を見ることが出來るのであります。

(三)は觸角の地中に通ずる部面であります、

思はれますから、一通りその梗概を記しませう。

そも無線電信は最近發明の一でありまして、そのいよいよ實地に應用されるやうに致されたは、伊太利人でマルコニと申す人であります、氏は十年の永さ月日の間研究に打ち掛かり、屈せず撓まずして、成功せられたのであります、その研究は今より七八年前のことでありましてマルコニ氏が伊太利ボロニア大學の學生で、電氣學者リギー教授の弟子となり苦學中のことであります、さて無線電信の發明は勿論マルコニ氏の功でありますが、其地盤は幾多の先輩に依て造られましたので、氏になつて大成就せられたので、その創意は全くヘルツ氏の發見に係る、所謂ヘルツ波に基いたものであります、そこで發明家の順序より次のやうに申されて居る方があります。

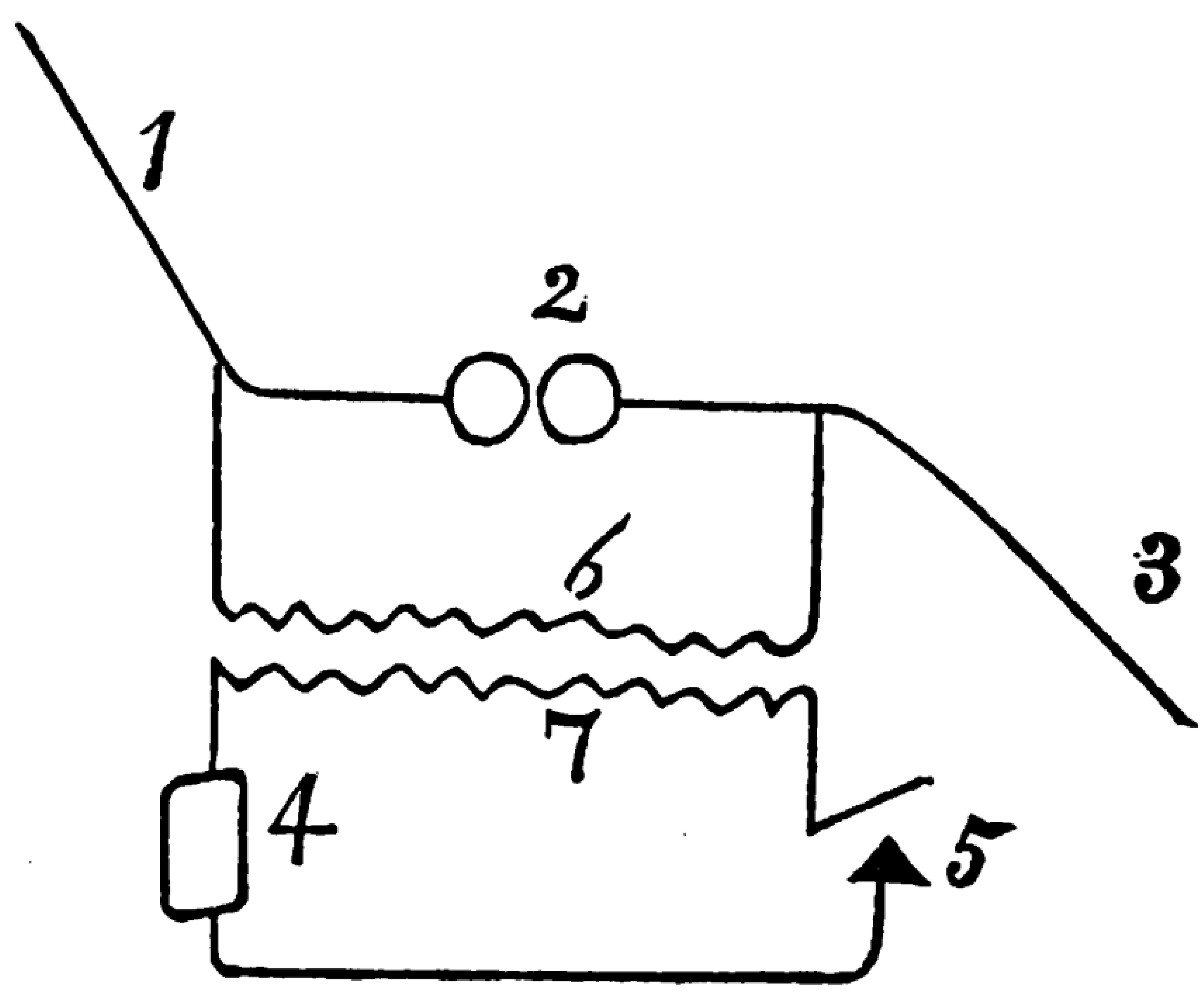
電氣波の發明應用に付ては第一ファラデー氏がその種を蒔かれ、マックスエル氏それを生長せしめられ、ヘルツ氏に至て果實を結ばしめられ、更にマルコニ氏がその果實を實地に應用せられた、

無線電信の開祖マルコニ装置の應用は、今から僅々五年前、西暦千八百九十九年三月に英吉利と佛蘭西との間、即ちドア海峽の兩岸で試みられたのであります、此の海峽の距離は僅に十里餘りでありまして故障なく電信が傳へられました、次に千九百〇一年になつて佛蘭西と地中海コルシカ島との間、その距離約四十五里の所で試驗されましたが、これ亦何等故障なく効果が見えました、それより更に千九百〇二年、即ち一昨年三月亞米利加のフイラデルフヒヤから一千五百五十一哩を隔てた先きへ無線電信で音信を送りました、又當時更に二千〇九十九哩の間に於てSと云ふ記號を通ずることが出來ました、斯の如く致しまして最後の試驗に同年末、太西洋を横切つてしかも能く音信を傳へられましたから、茲に初めて無線電信會社が設立されました次第でありますして無線電信とは讀で字の如しで、有線電信に對する稱呼であります、これ電線の媒介を要せずして、電氣作用で音信を一方より他の一方へ傳ふるのであ

ります、其方法は電氣振動を起して電波を作るのであります、その電波の空中を傳はる狀態は、恰も水面上下の波動が、その全面に傳はると同じであります、さて其電波を如何にして發せしめるか、又如何にして其電波を受けるであらうか、その發信器、受信器は如何に拵へて然るべきか、こゝが電線にする場合と異つて居りますから、最も發明者の苦心を要せし處なのであります。

發信機

(一)は觸角と云ふ、マルコニの發明でありまして、極長い金屬の棒でこれによりて音信を遠方へ傳へたり、又受取るのであります、故に艦船などでは檣の頂上を通じて建てますし、家屋ならば屋上を通じて空中に直立させるのであります、そして其觸角の下部は地中へ引てあるのです、又受信の方でも同様な装置がしてあります。



発信機畧圖

(二)は振動器であります、振動を起させる處であつて、火花の出る處で、茲に振動が生ずると前の觸角が共に振動いたします、而して其振動が空中に傳はり、その振動所謂ヘルツ波が他方の觸角、乃ち遠距離にある受信機の處へ感ずるとその觸角に同様な電機振動が起るのであります、この振動が觸角を通せる『コヒラー』に感ずるやうになりますから、通常電信器と同じやうに之に受信器が連續してあると、初めて音信を見ることが出來るのであります。

(三)は觸角の地中に通ずる部面であります、

(四)は電流を起す處でありまして、主に蓄電池であります、何れもフオール氏がフラレデ氏の改良された鉛の蓄電池を用ゐて居るのであります、是れは全く無線電信には最も強力なる電氣を要するからでありまして、他に色々なる電池がありますけれども、何れも不適當だからであります。

(五)は断續器でありまして、電流を断つたり續けたりする處であります、音信の意味は此所にあるので、断續の長短その他の具合によつて他方の受信器に一種の符號が現はるゝのであります。

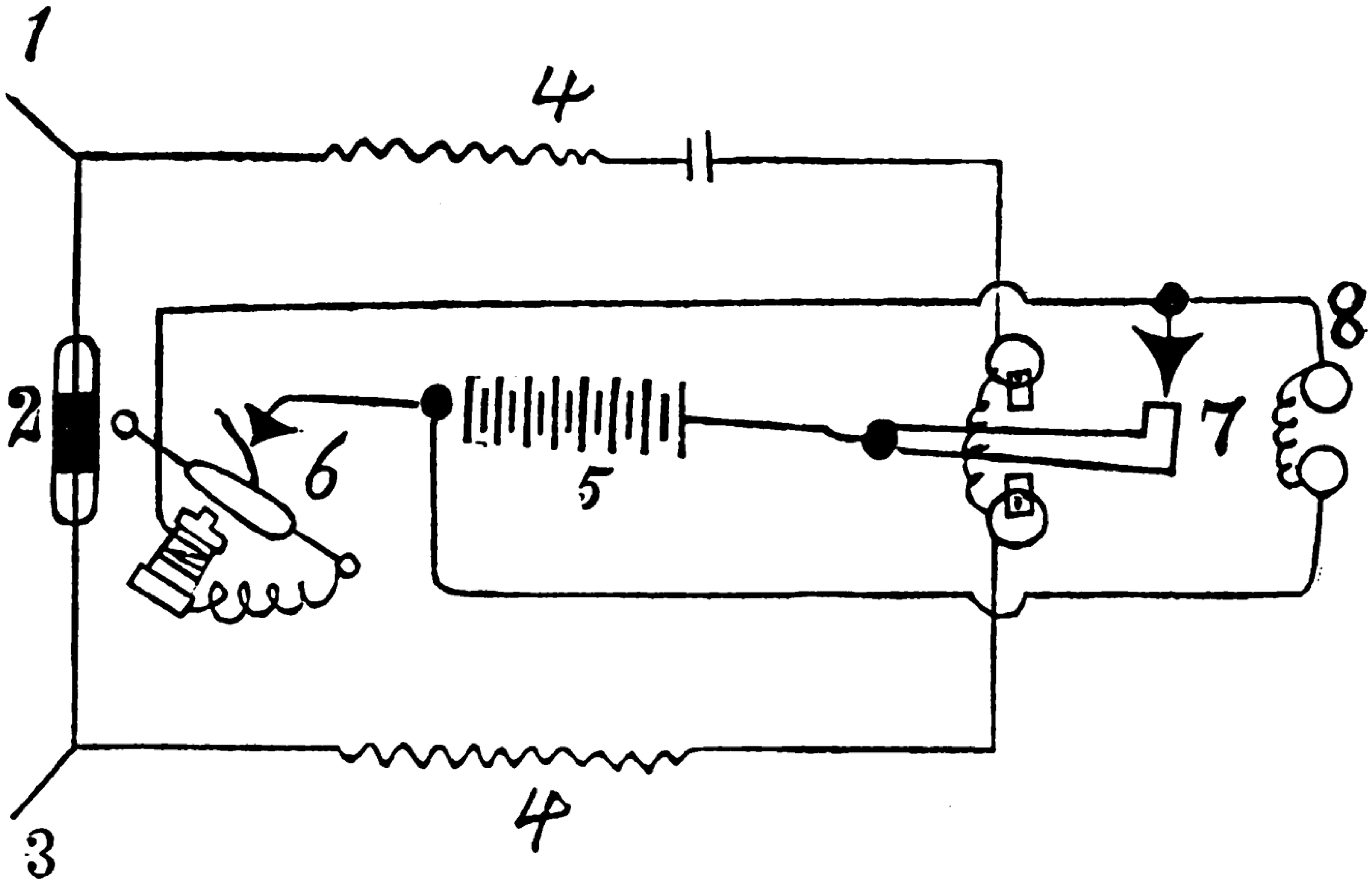
(六)及(七)はルームコルフ氏の感應『コイル』を單純に示した處で、(六)は外側の『コイル』で(七)は内側の『コイル』であります、實物の、感應『コイル』は一個の機箱中に裝置したるものであります、

先づ大要の裝置は斯くの如きものでありますが、そこで今(四)で電流を起し、それが(五)で断續いたしますと、その断續の都度に(七)を流れて居る電流が(六)に感應して(六)に電流を起させます、かくて起つた感應電流は(一一)に於て火花を發して結び付きます、そこで電氣波を起しまして共に(一一)の觸角が振動いたすやうになります、此の觸角の振動が周圍の空中へ傳はりますから、自然受信局の觸角に傳はるのであります、發信所の機械の作用は先づこんな鹽梅に働いて居るのであります。

1、觸角
2、コヒラー
3、地面へ接觸線
4、コイル
5、電池(リレーに連續す)
6、電流を断續する棒
7、リレー
8、受信器

そこで今發信局から來ました電氣波が(1)なる觸角に達してそれを振動させる、所で其震動が(2)に傳はつて『コヒラー』に電流を通ずる、電流が通じて來ると、それが(7)なる『リレー』に働いて之に又電流

受信器圖



を通じ、(8)なるモールス氏の受信器に感じます、從て受信器の紙に文字を印するのであります、この受信器に記號を印すると同時に(6)なる棒を引きますからして、その引く刹那(2)なる『コヒラー』を打ちます、『コヒラー』が打たるゝと電流が切れる、電流が切れると更に新に次の音信を傳へ初むるのであります、此の如く繰りかへされて、總べての音信が辨せらるゝのであります、受信機の作用は先づ斯樣なものであります、一見何だか紛糾して容易に了解せられないやうでありますが、今更に各部主要の理論に付て一應説明を試みますから、相互の關係が明瞭に會得せられるでありませう。

電信器

モールス氏の電信器は、記號を電磁石の作用で、遠方へ傳へるのでありまして、西暦一千八百三十七年の發明であります、それは電流を受けまして受信局の電磁石が磁石性を帶びます、すると之に向きあつて居ります鐵片を引きて直に合着のであります、さ

て發信局で久しく押して居りますと電流の傳はるとが永いから鐵片も久しく附着して居るし、又短いときはこれに反して直ぐに彈上ります、そこで其間を通ずる紙に記號が、・━(い)、・━・━(ろ)、━・・・(は)と云ふやうに、印出されるのであります、此のモールス器は、只今各國の電信局で用ゐて居ます、唯一の通信機であります。

『リ レ ー』

『リレー』とは、ホイートストン氏の發明に係る裝置でありまして、其作用は遠方から音信が傳つて來ると、その電流が非常に弱くなりますから、非常に澤山な電池を備へて置かないと受信器に感じません、ところで其局では電池を置いて電流を傳へ、モールスの電信器と名づく所に他の電磁石を置き、そのバ子を動き易いやう、即ち弱き電流でも引き得るやうにして置くことで、そこが『リレー』であります、かくしてバネを引いて電流が傳はると、その局の電池の作用によつて、容易に電磁石が作用を全うするやうになつて來ます、是處が『リレー』の効能であります。

『ルームコルフ』の感應『コイル』

『コイル』とは銅線を幾回も卷いた總稱でありまして西曆一千八百三十一年のことでありましたが、電氣學上のあらゆる方面に有名なフアラデー氏が『コイル』即ち卷た銅線をば一つの電流計につなぎて、その中へ磁石或は電磁石を入れました、そこで外側の銅線には一時電流が起ると云ふことを發見いたしました、之を感應電流といふのであります、この理に基きて感應『コイル』と云ふものが出來たのであります。

即ち太い銅線の『コイル』を取て、細い銅線の『コイル』の中にいれ、その内方の『コイル』の中へ更に鐵線を澤山入れて置いて、そして内方の『コイル』に電流を通ずると磁石になるのです、すると又外方の『コイル』にも電流が生じます、此に於て内方の『コイル』の電流を斷絕いたしますと、所謂レンツの定律

から外方の『コイル』の方に電流が起つて、これが空氣の抵抗を打破つて火花を起すのでありますが、その斷絶を速にする程火花が多いのであります、これが無線電信の場合に用ゐらるゝ振動器、感應『コイル』であります、取も直さず通常ルームコルフの感應『コイル』と申すものであります。

レンツの定律と申すは、感應電流の起る方向はその電流に伴ふ磁石力が、磁石の運動を止めんとする方向のことであります、

ヘルツ波

ヘルツ波とは、電氣の振動と云ふ事であつて、その研究は、西暦一千八百七十七年獨乙人ヘルツ氏の實驗によつて、完全に出來上つたのであります。

ヘルツ氏は電氣波を作るに付て二つの金屬の球の間へ電氣の火花を起させました、即ち一つのルームコルクの感應『コイル』を取つて、その外方『コイル』の兩極からして金屬の球へ連續させる、而して內方の『コイル』電流を斷續すると、その二つの球の間に火花が交番に起りまして、周圍に傳はることが、恰も水の上下の振動が、四方に傳はると同樣であります是れ無線電信の實用に資するやうになつた次第であります。

『コヒラー』

西暦一千八百七十年にワルレー氏が雷避けをする爲に金屬の粉を使ひました、そして其裝置は電信の通ずる妨げをせぬやうに、それは金屬の粉をかろくおくと殆んど普通の電流は導かぬけれども、落雷のやうな時にはよくそれを導くと云ふことを發明されたのでありました、そこで其理を應用して、一千八百九十年にブランリー氏は一つの硝子管を採つて其中へ種々の金屬粉を入れました、其上で兩端から金屬を出して電池に接ぎて置て、さて其硝子管を輕く振りて見ると、電氣が殆んど通じなくなりました、それは金屬粉の抵抗が多いからでありました、所が一旦その近邊に於て、電作用が直に其物に感じて、電氣を通ずるやうになりました。

この作用が更に研究された結果、これは多分金屬の粉が凝つて電流を通ずるやうになるものであらうと云ふことゝなりまして、結合するもの即ち『コヒラー』と命名されたのであります、彼の受信局にある所の『コヒラー』でありまして、發電所よりの電波をうけ、觸角より電流の來るに遇はゞ、直に受信局の電池へ流電せしむるのであります。

觸角

觸角はマルコニ氏の發明でありまして、發信の用も出來れば、又受信の用も出來るのであります、其理由は諸説未だ一定せないそうですが、先づ譬へて云へば觸角は風琴管のやうなものでありませう、同じ長さの風琴管で一方が鳴ると、又他の一方も鳴ります、それと同じやうに觸角の一端を地面へつなぐと上の一端なる電氣振動は最もはげしくなつて、下の端は全くその振動がありません、これと同樣に遠力の觸角は電氣波の作用で振動するのであります、さて觸角の高さは受信、發信共に同等でなければ、相方共に完全なる通信を交換することが出來ないと云ふことがあります。これで大體の原理は説明した積りであります、さて此の説明の要旨は、過日教育會の講話會で、無線電信にかゝる理論の一般を説きその實驗を示された在大學化學專攻家歸山信順氏の講述によつたのであります、併しながら理化學に渉る談は、圖解又は實驗を以てするのでなければ、中々會得の參ることは六ケ敷いものであります、先づこの記事で幾分の概念、否な大態のさまが知れましたら滿足に存じます。

十六世紀の頃初めて電氣の發見と命名があつて、その後フランクリン氏に依て雷電は全く空氣の電氣なることが慥められ、それから電氣の研究が進み〱て電信、電話、電力の發明應用となり、遂に無線電信の發見となつたのであります。

（完）

理科小話

梅の舎主人

獨逸の山中に地獄谷と云ふ名高い所がある。若しや狐なり狸なり兎なり、偖は鹿でも熊でも此谷へ入ることがあれば、脆くもコロリと倒れて死て仕舞ふ。アラ怪しや訝しやと四邊をにらんでも、赤鬼や青鬼の住み家でもない。ソレカと云てマチンやステレキなどの毒藥が吹き出るにもあらず。唯々其所にも彼所にも野獸の白骨が堆高いほど散らばつて居る。一目でゾツトする修羅の巷、ソレデ誰れ言ふとなく地獄谷と稱へたのであらふ。

或時物好きの若者三四人で、此地獄谷を探險に出掛けた。何れも凛々しい出立、熊でも一摑みに捩り潰ぶすばかりの意氣込、ズツト谷の頭まで驅け登り、イザ進み下らふといふ刹那、

甲「一同で行くのも善いが、もし萬一のことが生じた塲合に、後詰が、無いのは作戰の當を得たものであるまい。先づ僕が居殘るとしやうから、君等は先發隊として出掛け賜へ。」

乙「然り、君一人では後詰が無人過ぎる。僕も共に控えて居て、イザと云ふ時に進軍致さう。」

丙「然り〱大に然りだ。マア試めしに偵察隊として誰ぞ一騎で乘り出し賜へ。我輩の如きは大に今後の作戰に必要であらう。丁君は平素偵察家として中々の敏腕者だ。案じ賜ふな吾々が控えて居る。須らく偵察の名譽を君に一任致さう。」

丁「誰がソンナことを言つた。偵察の如きは僕最も不得手である。一齊射撃でヤツツケルなら兎も角左なくば、僕は斷然是れより退却いたす。」

甲「君マアさう怒り賜ふな。切角の探險ぢや無いか。目的を果たさぬでは、世間の物笑だ。デハ、無私公平リヤンケンで極めるとしやう。」

「諸君別に異議はあるまい。」

と。拇戰の結果は益々丙の出陣と決した。丙はジブシブ身を起し、犬を先立てゝ進發した。殘りの若者

等片唾を呑んで様子いかにと打ち眺めて居つたが、不思議に谷底の中途で犬がコロリと斃れて仕舞た。一同アッと思ふ間に、當の御大將も兩手を差上げキッとばかりにヒックリかへる。アレッとはね起る。拍子に前へツンのめる。又ドッサリと臀餅をつく。右へコロリ左へコロリ。それは〳〵きつい狼狽方。ヤットのことに起き直り一目散に逃げ歸た。一同腰を拔かし眞青になつて、サン〳〵大敗北であつた。ヤットのことで、

丙「ドウも酷い目に逢つた。」

一同「君、何か出たか。ドンナ様子じやつた。話し賜へ〳〵」

丙「イヤ、何も居らぬ。唯々狐や狸の骨らしいものばかりだ。」

一同「ソレジヤに犬めがドウして參つたか。何だか君もコロ〳〵投り飛ばされたじやないか。キット目に見えぬ曲者が出たろふ。」

丙「イヤ〳〵、僕が轉んだのは犬めがコロリ參つたのでウント氣を突いたからじや。決して〳〵何も居はしない。」

一同「不思議〳〵愈々分らん。分らんとて分らんに濟ませない。君が歸ることの出來る位じや。イザ全軍で進發しやう」

と。一同こゝに元氣づいて更に再び實地踏査を仕濟ました所が、成程白骨の累々たるのみで、別に何等の異狀も認めず、唯々一つの不思議な事柄として彼等の土產話になり終つた。然るに其噂が追々廣がつて遂に理學者の耳にまで聞ゆることになつた。倩理學者は此問題を如何に解譯したであらふか。

地獄谷の犬殺は目に見えぬ曲者なり

上州の北、遙か仰ぎ眺むれば、名にし負ふ淺間山の烟、大空高く上るのを見るであらふ。振りかへれば坤の方、山又山の彼方に雪の肌淸らげに表はして、白扇を倒にしたる如きものは富士山である。淺間山

の火山なるは一目に分れども、富士山の火山であることは目に見ることが出來ぬ。されど地文學者は二つながら之を火山と呼んで居る。火山の淺間山のやうに烟を噴き居るものを活火山といひ、其昔火を吐きたれど現在は消え失せ居る富士山の如きものを死火山といふのである。富士山が死火山でありしや否やは、頂上又は山背などに火孔の痕跡の有無を調べると明瞭になる。申す迄もない。富士山の頂には、所謂金明水や銀明水を湛へる湖、即舊火孔の水溜した所がある。其外山背などに、幾つも火孔の痕が殘て居る。此死火山の舊孔には炭酸瓦斯を噴出することがあつて、ソレガ低い凹處即ち火口たる空堀に渟溜することが無いにも限らない。ソコデ此炭酸瓦斯はドウして、コンナ所へ出かけるかといふに、假令死火山で火や煙は吐かぬけれども、山の心底には火脈が通つて居るから、昔のゆかりを止めて、僅に炭酸瓦斯だけを漏らすのである。燃ゆる火の元素には様々あるが、炭素が燃ゆるのは酸素と化合するからで、此二つのものが化合すると茲に炭酸瓦斯が生ずるのだ。

彼地獄谷の犬殺の曲者は即ち此炭酸瓦斯で、地獄谷は所謂死火山の舊火孔に外ならぬ。言葉を換へて云へば地獄谷と名ける舊い火孔の凹處に炭酸瓦斯が噴出し渟溜して爲めに犬や狐などが中毒して斃れたのだ。しかし人間はどうして中毒しないのか。犬も動物なれば人間も動物であるのに。彼は死んで是は助かるのであるか。偖其解釋を茲に陳べて見よう。

炭酸瓦斯とは如何なるものか

芝居寄席、さては多人數集合の席で、人に酔ふといふことがある。其酔ふた工合は、暈がする。グラ〳〵する。頭痛がする。吐きさうになる。ソレカラ甚いと死んで仕舞ふ。之も矢張り炭酸に中毒したのであるが、此炭酸は是等數多の人々が呼き出したものでソレが席上に渟溜して人を酔はせるのだ。ト申して人間のお腹に地獄谷はない筈、勿論有ては大變だら

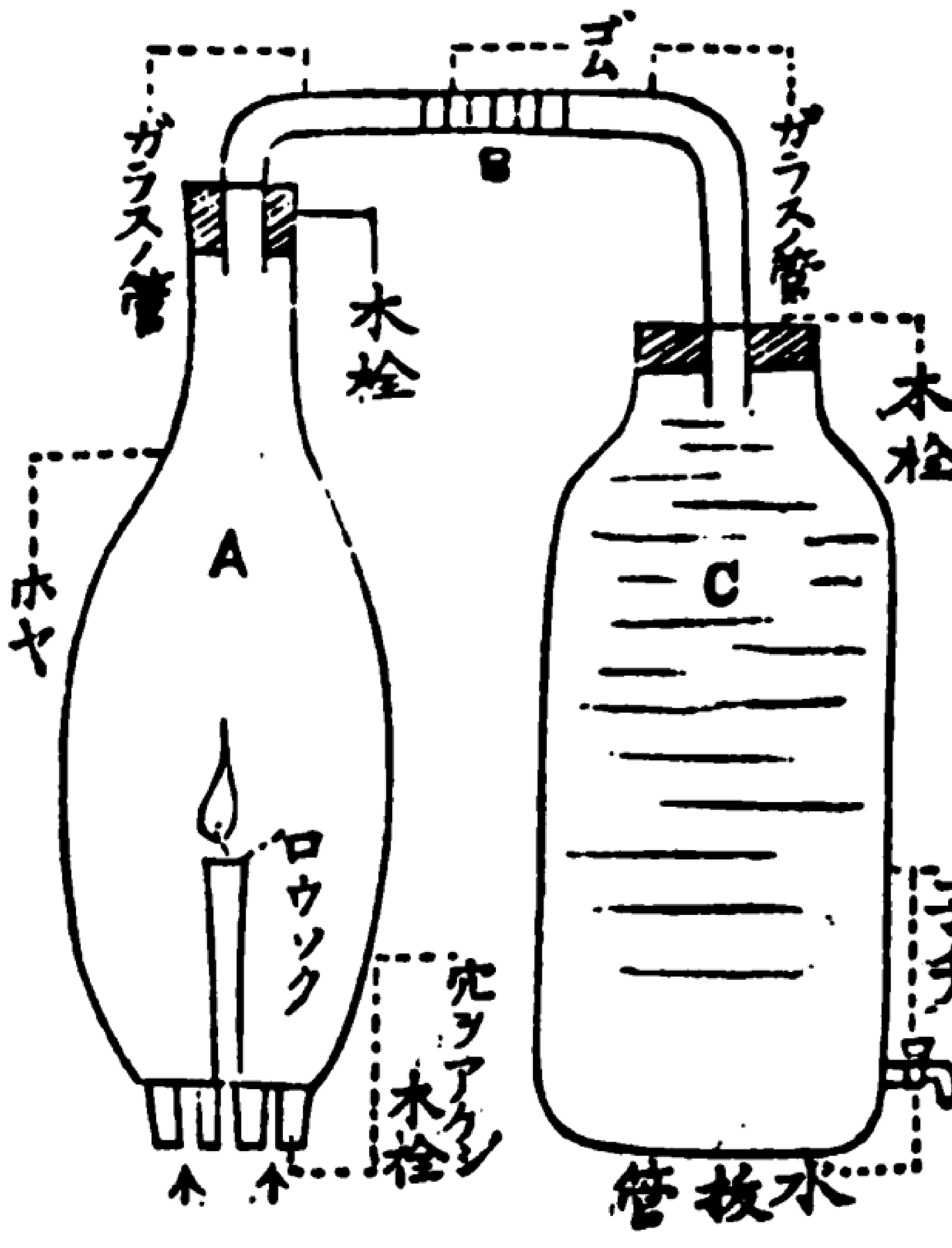
らが、火となつて燃えるものは慥にあるのだ。否體中行き渡らぬ所は無い。トモすれば人間の體から噴火せぬとも限らんと思ふ。言ひ傳へにも入道清盛は火の病で黒焦に爲たといふでは無いか。

偖此燃えるものは、吾々の體を組織する血液なのである。血液の重もなる成分は炭素であつて、吾々が絶えず吸込んで居る酸素と、肺臓で一所になり、茲に炭酸瓦斯を拵えて呼き出す。所が此瓦斯の目方は空氣より數倍の重みがあるから、底の方に積つて風通が惡るいと中々吹き拂ふことが出來ない。否でも應でも、つひ吸ひ込まなければならぬ。ソレデ據なく中毒にかゝるのである。

炭酸瓦斯の毒

炭酸瓦斯が動物に對して、何程毒のあるものかを試めさうと思ふには、先づ炭酸瓦斯を澤山捕へなくてはならぬ。ソレには試に手輕な仕方がある。

第一圖



装置

多くの穴を有する木栓を取り、其上に蠟燭を立て之をAのホヤの下端に箝める。

Aのホヤの上端をBなる玻璃管でCなる瓶の上部につなぐ。

Cなる瓶は下端の一方に水拔管のあるものを用ひ、之に水を滿たし置く。

實見

今蠟燭に火を點け、ランプのホヤの中に入れ、同時にCなる瓶の水拔管の口を開けば水が流れ出る。ソレゆゑ空氣はホヤの下端から矢で示すやうに侵入して蠟燭の燃燒が保續する。此燃える際に蠟燭なる炭素が、空氣中の酸素と化合して所謂炭酸瓦斯を生ずるのである。

偖この炭酸瓦斯はBの管を通つて、ドシ〳〵Cなる瓶の中に入り込む。所で瓶中の水が外へ流れ出すので、炭酸瓦斯が之と入り替てついCなる瓶に滿される。其滿つるを待て水拔栓のチヂを閉ぢ、B管をはづして之に活きた鼠を投げ込めば、鼠は悶へ苦んで斃れて仕舞ふ。勿論鼠に限らず、蛙なり雀なり金魚なり、其他如何なる動物でも此瓦斯中に生活し得るものはない。かやうな恐ろしい毒物でも、吾々の耳目では其生體を見屆けることが叶はぬから、トモすると飛だ危險を招くことがあるのである。

ソハ兎も角もとして、これで先づ炭酸瓦斯の性質と動物に對して非常に有毒なること、又空氣と比べて大層重いと云ふことが分つた。ソコデ、彼の地獄谷の犬のみ斃れて人間が助かつたと云ふ說明が、スラスラ出來る順序に運んで來る。

地獄谷の底で犬の斃れた原因は、此炭酸瓦斯の中毒なることは已に述べた通りであるが、人のみが助つたのは矢張炭酸瓦斯の性質の一てあつて、空氣より重いといふ事柄に過ぎない。即ち炭酸は底の方に沈んで積つて居れども、人間は犬や狐などより、ズットト身長けが高いので、其中を歩くも、頭は高く炭酸の氣外に在りて之を呼吸することなく、丸で普通の空氣中に在ると變らぬ狀態なのである。然るに狐や犬は其頭を炭酸中に陷沒して、之を呼吸しなくてはならぬから、たまつたものでない。彼獸類の白骨の累々たるは當然免れぬ次第である。

かやうに說明して見ると、ハヽア成程ソンナことかと丸呑に思ふであらうが、彼の若者等が探險の當時では、流石獨逸の學者にも分らなかつた。ヤウ〳〵近世に及んで理學の力に據り、多年の疑問が始めて氷解したのである。

さて思ひ返へせば、此炭酸瓦斯と云ふものは、如何に有毒で有るか、略了解したことゝ思ふ。去れば炭酸瓦斯は、全く世の中に於て無用のものゝやうに見えるが、更に一歩を進めて研究する時は、極めて大切のもので、一時も缺くことの出來ぬものである。

炭酸瓦斯は如何なる功用あるか

暑さ忘れの樂みの一つとして、ソコヽに金魚を養ひ居るを見るだらう。彼等は水面に口を開いてパクパクとして居るが、コンナ所作ごとを爲るのは何か必要があるのであるか。或は丸で偶然無意味の戯れなのであらふか。ボンヤリ考ゆると何等の價も認めぬのであるが、是れには中々深い意味がある。即ち彼等は水の外に空氣を呼吸して生活し得るものであるから、永く水中に沈んで居れば水中に溶解せる酸素(空氣の成分)を吸ひ取るより、遂に其缺乏を來たすので勢ひ之を空氣中から貪らなくてはならぬ。ソレゆゑ彼等は折々口を出して命の失せない工夫をする。かやうの場合には即ち水中に溶解せる酸素の乏しい徵であるから、新たに水を代へてやることを怠ると、ヨシ金魚が斃るゝに至らずとも甚だ衰弱して、サッパリ元氣を失つてシホ〳〵と陰欝こんで仕舞ふ。之も矢張金魚が水中に炭酸瓦斯を吐出し、其毒に中つて眩暈がしたり、頭痛がしてグラ〳〵と弱り込むのに外ならぬ。處がもし新鮮な藻草を取りて、其水中に入れる時は、次第に勢づいて遂にはピン〳〵と跳ねだすのである。

ソコデ此藻草と金魚とは、ドンナ關係を持て居るものかといふに、金魚が吐出すところの炭酸は、藻草が之を吸收するのみならず、其上酸素を吐き出して之を金魚に供給する。言葉を代へて申せば金魚の吐いた者は藻草之を吸ひ、藻草の吐いた者は、金魚之を吸ひて互に相資けて生活を保つのである。シテ見ると金魚は炭酸瓦斯の製造者で、藻草は酸素の製造者であつて、しかも其製造物は兩者各ソレ自身には無用の廢物なれど、相互に交換すれば、大なる利用となるのだ。此邊こそ造化の配劑がうまい味を見せるところである。此事柄は唯々金魚と藻とに於て行はれるばかりでない。天地の間に在る人獸鳥魚が吐出すものは草木之を吸收し、草木の吐出すものは人獸鳥魚之を吸收し、動植の物は互に相資けて生々繁

殖するので、恰かも彼金魚と藻とが互に密切な關係を有して、生々するに異らぬ。動物が日々に吐出すところの炭酸瓦斯は如何ばかりなるか計り知れぬけれど、嘗て過積の憂がない。シテ其吸收する酸素の量も亦無限であるが、更に其缺乏を告げぬといふのも、全く此關係の妙用に外ならぬのである。

花壇菊栽培法

睡花仙史

晩節獨秀其高潔は巖柱と類を同うし其幽貞は畹蘭と資を匹ぶべし、崇きは帝室の御苑に艷を競ひ、底きは賤が陋屋に客を俟つ、菊花の栽培こそ信に本邦特得の長技と云ふべけれ、左は云へ輓近歐米に於ても、斯の花の栽培流行を極め、其科學的肥料を應用して、奇輪佳趣を作り出すもの多く、時としては本邦を凌駕せんとするの概ありと聞く、されば本邦斯道の好菊家も、長く特得の夢をむさぼり得ざらんとす、精を拔き粋を蒐めて其進歩を謀らざるべからず、况してや花卉の栽培は心意を高雅にし、情操を優良ならしむるものなれば、女子の好伴侶として此上のものはなかるべし、よりて多年此道に經驗ある老圃某氏の談話により、菊花の栽培法を叙して、參考に供せんとす。

（一）菊の種類

菊花の種類は、千百を以て類別せらるべけれども、先づ大別して、大中小輪の三類と爲すを得べし、大菊と稱するは白、赤、黄及び雜色とにて、凡そ二百餘程あり、中菊と稱するは、白、赤、黄、薄紫、樺色とにて、是亦五百種内外あり、又小菊と稱するは薊、魚子、雜色とにて、二百五六十種もあり、丁字菊が五十種、廣熨斗が百三十餘種、吹詰、一文字が六十餘種、其他古代より栽培せられて、一般に賞翫せらるゝ處の彼の嵯峨菊、伊勢菊と稱する白、赤、樺、黄色等にて、四百餘種あり、猶ほ一旦本邦より輸出したるものが、歐米槖駝師の手にて變化せられ、

而して復た本邦に逆戻りしたるものが、五十餘種もあるべし、此外食用菊、野生菊等ありて、悉く枚擧に遑あらず。

（二）準　備

植物の繁殖力は、寒熱の自然的氣候に至大の關係を有すれども、進歩せる科學的培養法に依れば、この自然の勢力を奪うて、寒熱いづれの地にても、優に生育せしむるを得べし、ゆゑに好菊家は、先づ培養上特別の注意を拂はれて可なり。

土拵　菊は元來肥料分の吸收力多大なるものなれば豫め肥料に富める土拵へを爲し置かざるべからず、其方法は粘土に砂を三分許り混ぜ合せ、排水のよく出來る樣に裝置し、寒中に人糞を注入し、又雨雪等の浸入せざる爲めに覆をなし、斯く注意周到何時にても菊苗を植うるに差支へなからしむべし。

苗床　土拵への次には、菊苗を植うる場處即ち苗床の用意に取かゝらざるべからず、凡て花卉類の苗床は、陽當りの宜しき地に、北方に閉圍すと云ふが通例にて、菊の苗床も亦矢張り其通りに、最も日當りよく、又暖き場所を選みて、叮嚀に耕鋤し、北方を塞ぎて寒風を防ぐべし、而して畦の形は、幅は二尺位になし、東西は適宜に延長すべし。

（三）手　入

菊苗の三寸以上ともならば、爰に始めて他日の目的に對する手入れを爲すこと肝要なり、即ち盆差又は篠作り等になさんとするものならば、先づ稚苗の頂端を切裁べし、さすれば葉に副へて脇芽の發生を見るべし、此芽中の最强壯なるもの三芽だけを殘存し、他は悉く摘み去るべし、又若し箒作りになさんとせば、五寸位に生長せるとき、頂端を摘み去り、脇芽の三芽のみを殘存すべし、又一本作りになさんとせば、すべての芽を存留し、一切生長に任せて保育すべし、斯くて八十八夜に至り、最初きめをきたる各種作り方の目的に應じて、花壇又は鉢等に移植するものとす。

次に移植後の手入れを述べんに、さて新芽生長して

四枚の葉を着けたるとき、其頂端を摘み去るべし、さすれば葉毎に軟芽發生し伸長すべし、此脇芽をも又上述の如くに摘み去り、枝又枝を生じ、枝々叢發、遂に自己の欲する枝數を得るまで、かく摘み去り摘み取るべし、一株に五六幹を叢生せしむる篠作りは、此方法に依るなり、尤も土用前までを、分枝界限と爲し、土用後に生育したるものは、到底好き花を着くるに及ばざるなり、ゆゑに土用後の脇芽は發生するに隨ひ、悉く摘み去るべし、又九月頃も頂端に生ずる柳葉と稱する細き葉を摘み去りて、脇芽の生育に便ならしめ、而して最端にある花蕾の將に綻びんとするに先だち、篠作り又は缾差框等に結ひ立つるものとす。

（四）肥料

苗床に植ゑ置きし稚苗は、彼岸頃となれば、追々に生長し始む、此際施肥として、稀薄なる人糞を灌ぐべし、又適宜の時期を見謀らひ、開花前に約三回程人糞に水を混じて灌ぐべし、肥料は概して油糟人糞等を宜しとす、往々魚肥を用うる者あれども、葉に黒銹を生ずる恐れあるを以て、用ゐざるを可とす、又過燐酸石灰は、花をして偉大ならしむるの効あれども、風致を損する恐れあり、適度に斟酌せざるべからず。

（五）繁殖

菊花の繁殖として通例行はるゝものは、分秧、實生、接穗、挿芽等なり。

分秧 は往々古株より虫害を受くることあり、夫れさへ注意すれば、甚だ簡便なることあり、其法は冬至頃に古株より發芽するを俟ち、根際より根分けして苗床に植ゑ、八十八夜に至りて、花壇又は鉢等に移植す。

實生 晩秋花の凋みたる後ち、種子を採收し、翌年彼岸後に苗床に蒔き、發芽したるものをば、八十八夜に至りて、花壇又は鉢等に移植す。

接穗 紅、黄、白、紫種々なる花を一株に蒐めて、咲かしめんとする方法にして、よく活着生育すれば、

一莖中各種の艶麗を競はしむるを得べし、其接ぎ方は一莖中より、數多分枝せる其軟芽をば、梅雨季節に至りて、一寸五分乃至二寸位を殘して切斷し、其切斷面を小刀にて眞直に縱に割り、さて自己の接がんとする菊芽を藥研形にそぎて、其割り目に挿し、能く括りし後ち、周邊に水苔を付け置き、約一週間日陰に放置すれば活着するなり。

挿芽　梅雨季に際し、新芽を一寸程に切り、又は莖に三葉を付けて四寸位に切り、砂中に挿入して、根の發生するを俟ちて、他に移植するなり。

（五）　花壇

花壇を作るには、陽光直射の方面に注意せざる可らず、即ち東向き及び南向き等を最も適當とし、西及北向きは宜しからず、萬一止むを得ず、西北面と爲さんとするときは、發蕾期に際して、午後二時までは、光線を充分に直射せしめ、其後は日光を避くる様に裝置すべし、凡て花卉類は晩景の光線を忌むものなり、さて花壇としては、高さ凡そ三寸位に土を盛り上げ、幅九尺とし、長さは適宜になし、而して此地を充分に耕鋤し、後ち菊を植うべき穴を穿つなり、穴の穿り方は、碁の目に三列に穿ち、其列と列との間をば三尺とし、花壇の縁と菊列との間は、前列後列共に一尺五寸の距離を保たしむべし。又菊列中にて、穴と穴との距離は、鬢差作りならば二尺六寸とし、篠作りならば三尺一二寸とするを適當とす、又其穴も前列よりは後列の方を大になす、即ち前列は徑り一尺三寸、深さ八寸位にして、此穴中に砂質壤土を入れ、支柱を立つるなり、而して此一穴中三株づゝを植うるものとす、以上の設備成り菊を移植するに當りては、生長充分なるものを後列となし、稍や低きものを前列となすべし。

花壇菊の作り方　としては篠作り、鬢差作り、箒作り、大作り、文人作り、一本作り等種々あり、左に簡易に解說すべし。

篠作り　中菊或は絲菊の二三株を一處に集め、幹を叢立せしむる作り方にして、其方法は移植法の手入

れの處に詳述せり。

鬢差作り　是は主に中菊を用ひ開花前に輪を懸けること、宛も婦人の鬢を張りたるが如きを以て此名あり、之には圓鬢差、角鬢差の二様あり、是亦移植後の手入れの處に述べたり。

箒作り　中菊或は絲菊の一株に、五六乃至七八の幹を出さしめ、而して其眞中の一幹に、竹を添へる作り方にして、八十八夜前後に至り、脇芽の生長して二葉を生じたるとき、其頂端を切り、更に脇芽を分岐せしむるにあり、其分岐せしむる時季は、花壇の後列に植ゑて、六尺以上に莖を伸長せしめんと欲するものならば、土用前十日迄に其頂端を摘み去り、又中列として四尺五寸位に生長せしめんと欲するものならば、土用入を期として頂端をつみとり、而して前列のものは、三尺位に伸長せしむるものなるゆゑに、土用入十日後に摘みとるべし、總じて一株に六芽を殘して生長せしめ、其生長するに隨ひ、各枝に支柱を與へて培養するなり、花蕾の破綻せんとする際に及んで、適當なる花壇に移植し中央なる一株のみに支柱を立て、其他は撤去すると同時に、棕梠の毛を以て適當の距離を取り、支柱に結び付けるなり、此作り方は最も趣味深き代りに、精細なる注意を要するものと知らるべし。

一本作り　多く大菊を以て作り、八十八夜に至れば、鉢又は笊等に植ゑ、支柱を立て丶常に脇芽を摘みとり、秋季に至るまで一莖に培養し、花蕾の綻び初むるころ、花壇に整然列を正して、移植するものなり、總じて菊は葉を大切にするものにて、土際より頂天まで青蒼として變色なきを最良とするなれども、特に一本作りは、葉に注意せざるべからず。

文人作り　一名盆栽作りと稱し、野菊等をば其自然の生育にまかせて、鉢植となすものにして、これ亦八十八夜に、苗床より鉢に移植し、梅雨前に其頂端を止め、適宜の枝數を出さしめて、專ら雅致ある形狀に配置し、所謂生花流の天地人を應用するものなり、而して土用後に、一應分枝の頂端を摘み去り、

並に形状の手入れをなすべし。

大作り　一莖に千以上の花を咲かしめんとする作り方にして、本邦特得の長技なりとす、其方法は强健、豐肥、成育、最良の稚苗を根分けするものなるが、十一月頃ろ、菊花の未だ凋落せざるに先つて分秧し、溫室の設けあるならば、溫室内にて、冬期中培養すれば、此上もなきことなれども、溫室なければ、充分に防寒せる苗床に移植し、而して時々肥料を與ふべし、苗の八寸位に生長したる頃ろ、始めて其頂端を摘み去り、脇芽は六乃至八だけを殘して、其他の芽は悉く除去し、此脇芽亦生長して五葉を生じたるとき、復た一々其頂端を摘み去りて、この第二の分枝より發生する脇芽は、三個だけを生長せしむべし、これにて八十八花に及んで、花壇に移植するものとす、而して移植後は矢張り、上述の如く、分枝生長して五葉となりたるときは、各枝の頂端を摘み去りて、各枝より更らに三芽を生長せしめ、かくすること六七回に及べば、實に非常多數の分枝を生ぜしめ毎枝一輪の美花を生じ、遂に千何百と云ふ花を見るに至る、例へば最初の八芽に三芽を乗じて、二十四芽を得、此得數に又三を乗じて、七十二芽を得、又三を乗じて二百十六を得と云ふ割合となり、毎度三を乗ずれば、菊苗成長滿期までには、千九百四十四個の分枝を生じ得て、同數の花を着けしめ、壯觀偉麗を極むべき道理なれども、



實際は然らず、第五六回以後となれば、往々二個の分枝のみ生ぜざるにより、千二三百個の分枝を得て滿足するものとす、此の大作りに船底形、小判形等あり。

（六）害蟲及驅除

菊は實に害蟲の多きものなるが、其主なるものを擧ぐれば、蝗、青蟲、蚜蟲、菊虎、尺蠖、蠐蟀、小豆蟲、蛆蟲等なり、又近頃ろ發見されたる「スクリプ」と稱する程細微なる害蟲あり、害蟲中の最も損害を與ふるものなり。

右害蟲の形狀及び驅除法は左の如し、

菊虎　恰も螢に類し黑くして細長き蟲なり、五六月の交より軟芽を嚙み切る害蟲にして、日中は飛翔し居るがゆゑに、早朝露を帶び居る中に除去すべし。

蚜蟲　黑、赤、青色の三種ありて、常に芽端及び葉面等に寄生する小蟲なり、芽端なるは莨の粉を振りかけ、葉面なるは晴天のとき、箒にて掃ひ落すべし。

小豆蟲　は赤色なり、晝間は土を堀りて菊の根元五分許りの處に潜み、夜間出て芽を喰ふ害蟲なり、之を驅除するには、菊の根を堀りて採り殺すべし。

蠐蟀　は金龜蟲の子にして年二回發生し、苗の軟節又は根元より嚙み切る小蟲なり、能く注意して拾ひ採るの外なし。

蛆蟲　は螟蟲の子にして、非常に燈火を好むものなるがゆゑに、夜間紙燭にて呼び寄せ燒殺すべし。

「スリップ」は菊以外の花卉類には寄生する害蟲にして、極めて微細にて肉眼にては見出し得ざる程の小蟲なり、故に近頃ろまで發見せられず、昆蟲學上より漏れ居れり、此蟲は菊の芽の眞液を吸ひ、遂に枯死せしめ、又は不具に至らしむる害蟲中の最も恐るべき害蟲なり、之を驅除するには、矢張り莨の粉を振りかけるを簡便とす、又近來燕滊驅蟲法を行ふものあり、此法は菊花をば袋に包み、驅蟲劑にて燻蒸するものにして、最も有効なり。

其他の驅蟲法も大抵之に類すれば畧す。

女子と水泳

女子の水泳は、體育上益するところが多いと云ことで、近來頻りに流行して居るが、水泳には隨分注意を要することが少なくない、若し注意を怠つて、たゞ水泳をさへすればよろしい、と思ふ人があつたなら、却つて恐るべき害を惹起すことがある、そこで多年水泳上の經驗を有して居る某教授が、女子の水泳に就て、警告したる要領を摘んで、左に掲げるのは、時節柄必要と思ふからである。

▲疲れたる時は決して泳ぐべからず　大抵海岸に於ては、日中よりは、夕方になつてから、水泳するのが習はしてあるが、夕方は散歩もするし、運動もするから、相應に疲勞することが多い、疲勞してから後は、決して水泳をしてはならぬ。

▲食後二時間内に水泳すべからず　此の規則は水泳をする者に取つて、尤も嚴重に守らねばならぬのである、左もないと、水泳より生ずる利益は全然消滅してしまう。

▲疲勞又は寒けを覺へたる時　は一分間も猶豫せずに、水中より出でねばならぬ。

▲平常泳ぎたる區域外　には行かぬがよろしい、若し強て遠く泳ぎ出でゝ、過度に疲勞することがあると、生命に關する程の危險はなくとも、他の多くの危險に會ふ場合が少なくない。

▲伴侶と離るべからず　水煉に熟達してからならば兎も角、左もなければ、伴侶を離れて泳がぬが、安全である。

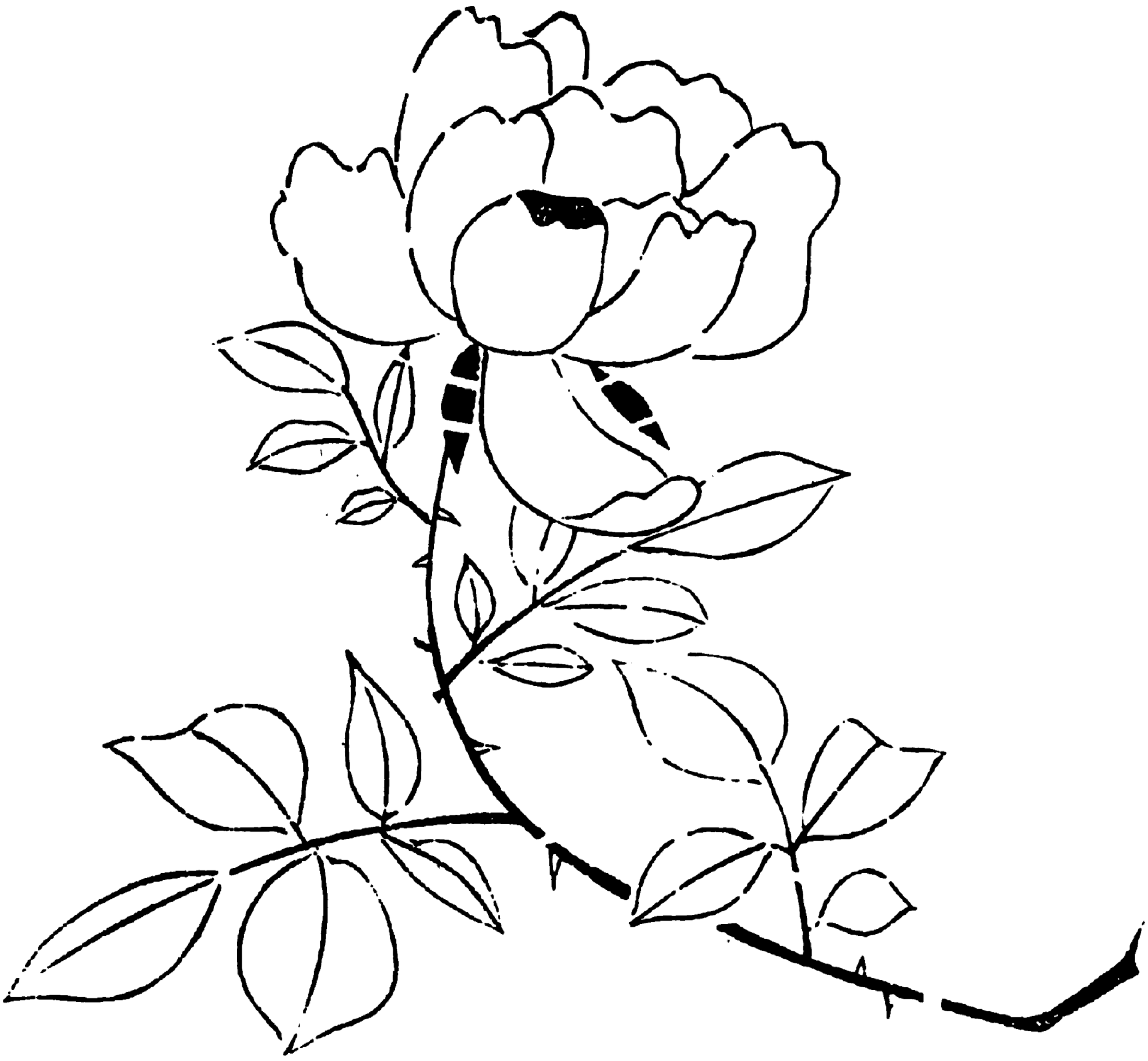
▲こむら返り　のやうなことがあつても、輕々しく驚いたり氣を喪ふたりしてはならぬ、靜かに水を出で、一分間も摩擦すれば、直に癒ゆるものである。

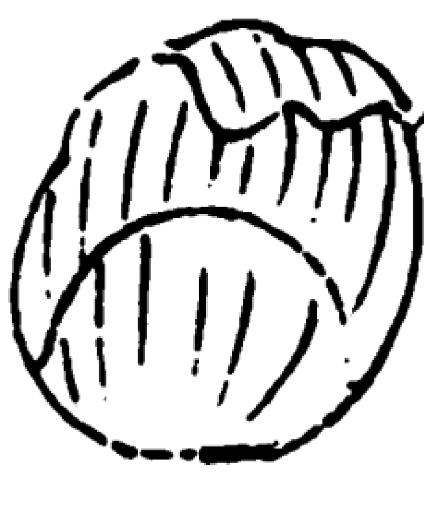
▲人を救ふ時　若し溺れた者があつた時には、騒がず、狼狽へずして、後より確と二の腕の上より抱きかゝへねばならぬ、決して前に廻はるものではないことを、平素留意して置くがよろしい。

ばらの花縫ひ方（刺繍）

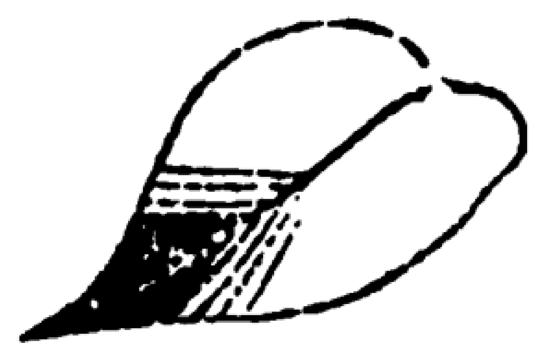
村上百世子

ばらの花は、矢張り平糸縫ひ撚糸縫ひに致します、是はすこし手の込みました縫ひ方に成つて居ります使ひます糸は、白時草色二種（濃淡）及び茶等のかま糸で御座います、先づ大なる葉から縫ひ始めます、濃き草色及び茶を使ひます、茶は葉先きに入れます、其入れ方は（イ）圖に有る如く、葉先きを茶にて割り縫ひにいたしまして、三分の一程縫ひましたらば、一針ぬきに二三度縫ひましてとめます、次に濃き草色にて、一針ぬきにいたしました所を縫ひます、後は其草色で縫ひつめます、次に後の葉は大なるを濃き草色を用ひ、小なるは淡きを使ひて、割り縫ひにいたします、葉はあまり針目の短く無き様注意して縫ひます、けれども大きな葉は、糸のうきたがる物で有りますから、草色かま糸一すがにいたしまして（ロ）圖に有る如く、はすに糸を掛けます、次に花を縫ひます、花は小撚りを入れます、美濃紙を一分五厘程に切り撚りまして、極下に有る花瓣からいたします、綴じ糸は矢張り白かま二すが合せで御座います、綴じ目は五厘程にいたします、（ハ）より縫ひ始め、白かま二本にて、其中途まで縫ひます、次に時色かま一本にて、白かまにて縫ひました中程より、針を出し、（と）の瓣の境まで縫ひます、次に（ほ）瓣は（は）を白で縫ひました程に、いたしまして、時色で三段に縫ひます、次に（へ）瓣を縫ひます、白かま前と同じで、時色は四段或は五段に圖に有る如く、なびく様に丸みを附けて、縫ひます、次に（と）是は（ほ）と同じ様に縫ひます、（ち）は前と同じく（り）は（へ）と同じく、時色を三度、又は四度にて縫ひまして、（に）は下の部分は、三度程時色をさします、次に（ぬ）（を）の二瓣を時色三四度用ひまして縫ひます、次に（る）瓣を縫ひます、（る）瓣の先きの方は瓣のかへりたる所で有りますから、（る）の出來上りたる後に小撚りを張り、圖に有る如く、白かまにてはすに縫ひ

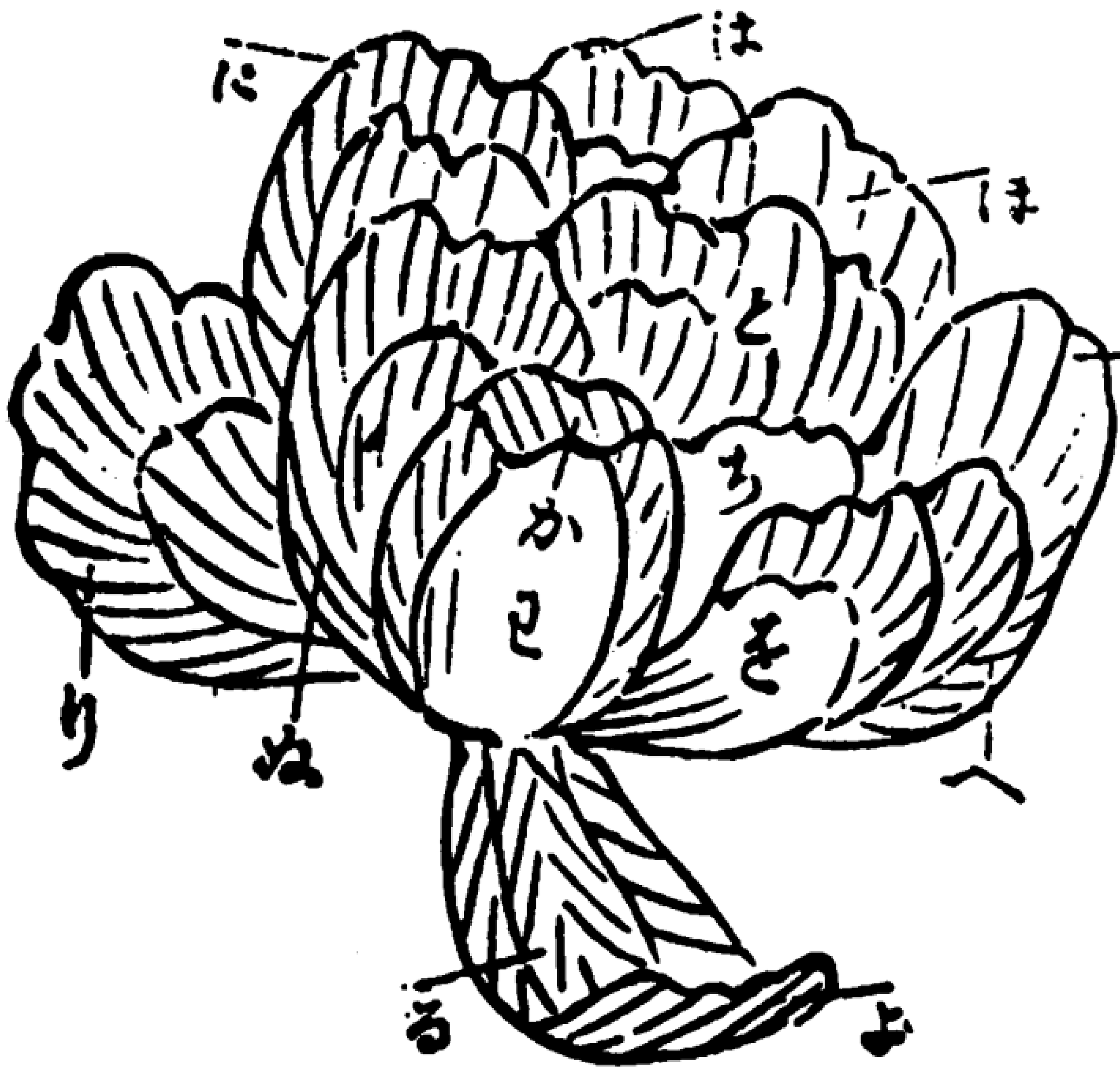




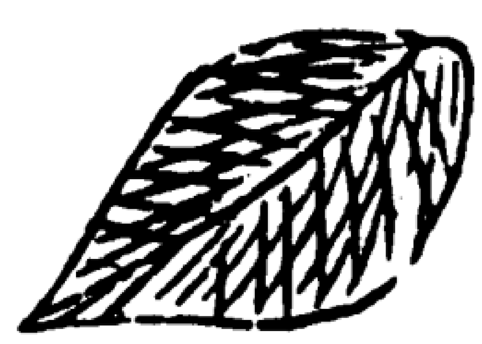
(わ) 瓣ノ出來上リ



(イ)



外ノ線ハ白カマニテ縫ヒシ所



(ロ)

ます、是れに入れます紙撚りは、前の瓣を縫ひましたよりもすこし太くてよいので有ります、次に(わ)瓣を縫ひます、圖に示したる如く、白かまにて縫ひ、後時色を二三段用ひて縫ひます、どの瓣も下方にて、一點に集合する樣に縫ふので有ります、次に(か)は(よ)と同じく縫ふのです、花瓣に長き線の畫き有るは縫ひまわしの爲めに示したるもので有ります、時色で縫ひます時は、二すが又は三すが程次第にすくなくしていたします。

家政學資料

磯部武者五郎

音物

交際の道にして足らずと雖も、品物贈答の禮亦最も重しとする所なり、贈り物、答禮の品などは、人情を全うして、交誼を厚うする手段にして、主婦たるもの、最も心得置くべきものなり。

音物の贈答は、輕薄浮華に亘るが如き品を贈與することあるべからず、敬愛する人に向ひて、其の意を表はすべき樣、至誠の心もて贈り物をなすべし、大概の贈り物は主婦の考案にて、取極て取り扱ふべきも、鄭重高價なる品の贈答は主人と協議し其の指揮を受くべきなり。

贈呈の品は、先づ先方の地位、貧富、時季、嗜好等を竊かに考究して、後に選び求むべし、或は先方の家計を助くべきものか、又は娯樂となるべきものかを考へて定むべきなり、然るに近來は外見のみを飾りて、內部の品質如何を顧みざるなり、これ甚だ賤むべきことなれば、注意して避くべきなり、すべて贈り物は高價のものよりは、念入りの品を遣はすを可とす、殊に老人小兒などのある家へは、其用ふべき品などを贈るは、先方を喜ばしむることなるべし、普通の家にありては、贈り物は新に調へずして、甲より贈られたる品を、又乙に贈ることあるなり、されど人の贈與品は、なるべく自分に使用し、

己れより贈る品は、自ら選びて贈るを、音物の禮に適ひたることゝするなり。

音物贈答の種類、併に其の品物の重なるものを例記すれば、左の如し、

慶賀の贈物（官位昇進、開業、新宅開きの類）

酒、肴、鰹節、雞卵の類（此類は切手にて贈るも、持參するも、又受けたる方にても、共に便利なり）

婚禮

反物、帶側、帶上げ半襟、櫛笄、裝飾品、料紙、硯箱、玉手箱、駒下駄、足袋、（嫁の君へ）

反物、調度（婿の君へ）

眞綿、鰹魚節、鯣、鯛、（嫁婿兩方共に同じ）

同部屋見舞

蒸菓子、羊羹、小倉野折、又は煮しめ重箱入、

出產

出生の子の產着、又は魚鰹節の類、殊に親しき方へは、產婦の食ふべき食物、看護人の食物、

凶事

金圓（神葬には玉串料、又は榊料と書す、佛葬には香火料と書す、）其の他野菜、菓子、香、蠟燭

餞別

旅中重寶すべき品を贈る、

留守見舞

菓子、鮨、魚類、徒然を慰むべき書物

火事、水害の見舞

飯、煮しめ、酒、家具類

病氣見舞

患者の娛樂となる品、患者の食ふべき食品、魚、菓實、菓子、看護人の食物、

春の贈り物

根芹、土筆、蕨、若き筍、若鮎

夏の贈り物

汗とり、汗手拭、蚊遣香、匂袋、扇子

秋の贈り物

栗、柿、松蕈、平たけ、葡萄酒、柿、紅葉、菊

花、海魚、
冬の贈り物
小鳥、もやしの前栽物、
年始の贈り物
菓子、海苔、漬物類、着類、
紙鳶、筆紙（男兒へ）紅おしろい、簪、根かけ、
半襟、油、元結（女兒へ）
三月の節句の贈り物
內裏雛、雛道具、人形類、白酒、菓餅、若鮎、
五月節句の贈り物
飾り兜、幟、鯉、幟、風車、菖蒲刀、兜人形、
人形類、笹ちまき、菰ちまき、柏餅、菖蒲、
歲暮の贈り物
鹽引鮭、鱈魚、串貝、寒鮒、寒ぼら、數の子、
田作、鹽ぶり、牛蒡、人參、砂糖、
暑中見舞の贈り物
素麵、葛粉、團扇、砂糖、氷砂糖、寒晒、らむね、
べるもつと、西洋菓子、越の雪、氷餅、果物、
虫籠、
寒中見舞の贈り物
玉子、寒鮒、このわた、雲丹、鯨、小鳥、昆布、
銘酒、西洋酒、菓子の類、

書信

書翰の相互の意思を通ず、吉凶を訪らひ緩急を報じ、其の他百般の事を通信往復する爲に用ふるものなれば、交際上一日も缺くべからざるものなり、故に書翰の要は、我が意思を充分に述べ、先方を感動せしむることを得る樣に、文辭を練習し、かねて手跡も拙からざる樣心掛くべし。

書翰につき心得べき要點を列記すれば左の如し、

尊長の人に呈する書は、丁寧に字格を崩さず正しく書くべし、

文字は宛字、誤字を書くべからず、

假名遣の誤りなき樣注意すべし、

文字の下りにはくぎりよくかくべし、

候、の、か、を、は、などの文字は、言葉に附隨した

る助辭なれば、別行にすべからず、

墨着は淡く濃きあり、文字に太き細きある樣に爲すべからず、

書翰の紙は通常は半切にてよろし、年賀其公け立ちたる時は、奉書紙を二枚重ねて横に折りたるを用ふべし、

書き出しの處は、右の端を指四本入るゝ程明け、上下は指一本明けて書くべし、

宛名の下には樣とかくべし、目下のものには「どの」とかくべし、

高貴の方へ呈する手紙は、必ず侍史、侍女の宛名にて贈るべし、

宛名の左には御前、又は御許など書き又平信、要用、願用など、一見して何用にてあるかを知る樣に認むべし、

宛名の人に必ず自分披見せられんことを望むときは、親展と書くべし、

裏の封じ目には封、緘、〆など書くべし、

公用の書信には小印を捺すべし、

婚禮の賀狀には猶々、返す〲、重ね〲、去る移る、戻る等の言葉文字を忌むべし、

何れの賀狀にても濃き黒にて書くべし、

悔み狀は淡き墨にて書き、何之誰樣云々と書き始め、他の用事を書き添ふべからず、又猶々、返す返す等の文字を忌む、

すべて賀狀、悔狀ともに、前文を畧するものあり、

病氣見舞の文には、かすり字又四の字を忌むべし、

病人の名は、濃き墨にて書き、其の他は淡き墨にて書くべし、

火事見舞の文にも猶々、返す〲、重ねて又、扨又等の文字を用ふべからず、

高貴の人に呈する文には自分の安否を書くべからず、

以上は書翰につきて、一般の心得べきことなり、次に書翰の上にて用ふる稱呼につき列記すべし、

父母のことを、愚父愚母、子を豚兒自分を妾など

とかくはよろしからず、

自分より父母に對しては御父上樣、御母上樣、伯父、叔母に對しては、伯父樣叔母樣などゝかくべし、

他人の伯叔父母に對しては御伯(叔)父君樣、御伯(叔)母君樣とかくべし、

自分の伯父叔母を他人に對しては伯(叔)父、伯(叔)母といひ、又伯(叔)父誰、伯(叔)母誰とかくべし、

自分の子に對しては、其の許、そなた、御許とかくべし、

他人の子に對しては、御子息樣、御孃樣、とかき、高貴の人には、若君樣、又御姫樣とかくべし、

自分の子を他人に對しては、伜誰、娘誰、又は長男、次男、長女、次女とかくべし、

他人の妻は御奥樣とかき、稍身分卑き人に對しては、御家内樣とかくべし、

自分のことは一般に私とかくべし、

他人の父母に對しては、御父君樣、御母君樣、又は御兩親樣とかくべし、

自分の父母を他人に對しては、父母又は兩親とかくべし、

自分の夫に對しては、旦那樣、おまへ樣、又あなた樣とかくべし、

他人の夫を其の妻に對しては、御良人樣又御主人樣とかくべし、

自分の夫を他人に對しては、正しく其の名を書すべし、

自分の兄姉に對しては、御兄上樣、御姉上樣、又御兄君、御姉君と書くべし、

自分弟妹に對しては、そなた樣、そのもと樣とかくべし、

他人の兄弟姉妹御兄君樣、御姉君樣、御弟君樣、御妹君樣とかき、兄弟姉妹の多き人ならば、御兄誰樣、御姉誰樣と名を書くべし、

自分の兄弟姉妹を他人に對しては、單に兄弟姉妹といひ、又兄誰姉誰とかくべし、

實驗 牛乳日本料理（第四回）

清水鈴子

▲味噌汁（ふたゝび）

第一回にてミルク汁と稱け味噌汁の事をしたゝめて置きましたが、其後また試みましたものを次に載せて、諸嬢の御參考にいたそうと存じます。

今牛乳に用ゐます味噌類は普通の田舍味噌でもかまひませねが、その時は成丈麥麴のことですから、後で沈渣が殘りませぬやう、すゐのうにて漉してお用ひなさるがよろしうございます。また常の本汁は三四分の白味噌を用ゐますけれど、牛乳を入るれば別に白味噌を加へる必用はなからうと存じます、又ほだし汁には名古屋味噌などに乳牛を入るゝがよく、御承知でもございませうが、ほだし汁をこしらへます時には、常の味噌を俎の上でよくたゝき湯にてとき、すゐのうにて漉すのでありまする、そして後牛乳を加へます。

それから青豆をよく水にひたして置きましたものを味噌汁にてのべ、布にて漉し再び煮立て、食べますすこし前方に牛乳を入れて用ゐます、やはり此の傳でごま汁に入れ青汁に入れ、こくしやうに入れなどして決してわろくはありませぬ、但しその青汁と云ふは、ほうれん草をゆでゝすり、青豆汁の如くにしたのでありまする。

▲そばがき餅

上等のそば粉を食鹽、牛乳にてたてゝ混和し、握らるゝ程にしましたものを、鍋に立てたる湯へ入れて、煮えたる時おもてへだし、ほどよく切り、藥味を添へて出します、但し食鹽はうすくしてのちにしたぢを出した方がよろしうございます。

▲深雪もち

うる米粉一升ならばもち米粉三合くらゐを合せ、よく牛乳にてねり、蒸籠に布をしきて右の粉を入れ蒸し上がりてから搗くのでありまするが、また搗ずとむし上つた時適宜に切つて食るのもよろしい、食

るのには餡などまづよろしからうと存じます。

▲白玉餅

白玉に似てゐるから恁うなづけたのでありまする

まづもちうるちの粉を四分六分に加へ、それを自然薯をおろして牛乳にて溶きゆるめましたもので捏ね白玉くらゐの大きさにとり煠であげ、冷水にひやしうつはへ盛つたものへ、三盃と牛乳をかけてだすのでありまする。此の傳でまた常の白玉をこしらへてもよろしい、まづ夏のおなぐさみでございます。

▲すり流し

これは豆腐をすり、牛乳と葛粉とを加へ、再びよく摺つて味噌汁へすりながすのでありまする。

▲煮奴

豆腐を一挺丸ながら鍋へ入れ、庖丁にて十文字に切れ目をつけ、牛乳にて充分に烹かへし、烹へたところを大きなうつはに取り、それによく煮ました醤油のすまし砂糖をくはへましたものを右の上にかけ尚それに淺草海苔の細抹にもみくだきましたものをふりかけ、席に出してから箸で混淆しておの／＼小皿へ分ちとりまする、そして其の牛乳はあとで朝お汁にいれてかまひません。

▲いもかけ豆腐

自然薯をおろしにて摺りまして、別に牛乳にて溶きましたる味噌汁を加へ、普通のとろゝ位にのべ（味噌は漉して用ゆること、味噌汁のやうになさねばなりませぬ、）それを火にかけてぐら／＼と煮え上つたとき、前のすり芋を金杓子にてすくひ入れ、ふわりとふくれ上つた頃を見はからつて火より引きます。かうして置きまして又一方にはとうふをうすく切りまして、それをざつと煠で、湯をしぼりましたのを碗のやうなものに盛り、それへ前の芋汁をかけ、又その上へは青海苔もしくは胡椒の粉をかけて膳部にいたします。

▲慈姑の蒲焼

大きな慈姑をすりおろし、それを更に摺鉢にて念を入れてすり、上等のウドン粉に牛乳を加へてほど

よきかたさになりましたところを、淺草海苔四つ切くらゐのうへにのせて、ヘット油または胡麻油にて揚げ、竹串をうちて蒲焼にいたします、これを味淋醤油にして頂戴いたしますのでございます。

▲苺羹

苺の大房のものを取りて、すり鉢にて摺り、すゐのうにて裏ごしにかけまして、かんてんのよく和かに煮ましたものに合せ、三盆砂糖と食鹽にて味をつけ、塗もの丶器具に入れてよせますのでございますこれを冷めたる所で庖丁し、五分位の角に切りまして牛乳をかけて召食るのでございます、まづ夏のもので、いつも〱白玉ばかりでもないと云ふところから試みて見るのでございます、で初めよせます時、砂糖はなる可く尠くして置いて、牛乳の方へ交せた方がよろしうございます。

▲鹿の子よせ

自然薯を生のまゝ、皮を去り、おろしにてすり、牛乳にて少し延べ、それにウドン粉の上等のもの、白砂糖、食鹽加減して入れ、摺鉢にてすりまする、それに大角豆の煮ましたものを落し、蒸籠に入れてむすのでございます、お食りなさいますのは、普通のよせ物になぞらへ、何でもよろしうございます。

▲はゝ子飯

前回にミルク飯の事を申しましたが、今度のはそれを一進歩させたものでありまして、まづ飯のたき上るころを見はからひまして、別に沸して置た牛乳を手早く投じ、火を引かずによく案配し(この案配に最も手際が入りまするから、幾度もやつて見たがよろしうございます、がそれも面倒なれば初めより牛乳を合へて炊くのでありまする)おむれた頃、別に又牛の肉の少し辛めに細かくきざんで煮たものをまじへ、交へながら飯鉢にうつしとるのでございます、今それにするには可成、ごはんの温かい中がよろしく、その時肉の煮汁を少しつゝ加へますので、この御飯のお菜にはキャベッか、キシャナのやうな野菜類がよろしうございます。

▲山かけそば

そばのしたぢへ山の芋をすり込み、牛乳と共に沸して熱くなりたるものへ、そばを投じてたべまする またこれを掛けてもよろしい、調和には山葵、おろし大根、ねぎ杯よろしいです。

▲精進物（數種）

一、百合根を牛乳で甘かげんに煮ます、白砂糖、たれ、醬油でもよろしいが、食鹽はいかゞですか、お試みなすつてごらんなさいまし。

一、大根をおなじくそれにて煮ます、それに葛などをかけてはどうでございませう。

一、筍を煮ます、ゆでこぼした上で。

一、豆を煮ます。以上の三品とも醬油でいたします

一、蕪、牛乳汁の味によろしうございます、總じて菜の類はこの種の汁にいれますと、油こくなつて風味が出ますやうでございます。

▲古錢煮

太き牛房の上皮をむき、一分切りになし、まんなかの穴へ箸にてかんへうを通し、おとさきを結び（凡そ十個くらゐづゝ）牛乳にて煮、その後また味淋醬油にて煮ます、牛乳で煮るまへに一たん水にてよくゆでた方がよろしうございます

四季の臺所（二）

中川雪枝

九月

殘んの暑さを華胥に避けむ代りに、若き人たちの、竿を擔ぎ、最寄の池また川をあさりて、夕餉の膳に得來るものは、多くは鯉、鮒、鰻の類なるが、左に其料理法を記さん。

◎鯉　はなか〳〵料理法の多きものにて、四條流庖丁式などにては、長命の鯉とか、開運の鯉とか云ひて、百種の料理法あり、そは美術として見るべきものにて、實用として味ふべきものにあらず、なほ鯉は生づくりを以て有名なれど、さる殘忍なる事は筆にするも好ましからぬ事なり。

△こくせう　この期は、まだ動もすれば、鱗に一種の虫の棲息することあれば、鱗を取き、腸のまゝ筒切にし、小さき黒き袋の如きものを、傷つけずして取り捨て、赤味噌汁にて煮る、副味は干山椒などよろし。

△あらひ　身のしまりたるを賞翫す、これは鯉を薄くつくり、冷水にてよく洗ふ、附合には水晶てん、岩茸、山葵などを用ふ。

△てつぽうあへ　刺身にしたるを、唐辛味噌あへにしたのを云ふ、薄皮は油にてあぐ。

△鯉味噌　鯉を煮て、其の肉のみを、味噌を酒にて濃く溶きたるものに入れて、よく煮たるものなり、冬はこれを煮こゞりにし、匙にすくひて口にするに味甚だよろし。

◎鮒　も種々の料理法あり、鯉には及ばざるべけれど、それよりは多趣味なり。

△すゞめ焼　佃煮と、もに、江戸名物の一に數へらる、こは鮒を開きて、山椒醤油にて付焼にし、其形雀に似て居る所より、この名を冠せられたるなり。

△てつぽうあへ　味噌煮　この二つは其料理法鯉に同じ。

△定家煮　焼酎と焼鹽にて煮る。小鯛の定家煮もこれと同じ。

△昆布卷　これは愛嬌のある食料にて、拵へ方は、小さき鮒を昆布にて包み、酒にて一夜煮、よきほどに醤油を入る。

◎鰻　といへば蒲焼に限れるやうなるが、猶二三の料理法あれば左に

△膾　皮を剝ぎて三枚におろし、細引にして膾にす。

△煮蒲焼　鰻を開きて付焼にし、雪花菜を炒りて之に付け、よく出たる茶の煮花で煮る。

△山椒焼　これは普通醤油にて蒲焼にするを、山椒味噌にて焼くの相違あり、一種の風味ある食料也。

汁のいろ／＼

この期に於ける汁のお代りを、少しばかり左に記すべし。

△材料の一　はんぺん、椎茸、芋、

はんぺんを拍子木形に切り、椎茸、丸なり、芋は斜に切りて用ゆ、味汁は云ふまでもなし。

△材料の二　海老、薯、玉子

海老をよく洗ひ、皮を剝ぎ、山葵おろしにておろし、おろし薯をまぜ合せてすり、砂糖と玉子をよくまぜ合したる中へ入れ、その團子にしたるもの、汁の實となるなり。

△材料の三　玉子、山葵、葛

味汁二合に玉子十個の割合にて、交せてよく攪廻はし、方圓隨意の器に入れて蒸し、茶碗蒸と半ぺん折衷の固さになりたるを、匙にてすくひ、それを汁椀に入れる、葛あん、山葵と調味すれば、極めて風味よし。

△材料の四　蜆

蜆をよく洗ひ、十分水に浸し、赤味噌汁の、まだ冷きうちに入れて煮る。

△材料の五　鰌

これも暫らく水に入れて泥の臭味をとり、酒に醉はせて味噌汁に入る、藥味はさゝがき牛蒡に油揚豆腐がお定まり。

△材料の六　冬瓜

冬瓜の皮を剝き、四五分角位に切掛をつけて切り、白味噌の汁に入れる、黒胡麻のすりたるを、椀に入れて加味すれば、更に味よろし。

△材料の七　素麵、葱

素麵をゆで、しばらくさらし、味のつきたる汁に入れて煮る、附合は葱、また茄子、油揚などもよし、人によつては唐辛を入れる。

韲もの四種

この期に於けるあへものを、材料の多きものより取りて、其の調理法を

△茄子の唐辛味噌　茄子をゆで、唐辛を加へた

る味噌に入れ、酢をたらし、味淋砂糖で例の如く味をつける。

△南瓜の味噌あへ　南瓜を蒸し、味噌をつけてあへる、其味噌は味淋にてよくとかし、砂糖を加へたるものなり。

△ちさの味噌あへ　、、ちさをざつとゆで、白味噌にてあへる、味噌は南瓜のと同じく、胡麻を加ふれば更に妙なり。

△蒟蒻の和蘭あへ　蒟蒻をむしり、鹽にてよくもみ、水にてあらひ、其水氣を取り、胡麻の油にていいため、黒胡麻の炊立てを擂鉢にてよくすり、味噌をすり合せ、酒と鹽にてのばしたる中へ入れる、第一の附合は岩茸と銀杏、第二は刻み唐辛、すり薑。



煮ものしな〳〵

鳥と魚との煮かたを、二つ三つ左に、

△鷄肉と冬瓜　鷄肉をよくたゝき、味淋醤油にて煮、其の煮汁にて瓜冬を煮、それをあしらふ。

△鰈の葛煮　鰈を三枚におろし、小角に切り、酒、鹽、醤油にて煮、其煮汁にて葛だまりを煮て上よりかけ、青海苔を粉にして副味に用ふ。

△鰈の味噌煮　生姜、とうがらし、山椒以上三種いづれにても味噌に加へ酒と鹽にて煮つめたる味噌にて、前頃の如く鰈を切りて、それをともに煮るべし。

△鱧の煮出し　鱧を骨切にし、よき程に切り、

鹽を少しふりかけ、暫らくして水分を取り、胡麻の油にてあげ、味汁醬油にて用ゆ、あしらひは、大根おろし、葱の小口切、とうがらしなどよろし。

△蛸と芋　蛸は薄く平たく、芋は隨意に切り、汁のなきやう、鰹の味汁にて少し辛目に煮る。

浸し物となます

この期には浸し物にすべきもの、極めて少し。

△あかざ　藜藿の摘み取り、ざつとゆで、暫らく水にしたるを取出し、細かく刻み、山椒醬油にて食す。

△茗荷の子　ざつとゆで、胡麻酢醬油をかけて用う。

△いんげん豆　これはざつと茹でたるを、山椒醬油又は擂胡麻を掛けて箸にす。

なますは

△椎茸とさらし麩　椎茸を細かく切りて茹で、麩を水にひたし、これを一つにして絞り、三杯酢にて風味す。

△鮑と薑　新らしき鮑を鹽にてすり、薑のすりたるを交せ、味淋を加へたる三杯酢に浸す。

△胡瓜　このなますは誰も知れることとなれば、殊更に記さず、少し砂糖を加へ、紫蘇の葉を刻みて撒布すれば、あつさりとしてよし。

△葡萄　砂糖、醬油、これに酢の三品を、よき加減に合せ煮、葡萄の肉をとりて之に入れる。

△酢蛸　蛸の茹でたるを、寸法適宜に切り、酢に砂糖を加へたる中に浸し、これに胡瓜の薄く刻りたるを合せ、線に切りたる生姜を上に置く。

△氷蛸　蛸を薄く切り、鹽にてよくもみ、其上に氷をかきて入れる、これを酢醬油にて食す、あしらひは胡瓜などよし。

炙り物二つ三つ

これも材料の多きものを選びて。

△南瓜の味噌やき　南瓜を茹でて程よく切りて串にさし、白胡麻白味噌白砂糖のすり合せたるをかけて、ほんがりと焼く。

△芋の附焼　芋をよく洗ひ、皮をとり両端を切りて串にさし、一度胡麻の油を塗りて烈火にかけ、山椒醤油また胡椒醤油にて附焼にす。

△はまちの板焼　はまちを三枚におろし、肉を小口より段々に切り重ね、上よりほうろくなどをふせ、其上に火を置きて焼き、柚、山葵などを加味すべし。

△蛤の附焼　大なる蛤の肉を串にさし、裏表よりよく焼き、山椒醤油をつけて焼く。

猶この期に於て、材料の極めて多い、芋茎の料理法を二つ三つ述べん。

◎芋茎　時節柄畠の中に武装したるやうにも見ゆるは芋の茎なり、芋の茎に二種あり、色赤きは味よく、煮物また酢韲にし、色青きものは煮物に用へられぬにはあらねど、多くは汁に用ふるやうなり、赤き方はこの汁に用へても妙。

△酢韲　芋茎の皮をとり、一寸程に切り、太き所はよき程に割り、火にかけたる鍋に入れ、水湯など入れずして、杓子にてかき巡し、茎より水氣出で湯煮したるやうになりたるを、酢を加へて煮ながらまはし黒胡麻の熬りたるを少しふりかける。

△煮物　前の如く皮を去り、よきほどに切りたるを、鳥肉または魚肉のあしらひにて用う、其の煮方は、鳥なればよき程に煮出し、醤油味淋にてざッと煮上し、其跡へ芋茎を入れて煮る、猶一層上品に仕立つるには、芋茎をざッと湯煮し置き、慈姑蓮根なども同じく湯煮し、取交せて盛合す、魚類もまた同じ、煮びたしとて、魚類一尾のまゝ用うる程の時は、前の如く煮出し、醤油味淋にて煮上げ、其跡へ芋茎を入れて煮る、これを皿に盛る時は、魚を向ふにし芋茎は手前に置く、すべて煮びたしの附合に限らず、魚鳥などの野菜と盛合すには、野菜を前の方にするものと心得てよし。

△胡麻煮　皮を去り、一寸程の切方とし、よく湯煮し置き、其中へ胡麻味噌を作りて入れ、鹽梅して暫らく煮て食す、味噌のこしらへ方は、前號に記

せる茄子の胡麻煮に同じ。

柳澤伯爵家の献立

この月に於ける、伯爵柳澤家の献立を記すれば左の如し。但し一日より順を逐ふ。

△朝　○しゞみ汁、こんにやくの煮付添○南瓜の煮付、酢蓮根○根芋溥葛、いんげん○茄子の汁、枝豆煮付○豆腐汁、たゝみいわし○さつま芋汁、茄子の煮付○しゝみ汁、里芋煮付○焼麩汁、いりゆば○千六本汁、枝豆煮付○さつま芋の汁、たゝみいわし○若芽の汁、南瓜の煮付○千六本の汁、いんげん豆煮付○冬瓜の汁、里芋煮付○若芽の汁、五分玉子○さつま芋の汁、あんかけ豆腐○蜆の汁、オムレツト○南瓜の汁、いりゆば○豆腐の汁、蓮煮付○千六本の汁、しらたけ○薩摩芋の汁、酢蓮○蜆の汁いりゆば○豆腐の汁、南瓜煮付○冬瓜の汁、オムレツト○茗荷汁、味付海苔、煮豆○かぶの汁、五分玉子○千六本の汁、薩摩芋の煮付○蜆汁、昆布入煮豆○若芽汁、刻みするめ○油揚の汁、オムレット

△晝　○しらすと海苔の汁、鰌鍋○おとし玉子の汁、鹽焼肴○シチウ、オムレット○鯛ねぎつゆ、肴の酢漬○かき玉子のつゆ、むし肴○玉子と豆腐の汁肴の煮付○かき玉子のつゆ、鮪のさしみ○海老の鬼から焼、鳥と菜つゆ○ちくわと三ッ葉つゆ、てり焼○玉子と豆腐の汁、鰻の蒲焼○あさりの汁、ビフステーキ○肴のつゆ、焼鳥○薩摩芋、つけ焼○ほしがれい煮付、副物なし○はんぺん菜つゆ、赤貝酢づけ○つみいれのつゆ、鹽焼肴○玉子豆腐の汁、そぼろ○玉子豆腐つゆ、そばろ○さらし玉子つゆ、鯖酢むし○おろし大根に干海苔の汁、鰻蒲焼○洋食これは最寄の今福に命ぜらる○すりみと葱煮肴○つみ入と菜つゆ、刺身○肴のつゆ、玉子焼○玉子豆腐の汁、鹽焼肴○八杯豆腐の汁、あらひ○すらし玉子のつゆてり焼○鰻のかば焼、鯛のさし身○鳥と野菜つゆ、栗めし○ちらし玉子つゆ、刺身○湯豆腐肴の酢づけ○つみ入つゆ、焼鳥、

△夕 ○鯛うしほ、たゝき焼鳥○八杯豆腐、ビフステーキ○ちらし玉子つゆ、てり焼○すりみつゆ、親子煮○洋食（日本料理の附合なし）○八杯豆腐の汁柚鍋○しらすと海苔つゆ、いり豆腐、焼鳥○おとし玉子汁、焼肴○ライスカレー、オムレツト○親子めし、八杯くずかけ○海老とみつばの汁、むし肴○洋食（同家仕立）○かき玉子の汁、さし身○海老と菜の汁、かも川焼○おとし玉子つゆ、鮎土佐煮○鯛うしほ、とろゝ、鯵酢づけ○ライスカレー、ビフステーキ○茶碗蒸、海老鬼から焼○洋食（今福仕立）○あさりの汁、さし身○落し玉子のつゆ、鳥と長芋の煮付○八杯豆腐、鮎土佐煮○チキンライス、ロースビーフ○鳥と菜のつゆ、肴の酢づけ○かき玉子のつゆ、蒲焼○豆腐あんかけ、海老のフライ○はんぺんと菜のつゆ、玉子焼○鳥と菜つゆ、煮肴○しらす海苔のつゆ、鰻どんぶり○刺身、寄鍋、

紫色の鉛筆使用禁止の訓令

有色鉛筆に毒を含んでをるかどうかについてはまだ其學説が一定してゐないが、人體上に害を及ぼすといふは確であるので此間文部大臣は左の如き訓令を出して學校生徒の紫色鉛筆使用を禁止せられた。

學生生徒等使用する「コピールピオレツト」「リラピオレツト」「ヨハンコピール」「ハ、ツエク、ルワコピール」等の記號ある紫色鉛筆は其製造原料に有害の色素を包含することある故其砕片又は溶液の眼中に入るときは激烈なる毒作用を呈し遂に不治の眼疾に陥ることあり仍て幼稚園及び小學校等の兒童には之が使用を禁止し其他の學校の學生々徒にありては必用缺く可からざる場合に限り之を使用せしむることを得ると雖も其使用上に周密の注意をなさしむべし、

右は生徒は勿論父兄の常に注意すべきことである。

雑録

武裝したる米國

澁谷馬頭

（一）獨立祭の武裝桑港

◎七月四日は惟れ米國獨立紀念祭の大祝日で、二三日以來、前景氣にポツ〳〵聞えた砲聲の聲（花火の音）は、今朝に至つて一層頻繁となり、早朝五時大抵の人のまだ臥床を離れぬ先から、大小絶間なき爆發の響は、さながら滿洲の野を想像せしめた。

◎午前十時過よりは、軍樂隊を先導として、徒歩隊馬車隊、騎兵隊等の混成大隊は、市の一隅より繰り出して、重なる大通りを通過し、日本領事及び他の各國領事は、此行列に加はる事を市より請求されたれど、一同辭退して加はらなかつたと云ふ事であつた。

◎混成大隊の通過は、如何にも勇壯で、規律が正しくて、祭日の景氣を一段引立たせた、但し兵士の中に、山高中折れ等、帽子が揃はなかつた、縞の脊廣服を着て居た者もあつた、口に卷煙草を食へて居た者もあつた、矢張米國風たるを免れなかつた。

◎盛裝した美人を見ると、惡太郎どもは決してのがさない、一發狙擊、其足もとに花火を爆發させて、美人の驚いて飛び上るのを見て興とする、イヤハヤ何國も同じ惡太郎のわるさ、困つた者だ。

(二) 菓子屋の武装

◎桑港市中菓子屋の先店には、大砲や、砲彈の玩具をならべて居ります、小間物屋が玩具をならべておくのなら當前で御座いますけれども、菓子屋の店先きの玩具は一寸目に當りまして、或時近よつてよく見ましたら、大砲の砲身の中にも、砲彈の中にも、火藥の代りに菓子を詰めて置きますので御座いました、露兵は彈藥を商人に賣り下げて、其代りに砲身に砂石を詰めたと云ふ話もありましたやうです思ひ合されて、面白く感じられます。

(三) 小間物屋の武装

◎桑港マーケット街の小間物屋に、小さな箱に、ジヤパニース、トルピド(日本水雷)と書いた紙を貼り付け、定價五錢と云ふ品物が有ります、其効能書によれば、此品はシモセ式の火藥を以て精製した者であると申します、讀者諸孃は何物と御判じなさいますか。

◎之は燐寸で御座います、米國商人の機敏な事は、先づ此類でございます、併し可笑しいのは、シモセ式の火藥と申す事で御座います、下瀬火藥のやうに爆發力が強くては、誠に危險此上なしで、御座いませぬか。

(四) 酒屋の武装

◎ロスアンゼル市に、或る米人が、此程酒屋を開きまして、其屋號を何と付けましたかと申しますと「トーゴー酒店」。

◎ワシントン洲北部の或る新開の村落は、「トーゴー村」と云ふ名を付けられました。

◎ワシントン府とか、アレキサンドリヤ府とか、ペテルブルグとか云ふ地名も、英雄の名を象どつた者で御座いますのは、御存の通り。

(五) 犬猫の武装

◎近來各地にトーゴーと云ふ犬だの、ウリウと云ふ猫だの、馬だの、續々出てまゐりました、一寸聞くと畜生に人の名を付けますのは、何だか勿體ないやうな氣がしますが、米人の心では、之が崇拜の意を表したつもりで御座います。

（六）細君の武裝

◎之は日露戰爭從軍記者として、日本へ參り、馬關で砲臺を撮影し、寫眞器械を取り上げられた事件で有名な文士ジャク、ロンドン氏の妻君の御話です。

◎ロンドン氏は、滿洲の戰場から米國へ歸る船の中に在つて今二三日の後には、桑港の波止場へ船が着くであらうと云ふ折しも、其細君ロンドン婦人は、俄に武裝して正々堂々の陣を張り、夫たるロンドン氏を相手取つて、其勝敗を天下晴ての裁判所に決しやうとするので御座いました。

◎ロンドン婦人が二人の娘を懷き抱へて、オークランド裁判所に出頭し、恐れ乍らとロンドン氏と離緣することを願出たのは、六月の二十八日の事で、ロンドン氏は其二日後に、海上無事に桑港へ歸着し、オークランドの住宅へ入りましたから、家内の風波はこれから立騷ぐので御座います、離緣の裁判で女の方が勝ちますれば、女はシタヽカの損害金を男より取る權利があるので御座います、負けましても裸かで逐ひ出される位ですむので、女は中々強う御座います。

◎ロンドン婦人の理由とする所は、其夫が他の美人を愛して居ると云ふのです、其美人と申しますのはもとは露國生れのアンナ、ストルンスキーとて、スタンフオード大學を卒業した女文學士で、ロンドン氏とは同窓の友でございます。

◎ロンドン氏同婦人共二十九歲五年前に結婚娘兒二人、姉はジユワン妹はベッスイ。

◎ロンドン氏は、未來の米國新聞王たらんと希望しつゝある、ハースト氏の部下の記者で、御座いまして、一度は砲臺撮影事件で日本を怨み、次には寫眞

器械拂下げで日本を褒め、爾來一方ならず、日本びいきの通信を送つた人であつたが、今や米國に歸ると依然態度を改めて、非日本黨となり、日本の惡口をつきます所を聞きまするに、

第一、日本軍は強い事は強いが、其うちに金が缺乏する、今でさへ六分利で賣出す位だから、經濟力の信用の淺い事は之でわかる。

第二、自分の是まで日本軍を褒めたのは、褒めなければ、檢閲官が通信を許さないから止むを得なかつたのだ。

ザット此んな風です、氏の確固たる所信のない輕薄才子である事は、之でわかります、それ故細君に對して幾分か同情を表せらるゝことゝ存じます。

（七）演藝會の武裝

◎ロスアンゼルと申しまする町に、毎年夏期になりますと、土地の人の演藝會の催しが御座います、今年は武裝のはやり年で、演藝會も武裝をせられまして、日本武士に關する芝居をする事に決定しました。

◎其藝題も、日本語を取つて、何やらと申しましたが、我々には其意味がわかりませんでした。

◎又其役者の中に、十三四歳位の女子が御座います其役割はクスノキ、マサツラと云ふサムラヒの娘になつて出るのだと申します。

◎どうも日本通な米人さんの智慧を絞つて、脚本を作つた芝居も、我々日本人には、何をするのやら、一向呑込めませんので殘念です。

◎これはロスアンゼルから私の關係して居る新世界社への態々の通信でございました。

（八）日本女子武裝

◎桑港　コールと云ふは、米國大新聞の一に計へられます者ですが、此新聞に記載されました日本女子の武裝談は、誠に珍らしい御話で御座いました、之を譯載しまするど此うです。

◎久しく日本政府の事業を受負うて、種子島に居ま

したりチャード、チェスターと申します男は、當地へ來て、今また日本へ歸る所です、此男の云ふ所によれば、滿洲出征の日本兵の中には、少くとも十分の一は女子で有つて、男子の風をして出たものです、日本女子の中で、人足に出る女子どもは、別に男子に劣るところはないと申しました、又リチャードの申しますには、日本兵は去年の十二月中に、既に十二萬も平壤附近に上陸して居ましたのですと。

◎こんな途方もない虚言でも、中には信ずる人のないでも御座いますまい、信ずる人のあればこそ、新聞にも載せるに至つたので御座いませう。

◎但し私が御報知致しますのは、其話を信じた譯でない事は勿論ですが、たゞ外國人中には、こんな虚説を放つ者もある事を申上げて、後日の參考に供したいのでございます。

(九) 令孃の武裝

◎何れの工場へ通勤の令孃におはすらん、毎朝同じ時刻に、辨當箱を提げ給ひて、或る通りの電車に物し給ふ、或朝電車の未だ止まらぬに、はやレイディは降り給はんずるを車掌は危しと云ひつゝ差寄りて抱き止めしかば、レイディは最後の通牒をも發せず車掌を肱鐵砲と云ふ者で、一撃を加へ給ひけり、又の朝も車掌はおのが務めとて、同じく抱き止めしかば、レイディはうるさしとや思ぼしけん、肱鐵砲に續ぐに唾を以てし給ひければ車掌の顏は數點の唾をとゞめて、見る目も氣の毒なるさまなりけり、かくては得堪へじとて、車掌は社長の許に辭表を捧げて、うら安き身となりたりとなん、シャトルなるハースト氏の新聞は傳へたる。

(十) 娘子軍

◎米國男子は、女子に抵抗する權利なしとかや、男女間の爭鬪に於て、女子の勝利と決せらるゝは常なり、米國女子のつけあがるも宜ならずや。

◎若不幸にして、日米兩親交國間紛議生じ、遂に干

戈相見るが如きことあらんか、予一秘計有り、米軍の全滅蓋し物を嚢中に探ぐる如けんと、或る諷刺家曰ふ。

◎客あり其妙策を聞かんと欲す、諷刺家曰く、他なし婦女を驅り集め、娘子軍を編成し、米軍に當らしむるにあり、米軍は娘子軍と衝突するや、其敵軍の悉くレイデー（貴女）なるに喫驚し、銃を拋ち馬を下り降を乞ふべし、豈快ならずやと、云ひ終つて呵々大笑す、諷し得て甚だ妙といふべし。（をはり）

軍國の片影

笠間醉雨

（一）形見の髭

（上）

『オイ、千年、ちよッと、鋏を貸して呉れないか。』

座敷から主人の聲が聞えた。

『ハイ。』と、勝手の方で、優しく答へるものがあつた。

『オイ、オイ、早く〳〵、何をしてゐるんだい、酒か、酒なんかア、急がんでも宜い、今、坂本さんでさんざ御馳走になつて來たんだから。』

主人は、年頃二十八九であらう、丸顏の、淺黑い目鼻立の凜とした男、大分醉が廻つてゐると見えて滿面に朱を灑いだかのやうで、言葉も縺れ勝である

『ハイ、ハイ、只今。』

と、靜に答へながら出て來たのは、芳紀は十八九であらう、すらりとした、面長な夫人、鬢のほつれをちよいと掻き上げながら、座敷へ入つて來て、針箱の抽出から、鈴の付いた一挺の鋏を取り出した。

『何うなさいますか。』

と、いぶかしさうに問ひつゝ、良人の手に渡した。

主人は無言で、机に向つて手鏡を立て、眞赤な顏をそれに寫して、暫し我と相對して、口元に微笑さへ浮べたのである。

夫人は重ねて、

『あら、所天、何うなさいますの？』

と、不思議さうに尋ねた。

主人は猶ほ無言で、鋏を取り上げて、見事な、八字髭を切り落さうとした。

『あら、まア、所天、お切りなさるの、折角それまでになすつたものを、惜しいぢやありませんか。』

と、口早に云つた。

『ナニ、構ふものか、うるさくて仕方がない。』

『だつて、所天……。』

と、夫人は稍呆れた面付。

止める間もなく、主人は既う、左の髭を切り落して了つた。そして、其髭を一枚の白紙に受けた。

『あら、まア……。』

と、夫人は切り落した白紙の上の髭を見詰めて、さも／＼惜しさうに、柳眉を顰めて、伸び上つて、所天の肩越に、凝手と鏡を覗き込んだ。

皎たる一面の鏡裏、火の顔に雪の面、恰も躑躅の花と白百合とが水に點じたかのやう。

火の顔は莞爾として、

『オイ、千年、お前、笑はしていかんよ。』

『いゝえ、何にも』

と、雪の顔は打ち消した。

『だつて、笑つてゐるぢやないか。』

『オホ……、所天の身體がくの字形になつて。』

『止せよ、冷笑しては……。』

制するものも、制せらるゝものも、今は哄と聲高に笑つて、火の顔は燃え、雪の面は溶くるかとばかり。

やがて、髭を左右とも奇麗に切り落して了つた。

夫人は、白紙の上の漆のやうな髭を、白魚と優しき指に摘んで凝乎と見詰めた。

主人は、何と思つたか、

『千年、宜い髭だらう、これも俺が遠洋航海のお土産だ。』

と、鼻下を撫でながら云ふ。

『可厭ですよ、そんなお土産は……。』
と、夫人は袂を頰に當てた。
『可厭？、俺の髭は、これでもなか〳〵安くないんだよ。』
『お高いのですか。』
『當前さ、大事にして貯つて置くが宜い。』
『ぢや、頂いて置きませうか。』
と、夫人は笑ひながら、手早く其髭を包んで、自分の匣底に收めて了つた。
これは一昨年の四月のことである。海軍機關少監竹内三千三が、長日月に渉る遠洋航海を了へて、久久にて佐世保の寓居に歸つてゐた時の一場の物語である。
折しも、下女がランプを持つて來て、
『オヤ、まア、旦那様が……。』
と、旣う笑聲である。
『何んだ？』
『お髭をお取り遊ばして。』

『髭か、切つたんだ、可笑しいか。』
『い〻え、可笑くはございませんけど……』
と吹き出しながら、勝手の方へと去つた。
一陣の風、窓から襲つて來て、ランプの燈火が急燥しく瞬きするので、夫人は袖で蔽ふて、
『あら、まア、いけないこと……』
『ナニ、消えたつて宜い、打捨つてお置き。』
と、これは主人の三千三。
『だつて、所夫、闇くなつては……』
と、夫人は居直つた。
『闇くなつたつて、宜いよ、緣側から月が差し込むから。』
下女は、今、能代塗の膳に酒肴を整へて、持つて來た。
『オヤ、何んだか、大變御馳走が出たぞ。』
と、主人はにこ〳〵しながら、猪口を取り上げて、夫人に酌をさせた。ぐいと仰いでまたも、差し出す其途端。

又しても、一陣の風が襲つて來て一際燈火が明くなつたかと思へば、忽ち暗！「オヤ」とばかり夫人は酌の手を止めて身を反らした。

○　○　○　○　○　○　○

空もぼんやり、月もぼんやり、庭の櫻は、恰も白雲の地に宿つたかのやう、さつと吹き來る汐風に、花は梢を辭して、ひら、ひら、ひら、ひら!!

（下）

第三回旅順閉塞に參加して、萬死の中に一生を得たる竹内少監も、その後軍艦吉野に乘組んでゐたが、去る五月十五日、不幸にも艦と運命を共にして波は高き黄海の水泡と消えて了つた。

あゝ名譽ある戰死！悲慘なる最後!!

此報、直に少監が麻布の留守宅へ知れたが、千年夫人は、豫て覺悟の上のことゝて、少しも取り亂したる樣もなく、彼の匣底に收めて置いた髭を取り出し、そして、少監の寫眞と共に、床の間に安置して早速、香花を手向けたのであつた。

何れ、其内、何か形見が來るであらう。來るであらう。との噂の内に其月は過ぎた。六月も過ぎた、けれども、形見としては何に一つ來なかつた。

あゝ、此髭、遂に形見の髭となつたのである。名譽ある形見の髭！光榮ある形見の髭!!

○　○　○　○　○　○　○

（二）今政岡

『もし、所夫、郵便が參りました。』

と、妻は良人に一封の手紙を渡した。

良人の市三郎は手早く開封して、默讀したが、何故にか、目の色は穩でなかつた。

『所夫、何處から參つたんです。萬様の所からではないんですか。』

と、妻のお澄は尋ねた。

市三郎は無言である。しかも、ほつと太息さへ漏らすのである。

『萬様、何うかなすつて？』

と、お澄は、ちよいと眉を寄せて、市三郎の顏を視つめた。

『うむ』とばかり、市三郎は輕く首肯いたまゝ默つてゐる。

三河國渥美郡牟呂村の大木萬太郎は豐橋衛戍歩兵第十八聯隊に入隊つてゐて、一等卒であつたが、過ぐる五月二十六日金州南山の攻擊に、我軍の左翼に進み、最も苦戰を極めた後、遂に敵丸に斃れ、名譽ある戰死を遂げた。で、今、所屬中隊長〇〇大尉から、其旨を同氏の遺族 實兄市三郎に宛てゝ報知して來たのである。

『戰死なすつての?。』

と、お澄は凉しげなる目を視張つた。

『うむ、戰死した。』

と、市三郎は力なげに、言つた。

『あら、まア、本當に……。』

と、お澄の聲は既う淚である。

やがて市三郎はお澄に手紙の全文を讀んで聞かした、お澄とて、豫て覺悟の上のことではあるが、女心のそれと斷念も付かないやうで、袂を顏に押し當てゝ、深き悲哀の淵に沈んだのである。

市三郎も、首垂れて默つて了つた、けれども、渠は單に實弟萬太郎の戰死を歎くのではなく、まだ其他に氣遣ふべきことが、新にその胸に襲つて來たのである――これは、則ち老母石子の病床に臥してゐること、それである。

母は今年七十七歲、平生至つて達者で、病氣などに罹つたことはない。たまさか風邪といつても三日と横になつてゐたことはない、極丈夫な質ではあるけれど、寄る年波のそれには爭はれないで、唯、老木の枯れて、朽ちて、倒れるやうに、日一日と弱つて往く今日此頃の姿、若しや、その最愛の萬太郎の戰死――名譽なことゝは云ふもの、――それを聞いた時には、嘸や、太く愁傷落膽して、病氣の爲に少なからざる影響を及ぼすことであらう。と、これが市三郎には一方ならず、氣に掛つてならぬので

ゐる。
『お澄、阿母樣に萬太郎のことを云はないで置かうではないか、云つちやア、病氣の爲めに宜くないだらうから……。』
と、市三郎は云つた。
『左樣でございますよ、まア、當分、皆に口止さして置きませう。』
と、お澄は市三郎と同感である。
この秘密は、忽ち一族間に決行せられて、誰も破る者はなかつた。
ある朝のことであつた、老母の石子は市三郎を枕邊近く呼んで、
『市三、妾は昨夜から二度まで萬太郎の夢を見たよどうも不思議だよ、何うか仕やすまいか……何だか氣になつてならないよ。』
と、物憂げに、斯う云つた。
『ハイ、別に何うも……。』
と、市三郎の言葉は何となく曇つてゐる。
『矢張り無事にやつてゐるのか……。』
『ハイ』
と市三郎は伏目になつた、
『何にも無事を願ふと云んぢやない、軍に出たんだもの、討死したつて、別に何んでもないが、どうも氣になつてならないから、實は今、お前に尋ねたのだ……』
と、老母は、寢返を打つて、身を起した。
市三郎は、何と思つてか、急に膝を進めて、
『阿母樣』と、意味ありげに云ふ。
『何だえ。』
と、枯れたやうな細い手を額に當てた。
『阿母樣、御心配なすつては、いけませんよ。』
と、市三郎は伏線を引いて、ちらと母の顔を見て、
『萬太は戰死しました。』
と、思ひ切つて言つた。
『あゝ、戰死したか。』
と、老母は少しも取亂した樣子もなく、落付拂つて

ゐる。これには市三郎却て驚いたのである。

『それは何日？』

と、老母は嚴に云つて、市三郎の顔を戍目つてゐる

『ハイ、この二十六日に、南山といふ所で大戰爭がありました、その時………』

と、云ふを待たず

『お前、なぜ、早く云つて呉れなかつた、旣う今日で七日目にもなるぢやないか、早く云つて呉れゝば早速花の一つも備へ、線香の一本も燻べてやるのに。』

と、老母は少し急き込んで、不平らしく。

『ですが、もしや、お話して、それを御心配なすつては、却て、御病氣の爲に宜くないと思ひまして…



…。』

『餘計な心配ぢやないか、萬太は兵に入つた時から妾は旣う思ひ切つて居たのだ、そんなことに、今更心配はしないよ、……何だか、妙に萬太の夢ばかり見ると思つたもの……道理で……萬太は死んだんだもの……。』

と、健げな老母も流石に語調が濕み勝ちとなつた。

市三郎は唯、老母の一言、一句に首肯いてゐるばかり。

やがて、老母は病床を出て、手を清めて萬太郎の寫眞を佛壇に安置して、聊の香花を手向け、靈前に合掌して、專心祈念を凝してゐたが、やがて靜に口を開いて、

『私の産んだ男の子は三人もゐるが、今度のやうな大戰爭に一人も出征ないやうでは、何んだか、實に御國に對して申譯がないやうだけれど、幸ひにお前が一人出征て呉れたのは、妾が何より心嬉しく思つてゐるのだ。が、お前も、此間の戰爭に到頭天晴れ戰死したそうだが、まア、よくやつて呉れた、それでこそ私の子ぢや、お前がそれで、少しでも天子樣のお役に立つたかと思ふと、お前を生んだ、此妾まで嬉しくて、嬉しくて、また肩身が廣いやうにも思ふんだよ、まア、よくやつて呉れた。……それにまア考へて見りや、先祖代々三河の國の百姓で、代々一人だつて刀一本差したことのない家柄だ。それにお前が兎に角軍人となつて、立派に討死して呉れたのは、此大木家の面目だ。まア、よく、やつて呉れた……お前も矢張りそれで三河武士だ。百姓の子ではない。………』

と、寫眞と相對して、尚ほ生けるが如く、長々しく物語つて暫らく其處を去らなかつた。

市三郎夫妻も、感に打たれて、思はず、涙の雨を降した。

名からして石子と氣丈な老母、人呼んで、彼の政岡が死せる千松に物いふ如しとて、今政岡と云ふ。健在なれや、今政岡その人よ。

婦人事物考

あまぎ

今婦人の用具に就きて、其出所誤謬を匡し見んとて、予の調べたる儘の二三を左に、固より其正鵠なるや否は、淵學の識る所にあらず、只讀者の明敎を仰ぐのみ。

◎披風　當今被布と書くやうなれど是れ誤りなるべし、固と披風と書くこそ好けれ、こは昔堂上方の略服にて、直衣に似て、上帶なければ風に披くより、此くは名けたるならむ、袖も短くして狹し、只内々のみの御服なり、近世被布と云ふは座敷合羽の事に

て、眞の披風に非す。

○足袋　和名抄に單皮履云々とあり、孝經樓漫筆にいふ、こは鹿皮を以て半靴とす、名けて多鼻といふ、宜しく單皮と書くべしと、蓋し古へは皮にて造りたるものゝ如し、能く古きものに擧けるは、もみ革にて種々の縞形あり。

○浴衣　湯上に着る故に名く、今は白地の單衣の專有なり、大縞にて如何にも涼しげなるものをいふならん、別に之が浴衣とて一定したるにはあらず。

○帷子　當世は生絹麻などにて織りたる物を帷子といへど、昔は裏なく一重なるものを、何にまれ帷子とはいひたるならむ、蓋し片とは單なるが故に斯くいひ、びらは風にひらめくの義ならむ、領巾、母衣、旗、旒、何れもひらの轉語にて義相同じ、ひらめく、はためくなど同じ義なり。

○夜着　何時の頃より始まりたるか定かならず、近代世事錄に慶長元和の頃より漸く盛になれりとあり、昔は小寐巻とて常の衣服の少し大なるを下に巻きて其上に蒲團を懸けて上つ方も是を召されしとなん、連歌四季寄冬の部に、蒲團のことは記載しあれど、夜着のこと何とも見當らず。

○蒲團　蒲にて造りたる圓座をいふならん、今のフトンの義に非ず、今のフトンは衾といふものなりと或書に見へたれど、是れ謬りなり、蓋し木綿の未だ渡來せざる以前には、庶人の冬服には布に皆蒲廬の穗わたを入れて着たり、布子とは是より出でたるの名、蒲團も其義亦相同じ、是れ蒲の穗を團めて入るる故ならん、古へ縉紳の間には多く繭綿を以て作りたるフトンを用ひたれど、庶人にはきる事なし、是れ其衾なるべし。

○羽織　今は禮式に用ふるやうになりたれど、昔は一個の道服なりしなり、園太曆を按ずるに、承久の兵亂後公卿大に窮し、衣服の調度本意に任せず、勿論車馬の便彌々不如意にて、衣冠束帶の御方も歩行し給ひければ、晴の服に塵埃のかゝらんことを厭ひ給ひて、衣冠などの上にゆかたなどの服を上張り歩

行し給ふ、故に道服といふ、その上張の褄の地に曳くを端折て挾み給ふ云々、羽織は即ち此端折の轉訛か、但しは上よりはをる故に斯くは名けたるならんか、東牖子にいふ、服は身に服する惣名、例へば呉服をクレハといふも、禽の羽翼をハと訓するも同じ事にて、皆身に被るものゝ稱なり、羽二重とは御召絹の念を入れて、恒の絹を二重に合せ織りし如きもの故、服二重とはいふなり、是を以て見れば羽織の義は服折といふこそ適當なれ。又陣羽織といふは道服の意とは異なれり、こは具足の縅を敵に知られぬ爲に設けしものにて、又民間に袖なし羽織を甚兵衛羽織といふは、蓋し陣兵ばをりの轉せしものなりといふ。

猶書きつらねたきこと數多あれど、そは折を見て書くことゝして、左に面白きことの二三をものせん。

○新造　新婦をさして新造といふ、こは昔の儀式に新に嫁を娶る時、新室を造りて此所に新嫁を住はしめたるが故なり、奥さま御内儀などいふは、所謂終始奥向の内に在るが爲めならむ。

○妻及妹　「いも」と讀む、こは男より女を呼ぶの通言なり、夫婦のことを妹脊といふは、女より男を呼ぶにせといふより出づ、つまとは夫婦の互稱、いもうとゝいふは妹人の義ならん。

○夫　「をうと」即ち男人の義にて、婦人より男子を稱するの語、又ひこぢとも云ふ。

○妾　「をみなめ」即ち男身の女の義なり、男子に隨從するが故なり、又そばめといふ側女の義ならん。

○女子　「をなこ」といふ、上古は男ををとといひ、女をめと云ひけるを、後に男ををのことし、女ををなごとして區別したるものならん、然れども其實はのもなも同義なれば、正しき言にあらず、めのこと云ん方穩當なるべし。

○嫁　「よばひ」即ち呼の義にて、男子が婦人を呼び迎ふるの謂なり、靈異記には伉儷の字を充て、類聚名義抄には娉の字をあてたり、萬葉に夜延とあるは借字なり。

○婦「よめ」は呼女の中畧語なり、古はよばひめといへり。

○聟「むこ」は迎子の義にて、猶嫁を迎女といふが如し。

○姒婦「おほよめ」は大呼女の義なり、長子の妻をいふ、兄嫁といふは是なり。

○娣婦「おとよめ」は弟呼女の義なり、兄嫁の義數字あり、嫂これ單に兄の妻をいふ、支那にては長兄の妻を丘嫂又巨嫂とも書けり、又長婦即ちをほよめを冢婦と書き、之を又あによめと讀ましたる例あり。

○姉 支那にては長女のことを伏といふ、是れ俗字なり、又阿姐とも書く所あり。

○介婦「おとよめ」是れ衆婦の義、娣婦の義とは異なれり。

○妯娌「あひよめ」是れ兄弟の妻互に相呼ぶの通言なり。

○婭「あひむこ」兩婿相呼ぶを婭といふ、蓋し一人は姉を娶り、一人は妹を娶る相亞ぐといふ意なり、友婿又僚婿に作る。

○婚姻「あひやけ」といふ、妻の父を婚といひ、婿の父を姻といふ、婚はむことり姻はよめとりの義なり、又婿を婚といひ妻を姻といふ、又婚は婦の家、姻は婿の家なり、何れにも用ふべし。

○妹脊「いもせ」本朝の俗語に夫婦の稱をいふ、蓋し妹は妻、兄は夫なり、故に妹兄といふ、恐らく伊冊伊那の古事より出でたるならん、詳しきは藻鹽草に明なり。

○贅壻「いりむこ」男の女の家に附緣するをいふ、史記幷に漢書等に出づ、又接腳夫と書す。

○伯母「をば」父の姉を伯母といひ、父の妹を叔母といふ、一說に伯は父方の稱呼、叔は母方の稱呼とあり、或書には父の兄を世父又伯父といひ、伯父の弟を仲父といひ、仲父の弟を叔父といふとあり。

○叔母「をば」是れまた同じ、又嬸と書く父の妹のことなり。

○姑「をば」是れは舅姑に續く文字にて、しうと、

しうとめと讀むべきならんも、或書には父の姉妹を姑と爲すとあり。

○姨「をば」母の姉妹をいふ、爾雅に妻の姉妹をいふとあり、以上四件は何れも引用あり、諸說一定せず、宜しく各自の判斷に任すべし。

○舅姑　舅は夫の父、岳父は妻の父なり、何れもしうと丶訓す、姑は夫の母、岳母とは妻の母、何れもしうとめと讀むなり。

○鰥寡　老て妻なきを鰥といひ、男子六十にして妻なきを鰥といふ、寡はやもめにして五十にして夫なきをいふ、嫠、孀皆同じ。

蟬の話

林　壽　祐

蟬は多く夏に出ます蟲で、古から隨分人にもてはやされて居ります。動物學上からいふと昆蟲類中の有吻類に屬するもので、頭は廣くて短く、そうして堅く、二本の小さい觸角を生やし、二ツの大きな眼が兩側へ突出てゐます。此他頭の中央に金光のしてゐる三ツの小點があります、此小點も一種の眼で、單眼といひ、專ら近い所を視るに用ゐ、前の二ツの大きな眼を複眼といひ、無數の小眼の集ッたもので、主に遠方を觀るに用るのです。口は細長い管になッて丶、使はない時は、ピタリと胸へ喰着けて置いてるが、空腹になると、恰も針を突立てた如く、其細長い管を樹の幹に刺し立て、樹の內の汁液を吸取るのでありります。

蟬の卵から孵ッた幼蟲は、地中に潛り込み、樹の根に噛りつきて、根の汁液を吸ひつ丶生長し、餘程醜い形でありますが、夏になると、モク〳〵地中から匍出て「セミノキノボリ」とて、樹や籬に攀ぢ登り二三尺の高さに止まり、體を空氣に曝すと、背中が裂けるから、ヒヨク〳〵脫出で、今度は立派な羽織を着けた成蟲となるのです。蟬の幼蟲は何の位の間地中に居るのか、よくは知れないが、一二年位でせ

う、外國には幼蟲のまゝ、十七年の長い間、地中に居るのがある、此蟬をば十七年蟬と稱へ、動物學上有名であります。

蟬は形不相應に大きな音聲を發して鳴くもので、其音聲の發する所は、腹の第一環節と第二環節の間で、其所にはヒサシの樣な堅い襞があつて、其下に薄い膜が張られてゐる、蟬の腹の内は殆んど空氣を滿たしてゐるから、腹を伸縮させると、空氣が其膜に觸れて音を發する、恰度風琴の樣なものです、で、調子のとり樣によつて、ジイ〳〵とかミン〳〵とか、各箇固有の音を發するのです、蟬の鳴いてる間は、ピク〳〵と絶えず腹を伸縮させて居ります。蟬の音聲を發するのは恐く雄で、雌は些も音を發することが出來ない、夫故俗にこれを啞蟬と呼び、一般に不具者と思ッてるやうです。

蟬の雄が佳い音聲を發するのは、即ち雌雄淘汰の結果で、隨分と動物界にありふれて居ります。蟬の雌は餘程音樂が好きとみえ、音聲の佳い雄を撰らんで、偕老同穴の契、いやそれ程にいかずとするも、共に生殖作用を遂げんとするのである、そこで雄は成るべく大きく、成るべく美しい音聲を發し、雌に可愛がられ樣と務め、それが爲め雄と雄との間に競爭が起り、千年萬年と經つ間に、發音器が發達して遂に今日の如き大音を發するやうになッたのです。彼の鳥類が喉を膨らかして囀づるのも、螽蟖、蟋蟀、金琵琶、金鐘兒などが、翅を震動させて鳴くのも、皆これ雌に慕はれ樣とする爲めに過ぎないのです。雌は音聲の佳い雄に從ふといふのであるから、蟬に限らず螽蟖でも金琵琶でも、雄の鳴いてる近傍には、大概雌が來て居ッて、熱心に其聲を聞いてるのです。で雄は他の雄が鳴き始めると、負けじ劣らじと、一層聲を張り上げて、鳴き競ひ、又雌を挑まん爲め、時々場所を換へ、此所彼所と鳴き廻はる種類もあります、螽蟖、金琵琶などの雌には、地中に卵を產み落す爲め、特に產卵管といふ劍の形をしてる附屬物があるのです、蟬の中にも產卵管のある種類があり

ます。蟬は體の色がよく樹の皮に似てゐて、翅が透き通ッてるから、鳴いてゐても他の動物には、容易に見出すことが出來ない。

蟬の種類は何の位あるか、學者の研究によると十五種以上もあるさうですが、普通我邦で知られたるものは、蟪蛄、鳴蜩、寒蟬、蛁蟟、茅蜩、蟀母、チッチゼミ、蚱蜩、蝦夷蟬の九種である。以上の中最も大きいのは蚱蜩で、身の長一寸五分、兩翅を張ると四寸にも達し、最も小さいのはチッチゼミで、身の長僅か六分位しか無い、最も早く出るのは蟀母で、もう四月には鳴き初める、次ぎは蟪蛄で、六月に現はれる、で長い間鳴き續くのは、蟪蛄、鳴蜩で十月頃まで其聲を聞かれるのです。

○蟪蛄は、麥刈蟬、夏蟬、小蟬ともいひ、夏中人家の近傍に在り、朝から晩まで、シインーと長くのばしながら鳴いてゐます、で時によるとニイニイと聞えるから、ニイニイゼミと名けられたのです。

○鳴蜩は、秋蟬、里蟬ともいひ、背黑くして白粉あり、翅は不透明にして褐色である、ニイニイゼミより遙に大きく、到る所に產し、ニイニイゼミと共に蟬類中最もありふれたる種類である、朝から日が暮れて薄暗くなるまで、ジイーミ〳〵、或はジイーラ〳〵と震ひ聲で鳴き、時とすると夜中に鳴くこともあります。

○寒蟬は、軀細長くて雄は色黑く、翅は透明である、ニイニイゼミや、アブラゼミと同じく、人里に來て、ツクヅクボウシ〳〵と活潑に鳴き、聞き樣によッては、ウックショシと思はれるさうです。けれども吾々の耳には、ホーインック、ホーインック、〳〵〳〵、チクレンヨー〳〵、ジユンーと聞えるのです、此蟬は夏より秋に多く、九月上旬は最も盛であります。

○茅蜩はヒグラシともいひ、形ツクツクボウシに似て少しく大きく、ニイニイゼミやツクヅクボウシと異り、人家の近傍に來らず、多くは山間の高い樹に止まり、空氣の涼しき時、即ち朝と晩に限り、カナ

カナカナア、〳〵、と爽かな高聲を發する、で谷間にあると、ケンケンと響くことがあります。

◯茆蟟 は、深山蟬、羽衣蟬、都蟬ともいひ、體廣くて黒く、翅は透明である、カナカナゼミと同じく人家に近よらず、概ね山上の茂れる高木に止まり、ミンミー〳〵と高い聲を發し、隨分遠く聞えます、地方によッては メンメンメー 或はビインビインビーと聞くさうです。(アブラゼミの鳴聲は、眞似ることが頗る困難であるが、此蟬のは、鼻をつまんでミンミンミーとやると、やゝ本調子が出來るものです、皆樣も小供の時、定めし眞似たともありましやう。)

◯蜂母 は松蟬ともいひ、形ツクツクボウシに似て遙か小さく、早くも春に發生し、主に山間の松の樹に止まり、ジイヨー〳〵と鳴き、産地は極めて尠いが、其産する所には、頗る多く繁殖し、一時に雷同するから、其聲は隨分凄ましいものです。

◯チッチゼミ は、南京蟬ともいひ、蟬類中最も小さく、軀黑くて翅は透明である、山間の松の樹に止まり、チッチ、チッチ、〳〵〳〵と鳴き割合ひに長く生活してるが、極めて尠ないのです。



◯蚱蜩 は、大蟬、馬蜩、山蟬ともいひ、蟬類中最も大きく、體黑く翅は透明である、大きなチャガレ聲で、シャアシャア、〳〵〳〵と鳴くが、此種も餘り居らない方です。

○蝦夷蟬は、クマゼミよりや丶小さいけれども、アブラゼミより大きく、躰は赤燕色で翅は透明である、此蟬はキエイ〱と鳴き初めて北海道で採集したもので、極めて珍らしい種類であります。

序ながら蟬類に近い動物をといへば、人類や畜類に宿ッてる虱、人畜を螫して困まらせる南京蟲、草木の新芽にたかる蚜蟲、嫌な臭を發する椿象、水中に捿んでる甲蟲、水黽などで、何れも口は管の狀をしてゐて、螫したり吸ッたりする道具になッて居ります。

蟬は夏に出るから、蟬といふと、直に炎熱といふ觀念が起る。何人でもジインー、ジラジラといふ聲を聞くと、一層熱くなる樣に思はれるのでせう。で夏の眞盛にも休息せず、喧すしく鳴き騒ぐから、古來歌人などに謡はれて居ります。

山川の岩もとどよむ蟬の聲
梢もやがて響きわひけん　師光

宿に鳴く梢の蟬のもろ聲は
夕日の影も所せきまで　爲實

夏山の椎の葉毎にとりつきて
耳のまりなくゆする蟬かな　仲正

暮れかゝる空どよむまで夏山の
木だちをしげみ蟬騒ぐなり　顯朝

鳴立てをやみもなくや木隠れの
雨よりしげき蟬のもろ聲　後柏原院

蟬の名所としては、山城の小倉山、たゝずの杜、大和のいこま山、丹波の大江山、隠岐の小島など、昔の書物にあるが、如何なる種類の蟬が産したのか、一向分らないのです。蟬といへば、前に述べた通り幾種類もあるのですが、昔の人々は餘り種名に頓着をしなかッたのでしやう。唯茅蜩だけは區別されて居りました、歌に

猿生るをきの小島の浪の上に
浦風さそふ蜩の聲　保季

鳴きつゞく蟬の諸聲ひまし無し
雙岡山の夏のひぐらし　爲家

紫部式が著はしたる源氏物語には空蟬の卷がありま

す。

空蟬の身をかえてける木のもとに
　猶人からはなつかしきかは

空蟬とは、主に蟬の脫殼をいふのです、俳句にも蟬の句は澤山ある。

靜さや岩にしみ入る蟬の聲　芭蕉
頓て死ぬけしきは見えず蟬の聲　芭蕉
月代に夢見て飛ぶか蟬の聲　正秀
蜩や捨て〻置いても暮る〻日を　捨女
日半日同じ茂みやわぶらせみ　抱儀

歌や俳句には、蟬の脫、蟬の諸聲、蟬時雨といふ語がよくある、蟬の脫は、即ち脫殼のことにて、蟬退或は枯蟬ともいひます。蟬の諸聲とは、無數の蟬が同時に鳴き騷ぐ時の音。蟬時雨とは、其聲が恰も時雨の如くであるから出たといふとであります。（終）

家庭衛生　簡易療法

季節の代りめには病氣も起り易く、初秋の頃は殘暑も酷しく毒虫類も澤山出て來るゆゑに、誰れも用心せねば叶はぬなり、されど一寸胸がわるいとてソリヤ醫者じや、蚤が刺したとてソリヤ病院じやと、騷いでは中々大さうのことなれば、豫め手輕き療法を心得おくは、時節柄大切なこと〻思へば、た〻二つ三つ記るさん。

感冒

感冒は人の多く罹り易き病氣にして、若し油斷をすればこれより種々なる病を引き起すに至るものなりされば感冒にか〻りたりと心付かば成るべく外出を謹みて冷えぬやうにし、靜に臥めば別段服藥するに及ばず、醫者も感冒にはよき藥乏しといへり、余の經驗によれば熱き葛湯を呑みて安眠するが第一なり生姜湯又は溫き粥などもよし、但し熱ある時は多食を謹むべし、「アンチヘブリン」の如き解熱劑を用ゐるも宜しけれども偶々胃を害ふことあり、熱高かければ「サルチルサン」曹達二分五厘を頓服するもよろし。

食傷

食傷したるときは、指頭にて咽をくすぐり嘔くがよし、疼痛あらば心下に温巴布を施し、又灌腸して通利をよくすべし、もし下痢することあらば腹部をあたゝめ、消化し易き滋養物を食して安らかに臥すべし、下痢二日にも渉らば醫者にかゝるべし。

便秘

便秘する癖ある人は、一週間も通利なきこと珍しからず、是等は胃腸の働き不充分なるより起るものにして、これより種々なる疾を醸すことあれば必ず通利をつくべし、これを爲すには重炭酸曹達三分五厘大黄末三分三厘を研混せて散薬となし、一日三回に服用すべし、又灌腸を行ふもよし。

嬰兒の便秘する時には普通は利斯林の灌腸をするやうであるが、或は乳母の食物を改良して奏功するともあり、又灌浴のときに、そろ〳〵兒の腹部を摩擦して便通を促すもよし、兼て屋外清淨の空氣中を抱懷逍遙するを宜しとす。

頭痛

頭痛には、胃から來るものと、神系痛とあり、胃より來るものは一オンス計りの舍利鹽を服用せば大抵は醫するべし、尤も其間は燒パン、ビスケット、米の上湯などの如き、輕くして消化のよきものを食し、大に散歩するがよろし、神系痛とは時に頭の半分が痛むなどのことあるを云ふ、その時は濃厚なる茶を呑み、靜かに一間に安座すればよく醫することあり、又熱き湯にて手拭を浸し堅く絞りて首を温めて奏効することもあり、試みてよし。

腹痛

腹痛には種々ありて中には隨分容易ならぬもあれど單に食物などの不消化より起れるもの、即ち臍の周圍に疼痛を感ずるものは、その局所に温巴布を貼り、或は風呂に入りて湯の中にて腹を揉むがよろし。

齒痛

齒痛の起るは、大抵齲齒より來るもの多ければ、その齲齒を奇麗に掃除し、綿を丸めて小球となし、樟

腦一分三厘、アルコール九十滴の混合液に浸してその穴の中に入れ、齒にて喰ひしめ、疼痛さらば、其跡を冷水にて嗽ひすべし。又齒齦腫れて痛むときは、その部分を針にてさし血を取るもよし。

痔疾

痔疾はいろ〳〵あれども、大抵腸管の欝血より起るものにて、肛門の外に腫れ出るものなり、或は血を走らすものあり、或は瘻を生ずるものあり、隱分この病氣には難儀する人多し、その第一の養生はその局部を温むるにありて、屢々入浴して肛門を暖め、甚しきときは蒟蒻を用ゐて半日も繼續して温むるがよし、もし肛門部腫れ上りて疼痛忍び難きときは、蛭を用ゐて惡血を吸ひとらしむべし、痔の起りたるときは生姜、からし、大根おろし等の刺戟性の食物を避くべし。

毒虫に刺されし時

蜂、蟻、蜈蚣等の如き毒虫に刺されし時は、創口に口をあて丶其毒を吸ひ出し、その唾液を吐き出すべし。蛇類に嚙まれしときも同じ處置を爲すをよしとす、又犬猫の爲に咬傷をうけたるときは、その傷部を洗ふべし、その後の消毒法には石灰水か護謨尼亞水を塗り置くべし。

注意のくさ〴〵

世には種々な病氣になやみ人知れず苦しめるもの少なからず、潛に功驗覺束なき賣藥などに依賴して、萬一の奏功を希へるなど誠に氣の毒なる次第なれば爰に今日まで功驗の確實たる手輕き治術をまとめて同患者の試用に資すべし。

◎田蟲に困れるものは、百倍の護亞酢を毛筆にて薄く日々塗布すべし。

◎疣の生じて困れるものは、白屈草の浸汁を繃帶に浸し、纏絡法を施さば四五日にて脫落すべし。

◎面皰にて困るものは、毎夜十倍の硫黃軟膏を塗布し、翌朝洗ひ落すべし。

◎腋臭になやめる人は、燒明礬末を擦り込み、並に二十倍の硝酸銀水を塗るべし、一時局部の變色する

ことわるも恐るゝに足らず、日を經れば復舊すべし。一週間位にて臭氣の有無を檢して、もし治せざれば今一週間試みるを要す。

◎痣を氣にやめる人は、小刀の尖などにて先づ局部を亂刺し、放血したる上にて八十倍の苛性加里軟膏を塗るべし。

◎油足にて困れるものは、隔日に一回づゝ一倍の格魯謨酸液を二三回塗布すべし、もしそれにて治せざれば一週間を隔てゝ今一回試むべし。

◎色の白きは七難かくすとの俚諺もありて殊に女性は色の白きを希ひ、色黑き方は美白劑の如き如何しき賣藥を人知れず用ゆるも少なからざるよし、されば顏色の黑きを治するには、常に牛乳を多量に飮用し、毎日度び〳〵五十倍の硼酸水にて顏を洗ふべし、暫し氣永く日を經れば、必ず効驗見ゆべきものなり。

◎輕き喉の痛みは、水飴の中に、切りたる大根を入れ、暫らくして、其汁を飮むべし、痛奇妙に止まる。

短霄錄

内田茂 文

◎圓山應擧の描ける畫に「四季美人」と云ふものあり一人の美人にして四季を意味せる服裝を着け居る畫なり、近者英國倫敦シーヂング街にて發行せる「日英新報」に、全身を纏ふに盡く輸入品を以てせる英國美人の圖を揭げたり、上衣及び袖の飾り、帽子の裝飾は佛蘭西、腰部の飾りは日耳曼及び露西亞、胸飾りは瑞西、帶は和蘭、袴及び襟飾は白耳義、靴は亞米利加、帽子は伊太利、而して傘は澳太利品なり、毫も自國の製品を用ゐず、一身九ヶ國の流行品を纏ふに至つては、四季美人位は物かは、斯の如くにして、流行の女王然と濶歩す、物好きも亦驚くに堪へたりと謂ふべし。

◎敷島の道と云へば、大低の人は和歌の事を言ふなるべしと思ひ居り、彼の慈鎭和尚の詠にも「人每に一ツの癖はあるものを我には許せ敷島の道」とあ

り又古歌には「思ひきや我が敷島の道ならで浮世の事を問はるべしとは」など詠みたるもあり、然るに予先頃「胡蝶庵隨筆」なる書を閲したるに、左の文あり。

敷島の道と言へば其中に律令、刑伐の政もあり、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の道もあり、これを敷島の道といふ、歌を詠ずるのみを敷島の道と心得たるは大なる惑なるべし云々

と大氣焔の下に前掲の二歌をも罵倒し去りたるが、斯く論ずるも矢張り是れ敷島の道と言ふべくや。

◎回顧すれば早一と昔なり、去る廿七八年に於ける日清戰役の際、金州附近に滯在せし我が第二師團某隊中の上等兵某、一夕月下にヤンレ節を謡ふて曰く

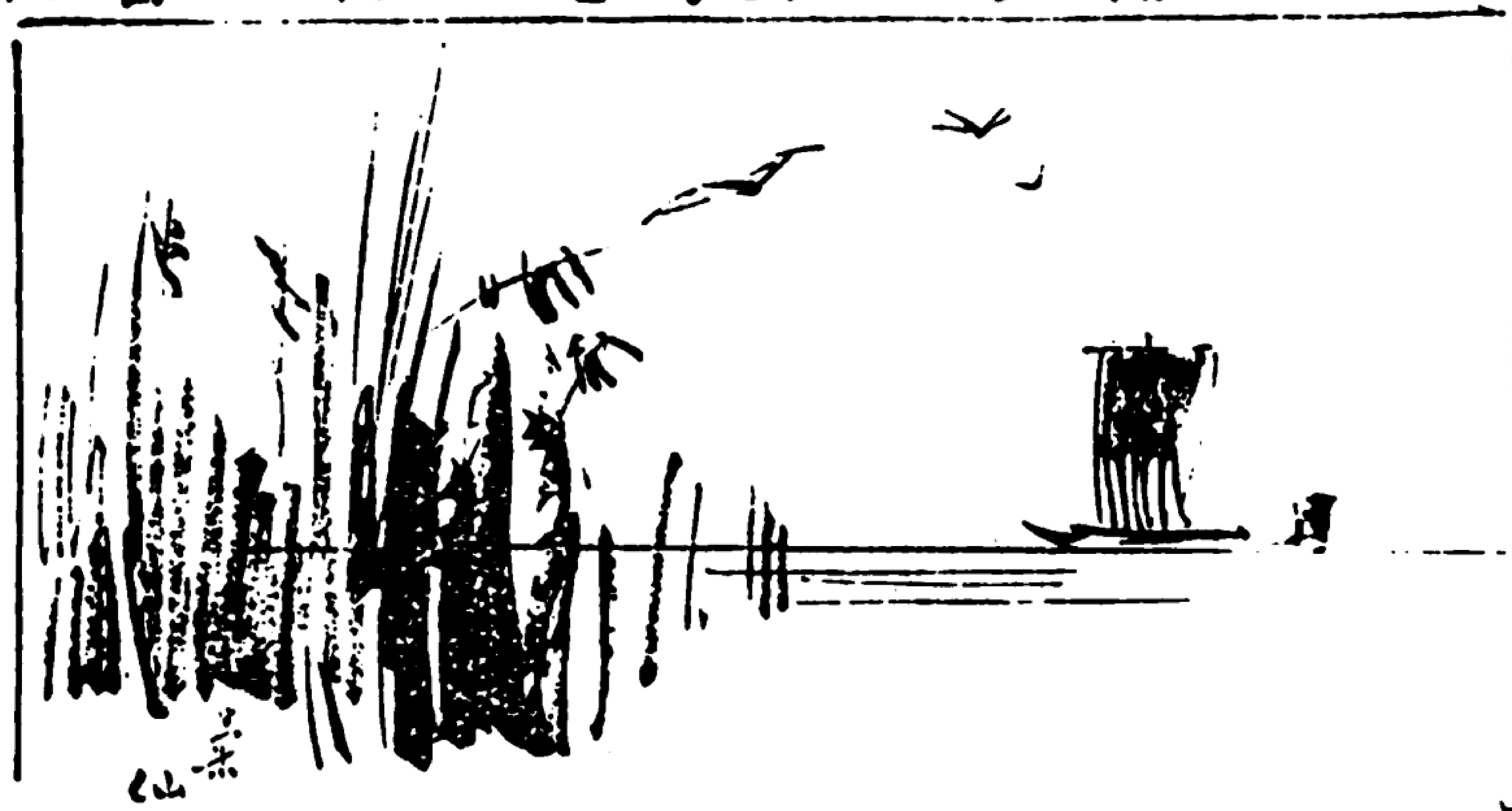
鍬を持つ手に鐵砲持て、花の仙臺出たのは去年、永の逗留廣島街で、欠伸交りの小言も出たが、軈て舟出は宇品の港、これが故郷の見納めなるぞ、舟の中から首さし出せば、烟のやうだぞ山々の影どうせ死ぬのに何要るものか、さんざしぐれを唄て死ねや、骨と髪とが故郷に行かば、家で嚊めが鼻高かんべ、サーサやれ〳〵一齊射撃、面倒臭いや吶喊攻撃、彈は霰と飛では來たが、何の因果か中つてくれず、露營舍營に風邪さへひかず、豚と芋とで豚の樣に肥えた、ゆんべ嚊から手紙が屆いた、家の伜は學校通ひ、村の娘子が嫁に行た、錢楽喇叭を五錢で買て、次男は毎日喇叭ふく、吹た喇叭を夢に見て、今朝の喇叭で目がさめたヤンレー、目がさめたヤンレー、

吐露し來る滿懷の熱情、噫々これ何たる悲壯の詩ぞや、而して今や日露の戰酣にして、又このヤンレ節を實地に演じつゝある兵士、その幾何なるを知らず、父は異境の戰地に雨と注く彈丸中に戰ひ、兒は平和なる家庭に餘念なく喇叭遊びを爲す、之が留守宅にある婦人の身を思へば、轉た同情に堪へざるなり。

◎迷信なるもの、行はるゝは、其國の文明と否とに關はらず、古くより習慣として存せらるゝものにて

中には東西その意同じきもの尠からず、英國にて飼猫が故なくして家を去る時は、其家に禍凶ありと言ふは、恰も我國の鼠が家を去るは、火災の前兆と云ふに同じ、耳の鳴る時は他に噂を言はしめて吉凶を占ふ事あるは、我が朝右夕左など、耳の痒き時は善き事を聞くといふに等し、又傘を途に落す時は失望する事あり、若し其傘を他人が拾へば、拾ひし者に失望は移るなり、是れ即ち我が俗に曰ふ櫛を遺失せば苦勞を脱する事あるも、之を拾ひしものは、夫より苦を求むると同一なるべし。

◎只に迷信のみならず、諺には頗る似たる、否、全然同一なるあり、彼の聖哲ソロモンの語に「死は貧窮より耐え易し」と言ふは我が國にて古くより言ひ傳ふる「四百四病の病痾より貧ほど辛いものはない」との諺に同じ、



◎身の飾りに心を用ひ過すべからず、時間費えて益なし、俗人奴婢の輩に褒められんとて衣服を飾れば、識者に賤しめらる」とは、是れ『大和俗訓』に記したる文なり、其意男子よりも別て装飾に憂身を窶す婦女子を戒めたるものなるや知るべし。併し乍ら、時代は又昔日の『大和俗訓』の世にあらず、今や一國の經濟より打算して、生活の度を高むるの必要あり、強ち手本として學ぶべきに限らざれど、泰西文明國にては、俸給の半額を装飾に費すと云ふ程なれど、尙英國婦人が毎年衣服の爲めに費す金額は莫大なるものにて、白耳義へ百五十萬圓、佛蘭西へ七百萬圓を支拂ひ、帽子に必要なる造花の爲め佛蘭西へ是又毎年五百萬圓を拂ふとの事、尙驚くべきは胸間に帶ぶる時計にのみ毎年金一千二百五十萬圓を瑞西國へ支拂ふと云ふ事な

り、今の世に大和俗訓著者の在りて之を聞かば正に驚死をや爲すならん。

◎レッタースブックと題する書に、或小料理店へ常に飮みに寄る一勞働者が、該店の下婢に艶書を贈つて、自分の妻に成つて呉れと請求したるに對して、件の下婢は、左の如き意味の返書を與へた文を揭げたり、

不束な私しを女房にして遣ろうと迄、思つて下さる郎君の御心切は忝なう厶いますが、過日も或夫婦連れの客が、私しの店へ飮みに來られ、始めの間は至極中よく、サモ睦ましそうに飮み合つて居られました處、醉が廻るに付けて、その御亭主は女房さんと爭ひを始め、果は擲たり叩いたり、大亂暴をした騷ぎに、他の客が中裁に這入つて漸と取靜めた事がありましたから、私と郎君と夫婦に成るは宜いが、郎君はお酒が好きだから、若しも二人で飮みに行く事があつて、郎君が彼の夫婦連の客の樣な亂暴を仕る樣な事があつては大變と、夫が心配に成つて堪りません云々、

何ぞ用意周到の甚だしき、其身嫁せざるの前に於て警戒一番、家庭の空隙に向つて箴針を打ち拔くものか、普通娛樂半分の艶書の返事に、何處までも眞面目に、飾り氣なき本音を吹き來る所、蓋し下婢的性情を表白して餘りあるものとや言はん。

蒙古通信（つゞき）

河原操子

此頃は王、王妃の御稽古も大に相すゝみ、王は「私は日本の刺身が大好でありますなど申され候、王は日本文、日本語、王妃は日本文、日本語ピヤノに御座候、ピヤノは橫濱にて佛蘭西人より習ひ置きたるは好都合に御座候、生來內氣の無口の私幼より今日までに口數を過してと出すぎとにて、失敗致したることとは唯の一度も御座なく候へども、其かはり心に思ふこと迄も言ひあらはすこと叶はず、我ながら悲し

と思ふことも屢々に御座候ひき。其私故到底萬事につけ程が宜しきなど〻は思ひもよらぬことに候へども、場所を踏めば多少變化し參るものと相見え、當王妃の事々にあなたは實に程がよろし如何にせば君の如くなり得るならんと申居られ候、參りし以來日の淺きに係はらず、無二の友として何事も相談を受け申候、太福晋も同様に御座候、王妃は碁と將棋が御自慢にて、何時も稽古の後に御對手致候へども、僥倖にして今日までは、一度の敗をとりしことなく爲に後宮の人々は、日本婦人は實に豪きものなりなど私語居り申候、王は「あなたが支那服をつけ支那語を話さば誰とて日本婦人とは思はざるべし。」と申され候、御かげ様にて此頃は少しも氣を用ふることなしに談話致し居申候。

時と場合により取捨は致し候へども、赤誠といふ骨髓は決して失ひ申さず候、支那人は、文明諸國の人々を對手に致し候とは、大に工合異り頭から馬鹿にてか〻つていけず、敬ひすぎて宜敷からず、先方の注文など待ち居らば、幾年經ちたりとて仕事はかどり申さず候、さりとて餘り指圖して宜敷からず、實に手工合ものに御座候、併し一度窮所を握りなば、萬事此方の思ふま〻、恰もアヤツリ人形の如くに御座候私は王、王妃と對等の心組にて言行はよき程に敬ひ心中にては幼稚園の兒童を導くやうなる心にて、飽きさせぬやうだまし〳〵引ばり參り申候、次に當地方にては、醫術は實に幼稚なるものにて、思へば可哀想に御座候、私在上海の頃より藥物につきて研究致し居り候ひしが、當地に參り非常に役に立ち申候王始め蒙古の醫者はやくにた〻ず、先生の藥は大變よろしきよし申され候次第にて、此頃は藥局大にいそがしく御座候、實に申上る言葉も御座なきほどの穢ない〳〵樣子で蒼い顏して參り候、憐れなる人人に、それ〳〵手を盡しやり、一二週の後に御蔭樣にて快くなりたりと、元氣よく禮に參られ候、其折の心地よさ實に天にも昇る樣に思はれ候、二年越の腫物に唯の一回も藥を用ゐしこともなく、捨て〻置

くなど御話の外にて是等は毎日〳〵洗ひては藥をつけやり申候、憐なる人民は左の如く申居候、先生を粗末にせば我々は天罰を受くべしと、終りに望み敎授致し候唱歌の一二申上候。

○金剛石不磨　無發其美光
人亦須勤學　靈德賴以顯
看彼計時器　廻轉無休止
惜陰勉不已　萬業豈無成」

○水分隨其器　方圓成形體
人分賴交友　善惡變氣禀
求友須擇賢　得賢須相愛
提撕磨丹心　精進學斯文」

○雲淡風輕　微雨初晴　假期恰過良辰
既櫛吾髮　既整吾襟　出遊以寫幽情
綠陰爲蓋　芳艸爲茵　此間空氣淸新
歌聲履聲　一程半程　學子偕行偕行」

王より勇ましき歌との御注文にて、左の歌を敎へ候ひし處非常に悅び居られ候。

雖有拔山之力　有蓋天地之氣
而不學則無知　我略喇沁偉丈夫
加鞭心之駿馬　馳向學藝之道
拾集知與勇焉　挾喜馬拉耶山
而越太平海洋　此大功可樹也」

右日本唱歌の譜にあはせ歌ひ居り申候、譜に合ふやうに作り或は譯し候ことは、實に困難にて好ましき文字を用ふること能はざる場合のみに候、それに四聲の工合にて羅馬字にて、綴りたるやうに工合よく參り申さず候、

非常に長々しく相成候へども、今一つ聞え上げおき度と存候ことは、支那婦人は實に世間見ずの我儘にて、多くの缺點を有し居り候へども、一方には美しき點も少なからず候、一例を申上候へば少し物の道理を辨へ居候婦人達は、或一人が他の人に向ふて彼の婦人は實に豪き人なりなど譽むる場合には、其答として實に然り、我は彼の人につき斯るよきことを聞き居れり、かゝることも見たることあり、など申

風にて決して〳〵人の賞めたる人に對し、其の點はよろしけれど、かゝる短所ありなどゝは申さず候、よく〳〵短所の知れ居り候場合にても、一方に長所ある時は、其長所をあげて短所は出來得る丈け、これを覆ふやうに致し候、併し心安き人々の間にては此限にもあらざるならむとは存居候、此點につき日本婦人は如何にと顧み候らへば、廣くは存申さず候へども私の承知致し居り候範圍にては、人が或る一人を指し彼は豪きものなりなど申候折には、必ず其點はよろしけれども、かゝる點ありと申候が多きやう思はれ申候、私は自分がいはれたるにより申わけには御座なく候へ共、上海に居り候ひし頃、便毎に上陸さるゝ種々の男子の方々が、實に城内住居はつらからん、よく忍耐が出來得ること、實に我々感服する抔申され候折には、必ずそれは城内は御話外の處なれど、かゝる人間の住場所とも思はれぬ處に居るものは、どうせ變調子なりとか、中等教育位うけ居る婦人の口よりは、一層多く出でし樣子に御座候爲めに往々、あなたは御目にかゝらぬ内は、調子はづれの御轉婆の方かと思ひしに、案外なりしなど申されく候ことは度々に御座候、實に日本の爲め東洋の爲めと思ひ、一身を犧牲に供し、人間の住場所とも思へぬ城内に、己が信ずる處を熱心に盡し居る心の一端にても察せられなば、かゝる無責任の言は出まじきかと存候ひしも、思へば人各々其欲する處を言はるゝにて人の言に對しては、我のあづかる處にあらず、我は唯其信ずる處を行へばよしと、ます〳〵熱心の度を高め候ひき。

私事一年半の契約にて、今年十二月十日にて期限になり申候、萬一續繼致すやう相成候とも、十二月には是非一寸なり歸朝致し度と存居り申候、福晋に御目にかゝり候折毎に貴校華族女學校其外諸學校の模樣、博物館、動物園其他につき委しく申上居候處しきりに行きて見たきよし申され候まゝ、ことにより候へば暑中後に御つれ申て御世話樣に相成り候やも計られず、其折には何分萬事よろしく御願ひ申上

候、上海の務本女學堂も其後ひきつゞき盛に致し居り候へども、二三年の後是非今一度來て與れよと切りに申參り候、私の後代りにつき大にすゝめ候ひしも人が代りては萬事新たになりて望ましからず、幸當城内の人にて日本より歸りたる人御座候まゝ（音樂學校に居りし人のよし）音樂と日本文は此人を賴むことに致し申さむと云ひ張り、氣心の知れぬ人はいやと申候處はさすがに支那人頑固の度は、とても私共の及ぶ處には御座なく候、當蒙古地方は喇嘛敎の盛なるため、年々非常なる勢にて人口減じ行くとのことに御座候、實に日本の當地方に手を入れ候は今にありと、過日の幸便を以て

公使館に申送りたる次第に御座候。

次に蒙古語の一つ二つ御笑ひ草に申上候。

一……ニツグ　　二……ホーヤラ

三……コーラパ　　四……トーラパ

五……ターブ　　六……ヂエーラガ

七……トーロ　　八……子ーム

九……イツス　　十……アラパ

わたくし……ビー　　あなた……チー

あのかた……タサラ

我的筆　わたくしのふで　ミニービール

儞的紙　あなたのかみ　ヂニーヂヤース

他的墨　あのかたのすみ　テル子ーブフ

我的　わたくしの　ミニー

儞的　あなたの　ヂニー

他的　あのかたの　テル子ー

申上度き事は山々御座候へども、餘り長く相成候まゝ是にて筆とめ申候。

（をはり）

小兒の注意

夜間の注意　寢冷せぬやう注意するのは至極であるが其度を過ごし子供が無暗に發汗する程著せて寢かす人がある、過ぎたるは猶及ばざるが如しで汗を餘り多く發しさせるのは危險の事である特に雨戸を閉めきつて外氣の入らざるを善しとして居る人が多いが、これも成るべくは少しづゝ明けて夜間でも空氣の流通を充分ならしむるが宜しい、尤も氣候の變化の甚だしい時には夜明け頃に閉ぢた方が宜しい、

皮膚を強くせよ　大人でもだが、特に小供は皮膚を強くせればならぬ毎朝冷水で拭ふが宜しい（哺乳兒は然らず）又溫浴後に冷水を浴せさせるのも宜しい、腫物などの多く出る小供、風邪に冒され易い小供は畢竟皮膚が弱いからである、

牛乳と米食　小兒に牛乳を飮ませる事は至極宜しいが飮んだ牛乳を充分效顯あらしめるには米食は不適當である、朝牛乳を飮ませるならば食事は麵包にするが宜しい總じて牛乳は成るべく水分を吸收するやうな食物と共に用ゆるが善と思ふ、（ドクトル加藤氏談）

文林

八月宮中御歌會兼題詠進

凡河内躬恒

田中光顯

千年へし今もくもらずゆみはりの
月にみかきしことのはの玉

同　伊輿子

ゆみはりのつきの光ともろともに
てりこそ渡れ君かことはも

高崎正風

おほうちの山のは高くはなちけん
光まはゆしゆみはりの月

鍋島直大

住吉のまつふくかせのこゑたかし
言葉の玉もひゝきあひつゝ

本居豊穎

花とさく河内のなみは紀のうみに
たち後れたる色ならめやは

黒川眞頼

心あてに君こそをらめはつしもの
おきまとはせる白菊のはな

津輕承昭

はつしものおきまとはせと中々に
匂ひかくれぬしらきくの花

渡邊清

ゆみはりの月みることに思ふかな
きこえわけつる君かことのは
小畑美稲

雲の上にゆみはり月のことのはを
きこえわけゝん心ゆかしも
梅溪通治

山に入るゆみはり月の御答へは
よにたくひなきほまれ也兒
竹屋光昭

はつしものおきまとはせる白菊の
言葉の花はよにかをりけり
藤井行徳

君か名はくもゐにたかく弓はりの
月とゝもにもてり渡りけり
唐橋在世

みことはにさして答へし山のはの
弓はり月のさやかなるかな
水野中毅

初霜のおきまとはせるしらきくの
花の言葉そよにかをりける
日野西光

初霜のおきまとはせるしらぎくの
千代のかをりの高くも有哉
常磐井暁煕

うの花のうきよの中になきわたる
山ほとゝきす聲のさやけさ
藤枝雅之

よの人のこゝろのほとをさくら花
ちりての後に思ひしりけん
澁谷隆敎

淡路島ふくしほかせにむらちとり
なくねはきみか心なりけん
小倉文子

ゆみはりの月にのこしゝ言のはゝ
山のは高きしらへなりけり
姉小路良子

ちりし後人はとはしのことのはの
花は幾世か香にゝほふらむ
宮地嚴夫

山のはにいるゆみはりの月に名を
くもゐに高くわけし君かな
坂正臣

大空にしられぬはなのしらゆきと
光をきそうゆみはりの月
近藤久敬

言の葉の香にこそにほへさく花の
ちりなんのちをこひし心は
小池道子

紀の山にさしむかひても言の葉の
しをりとなりぬ住吉のまつ
北島糸子

山のはにいるとこたへし言のはの
光さやけしゆみはりのつき
津守好子

大内のみうたえらひにつらなりて
たてしいさをは世に殘りけり
吉田愛

ちる花にむかひて人をいましめし
君かこゝろぞ世にかをりける
萩原嚴雄

今もよにくまれける哉おほゐ川
なかるゝ水の清きしらへは
小杉榲邨

名にたかき山へをさしている影は
くもゐをてらす弓はりの月
植松有經

すみよしの松の秋風なみの音に
かよふこゑこそとはに聞ゆれ
小出粲

さくらちるこの下風もすみのえは
松にところをおきつしら波
中村秋香

照月のやまへをさしているかげは

なとかみはしに昇らさりけん　大口鯛二

ゆみ張の月のひかりはしらくもの
おりゐる肩に顯はれにけり　猪熊屋樹

あはとみし昔の人のおもかけも
月にこひしきあはちしま山　千葉胤明

心あてにをりけん菊のかもたかし
木の下風のよにはにほへと　粟田口顯久

よの人のあさき心をなけききけん
君かことはの花そゆかしき　加藤義清

大井川清きなかれにきみひとり
言葉のたまをあまたえにけん　鈴木小舟

うきことをわれも思へは雁かねの
聲そ身にしむ秋のよな〳〵

すみの江の松ふく風にこゑそへし
しらへは高くおきつしら波　尾崎宍夫

ちる花を雪とのみ見しことのはゝ
木の下風のしたにやはたつ　須川信行

山家卯花　菊池武則

大空の影はくもりてうの花の
月さやかなる小野の山里

山家梅雨

杣木ひくおとさへ今は絶にけり
のこきり山のさみだれのころ

岡夏艸

水無月のてる日の岡の夏艸は
ゆふべになれど露も結ばず

夏風

水無の照る日さかりのいつくより
ふけばか風の涼しかるらん

教の庭

正三位子爵黒田清綱先生撰
（代撰菊池武則先生）

初秋月

天

東京麹町區富士見町六丁目六番地　寺尾まき子

秋きぬとわさ田が上をふくかぜの
すかたを見する月の影かな

地

東京本郷區根津　上村茂々子

夕霧の影もやとりて三かつきの
さすかに秋の色は見えけり

人

長野縣北佐久郡南御牧村　小泉みつじ

久方の空にやわきのたちぬらん

光りさやけき三か月のかけ

甲

手馴らしゝあふぎもいつか忘られて月なつかしき秋はきにけり　薩摩　松原みれ子

山のはに光ほのめく三かつきのかけさやかなりあきは来にけり　肥後　千知波橘子

ふく風は身にこそしまれすみわたる月のかけにそ秋はしらるゝ　熊本　田代艶子

はきのはの露にやとかる月かけは秋のはしめのひかりなりけり　秋田　古瀬惟子

軒端には夏はのこれとすゝしさをそらにみせたる三日月のかけ　山口　村上操子

昨日今日あきや來つらむ三日月のほのめく影もさやけかりけり　攝津　鹽見文子

三日月の影ほのかなるはつ秋はなくむしのねもすゞしかりけり　肥後　岡山登壽子

いつのまに秋きにけらしみか月のほのめく影そさやけかりける　大阪　長野悦子

福岡　山川敬子
かやりびのひまよりみえし月かけのみにしむ秋といつか成けん
東京　田中春子
秋されはくまなき空の月かけのなつはらつゝみなかめすゝしも

乙

秋田　古瀬りく子
いつしかも秋のけしきと成にけり月はゝやまにいまのほるらし
三河　榊原てる子
ひろのまはいまた暑のたへねとも秋みえそむるつきのかけかな
福岡　蟻岡美津野
秋はまた淺ちかはらのしらつゆにひかりほのめくゆふ月のかけ
札幌　小山かく子
うち寄するたりほの稻の波路こえてかゝやき渡る月の夜半かな
札幌　關　やえ子
むしの音もたえてさびしき山里にひとり眺むるはつあきのつき
愛媛　高橋茂子
うたゝねも衣手さむしおほへきて軒端におつるつきのさやけき
秋田　古瀬りく子
みそきしてつみはあとなき袖の上さやかにてらす三日月のかけ
松山　上原のぶ子
三日月のすゝしきかけにおもふかなあきはまことに西よりそたつ
神田　荒井幾久子
わけのほる山の端かくれに出る月のかけさやかなる秋の夕くれ
東京　渡邊名加子
吹かはる風にたよけるくれたけのはこしにみゆる月のさやけさ
肥後　徳永萬壽子
きのふけふまだ秋あさき八千草をさやかにてらす夕つきのかけ
松山　田村多豆子

ひとはちるのき端の桐は三日月のあきを見せむのこゝろなる覽
東京　荒井満武子
わけいれはすゝきそしける野に山にまたあたらしき三日の月影
東京　吾木たま子
大空にさやけくてらすおもかけもまたうひ〳〵し秋の夜のつき
肥後　徳永多鶴子
ひろのまとおなじ暑さにくれぬれど光身にしむはつあきのつき
三河　白井よし子
いさましくみ軍さ人のたちまわる満しうの野にはつあきのつき
東京　木村よね子
むら雲はいつしか晴れて三日月のさやけきかけをまねく尾花か
東京　白川愛子
秋來ぬと想ふはかりにや夕つきの影もさやかにてりわたり見ゆ
長野　山本直枝子
初あきになりにけらしな空きよみすゝしくてらすつきの影かな
長野　山本民卯子
ひろの間のあつさは夏にかはられとよるは涼しきつきの影かな
和歌山　白鷗女史
秋きぬと言づてがほのゆふかぜにさそわれにしか新づきのかけ
和泉　稲原すみれ子
なかき夜の心つくしのはじめとてほのめきわたる三日月夜かな
東京　林　艶子
ちりそめし桐の一葉のつゆの上にやとりてすゝし秋の夜のつき
肥後　徳永康子
ひろのまのあつさわすれし夕風にすずしくてらすはつあきの月
東京　渡邊初子
月かけのひかりもそひて虫のねもたかくなりぬる庭のくさむら
長野　山本斐女
待わひしあきは來にけりやまの端をはなれし月の影のさやけさ

長野　小泉餘念子

ふく風のおとにはさのみ知られれど月かげすゞしはつあきの空
長野　小泉たつじ子

なつころも秋たつ風としられれど月のひかりはすゝしかりけり
東京　松居よし子

ふく風も身にしみそめしきのふけふ空にすみゆく三日月のかけ
東京　比田井元子

秋はまたあさちか露にてるつきの影もすゝしきこのゆふへかな
大和　栗山たか子

風わたるいなはのつゆにてる月のかなしさ見ゆる秋はきにけり
長野　上野よし子

かゞみなすきよき御もかげほのみせてはかくれ匂ふ初秋のつき
奥　和住千鶴子

ま萩はらかくはつ風も身にしみておくしら露にやとるつきかげ
同　和住千代子

てる月の影さへさえて見えにけりまたきに秋のたちしと思へば
神戸　井上品子

秋くれはつゆふきむすぶ夕そらにかたふく月のかけをみるかな
東京　篠田圓子

たちそめて今日また二日三日月のかけもさすがに秋めきにけり
横須賀　岩橋花子

ひるは猶あふきの風をしのふれとさすかにすめる秋のよのつき
同　岩橋はな子

秋きぬとしらへそめたるむしのねにみ空の月もさやかなりけり
肥後　佐々小琴子

月のかげ昨日にかはるこゝちしてたもとすずしきはつあきの空
肥後　佐々有隣子

秋の来しるしと思へばおほ空の月のひかりもつゆけかりけり
肥後　秋吉輝尾子

八重霧の空のしらむとおもひしは弓はりつきのはつあきのかげ
豊岡　三河きく子

ふく風は夏のなごりののこれどもすゞしくすめるはつあきの月
東京　津野千代子

きりの葉の一葉二葉と散り初めてすゞしき庭のつきのさやけさ
兵庫　駒井登雄子

萩の葉にいろはみえねとたつあきの光はつきにまつそさしそふ
攝津　大岡いち子

萩の葉に風のかよへるゆふへよりくまなくすめる月をみるかな
下野　井上滋子

このゆふへ一はなちたる桐のはをさやかに照すあきのよのつき
北見　中川伊代子

きのふ今日秋たちそめてなきのはの露にやとれる三日月のかけ
東京　荒井千代子

秋空のすみ渡りたるみかつきよみつにうつれるかけのきよさよ
東京　荒井静

はりまかた秋風すゝしよいつきよ波よるいそにかけそさひしき
東京　神戸すゑ子

きのふけふ秋の初風うちそよきこのまをいつるつきのさやけさ
同　神戸よし子

世を忍びきよき心もみやまちのおとつるものはやまとりの聲
秋田　細矢はる子

秋来ぬとくさのは末におくつゆのうへにさやけき月のかけかな
東京　高橋常子

浮雲のたえまなき世をよそにしてふく風きよくすめるつきかな
名古屋　不破きみ子

山のはにたなひくくものたえまよりあきみえそむる夕月のかけ
埼玉　横田やな子

三日月のほのめく影にちりそむる桐のひと葉にあきは来にけり

秋の庭

埼玉　横田秋子

ゆふへより秋のはつ風身にしみて月のひかりのなつとしもなし
埼玉　横田音羽子

あき来ぬとつゆもおくらん虫鳴てうすつきにほふにはの淺茅生
無名

おとたては風もゝりきぬちりそむる桐のはこしにみゆる月かけ
埼玉　田中花子

はつあきの野風すゞしきゆふまくれたそや笛のね月にすみゆく
大和　栗山俊子

我いほのにはのしはふに秋たちてさやけきつきに虫のなくなり
神戸　梶原てい

ひと葉ちるのきはの桐の木かけより秋見えそむるゆふ月のかけ
東京　林　環子

いつの間に秋は来にけむ大そらに冴え渡りたる今日のつきかけ
上野　上野ちか子

秋の夜のふけ行く空の淋しきにはるかにきこゆかりのひとこゑ
長野　田島みよ子

そよ風にさそはれ落る桐の葉をてらすつきかけこゝろあるかや
埼玉　澤田伸子

夏すきて月かげきよし賤の女のきぬた打つれもところところに
同　澤田榮子

小夜ふけてさらても淸き月かけに秋たちそめてすゞむしのこゑ
長野　大町かほる

月すみて草木もねむるこの夜中にたれのつかれかすゞむしの聲
磐城　三森須磨子

おもひきやことせ中のつきすみてはやはつあきの月を見んとは
松山　三好しず子

秋かせにものおもふらんますら雄かもろこしの野の三日月の影
松山　匡子

秋風は尾はなかすゑにほのみえて夕つきあはしもろこしがはら
東京　森　辰子

初秋のしろへやにしの空はれてゆふつきさゆるきのふけふかな
信濃　横内みはる子

なつころもとみにかろさの袖の上にさすかけすゞし秋のよの月
東京　津野千代子

桐のはのひとはふたはとちりそめて淋しきにはの月のさやけさ
丹後　原田ひで子

夕されはをきの下風ふくかぜにさやけくやどるはつあきのつき
東京　小山染子

おく露もみかける玉の如くなり早やあきかせにつきやゝどらん
東京　丸毛よし子

きのふまでかげをたのみし桐のはに秋たついろの月をみるかな
美濃　吉田澄子

虫のねのきこえそめたる垣間よりさやかに見ゆる三日月の影
水戸　小堀勇子

秋風のふきそめしよりいもの葉のちるしらつゆにすめる月かな
山梨　標　武子

すむつきのいろに思はまさるなりことしもはや秋はたつらむ
長野　岡田千穂子

はつ秋のひかりもみえて萩の上にすゝしくやとる月のかげかな
三重　神田みよし子

秋のいろもやゝみえそめて西山のそらにほのめく三日月のかげ
三重　神田みよし子

一葉ちるきりの木のまに三日月のかけも涼しくあきかぜそふく

閑居

天

事しげき浮世はなれて隠處の
心にかなふ山のおくかな
三重縣津市西新町 神田みよし子

地

にごりなき我かくれ處の山水に
こゝろきよくもすめるいほかな
熊本市東寺原町 田代艶子

人

よをうちのかた山かけに袵しめて
つきゆきはなを友とれこすれ
名古屋横三蔵町 不破きみ子

よのちりな逃れて住めるかくれ家も耳のたよりまたぬ日ぞなき　攝津 鹽見文子

しづかなる遠ちかおくのともし火や世をはなれたる人や住らむ　埼玉 横田秋子

月花にこゝろつくしてよのうきをしらですごさんよもぎふの庵　肥後 德永廣子

春の花秋のもみぢのころならでひともとひこぬやまのかくれ處　肥後 千知波橘子

つゆふかき遠ちか奥のかくれがは山かけよりもしづけかりけり　東京 渡邊名加子

月かけのさすにまかするわかいほは犬のこ系のみ門まもるなり　肥後 佐々小琴子

千尋ある竹よりおくに世はなれて家ゐしなれはうきふしもなし　埼玉 横田やな子

山すみも遂にはなれてこのころはみやここひしと思はさりけり　東京 上村茂子

すみなれしみやこを出てみやま路に心のちりなあらひすてゝん　東京 荒井満武子

世をすてゝおもひいらすは折〳〵はみやこの事やおもひ出なむ　松山 田村多夏子

宮庭は訪ふひともなしひと重垣それなうき世のへだてにはして　山口 村上操子

しばのいほり訪ふものはかしのみの葉ごしにてらす三日月の影　東京 木村よれ

人訪はぬわがかくれ家の芭蕉葉におき風さむくつきのやとれる　神戸 梶原てい

すむやたれ松のはやしの奥ふかくしらへもたへにもるゝいと琴　薩摩 松原みれ子

にぎはしきみやこをはなれ山里にすむみなるこそ淋しかりけれ　三河 きく子

心たにしづけくあらばことしげき市としもなきやとはありけり　無名

春は花秋はもみぢのながめあれととふ人もなきよもぎふのやと　横須賀 岩橋化子

肥後 佐々有郁子

ふせいほのまけ庵つくり吾居れは風よりほかのおとつれもなき

横須賀 岩橋花子

いたつらにあれのみまさる我庭にことしの秋もとふむしのこゑ

埼玉 横田音羽子

や重葎しけきわたりのほそなかれよろ〱水のおとそさひしき

攝津 大岡いち子

いく千代もいきなからへむ心地して浮世のかれしすみか楽しも

下野 井上滋子

松かせのかなつる楽かことのねかやまひこならてかたる友なし

兵庫 駒井登雄子

にきはへる都なからも隠家はひとしとはれはしつけかりけり

北見 中川伊代子

人とはぬかたやまさとにすまゐして心のとかに世を送らなん

東京 荒井千代子

山奥にわひすまふ身は何としてうみのたよりのきかまほしさよ

同 荒井こう子

友とては何を定めんひとりすみなくさめかほにとりそさへする

東京 荒井朝

わひぬれは値り淋しきひとりやの音色ゆかしきひめのつまおと

秋田 細矢はる子

何事もおもひはなれてすめるみにうきよの塵はかゝらさりけり

東京 高橋凖音子

山松のしらへはとはにたえまなくなかるゝみつの音しすけくも

肥後 徳永多瑠子

夜もすから松ふく風をことのねときくもたのしき山かけのいほ

東京 白井愛子

苔ふかきみやまの奥の静家のあれたるにはとふひともなし

東京 青木たま

ひとりすむ軒のまつかせなか〱に心のちりをはらへとやふく

東京 荒井幾久子

すみなれしみやこやいかにすきつらんわれは山家に心きよかれ

松山 上原のふ子

あとつけてとふ人もなし我やとのみつの小徑はこけむしにけり

東京 荒井滿武子

しかそなく山かの奥にたゝひとり日ねもすあめにとふ人もなき

秋田 古瀬りく子

此頃は竹のいほりもかきりなくふしよきおとのきかぬひはなし

東京 林艶子

古しへのともと語りてすむつきにこゝろを磨くわかいほりかな

東京 渡邊初子

語るへき人もとはれはくれたけのよのうきふしもしらて住ける

肥後 秋吉輝尾子

柴の戸はとふ人もなきさひしさに庭もよもきにまかせけるかな

東京 林環子

四つの時とれともつきぬなかめをはひとり占めたるわか庵かな

秋田 古瀬惟子

しつけさをほこりかほなる我宿はひとりすみよき月なみるかな

呉市 和作千鶴子

ひとりゐの書よむ窓におとつるゝ友はのきはのまつかせのおと

長野 田島みよ

このまふく風よりほかに音せねば心ひとつにすましてそきく

前橋 林廣子

虫の音ととひくる風をともとしてひとりわひしく文をひもとく

長野 大町かなる

なか〱にちり深き世をあとにして住めるいほりの安らけき哉

長野 大町かほる

のきはなる松のしらへに合せつゝ絶えすとふなりたにの川

長野 山本基

さわかしき世を逃れても絶せぬは松ふくかせにたにのみつおと
長野 山本直枝

水おともまつふく風もへたてにしわか住居こそしつけかりけれ
長野 小泉たつじ子

世にうときしはの折戸をしは〳〵に音つれてふく峰のまつかせ
長野 山本民年

槙の戸を蔦のかつらにとちられてかけひの水のおとのみそ聞く
長野 小泉餘念

世のことは何といは根にわきいつる水より清きわかこゝろかな
長野 小泉みつじ子

のかれ住むわかかくれ家のさよふけてしらへゆかしき松風の音
和泉 福原菫子

世の外のやとゝはいへとみ軍のたよりみぬ日はしつこゝろなし
東京 篠田園子

かち軍ほきてたてたる日のまるの旗にしらるゝやまかけのいほ
肥後 徳永萬壽子

世のうきを外れし身にものかれぬは虫のねにさへ袖ぬらしつゝ
札幌 關やゑ子

世の塵を遠くはなれて山おくにつきゆきはなをともとこそせめ
札幌 小山かく子

おとつるゝ人もとたえしわひ住居み文のほかになくさめもなし
大和 栗山俊子

すみすてし我いほなれと淋しけれすきゆく秋にこふろきのなく
東京 松居貞子

わくらはにとはれし人もいつしかにうとくなりゆく庵の靜けさ
三河 白井よし子

庭の面にしける蓬にことよせてこゝろのまゝにおけるつゆかな
和歌山 白蘭女史

山かけに結ふいほりのたのしさは人はしらしな月そ知るらめ

上野ちか子

浮世をはすてゝみやまの奥ふかくきよき小川とともにくらさん
大和 栗山たか子

世のうきもしらぬ軒端を訪つれてものおもはするおきの上かせ
山梨 標武子

よの中のうさもつらさも忘られてひとりすむみそ楽しかりける
下野 井上尚子

このはちる淋しきまとに文よめはやかて答ふるやまひこのこゑ
愛媛 高橋茂子

絶えもせれたゆるはかりの細きしかけひの水のおとをきくのみ
東京 田中蓉子

ましらなく山のおくかに家居してあさ夕くものゆきかひみはや
磐城 三森須磨子

靜けさをなにゝたとへんみちのくの名も勿来なる關のかたへに
福岡 山川敬子

世をのかれいく日へにけん柴の戸の苔のほそ道あとたにもなし
野 露

まとの戸をたま〳〵たゝく音するは故郷のとものみつくきの跡
大宮 澤田仲子

樵りする音もしつけき賤かやにもみち散らしてしかのとひきぬ

○撰外 以下期日に後れなるものなれども本號に限り特に掲載す次號よりは一切没書とすべし

三河 永井さい子

ひさかたのそらより秋はたちぬらん昨日にかはるゆふつきのかけ
但馬 田尻保代子

おきそむるあさちか露に月かけのきらめくみれは秋はきにけり
山形 香澄露子

いつしかも秋はきにけむきのふ今日冴えに冴えたる山の端の月
東京 河合きさ子

秋の庭

にし窓のなすのひまより初秋のあはれな見するみかつきのかけ
大阪 桝田益子

たゝならす思ひやられて遠の夜のかけしのはるゝ秋はきにけり
東京 金原たまき子

物おもふ秋にいるさの山のはのこのまもりくるゆみはりの月
茨城 飯田やす子

月かけなかすむる夜牛のかりかれに秋来にけりと驚かれぬる
長野 吉田次子

風はまたさびしからねと初秋のひかりことなる三日月の影
小石川 辻岡ゆかり

はつ秋のきよきつきかけさしそひて眞萩か露も玉と見えつゝ
東京 松本まつ子

ひとは散きりの落はに露見えてほのかにてらすみかつきのかけ
東京 山口こと子

夕月のこのまもりくる影見れはおきのけしきにはやなりにけり
東京 椎野秀子

ひとはちる軒はの桐のこのまよりかけもりそむるゆふ月のかけ
壬生 松岡さく子

久かたのくもゐのそらは秋なれや照る三日月のかけのさやけさ
神田 山田婦美子

秋来ぬと人はいはねとおのつからすみゆく月のかけにしらるゝ
神田 山田靜子

吹くかせは萩の上葉に音つれておき来にけりとすめるつきかけ
下野 菅沼すみれ

かりかれの鳴きつる方を眺むれは月かけすゝしはつ秋のそら
長野 海沼ふみ子

ひと葉散るきらの梢を眺れはほのかにすめるはつあきの月
東京 後藤濱代子

いつのまにあきは来にけん山のはにあはれおほゆるゆふ月の影

上總 高石とよ子

こほろきの聲もきこえてふけ渡る月はさやかにあきめきにけり
東京 岩谷梓子

みそきせしかものやなきの一はのみぢるかとみしは夕月のかけ
東京 山本茂子

秋立ていくひもあらぬに片われの月ははやくもつゆけかりけり
東京 岩谷淺子

はつ秋のつゆとかせとにおとろきてみあくるのきに月冴にけり
陸前 前田河みさを子

きのふみし月にかはりはなけれども秋立そらそことにさやけき
陸前 前川河千年子

月るかりはなつのあゝさにかはられど秋立ぬるか月のさやけき
東京 牛山米子

を鹿なくこゑおもほえてすゝき原秋のいろなるつきいでにけり
東京 三好珍子

秋のきて露おきそむるくれ竹の末葉にやとる三日月のかけ
京都 鈴木菊子

ほにいてし尾花かそでにすむつきも心からにやあはれなりけり
東京 後藤きよ子

うきこともしらでしつかによなおくる軒にすゝしくかよふ秋風
三河 永井さい子

蟲の音に秋とはおもへと世のなかのうきはきこえぬむくら生の宿
大阪 桝田益子

山のはのこのまの月のかけならてかたらう人もなき住ゐかな
東京 河合さゝ子

よなはなれ住そしつけきうきふしもしらてとしふる竹の下いほ
東京 金原たまき子

いにしへのふみ讀わさに明暮てうきよにいてぬいほそしつけき
名古屋 わたはらみち子

さながらの山のけしきを庭にして文をともなるいほのしづけさ
陸前 前田河みさを子

人里をへだてゝすめとへだてぬはおきふく風にすめるつきかな
東京 椎野秀子

とふ人の跡はたえたるくさのとももらさてたつぬおきのはつ風
福井 今村たづ子

松かぜのおとなふよりは友もなし世を忘れたるやまかげのいほ
東京 松本まつ子

よをしらぬ庵ぞしづけき松風のおとよりほかにとふひともなく
東京 山口こと子

人とはぬおのがいほりはみ佛につかふる外のわざなかりけり
東京 辻岡ゆかり

山里にのがれ住む身もなか〱に渉やすからぬ昨日けふかな
東京 山田婦美子

八重むぐらしげれる庭にもる月のかげよりほかに訪ふ人もなし
東京 山田靜子

人訪はぬこのやま里にわれひとりすめばすみゆく月のかげかな
壬生 松岡さく子

訪ふひともなき山かげのたにがはに浮世のちりを洗ふ樂しさ
東京 山本茂子

まつをうゑ竹をめぐらすかくれがののきに生そふむめのいくもと
東京 山谷淺子

よのなかのうさをのがれて山さとにひとりすみたる月をみる哉
東京 三好珍子

しづけさは世のうきふしも白露の竹のあみ戸をとふ人もなき
東京 牛山秦子

松の風むしのこゑのみ友としてよのうきこともわすれつるかな
陸前 前田河千年子

ちりの世をのがれてすめるみながらもさびしさまさる秋の夕暮
上總 高石とよ子

まつ風をひとり千とせの友としてうき世のほかにくらすいほ哉
下野 菅沼すみれ

やまざとの松吹く風にさそはれて木の下蔭にいほをむすびぬ
長野 吉田次子

たきの音みねのあらしのそれならでかよふものなき山かげの庵
茨城 飯田ます子

わがやどにきこゆるものは朝夕に軒の雫とまつかぜのおと

十月	山家秋 電信	仲秋月を觀ざるの記 出陣中の父君(若くは兄弟に)贈る文
十一月	風前紅葉 烟	天長節 秋季運動會
十二月	歲暮 杖	家庭日記(三日間) 歲の暮に故郷の母君に贈る文

短歌、短文、今様に隨意投稿

右何れも締切期限は毎月十日とす期限後到着の分は悉く沒書とす

華族女學校教授　井上頼圀先生撰

夏季休業中の事を記す

地

和泉國泉北郡深井村　福原董子

塵深き都を離れて、今はなつかしき故郷なる深井の里に歸り、情深き父母君のみ前に、夏の暑さを忘るゝ身となりたるぞうれしき。思へば去年のことなりけり、いろねの君にともなはれて、あるは明媚なる山水に遊び、あるは近き川邊に螢狩などして、螢雪の勞を忘れし事のありしが、今や兄は、君の爲、國の爲、生還を期せず、遠く萬里の滿洲の荒野原に、砲烟彈雨の下に、勇憤突擊し給ふ雄々しさ、されば、照りはたゝく暑さにも、竹の葉分の月影にも、轉遠征人の上にのみ思ひははせて、思ひ寐の夢圓なる夜のなきぞわびしき。あゝわれ何ぞ碌々と此暑中休業を過ごさるべきや、げに勉むべきは此時ぞと、朝は疾より學びの道を修め、いよ／＼婦人の責任の重大なることを思ひ、ひるよりは、幼き妹と、シャツ、靴下などを編み、敢て他を顧るのいとまなかりき。今宵は緊の夜と軒端にいでゝ、父母君よりけふの軍語りを聞きつゝ、あすは戰地の兄君へ小包郵送の日、いざおくれてはと、シャツの殘りを縫ひ終らんと、急ぎ手にする糸と針。

地

肥後菊池郡隈府町　東小夜子

いつしかと待わびし夏は來にけり、學の窓も夏季の休業にとざされて、おのがし＼樂しき家庭にかへるべくなりぬ、妾も此數にもれざりしは、げに嬉しともたとふべき樣なくてなん。花咲にほへる春の空、月すみわたる秋の夜、みなとりとりに樂しければ、われらもの學する身には、夏ばかりたのしきはなし、まことにつかのまもわすれぬ、父母兄弟の豐なる顏、あいらしき姿、したしく拜みつゝ、朝はとく草葉の露を

ふみしだき、弟妹と袂つらねて朝顔の花を賞し、池水にうかぶ魚に餌をあたへて、僕が好むは此の鯉よ、妾が愛るは此の金魚よと嬉々とするもあいらしく、夕顔棚の月かげに、父母の御かたさきを撫さすりて、都會の物語に夜をふかし、ある夕べは。うちつれたちて近わたりに。そゞろあるきし。今日は師の君を訪なひ。身よりの者どもを訪ひつ問はれつせしほどに。休業も夢のまにすぎさりて、二日あまりになりぬ。

人

札幌北一西七の一　小山かく子

指折り數へて待ちに待ちし夏季休業も今日一日の名殘となりぬ、思へば暇ゆく駒の足早さ何に譬ふべき。あるは父に伴れて石炭の產地なる夕張岳の麓に一夜を明し、高峰の月に詩趣を養ひしも、或は波靜かなりし石狩の濱邊に親しき友と漫歩きの語らひも、或は木蔭のハンモックに身を委ねての華胥の國に旅立ちしも、空しく昨日の夢と消て果敢なき追懷の種子となりぬ。裁縫の業も、標本の蒐集も、豫期の如くならず、草花の寫生、新體詩、何れも一の面白き作物なくして止みぬ、いつも乾燥無味なりし日誌のみが、思ひ掛けぬ旅行に時ならぬ花を咲かせつ。

書物片手に、明日よりは再び學びやの人となる身の、なか／＼に心忙しく、思ひ出の數々いと多けれど、さりとはと略してかくなん。

志を述べて親しき友に贈る文

天

京都府下八幡　鈴木菊子

時候柄とは申しながら。此頃の暑さを、いかに凌がせ給ふらむ。片山里の、住居さへ、いとゞ堪えがたく

候を、都にて日毎の、御通學、嘸かしと、推し量られ候。此程の、御玉章によれば、兼て御志望のとほり、某門下に丹青の道をいそしみ給ふ由、嬉しく存上候。日頃より、優に秀でさせ給ふ御手並の程も、思ひやられて、やがて、來ん秋の美術會にはと、樂しまれ候。私事は、御陰様にて、恙なう勤め居り候、御心安うおぼしたまはり度く候。あはれ、いつに變らぬ、厚き御心のほど、返す／＼も、ありがたく承り候。げに、ままならぬは、世の常とは申せ、去年の春、宮の芝生に、君と語りし望の光も、運命の手にもてあそばれて、短夜の、果敢なき夢と、相成り候よ。同じ窓の、誰彼の、進む様を、見聞きするにつけ、あゝ私のみは、如何なる月日の、もとに、生れてか、空しく果つる、悲しさよと、人知れず、袂をしぼり候事も、幾度に候ひしか。さるに、此處へ參り候てよりは、飾りけなき里人と、天使の如き子等との、優しき慰めにより、美はしき、自然を友として、身を、神のなしのまにまに、任かせんには、いつかはみ惠みの露に、霑ほひて、又、浮む瀬もありぬべしと存じ、悲しみも薄らぎ申候。母も、年老い候ゆゑにや、人聲しげき都よりはと申候まゝ、此地の土と、相成る覺悟にて、敎への道に、つとむべく今より一層其研究に志居候。君よ、たとへ、都の友草のしげくとも、深山の草を、うとみ給はで、折節の御たより願ひ上げ候。末ながら、いまだ暑さも、厳しく候まゝ、よく／＼、いとはせたまひて、唯々一筋に志す方を、勵み給ふやう、くれ／＼も、祈り上げ候。かしこ。

下谷御徒町三の三三　岡田柳子

地

照りはたゝきて、土さへさくてふ、此頃の暑さ、最堪へ難きに、暫しの凉をと取る扇よ、是やこそ休暇の折懐かしき君の、恵み給ひし物になん。さらぬだに、妙なる妙なる君がみ筆にて、富士のね寫す淸見潟の景色、畫かれたる、見るだに凉しき心地せられ侍り、哀れ戀しき君よ、はらからも及ぶまじう、交らひし

からに、君が御心い程も、大方は推し得られつ、されば己れ、今時局に際し、聊思へるふしを告げ奉りて、君が御盡力を願はまほしきを、なめげとな、笑ひ給ひそ。

思ひ見れば、今や我同胞の君達は、炎熱烈しき滿洲の野に、彈丸ふりくる、其中を奮ひ戰ひつゝある、其艱難忍び出ては、空蝉のはかなき夢さへ、結びもあへず、女子の身のよしや戰場へは臨まずとも、大和撫子の色香にはぢぬ業もがなと、種々思考致し候ひぬ。幸に學びの屋にて、授けられし技藝、斯る折にこそ用ゆべけれ、されば此際心あひたる友垣打集めて、襯衣、靴下の類造り出し、献し奉らんには、聊軍人が、勞苦の萬分の一をも、報ひ得られなむと、思ひ侍るを、拙なき己が心の一ふし、難波江のよしとだに思ひ給はゞ、とく甲斐ある返りごと、おこせ給へや。あなかしこ。

人

名古屋　藤原濟子

軒は松風、庭の八千草、いづれも秋のけしきのまさりゆくに、ひとり大空の月影のみは。しづかにすみて、いぶせき世の、ちりもさはらず顔なるこの夕の哀。御もとには。いかゞ候ふらん。この年頃、同じ園生にをしへ草つみ候ひしも、夏のよの夢にてこそ候ひしか。いにしへのかしこ人達の言の葉にも、はずかしう、こゝ五年六年とりまとまりしわざとてもなう、年月のみあだにおくり候ひし事、今更口惜しう、はた、心うく候へども。さてあるべきやうにても候はねば。せめてははしたなきながらも倚をしへ草の一むら、わけ見ばやとのそゞろ心のとゞめがたければ。たらちねに、こひねがひて、東の都の旅嚢もと、思ひ定め候ひしぞかし。扨は例の、御高意をも、伺がはまほしくて、常には重き筆もかくくだ〳〵しく、ものしまゐらせ候。去年の秋、もろともにとひし、向ひのをかの、ま萩、きちかう、いやが上にも生ひまさり候ひて、今年も人戀しげなる樣に候を、さのみ、こもり居給はで、折々はむぐらふが宿をもとはせ給はずや。都に

ては中々に、えがたき材料も見うけられ候ひなむ。まして軒ばには、なつをまつといふなる、虫の紫鈴虫のすゞろなるにつれて、朝夕になきわかし居給ふものを。

夏季休業中の事を記す

長野　松澤まつ子

夢にまで通ひつるなつかしの古里に歸りつる嬉しさは、中々に旅せぬ人の得知るべうもあらじかし、まづ變らせ給はぬたらちねの御姿拜しまつりたるいひしらず嬉しきに、見渡す田の面は青く波立ち、見返る山邊は涼しくそよぎて、さながら我を慰むるかの如くなり。斯くて朝は池のはちすの花もすが〴〵しう家のすみ〴〵打清むれば、母君が手すさびに床に活けし草花は、顔ふり上げて香をおこし、小猫は鈴の音愛らしく走りまわれど、弟が手飼の小鳥捕へんともせねば、鳥も、のどかに歌ふなり。扨夕べはおのも〳〵一日の業終ひて、湯あみもしはてゝ、夕げのぜんに打ち向ふ折、例も我拙き料理の運ばるゝに、「今日のは又格別」になどの給はるゝもいと樂し。さて或時はたらちねに從ひ參らせて、いで湯に物して心のそこまで洗ひ清め、或時は弟達をそゝのかして、近き野邊にあくがれて、虫の品定め、はた未だ穂はいでぬ秋草なとり〳〵に評ひし事もありき。又幼きよりの友垣の交る〴〵訪ひ來まして、思はずも高ねの月めづる頃迄語らひし事もありしが。扨も己が友垣に別れてより、未だ程も經ぬに、いとうも變りつるものかな、無雑作の束髪ときて丸まげに結びたる君あれば、初々しかりつる君の早みどり子がゝひたるもあり、さては學びの業めで度卒へて、小學校に教のむちをとる君もあるなど、何も志を得つるものを、元のまゝなる我身かな、されど身持あしき女學生の群にも入らで、一筋に學びの道たどりしこそ嬉しけれ、偽だにつけずば石とて磨かぬ玉に勝る光はあるものを、何なげくべき、心の限り學び侍りて、月の桂手折らまほしや等思ふまに〳〵きこえまつりて、此長き暑中休暇も餘すところ五日許りになりぬるよ。

思へば此休み中は家事にたづさはり、たらちねの御心體定め參らむと、思ひおきてしを、たらちねの君のほゝ笑み給ふに心もゆるびて、あまひてのみ過ごしゝぞ、今更に恥かしきよ。

肥後　東津代子

木末になく蟬のこゑは、いとゞ暑をますかと思はれ、軒の風鈴は蜘蛛の糸にかこまれ、風はちとも吹かず暑は日々にますのみなり。かゝる時しも。貴人だちは、避暑旅行とか、あるは箱根のいで湯、あるは大磯の海水浴などに出かけ給ふに、妾はさるゆたけきゝはの身ならねば學問の道に事しげく、家事の手傳とては心のまに〳〵に出來ぬ身にしあれば、すこしにても母人のもとにありて、日頃の恩をむくひばやと思ひぬ。まづ日課表を、つくりて朝の涼しき内二時間は日々の復修と定め、午前は裁縫あるは炊事、午後は暑強ければ、庭の青葉の下ふく風に、種々の書籍をひもときて暑をわすれ、夕方は父君のめで給へる鉢の木にやり水そゝぎ、夜になりては父母はらからまどゐして樂しきものがたりに時をうつし、あるは妹とゝもに唱歌を誦して時をすごしゝ事もありき。過日よりは祖母君の御もとを音づれ、一週間ほども在りて御心を慰たりき。かくだしうち長しとおもひし四十日の休も一日二日となりければ、家にかへりて學業の道具などをとりしらべ、つく〴〵すぎこし方をかへりみれば、別になす事もなくすぐしゝこそ口惜きゝはみなれ。いくたのわが友垣はいかにして今年の休業をすごし給ひけんとおもへば、いとはづかしくおぼえつれど、ありし事を記すになん。

肥後　秋吉輝化子

草木もゆるがぬばかりの暑の盛は、家にかしこまる人だになく、蒲

根の温泉にものし、大磯の海水浴などにいでゆくなり。妾は年ひさしく見まほしくおもひし、那智の瀧になんあそびぬ。そは兄君のある年臘祠にかゝり給ひし事ありて、此地に轉地保養をなしたまひしところなり。げにもやまと島根にならびなき目を驚かす瀧なり。山のたゝずまひより樹木の繁生る景色まで、他に類なく、神仙の靈地とこそいはめ。そのさまあだかも美人の羅衣を着て立てるがごとく、瀧のおつる所は一枚の岩にてかべを造りたるがごとき所なり。其石壁の長さは十丁餘もあるなるべし。水の幅はことのほかせまく、凡そ三間ばかりに見ゆ。瀧つぼの石面に水くだけ、色白きこと白玉のごとく、とびちるさまいと美事なり。木陰になく蟬の聲さへ、暑さをますがごとくおもほゆる、下り立て瀧のべにさまよへば、暑はいつちいにけん、秋風の袂ふくかとおもふばかりなり。されば冬期氷柱相集りて、玉山銀盞を造るがごとき絶景は、ながめえざれど、とびちる沫の中に紅霓の七彩を現すを見、夜は明月朦朧として瀧水にうつるながめ、さすがにおもはずたのしき、夏の外なる日を三十日あまり二日三日をすごしぬれば、休業も已に終らんとす。歸路には名所古蹟をたづね、家につきて燈下にしるす。

本鄕　星野千代子

夏期休業の爲め歸省せしは去月五日、老いたる父母は笑顏もてむかへ給ひ、家人も皆我無事をよろこびぬ。舊友は自ら訪れ來りて四方の話は終日盡くるなく、外に出づれば山又川、故鄕の光景今更に風情ある心地して、何處も〳〵皆な我に慰籍を與へざるは無し、おもしろき日は只夢の間に過ぎたるに、或る日がぜん電報との一聲、こはこれ、我兄上に非常召集の令の下れる也て人々互に無言、父と兄とは何事をか語られしが、いざとて、兄上は其準備に取りかゝりぬ。豫て云ひ居りつる如く、家事萬端の整理は姉上に、父上にはおしなべて心添へ給ふ樣にと、後の事を托せられ、四才なる棒子を呼びて、父が軍と云ふに行てくるからおとなしくして御出でだよ、御土産を澤山上るかられと頭撫で給へば、おみやにうれしきか打

うなづきぬ。其夜村内有志者の發起にて盛大なる宴を開かれ、送別の辭いと厚かりき。出發は翌日九日午前十時との事なれば、人々と共に送り行きしに、早や停車場内の廣場にはテントをはりて、今日の式場は設けられたり。さらばとて兄上は此内に入りたれば、程なく人員點呼初まり、聲に應じて須次に正列する人々いと勇ましくかくても戰場の出立ちかと驚かるるのみなり。されど一度號令の下に彼方に去りては最早此方の人ならねば、言語だにかはすを得ず、見送人は只茫然とながむる計りにて、紅のハンカチーフにて顏打おほへぬ人もありき。

東京　岡田ちか子

いつしかと待ちわびし、夏期休業も早、今日となりければ、いと、うれしうて、急ぎ故鄕には歸りぬ。

峨々たる靑山、滔々たる流れは、懷しげに、我を迎ふる心地せられ、まして、慈の露深きたらちねの母は、我歸省を喜び給ひ、無邪氣なる妹は、愛らしき、手をば打のべて、今日は山に、明日は川に、遊ばましなど、たちさわぐうれしさ限りなく、げに、都のうちに物學びしける、此山水明媚なる、山鄕にあひてはいかで、かくあるべき。清水を結びては、汗を洗ひ、河邊に立ちては、涼をとる、げに、之に勝る樂みあらざらめ。さはれ、我、幾多の同胞は、茫々たる滿州の野に、やくが如き炎熱と、暴惡なる敵國と、戰ひつゝある、其辛苦いかばかりぞや。そを思へば、いかで快樂をのみむさぼるべき。いでや、此後は、已が、力の限り勉めて、聊、軍人の勞苦に報へ、皇軍の、凱歌とともにかへられん事をこそ願ふなれ。

肥後　佐々有鄰子

菊池小學校、鹿本中學校、第五高等學校などの諸學校は更なり、諸の官衙も夏季休業とはなりぬ。其官舍の職員も、生徒も、おもひおもひの避暑地をえらびて、出たつ人ぞ多かりける。妾も小學校の女子部裁縫と禮式との教員なりければ、嬉しくも夏季の休業とて、大阪府にまゐりて、伯父の君を音なひまゐらせんと、汽車より門司驛

さしてはしりぬ。夜汽車に熊本停車場よりものしつれば、門司停車場までは、夢の間に肥筑の國々をはしりすぎてけり、山陽鐵道れんらくの時刻になりぬとて、赤間關までのわたし舟にのりて、山陽鐵道汽車にのりうつりて、大阪府の梅田停車場さしてひとはしりにはしりつきぬ。今日の汽車は。征露の事件により急行の汽車なりしといふ、伯父君の家は此花町といふ所とぞ、夕かげより、おば君の御供して、天満神社に詣づ、

夏ふかき神のめぐみをふしをがみ
いよいよ文のさかえをぞいのる

今日は、祖影を東方にをがみて、從妹君の道しるべにより、官幣社住吉神社に詣で來りて、

みつのからことむけよしし大后
護りましけん三はしらの神

伯父君の御供に侍りて神戸にまゐる、道のついでなれば。尼が崎の法園寺なる、祖先なる佐々成政朝臣の御墳墓に詣づ。

小竹の葉の露のめぐみをかけたまへ
子孫の末の子孫なれども

神戸の多門通りにつきしころは、夜に入りて、月の西山に落かゝるころなりき。

東京　小山染子

一月餘りの暑中休暇其長き時日を如何してすごさんか。なすべき業もなく讀む書もなし、されど、なすべき業もなく讀む書のなきにあらず、只此灼々たる炎熱を如何して送らんか、灼々たる炎熱の日、此長き休暇を學舍に在ることも能はざれば、久しく音づれざりしおのが家に歸省して身を養ひ腦を休むるこそ眞に其良策なるべし。久しぶりの吾が家に行かなゝ事のうれしくて心も心ならず。其夜はねむりもあへず早とくおすのきたれかし。明れば葉月朔日朝暾は燦々として東天に輝き、清き風床を拂ふ、妾はおどろき覺めて支度もそこ〳〵歸家の途につきぬ。車窓より眺むれば山河の景色も今日は常より一きわ面白く見受けたり。やがてはなつかしき故郷の停車場になん着きぬ。姉君には妾の出せし文を讀みたまひてか、待顔に迎ふてはくだされし。停車場より程遠からぬ吾が家にとは着きぬ。門を入りて姉君には先きに上らせ給ひ、只今歸りぬといへば、母君には待ちわびたまひ、皆々打揃ひ出で迎へたり。中にも母君にはこよなくよろこばせ給ひ、よくこそ歸りつれ、其後は恙しきいたづきにもかゝらでつゝがなかりしや、こなたには皆々、すこやかなりと語らせつゝ、いたわりくださるもうれし。やがては弟のそこら邊りに遊び居りしなん友どち二人三たりと小犬追ひまはしつゝ歸り來たりけるが、妾が顔を見るより、こは姉上よ、よくこそ來たれまさしたれと、もうれしげに傍へ來たれば、犬も同じく首を上げ尾をふりつゝそばへ來たるもうれし、されば弟の妾に、よき處を見させんとて犬を引連れ小川のほとりたどり行きぬ、きのふまでも隣家の友がきと、かい、ひろひに來し、小川、たけ狩りせし小山などは早や二た年の夢。弟も犬も、よろこび、たわむれ、足のつかるゝも知らで、弟走る、犬走る、山又山と、かけつゞけて、一條の小川に來たる。水は清くして溢るゝばかりに流れ兩岸の樹木は林をなして北清流に相映じたる樣筆紙に盡しがたし。吹き來る涼風は暑さをはらひて妾の身の邊りには夏來たらざるの心知、やがては弟も犬も疲れしにや足もとおもく、やうやく、歸へりし、程なく日は暮れはてぬ。皆々おくの座敷によりつどひ、晩餐のはしを取りぬ。山の端出る月の影光り清らかに、おばしまのへなる池の水底見えて金魚の五ッ七ッ、妾の居らざりし間の、うつり變りし事など聞くもおかし。中にも、弟の、やよ姉上、吾が内のポチの、つよくなりし事よ。隣りの犬などの中々に及ぶ處にあらずと、ほこり顔にいふもおかし、時に空はいと高ふすみ渡り、月は稍く仄かにさしおたり、只清き涼しき風を頭上に受けつゝ話し居る間に、いつしか夜も深けぬ。いざ臥し給へ話は又あすと、母君に促さるゝに、皆一同床に

入りぬ。絶え〳〵ひゞく水車の音に、夢やぶられて目さむれば、既に明け方近きにや、四方に犬の鳴き聲。いとゞさわがしきは我が内のポチの床下のほえごゑ。かゝる内、窓の方明るくなり行くに、早や夜の明けけんと立ちて、障子打明けて見れば、さにあらで有明の月の影、木の葉にもれて、ほのかにさしたるにぞありける。げにも久しぶりの、我が故郷に歸りしほど、うれしく、又よろこばしき事はなしあゝ。

肥後　千知波楯子

毎年夏季休業中にものせんと思ひしは、かほりも高き菊池川の源なる、水源といふ所にぞありける。されど篠分小舟のさはる事のみにて侍りしを、今年は心あへる友どち、みたりばかりいざなひてゆかばやと思ひたちぬ。わがさとより四里あまりの所なれど、あら金の土さへさけんばかりのあついき日にしあれば、午前三時ごろ起いでゝ、朝飯そこ〳〵にすまして家を立いでける。豊岡といふ村里にて夜はほのほのとあけわたりたり。峰にわかるゝ白雲と共に、いそぎゆく、山田をわたる朝風のそよとふきくるも涼しかりき。さて菊池川をなゝたひにゆくみちすがら、いく所となく流れ落る瀧の白糸をくりかへして見るもいとをかしや。ゆきゆきて山ふかくなるまゝに。何となく心ぼそくおぼゆるをりしも、老鶯の二聲三聲啼わたりぬ。

時鳥名のり出たる夏山に
　老鶯のこゑもなつかし

左右聳ゆる山中にいたれば、石疊しきたらんごとき岩より、わきいづる水の清くつめたき事は、音に菊池の川のみなもとゝて、涼しさいはん方なし、

立よればむすばぬ袖も涼しきは
　おとに菊池の川のみなもと

この水源には四方に名高き菊葉苔といふ川苔あれば。あなたこなたの岩まより、わきいづる水中より、川苔をとり得て、かへり路に

つきぬ。

肥後　岡山登滿子

今年もはや夏季の休とはなりぬ。なつかしき山をながめ、ゆかしき川を渡りて、やうやう故郷にかへれば、弟妹等は門に立いでゝ姿がかへりをよろこびてむかへぬ。慈愛あふるゝ母君の言葉にそゞろうれしさの涙にむせびて、夜にいりて今年の休業には家政の實修をなすべしと母君のおほせられぬ。常なれば、三角港あたりに海水浴などなすをこよなき樂しみとおもひしに、時節がら身保養などなすべくもあらず、ひたすら家政をたすけて、かたはら學の道をいそしみ侍る。なりからはからずも病の床につきぬ。醫師のことばによれば、はかばかしくいゆべくもあらずとありしが、此ごろ起臥の自由なりぬれば、病氣養生のためにとて杖立温泉に物しぬ。山深く水清くして、別天地のごときこゝちせられ、山川草木ひとつとして目あたらしからざるはなく、月の夕はことさらあかぬながめの侍るものを、かたらはん友のなきぞさびしき。只おもひやらるゝは、海外千里の空の皇軍は、炎暑と敵とに戰ひて、其一身は君と國との犠牲になしてあるものを、いかに病保養のためとは申ながら、心ぐるしきかぎりにこそ。やうやう病も全快して家にかへりつき、隈府町名産の菊水ラムネを一杯ものしてかくはしるしぬ。

肥後　徳永廣子

まちわびてやうやうに葉月の一日よりなつやすみとはなりぬ。はらからうちつどひて、たはむるまも樂し。さはあれど、一人の兄君の戰地にましまして、此所にまさぬぞいとさびし。御出征の首途をおくりしをりには。いさましく別しかど、物案じ易き女心のいかにましまさんかと、思ひ出れば、みれんに涙の露のうかぶこそいとはづかしけれ。先づ頃の御消息は塞馬集とかいへる戰地よりなりしか、いといさましかりし事のうれしくて、朝夕家政の事に手をいだし、少しいとまあれば、新聞よむこそいとたのしけれ。されば新

開號外うりの聲は昨夜なつかしくまたるゝぞかし。されど皇軍も目出度進軍のよしなれば、かの國は氣候不順にして一晝夜の内にも四季の別あるよしなれば、わが將校はじめ兵士の苦勞しのぶにあまりあり。かゝるなりしも留守居の姿等いかに暑はげしくともはるかのたゞかひあり。されば女の身とても、かの赤十字の旗の下に。信愛の二字につとめ給ふ婦女子などおもはゞ、おなじ國民の義としておこたるべきや。いざわれもと思へども、おろかなる身のいまだ學道たどる身にしあれば、思ひ願へども力なきことの口をしきまゝにまに、今年の夏季休業もはやすぎなんか。あはれかひもなしに

小石川　松川千代子

暑さの爲とて、學びやも休みとなりぬ。紫陽花の色やゝあせし窓のうちに、玉なす汗拭ひもあへず、そこらの反古、調度、何くれと、とりしたゝむる程、遙に、鳴る神の音ぞ聞ゆる。仰ぎ視れば、さしも限なく晴にし青空は、いつしか、黒雲に蔽はれぬ。往來の人とだえて、迫りくる雷の響きにや恐れけん、只、幼兒の泣き叫ぶ聲のみ、手にとるやう聞ゆ。あなや夕立よ、と雨戸立つるひまもなう、見る〳〵篠つゝく大雨颯と降りそゝぎて、前なる小徑、しとゞにぬれぬ。天地晦朦、轟々といみじき音して、閃き渡る、其凄しさ、頭上に破れしかと覺えし事、そも幾度なりけむ。雨いよ〳〵降りしきり、風さへ烈しう吹きそひぬ。耳にのみ聞く修羅道の矢叫びも、かくや。暫くして、神やみ、雨霽れ、風も和ぎぬ。窓を押せば、風爽に、心地よく、玉水の音、いひしらず涼し。艶やかなる青葉には、綠の玉ぞ、ゆらめける。向ひの山々、後の瓦屋根、世の塵も洗はれて、滴り水づけるに、夕日の輝けるもおかし。涼しく晴れし大空に、天津乙女の帶にやと思ほゆる虹の、隙しう引きはへつ、はては翠濃き山の端に落つる、此世ならずめでたく、魂までも消えゆく心地す。命とたのむ雨露にあひて、心なき草木しも、嬉しと思ふらんかし。

東京　木村よね子

昨日は歸省する人々など送りつゝ、停車場歩きに、始めの二日三日はむなしく過ぎぬ。今年は此所にとゞまりていさゝかにても我思ふ方にいそしまんものと、此一室に籠りてより早や三十日餘り、今は又休日も僅に一日を餘すのみ。其間日よりたゆまるゝ心のみ出できてはか〴〵しう得はたさゞりき。されど我は此度始めて文の道の、いよ〳〵尊くありがたき事をば知りそめぬ。なつかしくゆかしく趣ありて意味深きはたぐう者あらじと思ひ、是に對する興味いやましにましたり。己が机にうづ高き書物は、取々に其姿の如何におかしかりしか、繙めば直に彼に移り、是を繙けば、身は室に在りながら綠の木かげに、涼風をむかふる心地もし或は戰場の面影など、まぼろしの如く現はれては、知らず肌もおのゝくになん。思ひは千々に馳せめぐりとゞまる所を知らず。卷を掩へば又更に、行りし者さへ新らしう今一際のながめおかしや。我は只暑中休業中のことゝして。此一事をかんじけるまゝに物しつ。

前橋　節子

待にまちし暑中休暇もはや日誌の中に綴られぬ、今や日露の交戰酣に、我が同胞の君には修羅の街に暑さ寒さのけぢめなく、幾辛酸を嘗め給ふ際、例の避暑等、健なる身にしあれば思ひもよらぬ、さはれ可惜休暇を空しく過ごさんは心許なき極、去りとて何の企もなき身は、徒に思煩ふのみ、折柄浮びしは過る頃出入の翁の語りし秋蠶種の事よ、そを請ひ受けんか等思ひつゝ、父上に漏らしぬれば微笑み給ひて、覺束無業ならめ、さはれ思ひ立ちしならば、心に任せよと宣ひける故、妹等共計りて遂に購求めぬ。發生しぬれば、初の程こそ箸等にて扱ひもしつれ、日を經る儘に成長しるく、漸々忙しさまさり、隨て朝は疾くより夕迄終日いそしみ、塒を急ぐ烏の聲に夕餉したゝめ、程近き是字寺の晩鐘聞きつゝ汗を湯浴みに清め、さてはらから四人、月さす椽に打ち寄りて、ふ調の唱歌に勞を忘れあるは語りつなせば何處よりか名もなき虫の集ひ來て、己がじゝ其妙なる音を競ひつゝ唱ひ出すも嬉しかりし、斯く繰り返すに、日

數つもれば蛍兒も美しき白玉の䑓と變り、惜しき休暇も夢と過ぎにき、さはれ、其間にえし樂しき記臆は美はしき糸と共に末永く消ゆる事なけん。

吳市　和住千鶴子

はてしなき學の道も限りありてや、土さへさくてふ昨日今日は、學の園も休ろふべく、吾らも懐かしき故郷に歸りきぬ。親しき友と訪ひつ訪はれつ、いづれ樂しからぬはなし。或る日の事なりけり、あつさ云はんかたなく烈しきに、庭もせの緑なす木の葉さへゆらがずなりぬれば、堪えずして、名もしらぬさゝやかなる瀧津瀬のありときゝつるまゝ、友どちはらから誘ひて立ち出でぬ。かはほり傘に日影さけしも絹布のひまよりぞもれし。かくて行く程に一歩〳〵涼しくなりぬと思へば、いつしか一の瀧までぎつ。尚ほ山路をわけ入るに、二の瀧は水淺しく紛あへぎつゝ登るに、駒下駄のやゝもすれば、まろばんとするおかしさ。やう〳〵きつきぬ。たつさへし衣着、瀧つぼに至れば、ほの暗き大きやかなる巖のひまより走り落つる瀧の白糸、音はたゞ雷の如し。物も云はで頭うなだせつゝあるに、青葉茂れる夏木立のひまより蟬ふりたてゝ蟬のなきしきる瀧の音ときそひけんとおもへばいとおかし。かくせしひまに幼き妹の寒けくやありけん顔の色蒼ざめしに驚き歸りし事もありき。長き休暇の日毎を、この瀧津瀬に過してたゞ一日二日の如くぞおぼえし。

志を逃べし親しき友に贈る文

小石川　松川千代子

一入塔へ難澁とせが身になれ〳〵し、夏の暑さも、今日となりては一入塔へ難く候を、君樣には如何渡らせられ候や。其後は、わりなき障り多くて、御音つれも致し參らせず、いかにほいなき事に思ぼすらん。されどこれとて、ゆめゆめ、隔て心ありての事ならねば、親友のよしみをもて、偏に許し給ひてよ。さても、花の下陰に、つきぬ御別れ致せしは、未だ、昨日けふとのみ覺ゆるを、いつしか春もくれはてゝ、青葉ふく風に、輕き袂を飜す頃とぞなりぬ。いにし年の此頃、手をつられて、翠なす山の姿なめで、淡々として流るゝ谷川の水を掬ひなどしつゝ、かたみに語ばかりの隔てなく馴れ聞え侍りし事、今更に御懐しう思ひいでらるゝにつけても、淸けき流れのほとり、いかに涼しき月に歌ひ給ふらむと、いとゞ御浦山しうてなん。まいて、此御暑さに塵の都に居候ては、一しほ靜けき故郷戀しく、休暇のみ待遠しうて、何事も手につかず、つれ〴〵行く月日の早きをかこつ身も、此頃はなどてしかく遲きにやと、おとなげなき事獨ごち、笑はれ居り候。いづれ近きうちに歸郷致すべく候へば、其折にこそ、日頃怠りの罪をもつぐなひ參らめ。はた、珍らかなる、數々の御物語も、聞え侍らばや。かしこ

埼玉　田中花子

思出多き夕空のけはひ哉。

またもや雨の降り出候ふ。御別れ申してより、未三月も立ぬを、はや幾年かの長き〳〵御別れの樣の心地致し候て、變りやすきは秋の空など申候へど、人の身の上こそげに其諺の如變り行者にて候よ。去年の今頃は往なれし彼の樂しの恐に、山茶花廻れる北窓の下にて懐かしの友どちと思ひ〳〵の田舍語、ばては紙に成りての山川風土の爭ひに打興じ候ひし。今は却つて夜毎の夢に入りて、思出の實に候ふよ。待わびし弟のやう〳〵一昨日より休日にて歸宅、嬉しと思間もあらせず、友人の誘ひにて、今朝より彼懐かしの房州へ水泳を習ひとやらに立たれ候ひぬ。

雨はやゝ小降りと成り、止みていつしか雲間をもるゝ淵き〳〵月庭の遣水にうつりて、ゆるうゆらげる、いと必地よのけはひ哉。いつぞや御約束申置し御寫眞、いつ御めぐませ給はるにや、樂しみもたぬものにかく待たせ給ふはあまりに罪多かるべきに。昨日戰地の兄より繪葉書、自ら寄せたる二枚戴き候へば、紀念にもやと露營の方を封じ込候ひぬ、如何御覽ぜさせ給ふや、何とぞ例の面白の評承たまはりたうてお返り言の來らん日を指なりて待ち參

らするぞや。かしこ。

札幌　小山かく子

妾の望みはさしたる事にこれなく、只婦人と生れ来し甲斐には、婦人にふさわしき業して世にも人にも疎まれず、親兄弟の迷惑にもならぬやうして、潔き生涯を送りたしと思ふのみにて候。されば或意味にて三従の教などには耳をかさで、いつ何時にても獨立し得らるべき實力を忘らず養ふことに勉め居り候。職はと問ひ給ふか、さなり、教師、看護婦、産婆、裁縫ひ、按摩、何にても宜しく候、務めに貴賤のけじめあるべきやうなく、貴賤のけじめは業とる人の心にこそあれと相信じ居り候、わが希望は教師たるにあれど、時と場合によりては按摩たるも苦しからず、否或は夫こそ意外の愉快ならめと存候。

嗜好は詩歌、音樂、繪畫の三つなれども、音樂は最も好ましく、うきつらさの折は云ふまでもなく、月に、花に、水に、思ふ如く謡ひうべくば此上なき樂しみなりと信じ、暇ある毎におり合せの樂器かなでをり候。

愛と涙とは婦人の生命なるべく、生ることの生命もて死せる職業、死せる生涯、云ひうべくば死せる運動、即ち器械的に男子のため弄ばれんことこそ、生涯の恨事に候。

いつの間にやら話に枝が生じて冗長に流れしも、妾の意見は大略右の如し、御参考ともなりたらんにはこよなき滿足に候。

肥後　佐々有鄰子

早涼いたる此ごろの時候、いかゞ御くらしたまふやらんと、一筆啓上いたし候。君のまします都の空は、わが山里の秋色にはひきかはりつらめど、軍人たちは、千里の波濤を越て、外國に戰衣を、さらしますらん。あはれなをしき事にこそ侍れ。つく〴〵思ひ参れば、かよわき女の戰場に侍りて、むかしの巴女のごとき馬上にありてのはたらきはかげでも出來ざる事にしあれば、看護婦の志願を思ひ立侍れども、無學短才の姿に候へばとても及ばぬものと存候ゆゑ、手に習ひおぼえし白の木綿を織いでゝ、軍醫師たちの傷病治療の萬分の一の保助にも獻納せまほしく候へ共、如何なるものに候や、折あらば御意見御洩し給はれや。

肥後　下知波橘子

みことのりくだりて戰のひらけしよりは、いづこの里の軍人も、皆召集せられて、遠征の途にのぼらぬ人無く、陸に、海に、連戰連勝のいさましき音信をきくにつけても、やんごとなきあたりの人々さへ、看護婦となりて。傷病將士たちをいたはり給ふとかや。いかでわが身男に生れたらんには、軍夫になりても出征して、犬馬の勞をとらんものをと、思ひ侍れど、かひなき女の身にしあれば、せめて九牛が一毛にても皇國の爲につくさばやと思ふものから、かねて心へだてぬ友がきの君にはかりまゐらせて、白木綿を織出で繃帶を造り、其筋にさゝげばやと思ひ侍れば、妾に同情をよせ給ひて、一臂のちからをかしたまひてよ、わが親愛の友がきよ。

肥後　岡山登諒子

おこがましく侍れども一筆きこえおくるになん。今や我國は露國と砲火を交ふる時とはなりぬ。忠勇なる我軍人は、炎熱をおかして、萬里の海をわたり、軍務を盡くしてあるなり。まことは開闢以來の大事變にして、世界萬人の刮目する時なり。されば大日本國民わけて婦人たるものゝ、此際よろしく愼重の態度をとりて、平生の心を失はず、いかに兩國間の砲火はげしくして、危害を聞が如きことありても、怠らず平生の務めにふくし、家事をとゝのへ、身を修め子女を養育し、節儉をおもんじ、内顧の憂ひなからしめて、永久に堪べき戰國の用を便ぜざるべからずと覺悟いたし居候。これひとへに軍國婦人たるものゝ務めと思ひ侍る、御心やすき中とておろかなる身をもかへり見ずきこえおけまゐらせ度候。かしこ。

肥後　秋吉輝尾子

三伏の頃とは申ながら、暑さいと堪がたくなん覺候を、御もと樣にはいかに御くらし給ふらん。定めし廣やかなる御庭内に木立やり

水など清けき御住居なれば、御きげんうるはしくいらせられ候はんと嬉しく存じまゐらせ候。次にこなたにても皆無事に日をおくり居候まゝ、御案休め給ひてよ。御承知の拙宅いぶせき小屋にて、毎日いとくるしく候へども、今日の身の上思ひ候ては、まことに心よきすみ家とうはさのみいたし居候。いつも、御もと様と、かのなしへの席にてさづかりし師の御訓になたがひそと、かたく語らひ参らせしは此かゝる事あるときのためなりしなり。戦初まりてより上は将校の君たちより、下は兵卒まで、君國のためにいさぎよく盡す心のゆかしさは、妾ごときのいかでおしはかり得らるべき。御もと様にはいかにおぼしめしたまふにか。妾は微かけの費にてもさゝげて、戦地にましますますらをの家族等の御もとにまゐらせんと思ひ侍れば、つゝましきこえあげまゐらせ候。あなかしこ。

肥後　徳永康子

ひるのまはおなじ暑さに暮され侍れど、夕の空ふきわたる風も、すむ月影にも、秋のさまみえて、なつかしきこゝろにおはしまし侍るに御けしきうるはしくわたらせ給ふよし、御目出度ことにこそ。其後はうち絶はべるを御戦場よりは御音信のはべりしや。手前の兄事も某の戦地より消息をよせてより、此の日頃はいづこの戦争に侍るにやとうち案じ侍るを、日々の新聞紙は大勝利の報のみつたへられぬ。勝利を得るるには數多の死傷もあるよしなれば、皆共に、赤十字婦女子のやさしき看護にて傷病兵士もすこやかにならせ給ふとぞ承る。信愛の力ならぬはなきぞつれしき。兄が出征のをりにも看護婦を出願せよとまなしのこしおき侍れど、願いづる道もたどたどしければ、一人心をいためんも愚のいたりなれば、おもふまゝをきこえ上はべる、御志のほどをも。もらさせ給り度、ねぎ奉るにん。かしこ

奥市　和住千鶴子

白紗の夏衣の衣だにたふましき日頃の暑さを、いかゞ過させ給ふらん、願はくばいたはらせ給へや。こゝもとにも變りなう侍るまゝみ心安うおぼしてよ。さても隔てなき懐かしの君よ、已が思ひなぞ聞えまつる。皆の程かやりの烟のまにまにくよみ給へかし。君しろしめすがごと、我つまの御國の爲に首途してよりは、日毎夜毎、汐風さゆるから海の沖つ邊にやすまよひ、あるは濃き霧におやめもわかぬひまを進むらんと思ひやり侍れば、げにげになす事もなき身のいとおほけなく思ひぬ。されば軍人の妻として、わづかながらも國の爲に盡さんと思ひたちぬれど、わが住む里の病院には女は容れられずときく、美はしの會には妾ら賤の女のいかにとも詮方なく日を送りつる本意なさよ。おしはかり給ひねかし。されど、いつの日か志のなる時もあるらんと、空たのめかは知られど思ひ侍るにこそ。おこなる事ども述べてお笑の種とぞはなるらん。まづは御見舞をかねてかくなん。あなかしこ。

群馬　林　康子

なつかしの君よ、如何に、おはしますらむ、妾も恙なう、暮し居り候ふまゝ、御こゝろ安ふ思し召されよ、去にし日、きく子の君の来給ひ、いとゞ、面白う、くさぐさの物語いとたけなはになり行きて、御軍の話にとはうつりにき、さる程にきく子の君は、如何にもして、君恩の萬分が一をも、つくしたく、心ははやれども、身はたなやめの悲に、と、うちたんぜらるゝ。妾も共にはしたなく考へつ、されども、今は、たらちねの膝下にありて、物まなびするみの、如何にせんすべもなきものから、せめては、師の君より習ひし品、あるは飾りの代をはぶきていさゝかなりとも、軍資の一端にもとの心得に候ふ、なれど、君には、如何思召候や、常に心あひたる君と我れ、互に隔てじへだつなと、誓ひし言の葉の忘れ難くて、残りなく心中をぞ明し参らせぬ。これもし、成りたちなばきく子の君のよろこびのみかは、それこそ妾の願なれ。

ちか子

最も親しき梅子の君よ、古語にも月日は流れの如しと、むべなり

〳〵、過ぐる頃、君様には都の地にて、避暑し給ふとて、立ち出玉ひぬ、其折妾も御見送るとて、共に停車場に至り志ばかりの名殘りを惜まんと、語る間も無く、心なき汽笛の聲に、いともつゆけき袖をわかち參らせしは、未だ昨日今日の如く思ひしにいつしか夏と過ぎ、秋と暮して、はや三年の夢とはなりはべりぬ、そも別にのぞみ君には何とのたまひしか、妾にも必ず後よりと、我も又必ずと約せしを、君にはよも忘れまじ、我又忘れんとしても忘れ難くてなん、君様には前途いよ〳〵望ある、幸多き御子に生れ給ひ、我又前世如何なる惡緣にや、多年心にゑがきし、望みも今は世の仇浪に誘はれて望みの綱の緒もたえ〴〵に、思へばはかなき空想にてありしか、決して〳〵さには有らざるなり、とは申ものゝ日一日と悲しき運命に漂ふて、むなしく月日を送り居り候。さりながら妾のむれにきざまれし鐵石心はいつか必ず達せんものと、いつを限りともなき悲境に沈み居り候。あゝ同情深き梅子の君よ、我又君とわかれて親しく語ふ友もなし、たゞ希ふ狐狸なく片山里に住む、一人の友を忘れ給ふなく、學びの暇の折々には、都の事情など筆にして、不幸なる我を慰めてよ、我はせめてもの、我が樂しみに候ものを。あなかしこ。

短文

避暑日記の一節

増田つや

この夏は何地にと思ひ煩ふ折しも、ふと心に浮びしまに〳〵、俄に親しき友を誘ひて、房州なる館山に遊ばむと出で立ちぬ。さすがなたゝる地なれば、眺望はさらにもいはず、涼しさなど夏をも知らぬなるべしと思ひつゞけぬ。早や出でなんと濱邊に立てば、冷かなる風輕く袂を翻へし、渺茫たる蒼海の遙かかなたに雪を頂ける富士を望みて、鏡の如き海を蒸汽船は煙を吐きて水をわけつゝ進めば、右手は青松を浮べたらむ如き沖の島、鷹の島間を、風に孕める白帆のをちこちに見ゆるは、さながら畫の如く、釣する海人の呼びこゑも手にとる樣なり。磯打つ波は濱邊の松に響きて天然の樂を奏しぬ。吹琴を手にせる三々五々隊は、何處の人々なるか、磯づたひに名古はかなに臥龍松はかしこといふに、行く行く濱邊の奇を賞しつゝ、發見につけば、名の如くさながら龍の臥したらむ如く、苔むして幾年を經にけむ、奇らしきこと限りなしどうどうと磯打つ浪の音に、ふと見下せば、奇巖突出してほらの如きあり、遠きより打ち寄する波碎けて雪と散り、煙と飛べるさま、例へん樣なし、二三の腰折などものして、これ等なれたる地へせめてもの名殘とせしは、八月三十日なりき。

夏の夜琴を聞く

埼玉　戸田折香

黄金もとくる晝の暑さに堪へ兼ねて、端近く涼み居りしに、松の梢に差し昇りたる、十六夜の月、影涼しくさながら秋の月にもおさ〳〵勝る心地のせらるに、そゞろに憧がれて、何處を知るべともなくやをら立ちあがりて、歩進む方へと十六夜月に誘はれて、ゆくりなくも天かゝる浮橋に彳みて、あたりをうち見しに、橋の傍なるいぶせき小舍の、三ッ二ッ圓の月に照されて、折り〳〵青葉のうれ吹き渡る風のまに〳〵、箏の音幽かに聞ゆ、床しさに我知らず音を知るべに辿りぬ、斯るいぶせき小舍にもよく聞けば、嵯峨野の奥の想夫戀の調べ、末の松山木かけて契り結びし、其の人の無情をかこちし小督の局にも似たる調かなと、暫し聞く程に、高く低くあやに妙なれば、如何なる人の調べなるかと、知らまほしさに、尚ほも歩を進むれば、漸う〳〵箏の音もたえ〳〵て、音のふものは荒川の、岸打つ波の音、玉落る水鳴の瀧の響のみ、やれ垣に咲き匂ふ、夏の黄菊白菊に置く露の、數々に哀れ理想の光はきらめきつ、中に何をかこつか、鈴虫の聲々いやまして、哀れを添ふる折りしも、天の戸渡る鳥の一聲に、ふと雲井の空を見

あぐれば、只有明の月のみ獨りすむめり、嗚呼我が身は如何なれば、かくも露深き草のいほりには、さまよひきしと、なごりをしくも家路をいそぎぬ。
　今宵しも十六夜月に誘はれて
　　思はぬ箏の調べ聞きしか

夢　　松山　しづの女

我が身は常にはかなきうたゝねの夢路にさへ、戀しき〳〵友のいます、都の空をのみたどるのである。
『清子さん、アノあつい土用中でも、夜もやはり、針仕事をなさるの？』
『えゝ……』
『かはひさうに、蚊がくうでしよう……私なんか、毎夜、ヤレ、エンマ様の緣日である、杯申ては、家内そう連れで、散歩に、出かけますの、いつも路傍に、ひさいでゐる愛らしい虫の聲を聞ては、なつかしい、故郷の、畑畔の出聲を、忍ぶのよ』
『ソー、マアうら山しいこと、とても此田舍などてはさういふ、高尙なことは、出來ませんワ、…だから、私なんか、つまらないの』
猶親しき中には、おぼろげなる、なつかしい言葉が交はされてゐる折しもかしましきよびりんの聲、さながら二人をさくるやう……『オヤ……電車が……』フト目をさましてみると、今の音は親しき友と語りつる都大路の電車ではなくてあはれ〳〵、淋しき賤が屋の門打過る馬子の鈴の響……あゝはかなの夢路なるかな。

折にふれて　　長野　上野よし子

涼しげに、さゝやく小川の遣り、緣の木陰に、詩集とりいで、好める數々打吟じけるをりしも、かすかに、もれ來し愛らしの歌ごゑ、耳傾くれば、請歌の一曲、やがて吾前を同胞とも覺しき二人の小兒の、愛らしきは花束手に、凛々しきは號外もちて、いと嬉しげに、うたひすぎぬ。あな、愛らし、あな、勇まし、と、しばし見送る程、姿はいよいようすれ行きて、……思ひきや、……とある木立の中、まだ新らしき墓標のかげにと消えぬ。……あゝ、彼の二人よ、そもいかなる人のおくつきをや弔ふ、何をか爲して。……彼の花束、……彼の號外、……

高峯の月　　札幌　小山かく子

そよ〳〵といやに冷しい風が夕張嶽のてッぺんを撫ると、薄黑い雲の片々が行列正しく西の方へ飛で行く。町のドコからかあはれげな俗曲が洩れて來る。夫がびゆーと云ふ汽笛の聲の爲に紛れて不潔な細長い市街地は忽ち黑烟に包まれて仕舞ふのである。見ると向ふの山の端が次第に明るくなツて來て、大きな月が覗き初めたので、暗黑なる町も再び其光明を浴びることが出來た。すると炭堀り坑夫の歌も冴えたる月の光りに同化されて遠く〳〵響くのである。多分彼等は無意識に叫ぶのであらうが我には夫が感謝の辭のように感じられた。

子供の泳ぎ　　札幌　關八重子

だぼん〳〵と音がするので、はて何だろふと思ふて見ますと、遙下の方で十一二才の子供らが、さも心地よげに水をあびて居た、『おや』と思つて見て居ると、今まで二三人しか居らなんだ子供らが、俄に七八人となつたのは不思議〳〵、澁紙の如く日にやけた小供らは蛙の如く巧に泳ぐ、くゞる、逆立ちをやる、自然に茂れる青葉の下に、誰かとまごう許りの清流に、此の無邪氣で有益な體育。
暑さを水に流しての游水術研究、夫よ不思議の種子。

樂しき散步　　前橋　林廣子

姿、一日、涼みかてらに、友垣二三うちつれだち、螢狩やせんと出で立ちぬ。皆々、扇團片手に、草かきわけて、やうやう見つけ得しを、見れば、僅に四ツ五ツあるのみ。それを家へのつとにして歸らむとせし折しも、遙か向ふの大路より、年まだ若き男の子等が、露軍討つべし、破るべしと、軍歌の曲一としきり、遠くかすかに聞えけり、あゝまだ耳に殘りけり。

螢を貰ひしを謝す　大阪　池田英子

母上樣と昨夕宇治の川岸御逍遙の折しも、御手に入りたる名物のほたる、ことにすくれて光の見事なるを、一籠御土產として栽き有難く存し候、すく樣露草ともさしいれ今より文のまことに友として奨勵申べく、くれ〴〵も御禮申上候。かしこ。

樹陰　同

今日しも訪づれ玉ふ人もなし、樹陰讀書も又格別ならめと、松林の中にハンモックを釣し、詩集手にして横はりぬ。若葉の光きらきらとかゞやき下々は露草や月草や黃なる花或は高く或は低く敷けるがごとく咲き亂れ微風そよ〳〵と梢渡れば、葉は動き松はさゝやき花うなづき佐保姫の緑亂髮とや見む青柳の糸、忘れがたき人のおもかげさへ、目のあたりに見ゆるが如き心地し、松のしげみをよけて照り出する大陽は、餘念もなく我が顏を折まもりぬ。

樹蔭讀書

緑なす若葉の蔭に學ぶなり　ほたるや雪の光なくとも

春の日の思ひ出　石黑やす子

月日の流るは早いもので、火桶がこひし冬の日もいつしかすぎゆき、今は重ね着さへ耻かしき春の時候となつた、外を見れば日の光りははでやかにてらし、小鳥どもがあちらこちらにむれつどひ、其親とおぼしきが餌をあさりては、木の枝の上なる子供にあたへて愛しつゝたのしく神樣を讚美するがごとく、野面は菜の花の黃色のもうせんなど敷きたるかとばかり、まさかりなるに、れんげ、たんぽゝすみれ草などわれおとらずと咲きそろひたるあたり、花の香とらんとてか黃白の小蝶のたのしさうによろこびてはたらく、樣の、實に心地よく、感ぜられて、たれやらの「人の一生は幼き時にあり、幼き時は即ち春なり」との言葉あるを思ひ出し、アゝ小蝶も其如く一番たのしき時は春の花咲く頃で、この小蝶、さもよき花の香をさがしおるものを、我等人間は幸に萬物の靈長としてありながら、何事も考ふることもせず、うつかりと一生をすごす事の恥かさよ、草木でさへも春になればあたゝかき日の光りの惠みに青々となりて、人の心をうごかすものを、我等は人間として人を善きに導く力もなきは、草木にもをとる者か、アゝ吾れも神樣によりて惡しきをすて、善き花の香たづれ、ちゑと力を受け、世のため國のため、はた又人のために心をよせ、少しなりとも此の世をばよきに進め、やがてうるはしき果をむすぶなりなまたんかなど、心にうかべるまゝなかくは記しつ。

短歌

傷病兵慰問　三河　柳原てる子

血しほそれも花とかなりぬ君が爲いくさのにははにおひしいたては

軍人　肥後　佐々有鄰子

いくさ人こゝろそろへてうちはなつ大砲小つつおとのするどさ

妻のちかひ　下野　井上何子

勳功たてゝかへりまさむ日を我またん子供相手に田はたかへして

夕立　　下野　井上滋子
二荒山あしほのくものめくりきて茶臼のさとに夕立のふる
田草とる小田うるほしてなみ杉のこのますぎゆく夕立のあめ

題しらす　　松原みれ子
われ知ずよろつ代高くさけびけり勝ちし知らせのこのにひふみに

早苗　　東京　大塚里子
夏人も兄も軍に勝て早苗とるをとめかうたもいさましきかな

長野　田島みよ子
やへ雲のそらのかこみも打ちとけてかけさやかなり城山の月

斥候に付て　　東京　北村楓
いかにせむ行くてもわかすみちもなし飛駒あつむ秋の夜の月

あはれ白百合の花　　築地　山崎女苑
殿の上に涙のよせたる白百合にむすひし歌を人誦してゆく

札の君にまゐらす
夕月の與思ひいてゝふでそめぬあきは石狩詩によきところ

初秋月
なつの雲ちぎれてみそらあきの色月に精あり瞳こらせば

友の戦死を　　北海道　小山かく子
やがて咲く色香も見せで散りし花汝か理想にそはぬ運命よ

軍人　　熊本　指原みさを
外國のあひすなにかあらむ敷しまのやまとますらをの力ためさむ

出征中の兄に　　長野　上野よし子
進め君みつるぎはきてつゝとりて魂のあらわしかりつくしませ

述懐　　長野　堀すよ子
何事もおもふかまゝになり行かはいかに樂しく嬉しかるらん

安藝　　安藝　田坂環子
うたのみをあさる火影かよひやみの雲のなみまをほしうつくしき

櫻　　播磨　森脇董子
散るものと思へば庭のさくらばな咲くたにをしき心地こそすれ

ふみのうへにうけてながめぬ學びやの窓にちりくる花のひとびら

折にふれて　　山梨　櫻武子
しほあみにことしは行かで過さなん征まし父かおとなまもりて

親友　　播磨　森脇董子
親もなくはらからもなき我みにはみやこの君ぞいよよしたはし

三日月　　野露
友とちとかたるたそかれ月おちて露のしとれにすゝむしのなく

日露戦争の歌のうち　　美濃　大隅滋子
よにうとき山里ひともこのころは軍はなしのほかなかりけり

游泳　　肥後　宗方儀子
みなこかすこの日さかりも白川にかはたちすなるさとのますらを

釜狩に行んとて友の許に　　北見　中川伊代子
君よいさとくとひきませもろ共にいさゝ川へにほたるかりせん

軍人　　肥後　佐々小琴子
そびらにはたまをうけじと玉ほこの道ひとすぢにすゝむますらを

舟　　麹町　高橋津音子
かちいくさ勝ときあけし舟はたにみ旗なびきてよはあけにけり

郭公　　播磨　森脇董子
ほととぎす影こそみえねあか月ののこれる方にこゑのきこゆる

朝かほ　　麹町　高橋津音子
露ながらにほふ朝かほ花みれはつるよりつるに笑そこぼるゝ

艦上月　　肥後　徳永茂子
軍艦にかゝやきわたる月影はますらたけをか魂なるらん

東京　大塚里子
上野の山の花さかばと契し人のひさしくおとつれざりければ五月中頃よみておくりける
上野山ちぎりし花はちりぬれど青葉のそよとおとつれもなし

社頭新竹　　肥後　清田初子
今年生のいがきの竹に風たちぬかみのみまへのちりはらふらん

紅葉似錦

見る人のこゝろもてさへも照妙にやまはもみぢの錦おりいたす　肥後　千知波橘子

瀧

山ひめのさらせる布なきてみれは心にかゝる瀧のしらいと　肥後　德永廣子

紅葉似錦

露霜をたてぬきにして高はたの山のもみぢはにしきおるなり　肥後　友永章子

池蓮

にごりたる水をはなれておのれのみ涼しくすめる池の蓮葉　肥後　田尻成子

殘暑

萩の葉にそよと音するかぜもなし夏にかはらぬけふのひざかり　和泉　福原葦子

風告秋

秋きぬとつけの枕のかぜそとはふくるはしぬの秋にそしる　肥後　板坂惟子

涼しきゆふべ河邊にて

水のおと柳の風も夏のゆふべさらにすゞしきこゝちこそすれ　肥後　服部倫子

右田常秀が初兜祝につらなりて

とりよろふかふとの星の目がやく家の風をはふきつたへてよ　肥後　佐々小琴子

近所の人漁舟にのりて漁をなし居たるに舟くつかへりて死せしときゝて

今さらに定めなきよそしのはるれきのふ見し人今日はてんとは　北見　中川伊代子

漁舟くつかへりて溺死せし人のつまにかはりて

大ふれとたのみしかひもあら波のそこのもくつとなりしかなしさ　壬生　松岡よし子

綠蔭讀書

風清き若葉のかげに書讀みてけふの暑さを忘れぬるかな　東京　小圷波留子

友

世のなかに得やすきものは友なれとまことの友そまことすくなき

問

かりこものみたれし心ときかれて今日もゝたへて暮しぬる哉

兼題投稿心得

一投稿歌文は女子は何人にても隨意投稿することを得

一投稿用紙は文は半紙和歌は同上又は端書を用ふべし但題異りたるときは必ず別紙に認むべし

一題目の下には必ず住所姓名を明記すべし

一文字は必ず楷書にて句讀點を施し鮮明を主とすべし若し二葉に渉るときは必ず紙捻にて綴り置くべし

一文は題毎に用紙を別にし一行十五字詰に認め三十行を越ゆべからず

一歌は一人一首若くは二首を限りとし上下句中二音の漢字三字を入れ其他は悉く平假名にて認むべし

一投稿宛名は國光社女鑑編輯局とすべし

一總て以上所記の規定に違ひたるもの及び〆切期限に後れたるものは採用せず

一原稿〆切期日は雜誌發行日の廿日前則ち十月分は九月十日十一月分は十月十日とす

一當撰者には文は一圓(天)五十錢(地)三十錢(人)歌は其半數に當る計算を以て各代價相當の書籍を呈す

小説

雜記帳

幸田露伴

蓮花を視れば瓣々皆美しく、伽羅を碎けば片々盡く香し。馬鹿は障子の開閉から愚しく、心無は下駄の脱ぎやうにも知るゝなり。おもへば苟且の振舞いさゝかの事の端にも、其の人々の本質の見ゆるは、さて是非も無き道理といふべし。

例無き大戰はじまりて、勝負の勢は未だ定まらず、いつまで新聞賣りの鈴の音の騷がしい沙汰の續くやら知れぬ狀態に、富めるも貧しきも心を締めて、奢を省き入用を少くし、萬一の時に困らぬやうにと、それ〴〵の身の仕覺を仕たる頃の事なりき。婦女は分けて胸小さければ、末を思ふ心の強くて、何家の女房も家のため身のため油斷無く氣を配るが中に、麴町は番町にて高からず低からぬ中通りの生活をする然る家の妻、下々は皆眠りて、兒童等も罪無き夢に耽れる夜半の靜なるを好き機と、今しも書見を廢めて此方に振り向ける夫に對ひ、ねえ吾夫、過般も一寸申し上げかけましたが、御客來のあつたので其限りに致しました彼の生活方の御談でございますがねえ、と機嫌を伺ひ〳〵徐々に說き出したり。

主人は寛大なる態度の何取繕ふ樣も無く膝近なりし卷烟草を取りて、心長閑に火を點じつゝ、フム、書生を減らして呉れんかといふ談かネ、何樣も卿の言ふのも道理だが

居狎染んで居るものを出すといふのは憫然でならんのでナ、つい彼の時は卿とも爭ひかけたが、と云ひさして妻の言ひ出づる趣旨を聞かんと待つもの、如く口を噤みぬ。

妻は夫の心を害はじと一としほ面を和らげ語を靜かにして、それはもう仰ある通りでございます、居りますものを出すといふのは妾に致しましても好い心持は致しませんものを、まして吾夫の御氣性では定めし可厭に御思召でございましやうが、どうか最終まで妾の申すことを御聞き下さいまして、妾の申し上げることを御取上なすつて戴きたうございます。何と申しましても斯樣いふ世の中の態でございますから今までのやうに年が年中追はれてばかり居りまするやうでは、妾が心配で／＼堪りません。商人は皆不景氣／＼と申しまして懸倒れにならぬ用心ばかり致しますから少しの拂ひ殘りでも今までとは違つて喧ましく申しまするし　用をいひつけましても前の懸が濟まない中は好い顔をせぬといふ位、損を仕まいの算段にばかり掛つて居りまする、斯樣いふ切辛い世の中になつてまゐりましたのですから、此方獨り今までのやうな氣で居りましても追ひつきません、左樣で無くても兒等は段々と大きくなりまするし、少しは彼等のためにも用意を仕て下さらなくつてはなりませんのに、憫然だ／＼で他人ばかりを好遇して遣つて吾家の兒が行末は何樣なるかも搆はずに御いでなすつては困ります。妾も出來るだけ骨を折りまして二人使つて居りました婢も一人は下げました程ですから、何樣か六人の書生を悉皆とは申しませんから一人か二人に仕て頂きたいのです。彼の書生等が緣合續き合で逃れぬ關係があるといふのではありませんし、たゞ吾夫が仁慈深くて靑年を御愛憐りなさるといふところから、同縣同國といふだけを緣に參つて居るものどもですもの、何も此方が苦んでまでも世話を仕無ければなりません義理合は無いのです、ですから何卒性の良い見込のある男だけを殘して、其餘は悉皆他處へ遣つて頂きたいもので、此事はこれまでも度々申し上げや

うとは存じましたが、吾夫が青年を御引立てなさることが御好で、御樂みのやうに爲すつて居らつしやることを、傍からいろ〳〵申すのも御氣の毒と存じまして控へて居りましたが、斯樣いふ時節になりましては仕方がございませんから、御氣に障るとは存じて居りながらも申し上るのですから、何卒御聽きなすつて頂きたうございます。と諄々として細かに說きたり。

男は既に吸ひ終りし卷煙草を棄て丶、また新に一本に火を點じて吸ひ初め居しが、その灰を輕く打拂ひて私の氣性も理想も知りぬいて居る卿が、左樣いふのだから、決して卿のいふことに無理は無からうとおもふがノ、何樣しても今までのやうに畜生を置いて居るわけには行かんといふのかヱ。と飽まで寬厚の長者の物いひ振りなり。

妻はいよ〳〵熱心に、一家の內務大臣たるもの無責任の言葉は出さずといふやうなる意氣組にて、ハイ、何樣も彼此を考へますと、何處までも今までのやうに仕て居りましては不利益と存じます。たゞ無暗に他人の世話をするのが可厭故に申す妾の得手勝手ではございません。先づ金錢の上だけでも御考へ下さいまし、貴夫の御所得が一ト月月給や何や彼やで百二十圓ばかりでございましやう。その中御鄉里の御父樣の方へ御上げなさる御小遣と此家の屋賃とを引きますと、それ、もう僅九十圓足らずになるでございましやう、吾夫はまことに寬大で居らしつて、萬事妾に御任せなさり限りで、此樣な談を今日まで聞かうともなさらないのですから、詳しくは御分りにもなりますまいが、その九十圓足らずの中から、所得稅も出します、赤十字へも出します、やれ何の會彼の會といふのへも、少許づ丶ですが集せて見れば、可なりの額になるだけ出します、吾夫と妾との生命保險の懸金も出します、せめて保險の金額でも大きく仕て置かなくてはといふところから懸金も少くはございません。入らなくても御差支はあるまいとおもふ會

やなんぞへまで例の御氣性から入つて居らつしやるので、生活以外に毎月出まする此等のものを勘定して見ますと、それもう十何圓といふ額が消えて仕舞ふではございませんか。ですから正味生活に使ふところは七十圓が欠げるほどです。吾夫は可い〳〵と仰やつても世間が許しませんから、高等官は高等官だけの服姿も仕て頂かなければなりませんから、默つて居らしつても、洋服から和服、靴、帽子、それ〳〵妾が御心付申さねばなりません故、時節〳〵には苦しい思を仕ましても人中で御笑ひなされぬやうに致しますし、又三人の兒童も見苦しくないやうに致して遣ります、妾は何樣でも好いに致して内にばかり籠つて居りまするから、髮も手束ねに致す位にして居りまするが、吾夫や兒童等の服裝から、また雨や雪の日其の他式ばつた日の吾夫の御車なぞを數へて見ますと、是も一ト月に仕て見て可なり掛ります。さあ其處へ持つて來て書生でござひましやう。妾が參りました時は一人でございましたが、それから入れ代り立代つて段々殖えて、今では六人でございますもの、全くの食料ばかりでも一人では僅少ですが多勢では荷になります。第一人增せば水增すの道理ですから、下婢が二人居りましても、妾に吾夫、子供三人、書生六人、それに婢二人、都合十三人では、婢の働きも容易ではありません。それは書生でも取次を仕たり庭掃き水撒き、風呂の世話位は仕て呉れますが、男子と申すものは、家内の用を殖やすとも減らすものではございません、その證據には書生の多く居りまする現今の方が書生の少うございました時分よりも家中も整頓いて居りませんし、椽側なども曇つて居りますのを見ても御解りになりましやう。ですから、子供が三人のところへ六人も書生が居りましては、婢一人に妾では、如何に妾が八天狗働いても、中々追及くことでございません。經濟も苦しくて〳〵堪りませんから、自然吾夫には御氣の毒でなりませんが茄子に油揚の「松もどき」や、推茸をあしらつた八杯豆腐のお汁位で辛抱して頂かなければならないことに

なります。此處を今書生一人に仕て頂きますれば、婢も一人で間に合ひますし、金錢を掛けないまでも妾の手を掛けまして、少しは滋味のあるものも差上げられますし、家の內も玄關に御團子の串が轉がつて居たり、沓脱に煙草の吸さしが棄てゝあるやうな亂雜なことは無くなります。そればかりではございません、呉服屋八百屋魚屋米屋へ勘定の殘るやうなことも段々無くなりますから、此方が強くなつて買物にも損は見ませんし、長い間には不時の入用にも躓かないやうな少位の貯金も出來ましやう。現今のやうでも、吾夫の好で爲さる事ですから、これで可いと仰われれば、それまでゞすが、世間は段々辛くなりますし、若し此の中で妾でも病ひましたらと思ひますと、家の中が何樣になるだらうとおもひまして、實に心配で〳〵堪りませんから、何卒書生を御減らしなすつて下さいまし。女は吝惜だと仰わらうかと今までは辛抱に辛抱致しましたが、此樣いふ時節柄になつてまゐりましたのですから書生を出しましたとつて誰が吾夫を惡く申しましやう。當節は何家さんでも書生をお置きなさる事は廢つて居りまするのですもの人は却つて吾夫を御物好位に噂して居りましやう。いゝえ實際吾家位の收入で吾夫のやうに書生を御憐憫になるのは、何方かと申せば御物好の方です。どうか御願ひでございますから妾の申しますことを御取上げなすつて下さいましと平生より言はん〳〵とおもひ居しと見え、積水を決するが如く演べ立てたり。

成程ナア、然し何樣も折角私を頼んで居るものを逐ふといふのは憫然でノ、第一誰を殘して置て誰を出すといふ標準も付くことでは無いし、氣に入つたのを殘したら依怙贔負に當つて、一二人の餘のものからは恨を受くるわけだからノ、と主人は猶言を左右に托して妻の言を納るゝに澁れり、

されども妻は猶屈せず、聊か面に笑を泛めて、左樣仰あるのも、豫想つて居りました。蛇度終局には左樣仰わるだらうとおもつて、それに就いても考へて置きました。木槵子は何程彩つても矢張黑うございます

性の悪い書生は、御世話なすつても仕方がありません、質の好いのだけ擇んで御世話をなすつたら、畢竟書生の世話をなさる御精神にも協ふ道理でございましやう。といへば主人は不思議さうに妻の面を見ながら、其は其の通りに違ひないが、その鑑定の仕やうが有るでは無いし。といふを皆まで云はせず、妻は引取つて、いえ、其の鑑定の仕方も考へて置きました、乾度終局には御話が此點へ落ちると思ひましたから考へて置きました。と勝鬨を揚ぐるが如くに勇みて云ひたり。

フーム、鑑定の法までを考へて置いたといふのだネ、大分根深く考へて呉れたの。兎に角面白いから其の仕方を聞きましやう。それが私の腑に落ちたら成程卿の言に從つて不良書生は出すことに仕ましやう。と主人も笑を含みながら答へぬ。

土曜日の其の夜主人夫婦は猶長く打語合ひしが、明けての日曜の朝の事なり。主人は六人の書生に對ひて各自の雜記帳手帳の類を新しきと使ひ棄てたるとに論無く我に見せよと申渡しぬ。

書生共は皆顏見合はせて、主人に雜記帳を見らるゝを厭ふやうなりしが、是非無く各自に持ち出でたるを主人は一々眼を通したるに、六人の中五人までは、一ツとして雜記帳の初より末までを用ひ盡したるもの無く、およそは白紙を其處此處に遺して、半分乃至三分一ほどは用はずに既其の綴帳を棄てゝ新らしきを用ゐ居り、下らぬ事を埒無く記したるところもあり、又は女の首の落書なども無きにはあらねど、初より末までを正しく使ひ盡しては次の冊に移れるは唯一人なりけり。

其より幾日を經て其家の書生は唯一人となり、其他はそれ〳〵に還されしが、其後其家に青年の來りて、食客として養はれんことを乞ふ時は、主人は先づ其の書生に古手帳を示さんことを求め、あはれ其の古き冊子の使ひ方に美しさの見ゆる男もがな、必ず書生とせんもの、と願ひながら、之を見るに、扨も世には一心の末まで弛まで通りさうなる男は少き事にや、今だに養はるゝ書生の數も殖えずとなり。　（終）

士官の妻

琴伴女史

(上)

『唐郷艦隊』

と少しの淀みさへもなく、如何にも肩身が廣さうに、一座を見廻して答へたのは、色は至極黒いけれども衣服態度のなか〳〵立派なハイカラ的夫人で、癖として話の中に、手を額に衝る其度に、指の幾本かに、ダイヤモンドがきら〳〵と輝いて、胸に巻き付けられた黄金の時計の鎖と、相映ずるのであつた。

『まアー御名譽です事ねえ』

隣席の令嬢は、今更にハイカラ夫人を見上げた。

『本當にお美しい事ねえ』

五六人の夫人は、一度に斯う叫んで、好意を表した。

ハイカラ夫人は、愈々傲然たる樣で、

『私は何うせ最う再度面を合せやうとは思ひませんもの、……私は何時でも手紙の度に花々敷い戰死を爲るやうに、左樣云つて遣りますのよ』

『本當に貴女は、お豪いのね』

『私なんぞは、とてもそんな事は出來ませんわ』

『貴女は別ね』

と口々に感じたらしい語を發した。

『竹内さん、貴女の御良人樣は？』

突然にハイカラ夫人は、思ひ有り氣な沈み勝な、餘り口數をきかずに、謹しまやかに控へて居た一人の美人に尋ねた。

美人は何の答へもなく、唯俯伏いてしまつた。

『あゝ左う左う、竹内さんの旦那樣も、戰にお出成すつたのねえ』

先の令孃は合點の行かぬ樣子で、美人の面を見たのであつた。

『何の艦隊？お話し遊ばせな』

皆々膝を進めて促した。

『は……』

と美人は倘躊躇つて、愁し氣な花の顔を上げた。ハイカラ夫人は、愚圖愚圖して居る人よと、云はぬ斗りに、一寸額に八の字を寄せて、

『えー竹内さんハ何艦隊……私だつて話したぢやあ有りませんか、……殊に貴女の御良人樣は、お若くつて大尉に迄もお成りになつたのですもの、……ねえ皆さん其のお働きに注目しなくつちやあなりませんねえ』

『本當――竹内さん、斯う云ふ時に御自慢遊ばせよ』

曾て學生時代から、竹内夫人の美しさと、學藝の勝れたのを、羨んで居つた夫人達は、今又竹内大尉のやうな有望な人物に嫁いだのを、岡燒半分、益々烈しく詰つた。

『御免遊ばせ』
と徐に立上つた柳の腰を、ハイカラ夫人は押へて、
『竹内さん、そりやあ貴女失禮でせう、……中座なんぞを成すつちやあ……』
『あの少々氣分が』
實際急に氣分も悪くなつたのであらう、心細氣に、口の内で幽かに云つたのを、わざと聞えぬ様な顔を仕て、
『殊に貴女も、幹事ぢやあ有りませんか、……我儘を成すつちや困つてよ、』
汗を拭ふに紛らした竹内夫人の手巾に、一雫の苦しい涙が注がれた。

（中）

去年に増した暑さにも、竹内大尉の書齋斗りは、風流に作りなした杉松など、緑蔭深く立ち籠めて、夏は何處にと云ひ度げな風情である。
垣を頼みに、一輪二輪咲いた朝顔も淋し氣に主の留守を喞ち顔だ。
君子は、讀み差した新聞紙を、物憂氣に机の側に置いて、じつと、水を打つた敷石を眺めた。
『あゝ詰らない浮世、……私とて人だもの、殊に心弱い女だもの、……互に想ひ想はれて、漸う嫁入つてから、未だ半年に成るや成らずに、……戀しい夫は出陣、……御國の爲とは云ひながら、……何で悲しまずに居られやう、……出陣なされては、最う再度とはお目に係れぬ覺悟だもの、……』
數へ年で漸う十八に成つた斗りの君子は、房々した髪を、可愛らしい丸髷に結んで、赤い手柄何となく末通らしく、ふつくりとした白い頬に少し痩せの見えるのも、夫の身の上を心配した故であらう！

『此んな苦しい悲しい思ひも、……御國の御爲君の爲、……軍人の本分を盡す時と、……嫣然笑つて、花々しいお働きをと、……云つて御別れした彼の時の私の心、……心弱い愚痴な女と、人は笑ふかも知れないが、……私は虚言のない、本當の心だもの、……今日は花々しい御功名、若や又明日は名譽の御負傷と待つ甲斐もなく……あゝ吾夫の艦隊は、不運な事ばかり打續いて、……此間も實家の弟に泣で……姉さん……姉夫さんの艦隊は、失敗つて斗り居て、僕は友達に肩身が狹い……と言はれた時の心苦しさ……』

机の中央に置いてある軍服姿の、悠然として星の眼を輝かせて、少し笑みかけた夫の寫眞を、恨めし氣に又何とも云へず懷し氣に、じつと見詰めた。

『昨日は殊に、……女學校の校友會で、……斷つたのを是非にと賴んで連れ出し……あゝ此れも私が足りぬ故、……だが餘りな大島さん、……我夫の屬いて居る艦隊は良く知つて被居るくせに、……あゝ情ない。特とあんな切ない思ひをおさせなさるのだもの、……世間で種々の取り沙汰をするのを聞けば女でさへ腹が立つて口惜しいものを、……まして我夫は何んなに思つて居らつしやるか、知れやしない、あゝ情ない廻り合せだ……』

悄然として又新聞紙を眺めて、吾夫の所屬艦隊の事を、冷笑的に書いた記事の處に、恨みと愁ひとに充ちた眼を留めた。

（下）

『彼でね、私——竹内さんは、神村艦隊に屬いて被居しやつたのだと、云ふ事を伺ひましてね、……昨日は悪い事を爲たと思ひましてね、……今日は態々お詫に上つたのよ、』

憐むやうに下目で相手を盗み見た。
お詫びなど〻、氣味惡き言葉は、尙ほ一入に君子には辛いのであらう！
君子は默然として身動きだにせぬ。
『然しね、お身體には別條はありませんわ、……彼んな艦隊に被居ると、』
無禮な一言、——餘りと云へば、我夫を侮辱した皮肉な言語と、平生は眞に女らしい君子も、憤然として紅葉した面を上げたが、相手に爲まいと云つたやうに、又首を垂れた。
『我夫なんぞは、貴女ね……此間負傷致しましたのよ、……でね一昨日金鵄勳章も頂きました、——夫れから昇進も致しましたのよ、……ほゝゝゝ夫れでも、未だやつと大尉に成つた斗りですもの、貴女の御良人樣には、名譽の負傷をしても及びませんわ、』
と名譽の負傷に、力を入れて、貴女の夫よりも豪ひと云ひたけだ。
『でも郵便などは、良く寄越しますのよ、……最う一度立派に働きますとね、——今度はおほゝゝ……貴女の御良人樣からはお便りが有つて？』
君子は唯頭を振つた。
『まあ……矢つ張り、面目なくつて居らつしやるのでせう、……私の從兄なぞも、彼の艦隊なのですよ處が少しも手紙を寄越しませんの、本當に氣の毒ですよ、……新聞などぢや云ひますが、まさか晝寢をして居た譯でも有りますまいよ、ね竹内さん、』
口惜しさと悲しさに、唯淚含んだ君子は、答へも何も無い、それにいよ〳〵下すんだやうに、
『私は我夫が討死しても、淚一滴漏すまいと覺悟して居ますから、……下らなく、くよ〳〵とは案じま

せんよ、……唯名譽さへ傷けなけりやあ、何う成つても搆ひませんわ、……だが神村艦隊も、何うかしたら、良ささうなものね――氣が利ない、』と大島夫人が私語いた時、けたたましい號外の聲が聞えた。

二人一時にぎよつとして、振向いた時に、丁度下女がいち早く、一枚の號外を差し出した。

君子の眼は忽ちに二號活字をもつて記された竹内大尉といふ文字を、見や否や火の如くに輝いた。

號外の記するところは、敵國艦隊が某海峽を過ぎんとするに對して、我が〇〇艦隊は大に勇奮追擊し、敵艦隊をして殆ど戰鬪力なき迄に至らしめたが、中にも〇〇艦の竹内大尉は、身に重傷を負ひたるにも屈せず、最大口徑の砲を以て勇戰し終に敵の一大艦を擊沈したといふのであつた。

君子は大島夫人の傍に居るのも忘れたやうに、號外を面に當てゝ、咽び泣きに泣いたのであつた。

あゝ嬉し泣き、――嬉し泣き、――是れが眞の嬉し泣きであつたらう！やがて心が沈まつたやうに、肅然とした、然し晴やかな美しい面を仕て、呆れて見守つて居る大島夫人に號外を示した。

『大島さん……』

と感極つたやうな、然し矢つ張り沈んだ音調で、如何にも女らしく、頬を傳はつた涙を拭ひもあへずに、呼びかけた。

大島夫人は、無言であつた、然し其の眼には旣涙が潮して居た、それは言ふまでも無く、吾が夫の負傷の報知を得た時の、我が悲喜一齊に迫つた胸中の無限の感じと、同じ感じに今打たれて居るところの、竹内夫人の心の中をば、思ひ遣つて爭はれぬ女性の本然の柔婉しい性に立反つた一瞬から、湧き出した同情の涙で、同じ軍人を夫に持て居る同じ婦女の、夫の職分を思ふ意氣地と、夫の身の上を思ふ愛情との、一團になつたものゝ強い感じは、蓋し誰も彼も同じことであるからで有らう。

（をはり）

彙報

○伏見宮殿下の御仁德

（第二の軍國民を愛しみ給ふ）

竹の園生の貴き御身を以て親しく腥風血雨の戰場に臨ませられ具さに辛酸を嘗めさせたまひし伏見大將宮殿下が茲に御凱旋あらせられ去る十七日午後八時十分といふに廣島より山鐵三原驛御通過同八時十六分といふに糸崎驛に御着到ありて町民の奉迎を受けさせ給ひし時の御事なり三原警察署長警部村田淳氏同驛にありて御警衞申上げゝるに殿下には御車窓近く村田警部を召させられ同警部をしてプラットフォームに奉迎せる小學校生徒の中にても殊に幼き兒童を近く召すべき樣仰せられければ同警部は畏まりて男女の兒童四五人を御車窓近く進めまゐらせたり殿下は之を憐はせ給ひ御手づから苹果を一つゞゝ賜はらんと有難き御沙汰の聞えければ幼き兒童等はそを御受けせんとしたれど御車窓まで手の達きかねしを殿下には御覽ぜられて御微笑あらせられ村田警部に此れ取らせよとの仰せあり警部は畏まりて一々之を御取次ぎ申上げゝるに無邪氣なる兒童等は我も〱と尚御車窓近く進みけるを御覽ぜられ殿下には之をこそとて籠のまゝ苹果と夏橙とを二籠御下賜相成りたりされば同警部は前に三原驛にて奉送迎を申上げし學校生徒等にも此光榮を頒ち申し度との旨を伺ひけるに然るべう取計らふべしとの御詞を賜はりぬ

斯くて又殿下には奉送迎の生徒等が紅燈と紙製の聯隊旗とを青竹に吊して持てるを御覽ぜられ最と御意に叶ひし由にて其一つに生徒をして校名を記させ差出せよと仰せられければ引率の教員は生徒をして鉛筆にて旗の餘白に校名を記させ恭しく殿下にさゝげ奉りしに殿下は教員に向はせられ生徒は第二の國民なれば今日の時局に鑑て薫陶を等閑にすること勿れとの介旨ありければ教員は謹んで御受申上げたりといふ殿下御仁德の程こそ恭なき極みなれ

又た右殿下の列車が東海道山北驛に着せし時、附近の小學校生徒はプラットホームに整列し咫尺の間に殿下を奉迎し、君が代の一曲聲美はしく歌ひ出たるが殿下も殊の外、此山間の可憐なる女生徒の志を愛で給ひ御附武官三原少佐をして恰かも列車の前なる一少女生に向はせ「我海陸軍は何故に戰ふごとに勝つや」と問はせ給へば少女生は畏みて「勇氣があるからであります」と答へしが三原少佐は更らに次ぎなる女生に向ひ同じ問ひを發し唯だ勇氣のみにて他の答へはなきかと促がせば此女生は前の女生よりも年嵩なれば「勇氣ばかりではありません第一忠義の心が強いからであります、我國には二千五百年皇統連綿の天子樣が遊ばすから人々の忠義の心が多いのであります」と臆す色も見せず澱みなく答へしかば殿下には其答へを車窓のほとり親しく聞し召され痛たく感稱の面持におはしまし重ねて女生の學年を問はせられ其の高等科三年なることを申上げしに殿下は最とも御滿足におぼされ給ひしと三原少佐より同校長に傳へられしとぞ承はる

○一婦人の光榮

又同殿下御歸京の途備後三原驛を御通過の折から七十歲ばかりなる老婆と三十歲許の婦人が手に小旗を携へ『萬歲』を唱へつゝ殿下の御車に近き澁茶を上りしがこの兩婦人は殿下が曩に御出征の際にも熱心に奉送し居たるを御記臆遊ばされ殊勝の者よと御感に入り畏くもその氏名を問はせ給ひしに老たるは

岡山縣淺口郡六條村岩淵すが、今一人は同村寄留原籍香川縣香川郡佛生山町字百擔の細谷百々代といふ者なるがこの兩人はいかなる大風雨にも拘はらず軍隊負傷兵等の通過する時は送迎を欠ぎし事なしといふ奇特の婦人なる由を聞召され殿下にはその殊勝さを賞で懇ろなる御言葉を懸けさせられ且つ紀念にせんと仰せられ彼の婦人の携へたる小旗を御手づから取上げさせ給ひ御持歸り遊ばされしと

○華族女學校卒業式

華族女學校に於ては去七月十三日生徒卒業證書授與式を執行せり　皇后陛下には豫て仰出されたる如く午前九時卅分御出門御陪乘は高倉典侍供奉は香川皇后太夫、山内同亮、小倉權典侍、北島權掌侍、高階侍醫等にして御順路同校に行啓あらせらる是より先き同校にては表門に大國旗を交叉し諸職員各生徒は門内に整列し梨本宮、久邇宮、伏見宮博恭王の各妃殿下には玄關に細川同校長初め久保田文部大臣、田中宮内大臣、同夫人、東久世樞密院副議長、大鳥同顧問官、花房宮内次官、岩倉爵位局長、長崎調度局長、同夫人、高嶺高等師範學校長、同夫人、徳川家達、島津忠濟兩公爵、鍋島侯爵、同夫人等の重なる來賓と共に玄關御車寄に整列して奉迎し君ケ代の奏樂中に陛下には細川同校長の御先導にて便殿に入らせられ御休憩中同校長初め勅奏任官へ拜謁を賜ひ夫より細川校長の御先導にて式場へ臨御此時奏樂次に生徒唱歌（皇后陛下御製金剛石、水は器）一同起立次で細川校長より全科卒業生及び別科卒業生に證書を授與し次に中小學各級生徒總代に證書を授與す此間奏樂次に細川校長の式辭全科卒業生總代の謝辭生徒會員唱歌（秋の宮居）あり了て皇后陛下入御此時奏樂一同退場正午前還御あらせられたり此時奉送は臨御の節と同じ夫れより來賓には茶餐の饗應ありたり

○篤志看護婦人調製の繃帶

篤志看護婦人會にて

は曩に陸軍衛生材料廠長より出征軍人携帯小包繃帯三萬個の調製を囑託せられ此程悉皆之を差出したるに小池衛生長官より左の謝狀を送ると同時に更に該繃帯四萬個の調製を囑託されたり

曩に陸軍衛生材料廠長をして繃帯包の製作を貴會に依囑せしめたるに今般廠長より貴會の用意周到操作適當なるを認むる趣報告に接したり玆に貴會の勞を深謝し尚ほ引續き良繃帯包を製せられ負傷將卒の幸福を圖られんことを冀望す

大本營野戰衛生長官　小池正直

篤志看護婦人會長
子爵夫人　鍋島榮子殿

○萬國婦人大會　婦人問題に就ては遙かに英米の後に在りし獨逸國も近來は非常の進歩を來し去月其首府に於て萬國婦人大會を開くに至れり會するもの委員六十名即ち萬國各婦人會の會員七百名以上を代表せり而して六十名の中三十人は皆な獨逸以外より來會せしものにて名譽會頭は北米合衆國のスザンアンソニー夫人選擧せらる、八十四歳の老婦人儼然として六十の巾幗を統理す、其光景想ふべし。第一日にストリツト孃が大喝采の中に演說したる名句の終に曰く、吾等の理想は下の如し、凡そ將來の婦人たらんものは「强壯、自由、然し乍ら母らしく」、凡そ此の三大綱を得るにありと、尙アパルジン伯爵夫人は議事の議長となり獨逸皇后は委員の主なる面々を引見し長時間談話あり皇后は婦人問題に付ての御注意至つて深厚なるよし傳へらる

○戰時女子の模範

劍を揮ひ銃を荷ひて滿洲の野に風雲を叱咤し又は鯢鯨を黃海に驅逐するのみが義勇奉公の務めならず擧國一致其業務を勵み絲毫の微も積貯へて軍餉の資に輸すは實に報國の大義に適ふものといふべし然れば日露開戰以來我臣民として誰かは其志を抱かざるものあるべき中にも高橋なを子の如きは一女子の身

に生れながら國家を思ふ至誠の心鬚眉の男子も耻かし、なを子は本年三十四歳大分縣直入郡竹田大字會々の士族にして資性温厚郷黨の中に貧しくして病める者ある時は物など惠み與へて同情の涙を灑ぎ最と慈悲深き人なるが十九歳の時父親に死別れしより不幸打續き二十歳にして兄を二十二歳にして母を失ひ前後四年間に賴みと思ふ長上の者悉く此世を去りて殘るは己が身一つと幼き貫藏と云へる弟のみ元來豊かならぬ財産にて斯く不幸の續きたるより僅かに日傭賃仕事などにて其日を送る中にも弟貫藏の敎育を忽せにせず小學校より中學校と學資を貢ぎて勉强させ自分は製糸の女工となりて去二十七年竹田町四山株式製絲會社の周旋により鹿兒島市の某製絲工場へ雇はれて赴きしが偶征淸の役起りしかば微々たる一女工の心にも我國大事と思ふものから若し此身が男なれば眞先に從軍を願ひ出づべきになど喞ちしが切めては看護婦として戰地に赴き忠義の爲に負傷せる兵士を介抱せんとの志を定め雇はれて間

もなき會社を辭して熊本に至り其筋に斯くと出願したるにぞ係り官も健氣なるなを子の志を感歎したれど夫々の規則あれば採用げざるよりなを子は本意なくも熊本市の製絲會社に入り再び製絲業に從事せし時に弟の貫藏は中學を卒へ第五高等學校に入學して勉强中なりしが健康を害して窒扶斯に罹り殆んど死に瀕するばかりの重體に陷りたりなほ子は太く驚きて業務の暇夜の目も寢ずに看護しつゝ辛苦して貯へたる五十圓を悉く醫療の手當に消費したり如何に骨肉の間柄とて其友誼の厚きには見る人聞く人何れも感心したりしが貫藏の病癒えて後なを子は更に一層の勤勉と節約を旨となし工錢の幾分を割きて弟の學資に充てしかば貫藏も姉の赤心に感奮して學業を勵み高等學校を卒業し上京して法科大學に入り首尾好く法學士となり今は植村貫藏と稱して東京組合の辯護士たり其間なを子は始終學資を補助したりと斯くて第四回內國勸業博覽會の京都に開かるゝや熊本製絲會社より其技術に熟練せるもの五人

を選抜して出張せしめたるがなを子も其中に在りしが一人にて六枠の器機を使用したる手際には當時御巡覧わりし　皇后陛下にも御感歎わらせられたりと承はる

昨年なを子は郷里に歸りたるが本年二月日露の風雲穩かならずイザ開戰と云ふ事を聞くや斯る折こそ女の身の口惜しさよと二十七、八年の役の時にも増して慨きけるが俄に思立ちて春蠶種半枚を掃き晝夜の休みなく一人の手にて之を飼育しけるがやがて黄金白金の繭美くしう好結果を得たれば喜ぶこと限りなく晝は製絲の爲人に雇はれ夜は家に歸りて碌々まどろみもせず右の繭を絲に繰りて此程賣却し二十圓の金を得たるが一錢も己が身に着けず直に携へて直入郡長渡邊某の許を音づれ左の如く分割して献納方を依頼したるにぞ郡長も其報國の至誠と用意の周到に感じ早速手續きを了したりと

▲十圓　軍事費▲參圓　陸軍恤兵部▲貳圓　海軍恤兵部▲參圓　赤十字社大分支部戰時救護準備員▲壹圓赤十字社篤志看護婦人會大分支會竹田區會▲壹圓愛國婦人會より出征軍人家族救護に對する費用▲以上計貳拾圓

今やなを子の殊勝なる行爲は同地方一般の稱讃する所にして戰時の婦人には好き模範と云ふべし因にいふなを子は彼の廣瀨中佐と郷國を同ふせるものなり

○水夫の母マクレーン孃

日本水兵の母として知られたる海員の恩人マクレーン孃、病氣保養の爲めにボールンマウスの海濱に在りしが其危篤の狀在英日本公使館附武官鏑木海軍大佐より報知わりたれば海軍大臣山本男より取り敢へず我海軍有志の醵集せる五十磅の見舞金を贈られたりといふ孃は名をマリーといふ篤信の基督敎徒なれども特殊の敎會に屬せず英國プリマウスに發達して諸國に擴かれるプリマウス同胞會の一人なり早く支那に來り千八百七十二年秋日本に入りて橫濱に住し居ること九年此間海員の休室を建て專ら其慰籍と傳道とに盡力し日本民族を親愛し英國に歸るの後日本人の友として日本を英人の間に紹介し日本の靑年

英國に遊ぶとあれば其惡習に染ますして良家に親むの媒介となり旅舍を訪ひ羈情を慰め深切懇到盡さゞるなく此の如きと年久しくして英人の日本を知らんとする者孃に之を問ふに至れり人綽名して日本マクレーンといふ前年我軍艦英皇即位の式に參列せし時孃が我海員の爲めに盡力せしと顯著なりしを以て其名特に我海軍の間に知られたり孃年六十餘ポールンマウスは我大磯の如き保養地なれば病を此地に養ひ居るならん日露の戰は孃が宗教家として戰爭其事を嘆息すべきも日本の國運開くるを見て日本マクレーンは大に慰む所あるべし吾人は其快癒を切望す孃は曾て「日本よりの反響」といへる小冊子を著して日本の事情を英國に紹介したることあり

○リチヤードソン夫人の特志　澁谷豫備病院に勤務中なる英國特志看護婦リチヤードソン夫人は米國特志看護婦の團體と異り一切の費用は總て自辨なるのみならず既に赤十字社救護費中へ百圓宛を二回篤志看護婦人會へ五十圓を寄附し公務の餘暇には傷病者の慰問をなし居たるが一昨日も亦金百圓を赤十字社に寄贈したり何故に夫人は此くも金額を小さくきざみて寄贈するやと云ふに一時に多額を寄贈すれば新聞雜誌記事の材料となり種々なる方面より來訪者ありてそれが爲め餘計な暇を費し公務を怠りては傷病者に對してすまぬゆゑ可成目立ぬやう寄贈なす考なりと

○此の母にして此孝子あり　芝區愛宕下町二丁目十四番地新橋停車場給仕藤村謙太郎(十一)は亡父を寅吉と呼び新橋の鐵道作業局ヤードメンを廿年も勤續せしが不幸にして寅吉は去る卅六年一月中感冒に罹り翌二月死亡せしかば謙太郎は母國(四十七)と弟辰雄(七)同松雄(四)を抱へ乍ら其日の生活に困難を來たし一家手を束ねて餓死せんとする悲境に陷いりしより健氣にも母を慰め新橋驛長高橋善一氏に依賴して同驛の給仕となり辛くも一家の生計を助け日夜母の國に對し孝養至らざるなく傍ら二弟を愛むにぞ母の國もその孝心に感じ坐して衣食する時にあらず

と毎朝六時頃より駄菓子を脊負ひ亡夫が勤めし作業局に至り亡夫の同僚等に買つて貰ひ子は親を孝養し母は子を慈みて風裝もかまはず一生懸命に働くより茲に一家は何に不自由なく衣食する事を得に至り昨今にては國は郷里より妹キヨと云へるを招き辰雄と松雄の二人を世話させ自身は相變らず駄菓子を賣り歩き又た謙太郎は一日の缺勤なく家にありては母を慰め夜に入りては同所の成立學校に通學し一心に勉學しつゝありて僅か九尺二間の陋屋にはあれど親子樂しき生活をなしつゝあるより今は孝子貞女の噂界隈にかくれ無しとぞ

○二十餘年勤續せし教師　小込區水道町二十七番地の醫師川島鶴次郎方小島ヒサ子(五十)は去る明治十一年五月十三日玉藻學校に教鞭を執りたるを始め本郷駒込等諸小學校に勤續する事二十七年而も一日の如く兒童の教育に從ひ慰勞金一時賜金年功加俸證等十五回を賜はる程ありて平生病氣を除くの外缺勤せし事無かりしが此度咽喉枯液腫及慢性咽喉加答兒にて退職したれば人皆大に是を惜しみ本郷區會は七十圓を又同校職員一同よりは花瓶一個を贈りたり人の子を教ふるに熱心の餘り終に一度も他家に嫁せず常に曰ふ『小供が出來ては人は教へられませぬ』と是に好一對とも稱すべきは本郷區菊坂町十番地福村義寶氏(四十五)にて去る五月九日職を退きしが十二年五月二十一日より此年迄本郷學校の教員として慰勞金を得ること十六回此度同じ區會より七十圓を受けたりとぞ

○成女學校の生徒募集　麴町下二番町なる同校は來九月に於て一二年兩級の補缺募集を爲す出因に記す同校の教育方針は時勢に應ずる實際的女子の養成にありしが猶ほ時局に鑑みて益々この點に注意し一層の改善を圖ると云ふ

○感ずべき孝婦　新潟縣三條町一ノ町日雇渡世高橋貞五郎(七十九)長女イヌ(四十六)は母ミイ(七十七)の三人暮しにてイヌは幼少の頃より至つて孝心篤くして老父母に孝養を盡し往年本成寺村大字大曲

より久八なるものを婿に迎へしに夫久八は不景氣故北海道へ出稼ぎに行くと稱し七八年前出で行きたるまゝ歸宅せざるにも不拘イヌは更に其無情を恨みず貞節を守りよく内外の家政を整理し居りしに二三年以前より老父母は眼病のため明を失ひ老衰して起居も自由ならざるに之を介抱し懇切に事へ繊弱き女の腕ながら彼處の用事此家の言ひ付けとよく働き廻りて貧困の中より老父母に美食を薦め其悦ぶを見て樂みとなし孝養を盡し居るより附近の人々はイヌの孝養に感じ屢〻其宅を訪れ衣食を與へ之を慰め居れりと云ふ

○英國の小兒は日本の味方　我が同盟國なる英國が我國に同情を表し居ることは今更贅するに及ばざるが無邪氣なる小兒迄も我國の勝利を喜び此程左の書信を黒木大將に送りたりと

親愛なる黒木大將閣下

私は八歲の英國の子供であります閣下が鴨綠江で露西亞兵をわんなに酷ひ目に合はせましたのを見て大層喜で居ります英國の小兒は皆な日本の味方であります私は日本の郵便切手と端書が欲うあります父樣の申ますには私が閣下に手紙を差上げて御願するならば私に送て下さるでせうと、どうぞ私の御願を御かなへください

五月六日　エッセックス、イルフテルドノース、
ヅルツク、ロード五十二番
エットサン、ホケン

嚴格なる黒木大將も流石に此無邪氣なる愛らしき手紙には喜びを止め得ず陣中にて寫せし大將の寫眞に一通の手紙を添へて其子供へ送られたりと

○學校樹栽培　去月六日文部省より學校樹栽奬勵の訓令を發したるが小學生徒をして樹木を栽培せしむることは曾て今の駐伊公使牧野伸顯氏が米國に滯在中同國の兒童樹栽の風俗を看て感するところあり文部次官たるに及び始めて之を實行したりしものなるが右は教育上にも經濟上にも有益なるを以て今般益々盛んならしめむの旨趣にて此に及ひたるものなりと云ふ

新刊書目

家庭のしるべ(第二號)	日本橋通	白木屋
佛教文藝(辰年第三號)	豐多摩郡巣鴨町	佛教發行所
上野教育會雜誌(二百二號)	前橋市	同教育會
六合雜誌(第二八四號)	三田四國町	日本ゆにてあん弘道會
中央公論(第十四年第七號)	本郷區西片町	反省社
慶應義塾學報(第八十號)	芝區三田四國町	同發行所
平民新聞(毎號)	麹町區有樂町	同新聞社
婦女新聞(毎號)	牛込區東五軒町	同新聞社
東京經濟雜誌(毎號)	京橋區彌左衞門町	同雜誌社
女子之友(第一五五號)	牛込區市谷田町	文友社
東京感化院月報(第三十四號)	豐多摩郡澁谷村	東京感化院
商家の友(第二十九號)	京橋區南鍋町	時事新報社
時好(辰七八號)	同市日本橋區駿河町	三井呉服店
日本婦人(第五十七號)	豐多摩郡澁谷村	帝國婦人協會
裏錦(第一百四十一號)	神田區北甲賀町	尙絅社
をんな(第四卷八號)	麹町區下二番町	大日本女學會
中學科講義錄(第二學年 自四至七號)	神田北神保町	大日本國民中學會
東洋哲學(第十一編第七)	小石川區原町	東洋哲學會
婦人と子供(第四卷第五號)	本郷區湯島	フレーベル會
愛國婦人(毎號)	麹町區下二番町	同發行所
國學院雜誌(第五八號)	麹町區飯田町	國學院
婦人世界(第卅四、五號)	大阪市南區末吉橋	浪華婦人會
大八洲雜誌(卷之二百十七)	神田區三崎町	大八洲館
大日本婦人教育會雜誌(第七號)	麹町區永田町	同教育會
ふでのはな(第二〇四集)	神田區山本町	若葉會
徽章雜誌(毎號)	麹町區飯田町	同雜誌社
日本女學生(第十八號)	本郷區駒込千駄木林町	同會
兒童研究(第七年七號)	神田神保町	冨山房

定價

- 一冊　前金貳拾錢
- 三冊三ヶ月分　前金五拾七錢
- 六冊半年分　前金壹圓拾錢
- 拾貳冊一年分　前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

- 五號活字廿三字詰一行　金三拾錢
- 半頁　三十二行　金八圓
- 一頁　六拾四行　金拾貳圓
- 表紙一頁　金拾六圓

(色刷は特に御相談に應ず)

御注文規定

一切前金の事(但郵劵代用一割增の事)●前金領收證は發出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附ありたし

明治三十七年八月卅一日印刷
明治三十七年九月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊敦一
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社 國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八番)

◉女子實業教育の講義◉

女子技藝講義

會員募集

束脩卅錢會費一ヶ月三拾錢一ヶ年三圓五十錢一ヶ年卒業

科目 ▲裁縫▲造花▲刺繍▲編物▲繪畫▲割烹▲其他
▲染織▲生花▲禮式▲茶の湯▲家政▲看護

九月新學期開始 ●本會講義錄は平易にして何人にても分り直に實用に適す●本會講師は女子高等師範學校教授其他斯道の有名の人なり●本會は各地方に支會を設け本會より講師を派出し講習會を開く●規則は貳錢郵券送れば直に進呈す●本月中の入會者には束脩を免ず

◉**發行所** 東京市下谷區茅町二丁目廿九番地 **女子技藝會**

女子部

生徒募集

●**高等科** 參拾名

●**普通科** 參拾名

●**選科** 若干名

本科は高等女子師範學校等の體操教員養成の目的とす

本科は小學校體操科教員たらんもの丶爲に課し無試驗檢定の特權あり

各自の運動若くは練習の爲本科中の或科目を希望するもの丶爲めに設く

本部は午後の教授なるを以て他の學校と兼修する事を得べし
志願者は九月五日迄に申込むべし
規則入用者は郵券三錢を送れ

九月一日

東京麴町區飯田町牛ヶ淵
日本體育會
體操學校

島田三郎序
小畠幾次郎著

腦力増進論

菊判洋装
定價卅五錢
郵税六錢

沼南島田三郎氏、本書の冒頭に序して曰く、心身の二者を保養して、人初めて其發育を完全にするを得べし、心性を措て、偏に自体を説き、身體を外にして、專ら心性を論す、二者各其半面を語る者にして、全局を蓋ふの見解に非すと、著者茲に見るあり、世の青年學生の腦病に罹る者多きを嘆し、研究を積み、推考を重ね、廣く專門諸名家を歴訪して、其の所説を聞き、大に悟るところありて此書を爲せり、賀古耳科院長、井上眼科院長、中濱同生院長、此木ドクトル、三浦大學教授、岩佐告成堂病院長、鈴木胃腸病院長等の卓見高論は著者の實驗及び古今に渉れる實地談と共に輕妙快活なる文章によりて描寫され、一讀の下精神の頓に壯快なるを覺ゆ、今や三伏の盛暑燬くが如し、若し此書を繙いて靜かに熟讀し來らば、心身の二者を保養するに於て極めて必要なるのみならず、又以て清涼劑を服するに優ること萬々なるを感せずんば非さるべし。

登張竹風著

讀書と修養

四六判洋装
定價三十錢
郵税四錢

如何なる書籍を讀むべき乎、如何なる書籍を讀みて修養を資くべき乎、是れ恐らく讀書家の胸間に蟠れる先決の問題なるべし。

著者竹風氏奇警の見識と卓拔の議論とを以て此間の疑問を解決するや、恰も庖丁の牛を解くが如く、向ふ處整然として解けざるはなき也。

此書一たび出で丶。讀書社會未決の大問題は釋然として氷解し、机に對して亡羊の嘆を發するものなきに至らん、復何ぞ其の讀書に益し修養に資くるの多大なるを疑はんや。

希はくは江湖の讀書家一本を購ふて、座右の參考とし、以て讀書の興味と利益とを併有せられんことを

發兌元　東京築地二　國光社

明治三十七年九月一日發行　毎月一回一日發行　第拾四年第拾號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社印刷